岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第132集

# 興　福　地　遺　跡

２０１５
岐阜県文化財保護センター

# 興福地遺跡

（こう ふく じ）

2015

岐阜県文化財保護センター

西地区第１面（東から）

東地区第２面（北から）

西地区第２面（西から）

巻頭図版２

SE3 出土扇子（165、166、167）

緑釉陶器（232）

SK9 出土段皿（42、43）

SE3 出土小型片口壺（161）

SE3 出土山茶碗

# 序

大垣市は北西に山間部が広がり、市域は扇状地上に位置しています。揖斐川が市域東を南流し、市域西南を牧田川が東流します。北西の池田山からの伏流水が豊富で、大垣市は水都と称されています。池田山の南にある金生山は赤鉄鉱が露出し、弥生時代から古代にかけて、この赤鉄鉱を財源とする氏族を中心として発展します。大垣市には美濃国分寺、西の垂井町には美濃国府、関ヶ原町には不破の関と、この辺りは古代において重要な地域といえます。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道（大垣西ＩＣ～大野神戸ＩＣ）建設事業に伴い、大垣市興福地町に所在する興福地遺跡の発掘調査を平成 25 年度に実施しました。興福地遺跡は南北方向に長く自然堤防上に広がる古代～中世の遺跡です。

今回の調査では、平安時代前期の井戸、溝、柱穴や、平安時代末から鎌倉時代初頭の掘立柱建物、井戸、溝、柱穴などを確認しました。特に鎌倉時代の井戸からは、埋め井の祭りで使用した道具をまとめて捨てている状態で多くの遺物が出土しました。祭りの道具の中には斎串として使用した扇子の骨や、美濃須衛産の小型片口壺など、一般の集落からはあまり出土しない遺物も出土しました。検出した遺構と合わせて考えると当遺跡には、宗教関連施設か荘園管理施設が存在した可能性が考えられます。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、大垣市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 27 年３月

岐阜県文化財保護センター
所長　宮田　敏光

# 例言

1　本書は、岐阜県大垣市興福地町に所在する興福地遺跡（岐阜県遺跡番号 21202-7060）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、東海環状自動車道（大垣西ＩＣ～大野神戸ＩＣ）建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘調査は平成 25 年度に、整理作業は平成 26 年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当は、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は近藤が行った。

6　発掘調査における現場管理、掘削、測量、景観撮影などの業務と、出土遺物の洗浄・注記、また、平成 26 年度の整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　木製品年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、木製品墨痕分析は株式会社パレオ・ラボに、木製品樹種同定は株式会社文化財サービスに委託して行い、第４章に掲載した。執筆はパリノ・サーヴェイ株式会社及び株式会社パレオ・ラボ、株式会社文化財サービスによる結果をもとに近藤が行った。

9　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）

　　宇野隆夫、中井正幸、長屋幸二、藤澤良祐、渡邉博人

　　大垣市教育委員会

10　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用している。

11　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2006『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

# 目　次

序
例言
第１章　調査の経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……4
第２章　遺跡の環境……9
　第１節　地理的環境……9
　第２節　歴史的環境……10
第３章　調査の成果……15
　第１節　基本層序と遺構検出面……15
　第２節　遺構概要……17
　第３節　遺物概要……21
　第４節　第２面の遺構・遺物（平安時代～鎌倉時代初頭）……25
　第５節　第１面の遺構・遺物（平安時代末～鎌倉時代初頭）……39
　第６節　遺物包含層出土遺物……60
　　遺構全体図分割図、遺構観察表、遺物観察表
第４章　自然科学分析……89
　第１節　出土木製品年代測定……89
　第２節　出土木製品墨痕の赤外線写真撮影……92
　第３節　出土木製品樹種同定……95
第５章　総括……103
　第１節　遺構から見る遺跡のまとめ……103
　第２節　遺物から見る遺跡のまとめ……106
　第３節　興福地遺跡のまとめ……114
参考文献
写真図版
報告書抄録

## 挿入写真目次

写真１　東地区調査前風景・・・・・・・・・・・・・7
写真２　西地区調査前風景・・・・・・・・・・・・・7
写真３　東地区表土掘削・・・・・・・・・・・・・7
写真４　東地区包含層掘削・・・・・・・・・・・・・7
写真５　東地区遺構掘削・・・・・・・・・・・・・7
写真６　東地区遺物取上作業・・・・・・・・・・・・7
写真７　西地区実測作業・・・・・・・・・・・・・7
写真８　高所作業車景観写真撮影・・・・・・・・・・7
写真９　東地区調査区・・・・・・・・・・・・・・7
写真 10　興福地遺跡周辺の地形・・・・・・・・・・8
写真 11　59、171、172 赤外線写真・・・・・・・・・93
写真 12　166 赤外線写真・・・・・・・・・・・・・94
写真 13　樹種同定木材組織写真１・・・・・・・・・101
写真 14　樹種同定木材組織写真２・・・・・・・・・102

## 挿図目次


図１　遺跡位置図・・・・・・・・・・2
図２　発掘区位置図・・・・・・・・・2
図３　試掘調査坑位置図・・・・・・3
図４　グリッド設定図・・・・・・・5
図５　遺跡周辺の地質概略図・・・・9
図６　周辺遺跡位置図・・・・・・・11
図７　小字図・・・・・・・・・・・13
図８　基本層序図　・・・・・・・・16
図９　遺構分類模式図　・・・・・・18
図 10　第１面遺構全体図　・・・・・19
図 11　第２面遺構全体図　・・・・・20
図 12　木製品細部分類　・・・・・・23
図 13　SD1 遺構図、出土遺物・・・・25
図 14　SD2 遺構図　・・・・・・・・26
図 15　SE1 遺構図　・・・・・・・・27
図 16　SE1 出土遺物・・・・・・・・28
図 17　SK01、SK03 遺構図、出土遺物・29
図 18　SK09、SP001 遺構図出土遺物・30
図 19　NR1 遺構図、出土遺物・・・・31
図 20　SE2 遺構図・・・・・・・・・32
図 21　SE2 出土遺物・・・・・・・・33
図 22　SK10 遺構図・・・・・・・・34
図 23　SK10 出土遺物・・・・・・・35
図 24　SP051～SP053、SP057～SP059
　　遺構図・・・・・・・・・・・37
図 25　SP060、SP061、SP062 遺構図・38
図 26　SP090 遺構図、出土遺物・・・38
図 27　SA1、SD3 遺構図、SA1 出土遺物
　　・・・・・・・・・・・・・・39
図 28　SB1、SB2 遺構図・・・・・・40
図 29　SB1、SB2、SD3 出土遺物・・・41
図 30　SD4 遺構図・・・・・・・・・42
図 31　SD4 出土遺物・・・・・・・・43
図 32　SE3 遺構図(1)・・・・・・・44
図 33　SE3 遺構図(2)・・・・・・・45
図 34　SE3 出土遺物(1)・・・・・・46
図 35　SE3 出土遺物(2)・・・・・・47
図 36　SE3 出土遺物(3)・・・・・・48
図 37　SE3 出土遺物(4)・・・・・・49
図 38　SE3 出土遺物(5)・・・・・・50
図 39　SP097～SP099 遺構図、
　　SP097・SP098 出土遺物・・・51
図 40　SA2、SA5 遺構図・・・・・・53
図 41　SA3、SA4 遺構図、SA3 出土遺物
　　・・・・・・・・・・・・・・54
図 42　SA6 遺構図・・・・・・・・・55
図 43　SA7、SA8 遺構図・・・・・・56
図 44　SB3 遺構図、出土遺物・・・・58
図 45　SK20、SP107～SP110 遺構図、
　　SK20、SP109 出土遺物　・・・59
図 46　包含層出土遺物(1)・・・・・60
図 47　包含層出土遺物(2)・・・・・61
図 48　包含層出土遺物(3)・・・・・62
図 49　第１面遺構全体図分割図１　・64
図 50　第１面遺構全体図分割図２・65
図 51　第１面遺構全体図分割図３・66
図 52　第１面遺構全体図分割図４・67
図 53　第１面遺構全体図分割図５・68
図 54　第１面遺構全体図分割図６・69
図 55　第２面遺構全体図分割図１・70
図 56　第２面遺構全体図分割図２・71
図 57　第２面遺構全体図分割図３・72
図 58　第２面遺構全体図分割図４・73
図 59　第２面遺構全体図分割図５・74
図 60　第２面遺構全体図分割図６・75
図 61　暦年較正結果・・・・・・・90
図 62　遺構変遷図・・・・・・・・・104
図 63　柿田遺跡遺構配置図 SH38 遺構図
　　・・・・・・・・・・・・・・105
図 64　中世食器組成破片数グラフ・107
図 65　中世食器組成個体数グラフ(口
　　縁部残存率)・・・・・・・・109
図 66　中世食器組成個体数グラフ(底
　　部残存率)・・・・・・・・・109
図 67　中世陶器時期別個体数グラフ
　　・・・・・・・・・・・・・・109
図 68　煤付着山茶碗点数グラフ・・109
図 69　山茶碗煤付着状況グラフ・・109
図 70　美濃須衛産壺、まなこ壺、扇実
　　測図・・・・・・・・・・・111


## 表目次


表１　興福地遺跡周辺の試掘確認調査
　　結果・・・・・・・・・・・・３
表２　周辺遺跡一覧表・・・・・・・10
表３　検出遺構一覧表・・・・・・・17
表４　出土遺物点数等一覧表・・・・21
表５　木製品・種子出土一覧表・・・23
表６　石器・石製品一覧表・・・・・23
表７　編年対応表・・・・・・・・・24
表８　遺構別遺物出土点数表・・・・76
表９　遺構観察表(1)・・・・・・・77
表 10　遺構観察表(2)・・・・・・・78
表 11　遺構観察表(3)・・・・・・・79
表 12　土器観察表(1)・・・・・・・80
表 13　土器観察表(2)・・・・・・・81
表 14　土器観察表(3)・・・・・・・82
表 15　土器観察表(4)・・・・・・・83
表 16　土器観察表(5)・・・・・・・84
表 17　土器観察表(6)・・・・・・・85
表 18　土器観察表(7)・・・・・・・86
表 19　木製品観察表(1)・・・・・・87
表 20　木製品観察表(2)・・・・・・88
表 21　土錘観察表　・・・・・・・・88
表 22　石器観察表　・・・・・・・・88
表 23　年代測定対象木製品の一覧　・89
表 24　放射性炭素年代測定および暦年
　　較正結果・・・・・・・・・90
表 25　墨痕分析対象一覧・・・・・92
表 26　樹種同定結果・・・・・・・96
表 27　興福地遺跡の時期別・器種別種
　　類構成・・・・・・・・・・98
表 28　出土遺物破片数量表（須恵器）
　　・・・・・・・・・・・・・・107
表 29　出土遺物破片数量表（灰釉陶器）
　　・・・・・・・・・・・・・・107
表 30　出土遺物破片数量表（山茶碗）
　　・・・・・・・・・・・・・・107
表 31　出土遺物破片数量表（古代・中
　　世土師器）・・・・・・・・・107
表 32　出土遺物破片数量表（中国製陶
　　磁器）・・・・・・・・・・・107
表 33　中世食器組成（破片数）・・107
表 34　須恵器数量表（口縁部残存率）
　　・・・・・・・・・・・・・・108
表 35　須恵器数量表（底部残存率）108
表 36　灰釉陶器数量表（口縁部残存率）
　　・・・・・・・・・・・・・・108
表 37　灰釉陶器数量表（底部残存率）
　　・・・・・・・・・・・・・・108
表 38　山茶碗数量表（口縁部残存率）
　　・・・・・・・・・・・・・・108
表 39　山茶碗数量表（底部残存率）108
表 40　古代・中世土師器数量表（口縁
　　部残存率）・・・・・・・・・108
表 41　古代・中世土師器数量表（底部
　　残存率）・・・・・・・・・・108
表 42　中国製磁器数量表（口縁部残存
　　率）・・・・・・・・・・・・108
表 43　中国製磁器数量表（底部残存率）
　　・・・・・・・・・・・・・・108
表 44　中世食器組成（口縁部残存率）
　　・・・・・・・・・・・・・・109
表 45　中世食器組成（底部残存率）109
表 46　中世陶器集計表（底部残存率）
　　・・・・・・・・・・・・・・109
表 47　中世陶器時期別個体数（底部残
　　存率）・・・・・・・・・・・109
表 48　煤付着山茶碗点数表・・・・109
表 49　山茶碗煤付着状況・・・・・109
表 50　扇出土遺跡一覧表(1)・・・・112
表 51　扇出土遺跡一覧表(2)・・・・113
表 52　井戸出土まなこ一覧表・・・113


## 写真図版目次


図版１　西地区第１面、東地区第１面
図版２　西地区第２面、東地区第１面
図版３　SB1、SB2、SP097 検出、完掘等
図版４　SA2、SB3、西地区第１面完掘
図版５　西地区第２面検出、完掘等
図版６　SD1、SD3、SD4、東地区西完掘
図版７　SE3 検出、遺物出土状況等
図版８　SE3 扇出土、完掘、SE2 等
図版９　SE1 検出、土層、井戸枠等
図版 10　SK10 検出、遺物出土、SP098
　　等
図版 11　SD1、SE1、SK09 等出土土器
図版 12　NR1、SE2 出土土器、土錘
図版 13　SE2、SK10 出土土器、墨書
図版 14　SK10、SD4 出土土器
図版 15　SD4、SE3 出土土器(1)
図版 16　SE3 出土土器(2)
図版 17　SE3 出土土器(3)、墨書
図版 18　包含層出土土器(1)
図版 19　包含層出土土器(2)
図版 20　SE1、SK10 等出土木製品
図版 21　SE3 出土木製品
図版 22　SE3、SB1、SP097 出土木製品、
　　石器

# 第１章　調査の経緯

## 第１節　調査に至る経緯

興福地遺跡は大垣市興福地町に所在する（図１）。この遺跡は、昭和 48（1973）年に大垣市教育委員会が実施した分布調査で遺物散布地として確認されている古代から中世の時期を中心とした遺跡である（大垣市教育委員会 1990）。平成元（1989）年に大垣市教育委員会が、都市計画道路昼飯・大島線立体交差事業に伴う記録保存のための発掘調査（1,300 ㎡）を実施し、奈良時代と鎌倉時代の掘立柱建物を検出している。調査当時は字名を用いて「黒平遺跡」としていたが、平成６年『新版大垣市遺跡地図』から名称を改めている（大垣市 2011）。

興福地遺跡及びその周辺において、東海環状自動車道が建設されることになった。東海環状自動車道は、東名・名神高速道路、中央自動車道、東海北陸自動車道などを、環状にネットワーク化することを目的とし、鋭意建設が進められている自動車専用道路である。

この事業に伴う興福地遺跡の試掘確認調査は、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所（以下「岐阜国道事務所」という。）からの依頼により平成 24 年度に岐阜県教育委員会が実施した。試掘調査坑は、興福地遺跡及びその周辺の事業予定地内に 19 箇所（TP1～TP19）設定された（図３：試掘調査坑番号は試掘確認調査時の名称を記載した）。遺構面まで重機による掘削、人力により遺構検出及び一部の遺構掘削作業を実施された。その結果、TP9・TP10 において土坑５基が検出され、灰釉陶器・山茶碗等が出土した。また、TP10 では古代と中世の遺物包含層と遺構面２面が確認された。これらが大垣市教育委員会による発掘調査で検出した遺構面に相当し、自然堤防状の微高地に集落あるいは墓域が広がることが想定された。

試掘確認調査の結果をもとに、岐阜県教育委員会社会教育文化課は、平成 25 年１月 15 日に平成 24 年度第１回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会を開催し、580 ㎡の本発掘調査が必要との意見をまとめた。本発掘調査は平成 25 年度に 580 ㎡を対象に、岐阜県文化財保護センター（以下「センター」という。）が岐阜国道事務所から、東海環状自動車道（大垣西ＩＣ～大野神戸ＩＣ）に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の依頼により、発掘調査を開始したが、調査の途中で西地区において、東西及び南北方向に並ぶ方形の掘形を伴う柱穴が検出されたため、柱穴列の広がりを確認する目的で３㎡を追加し、合計 583 ㎡の発掘調査を実施した（図２）。

本工事については、文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づき、岐阜国道事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あて埋蔵文化財発掘の通知（平成 24 年６月 11 日付け国部整岐調第 51 号）が提出され、同法第 94 条第４項の規定に基づき、県教育長から同事務所長あて発掘調査の実施を求める勧告（平成 24 年８月 29 日付け社文第４号の 64）を通知した。同事務所長は県教育長に発掘調査の実施を依頼した。それを受けセンターは調査着手後、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく発掘調査の報告（平成 25 年６月６日付け文財セ第 73 号）を、県教育長に提出した。

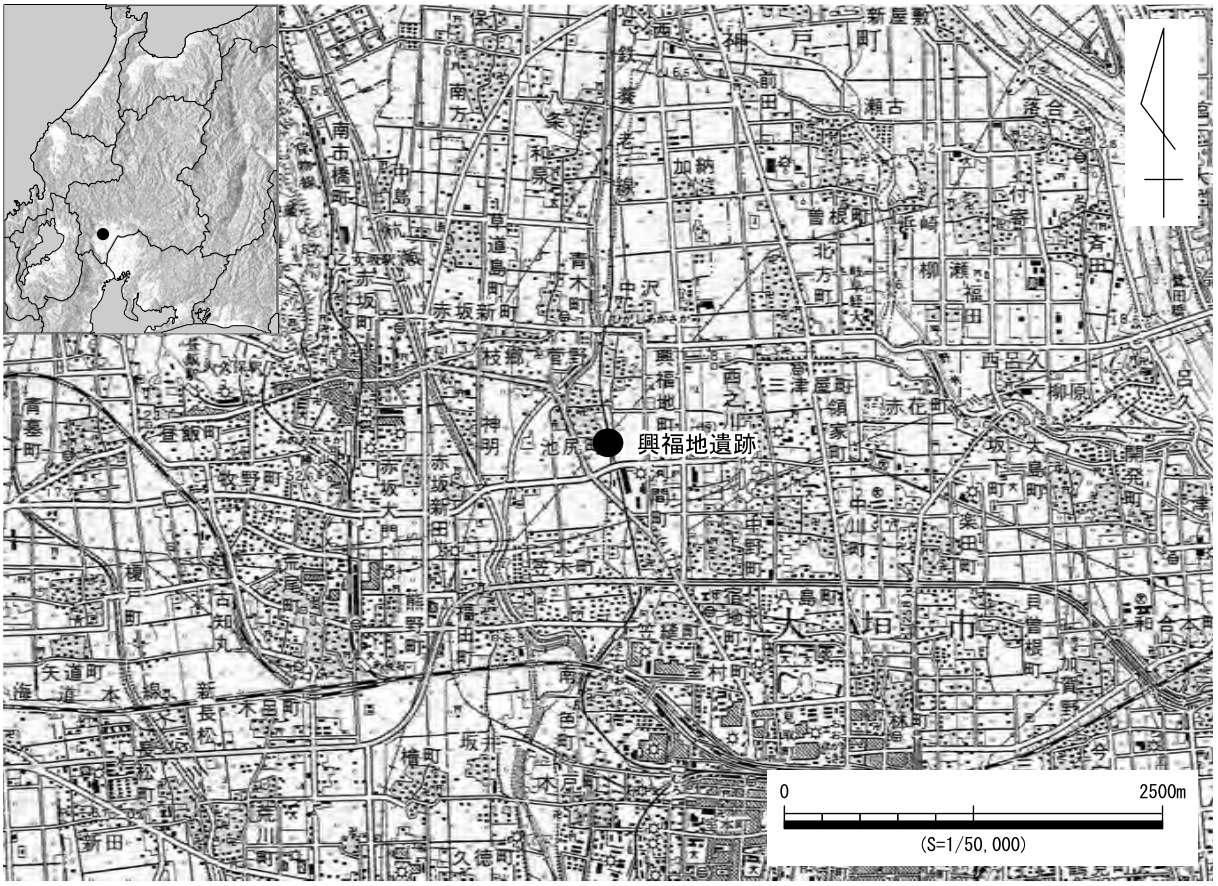



図１　遺跡位置図（国土地理院発行 1:50,000 地形図「大垣」）

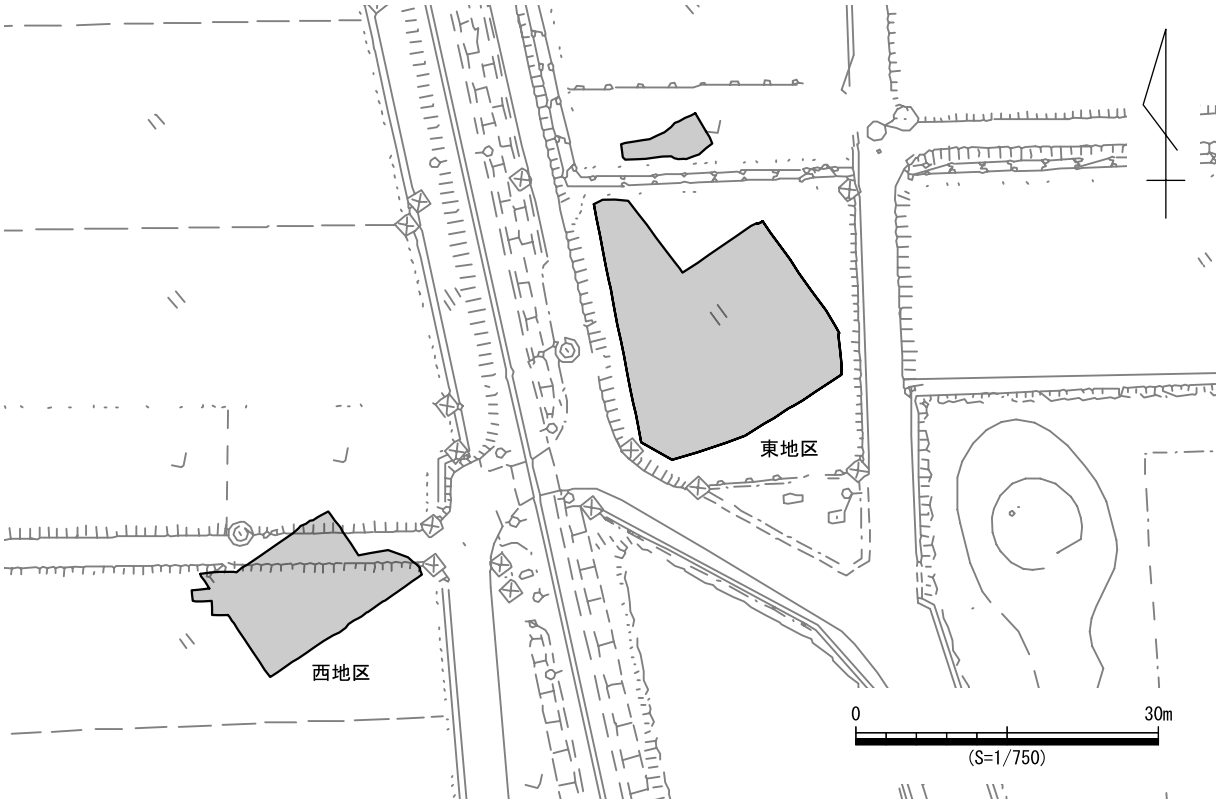



図２　発掘区位置図

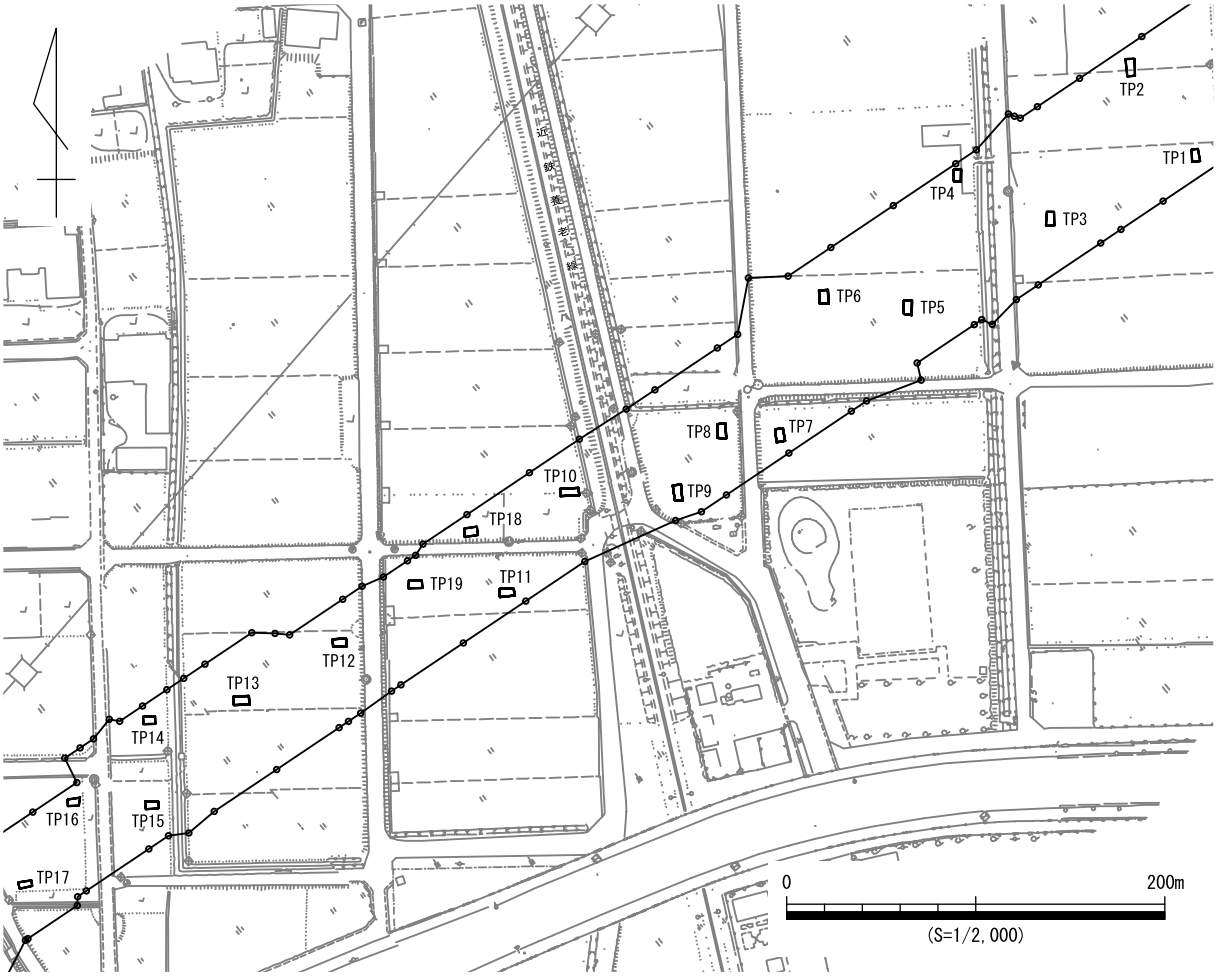



図３　試掘調査坑位置図

表１　興福地遺跡周辺の試掘確認調査結果

| 時期 | 試掘調査坑 | 検出遺構 | 縄文土器 | 弥生土師器 | 須恵器 | 灰釉陶器 | 山茶碗 | 土師器皿 | 古瀬戸大窯 | 中近世陶磁器 | その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成24年度 | TP01 | | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| | TP02 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| | TP03 | | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| | TP04 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | TP05 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | TP06 | | 0 | 1 | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 |
| | TP07 | | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| | TP08 | | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 2 | 0 | 6 |
| | TP09 | 土坑1,2 | 0 | 26 | 1 | 26 | 22 | 0 | 0 | 1 | 1 | 77 |
| | TP10 | 土坑1,2,3 | 0 | 3 | 2 | 5 | 16 | 0 | 0 | 4 | 5 | 35 |
| | TP11 | | 0 | 6 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 3 | 0 | 13 |
| | TP12 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | TP13 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | TP14 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | TP15 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | TP16 | 畦畔1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | TP17 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | TP18 | 畦畔1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | TP19 | | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 3 |
| 合計 | | 土坑5 | 0 | 40 | 4 | 33 | 55 | 0 | 0 | 14 | 7 | 153 |

## 第２節　調査の方法と経過

### １　調査の方法

発掘調査は、平成 25 年度に 583 ㎡を実施した。発掘調査対象地は道路建設計画により橋脚や調整池が建設される部分である。

発掘区は、橋脚の規模や調整池堰堤の形状により形や面積が異なるが、養老鉄道をはさんで東と西に分かれており、東側を東地区、西側を西地区として、世界測地系座標をもとに 100ｍ×100ｍの大グリッドを設定し、一つの大区画に２地区がおさまるため大区画に名称は付けていない。さらにその中に、５ｍ×５ｍの小区画を設定し、北から南へ A から T、西から東へ 1 から 20 とした（図４）。そのため、発掘区の北東隅のグリッドは D15、南西隅のグリッドは 03 となる。

調査対象地は、調査前には水田、畑として利用されていた場所で、試掘確認調査で調査面が中世と古代の２面あることが確認されており、調査初めに排水溝を発掘区の西と南の壁面沿いで掘削し、土層観察を行った。基本層序は、Ⅰ層からⅣ層まで設定し、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が遺物包含層、Ⅲ層とⅣ層上面を遺構基盤層と設定した（第３章第１節参照）。なお、発掘調査を実施する中で、必要に応じて a～e を用いて細分した。

重機により発掘区内の表土（Ⅰ 層）を除去し、人力により遺物包含層（Ⅱ層）を掘削し、第１調査面（以下、「第１面」という。）となるⅢ層上面で遺構を検出し、遺構掘削作業を実施した。その後、遺物包含層（Ⅲ層）を掘削し、第２調査面（以下、「第２面」という。）となるⅣ層上面で遺構を検出し、遺構掘削作業を実施した。遺構の調査記録は、写真撮影及び手測り実測、デジタル測量を行った。

検出した遺構は検出順を原則として通番を付し、整理作業時に遺構種別番号を設けた。遺物包含層から出土した遺物は、層位・グリッド単位、遺構から出土した遺物は、遺構内を概ね５㎝単位の人工層位もしくは、分層した層位毎に取り上げたが、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、実測あるいは出土位置を測定して取り上げた。遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西暦下二桁と KF（遺跡名略号）」「出土場所（遺構番号又はグリッド番号）」「出土層位」「取上日」「備考」を記入し、この記録をもとに遺物台帳を作成した。遺構番号はＳと３桁の数字により表記した（例、S001）。

調査面毎の発掘区全体の景観写真撮影は、高所作業車からの撮影によって行った。第１面は東地区・西地区の景観写真撮影を同日に実施したが、第２面は西地区で市道復旧作業を調査期間内に終了させるために、西地区の掘削を先に終了させ景観写真撮影を実施したため、東地区と西地区の撮影を別日に実施した。

発掘区内は湧水が激しく、排水溝を発掘区内に掘削して常時ポンプによる排水を行う必要があったが、西地区は新たに電柱を立てる必要があり、調査期間内に設置することができなかったため、作業時に発電機を使用して排水を行った。東地区の排土は事務所西の建設用地内に運搬し、西地区の排土は調査区北と西の建設用地内においた。

出土遺物の一次整理作業（洗浄及び注記作業、遺物台帳作成）は北方京水遺跡とともに、北方京水遺跡一次整理所にて実施した。

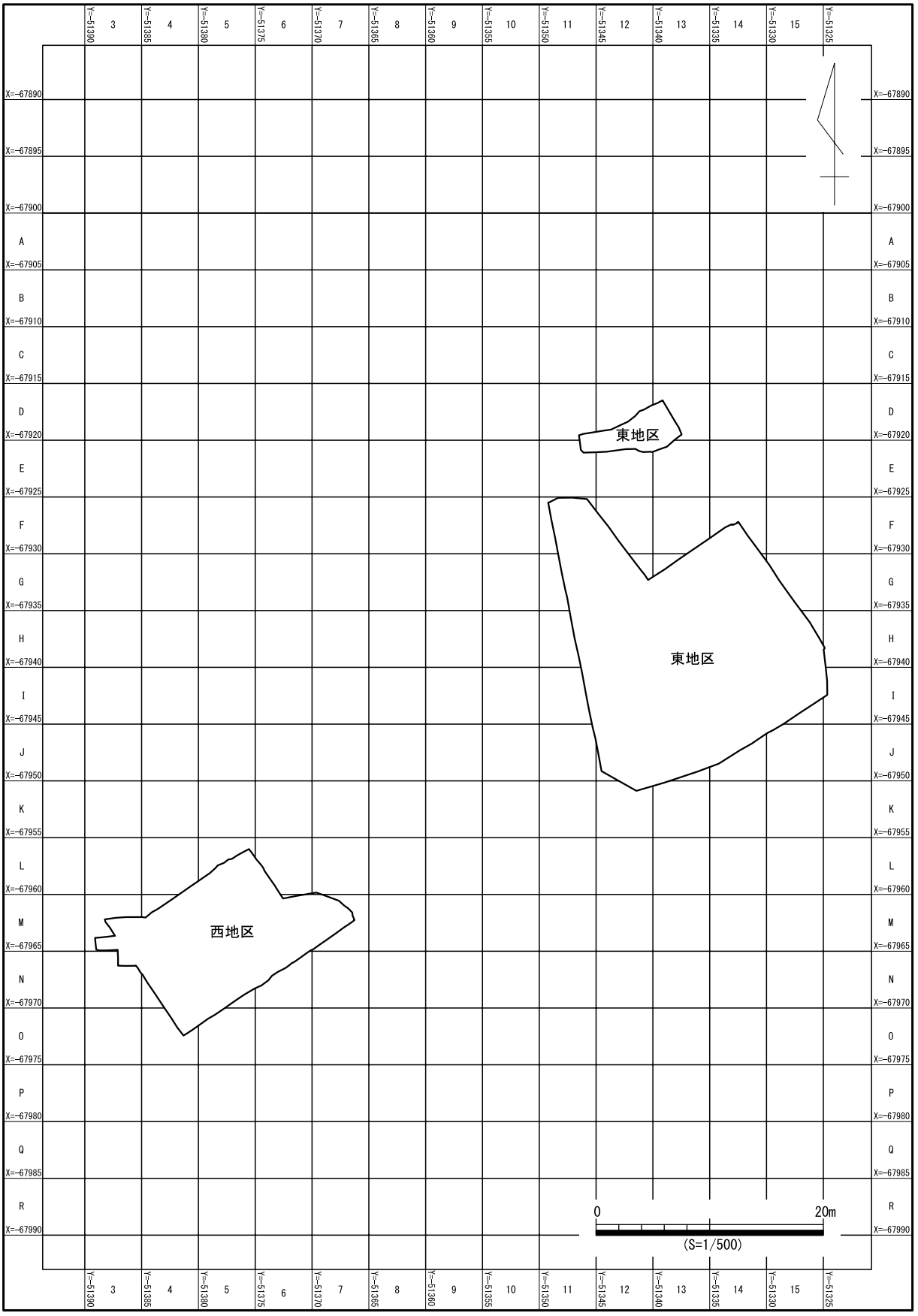

Y=-51390
3
Y=-51385
4
Y=-51380
5
Y=-51375
6
Y=-51370
7
Y=-51365
8
Y=-51360
9
Y=-51355
10
Y=-51350
11
Y=-51345
12
Y=-51340
13
Y=-51335
14
Y=-51330
15
Y=-51325
X=-67890
X=-67895
X=-67900
A X=-67905
B X=-67910
C X=-67915
D X=-67920
E X=-67925
F X=-67930
G X=-67935
H X=-67940
I X=-67945
J X=-67950
K X=-67955
L X=-67960
M X=-67965
N X=-67970
O X=-67975
P X=-67980
Q X=-67985
R X=-67990
東地区
東地区
西地区
0
20m
(S=1/500)

図４　グリッド設定図

## ２　調査の経過

現地での調査経過は以下の通りである。

第１週(5/28～5/31)　危険物探査で不発弾が発見され自衛隊が処理(5/28)、重機による表土掘削開始(5/31)。

第２週(6/ 4～6/ 7)　表土掘削終了(6/6)、作業員による排水溝掘削開始(6/7)、排水溝掘削でG11、H11から須恵器出土。

第３週(6/10～6/14)　包含層掘削開始(6/11)、SE3検出、山茶碗出土(6/13)。SD4検出、山茶碗、土師器皿、スモモの種子出土(6/14)。

第４週(6/17～6/21)　東地区I12、I13で遺構検出。SB1、SB2検出、柱材残存。H14でSD4検出、被熱した石と硬化面確認。西地区M3、4、5で包含層から山茶碗出土。強い雨で発掘区水没(6/19～21)。

第５週(6/24～ 6/28)　G13でSD4検出。SE3掘削、山茶碗、下駄、笊等出土。埋蔵文化財等基礎講座（県社会教育文化課開催）12名来訪(6/25)。強い雨、東地区北の用水路から水が入り込み発掘区水没(6/26)、西地区M3～6遺構検出(6/27)、N4、N5、O4遺構検出(6/28)。東地区遺構掘削。

第10週(7/ 1～7/ 5)　西地区遺構掘削開始(7/1)。SE3遺物取上。

第11週(7/ 8～7/12)　大垣市教育委員会中井正幸氏現地指導(7/8)。SB1、2柱材取上(7/10)。西地区第１面遺構掘削完了。SE3出土笊取上(7/11)。高所作業車での景観写真撮影実施(7/12)。

第12週(7/16～7/19)　図面校正(7/16)。東地区第２面遺構検出包含層掘削開始(7/17)。

第13週(7/22～7/26)　東地区第２面遺構検出開始、西地区第２面遺構検出・包含層掘削開始(7/22)。SE3下層掘削、西地区第２面遺構検出開始(7/23)。大垣市教育委員会中井正幸氏来訪。西地区第２面遺構検出完了(7/26)。

第14週(7/29～8/ 2)　西地区遺構掘削開始(7/30)。西地区拡張分重機掘削、第１・２面遺構検出(8/1)。

第15週(8/ 5～8/ 9)　西地区第２面、高所作業車での景観写真撮影実施(8/5)。強い雨、調査区水没(8/6)。指導調査員三重大学名誉教授八賀晋氏現地指導(8/8)。東地区遺構掘削開始(8/8)。西地区埋戻開始、市道基盤復旧(8/9)。

第16週(8/12～8/16)　SE1井戸枠の曲物出土(8/12)。夏期作業休止(8/14～16)。

第17週(8/19～8/23)　SE1井戸枠内完掘(8/19)。東地区遺構完掘、東地区第２面、高所作業車での景観写真撮影実施(8/20)。SE1曲物取上(8/22)。図面校正(8/23)。

第18週(8/26～8/30)　図面校正(8/24～26)。遺構全体図校正完了、東地区埋戻開始(8/28)。埋戻完了(8/29)。

第19週(9/ 2～9/ 6)　事務所撤去開始(9/ 2)。

第20週(9/ 9～9/13)　現地引渡(9/12)。

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、北方京水遺跡と合わせて11月25日から12月25日までの期間に北方京水遺跡一次整理所で行った。二次整理作業は平成26年度に実施した。なお、木製品については主なものの樹種同定及び保存処理、墨書の可能性のあるものについては墨痕分析、土器を伴わない柱根について年代測定を実施した。

写真１　東地区調査前風景

写真２　西地区調査前風景

写真３　東地区表土掘削

写真４　東地区包含層掘削

写真５　東地区遺構掘削

写真６　東地区遺物取上作業

写真７　西地区実測作業

写真８　高所作業車景観写真撮影

写真９　東地区調査区

## ３　調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

| | |
|---|---|
| センター所長 | 丸山和彦（平成 25 年度） |
| | 宮田敏光（平成 26 年度） |
| 総務課長 | 二宮　隆（平成 25～26 年度） |
| 調査課長 | 成瀬正勝（平成 25～26 年度） |
| 調査担当係長 | 春日井恒（平成 25～26 年度） |
| 担当調査職員 | 近藤正枝（平成 25～26 年度） |

写真 10　興福地遺跡周辺の地形

# 第２章　遺跡の環境

## 第１節　地理的環境

濃尾平野はわが国有数の平野であり、その大部分を沖積平野が占める。沖積平野は一般に上流から、扇状地地帯、自然堤防地帯（氾濫原）、三角州地帯に大きく分けられるが、大垣市付近には扇状地、自然堤防と後背湿地、三角州平野の地形が発達している。また、大垣市北西部にはわずかながら段丘も見られる。大垣市を流れる河川は、揖斐川とその支流である平野井川、相川、牧田川などが市域の外周を流れ、市内においては、杭瀬川、水門川、大谷川などが貫流している。西濃地域では大垣市を中心として自噴帯が広がっており、自噴帯の周辺には多くの「がま」と呼ばれる地下からの噴出水が分布している。興福地遺跡は、大垣市の北西部にあり、遺跡の西を北西方向から南流する杭瀬川と、遺跡の東を北西方向から南流する揖斐川にはさまれた標高８ｍ前後の氾濫低地に立地する。遺跡の北西には金生山、西には金生山から南に向かって舌状に延びる牧野台地と称される低位段丘、独立丘陵（勝山）がある。段丘上位面は沖積平野との比高差が５ｍ前後、下位面は沖積平野との比高差が２～３ｍあり、両段丘面上には多くの古墳が立地している。金生山では古代から赤鉄鉱が露頭し、荒尾南遺跡では弥生時代に金生山の赤鉄鉱からベンガラを精製し多くの遺物や遺構での使用が確認されている。金生山の北に位置する６世紀後半の南高野古墳では石室内にベンガラが塗られている。地名も赤坂といい現在では赤鉄鉱は採り尽くされ、石灰を削り出しており、山の形は現在も大きく変化している。

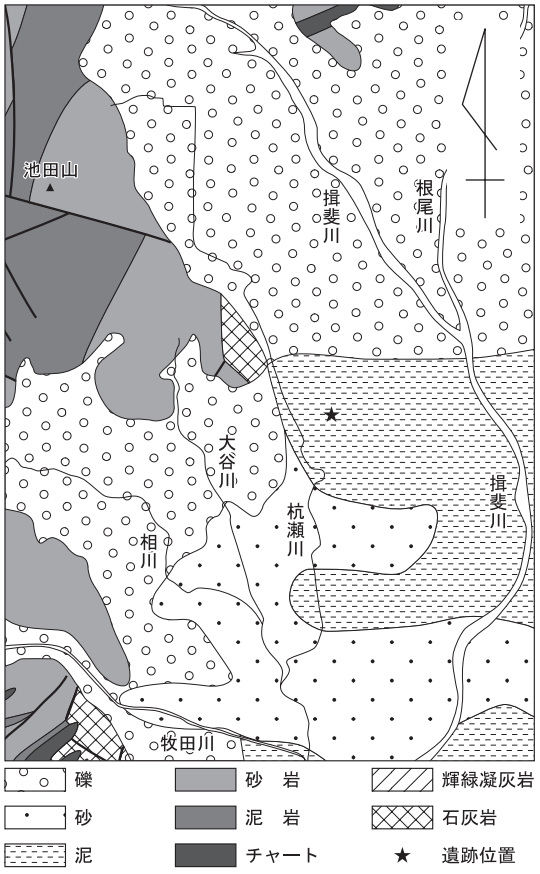



図５　遺跡周辺の地質概略図

発掘区で確認された地形から、４～14 列の約 60m 幅で、微高地が南北方向に広がり、微高地上に遺跡が展開すると考える。西地区 M3 グリッドの西三分の一から土質が変化し、西地区 M7 グリッドの東三分の二は粘質が高く地形も低くなっていく。東地区で確認された地形は、東西方向の用水路周辺と南東が低くなっている。東地区北の発掘区から遺構は確認されなかったが、西側が低く東側へ高くなっている。現在ある用水路の位置で古代にも自然流路があった可能性が考えられる。発掘区から南東方向約 100ｍの場所で、平成元年に実施された調査では掘立柱建物跡が確認されていることから、東地区で検出した遺構面が平成元年調査で確認された遺構面につながると考えられる。遺跡範囲の北端には、菅野神社（興福地町）があり、木造文官神座像二体を祀っている。

## 第２節　歴史的環境

興福地遺跡周辺は、古代から中世の遺跡が広く分布する場所である（図６）。数多くの周知の埋蔵文化財包蔵地が登録されており、その中には発掘調査によって性格等が明らかとなった遺跡もある。本節ではそれらの概要を中心に時代順に記す。なお、図６は『改訂版岐阜県遺跡地図』を基に作成し、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表２、図６と一致する。

旧石器時代　大垣市内の旧石器時代の遺跡は平成 26 年現在で発見されていない。

縄文時代　東町田遺跡、矢道Ｂ遺跡、御首神社遺跡（35）などで縄文時代中期や晩期の土器が断片的に知られている程度である。また、荒尾南遺跡（32）では、竪穴住居跡１軒を検出し、自然流路内や包含層などから縄文時代晩期の土器が出土している。

弥生時代　縄文時代に比べ弥生時代になると遺跡数が増加する。荒尾南遺跡では弥生時代前期の土器がまとまって出土し、土器棺墓も確認されているが、遺構や遺物の多くは弥生時代中期から後期に属する。弥生時代中期は、東町田遺跡で方形周溝墓や環濠と思われる溝が確認され、荒尾南遺跡では大規模な方形周溝墓群や、遺跡東部を南北に貫く大溝が掘削されている。弥生時代後期は、荒尾南遺跡や東町田遺跡などで集落が、一本松遺跡（49）や荒尾南遺跡では方形周溝墓が確認されている。荒尾南遺跡で確認した集落跡は、弥生時代後期から古墳時代初頭に営まれたもので 500 軒を超え、後期の方形周溝墓は南西部を中心に分布する。東町田遺跡では、弥生時代末期から古墳時代初頭の前方後方形周溝墓が２基確認されている。

**表２　周辺遺跡一覧表**

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|---|---|---|---|
| 1 | 興福地遺跡 | 集落跡 | 古代・中世 |
| 2 | 市橋１号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 3 | 明星輪寺経塚 | その他の遺跡 | 古代 |
| 4 | 金生山古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 5 | 塚のこし古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 6 | 西保北方城跡 | 城館跡 | 中世 |
| 7 | 南方古銭出土跡 | 散布地 | 中世 |
| 8 | 和泉城跡 | 城館跡 | 中世 |
| 9 | 青木遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 10 | 北方京水遺跡 | 集落跡, 水田 | 古代・中世 |
| 11 | 北方城跡 | 城館跡 | 中世 |
| 12 | 北方遺跡 | 散布地 | 古墳・古代・中世 |
| 13 | 北方次郎丸遺跡 | 散布地 | 古代・中世 |
| 14 | 曽根八千町遺跡 | その他の遺跡 | 弥生～中世 |
| 15 | 曽根城跡・城下町 | 城館跡 | 中世 |
| 16 | 中山道 | その他の遺跡 | 近世 |
| 17 | 赤坂湊跡 | その他の遺跡 | 近世 |
| 18 | 興福地村北遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 19 | 池尻城跡 | 城館跡 | 中世 |
| 20 | 興福地向田遺跡 | 散布地 | 古代・中世 |
| 21 | 塚越遺跡 | 散布地 | 古墳 |
| 22 | 西之川遺跡 | 散布地 | 弥生・古墳・古代 |
| 23 | 領家遺跡 | 散布地 | 古代・中世 |
| 24 | 中川大坪遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 25 | 河間遺跡 | 散布地 | 古代・中世 |
| 26 | 河間村内遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 27 | 笠縫城跡 | 城館跡 | 中世 |
| 28 | 南一色遺跡 | 散布地 | 弥生～中世 |
| 29 | 福田遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 30 | 福田城跡推定地 | 城館跡 | 中世 |
| 31 | 桧遺跡 | 散布地 | 古代・中世・近世 |
| 32 | 荒尾南遺跡 | 集落, その他墓, 生産 | 弥生～中世 |
| 33 | 木呂古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 34 | 八幡前遺跡 | 散布地 | 弥生～中世 |
| 35 | 御首神社遺跡 | 散布地 | 古代・中世 |
| 36 | 荒尾６号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 37 | 荒尾７号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 38 | 荒尾８号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 39 | 荒尾９号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 40 | 荒尾10号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 41 | 荒尾11号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 42 | 荒尾12号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 43 | 熊野遺跡 | 集落跡 | 弥生～中世 |
| 44 | 赤坂新田遺跡 | 散布地 | 古代・中世 |
| 45 | 赤坂畑田遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 46 | お勝山東北古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 47 | お勝山中世墓地 | その他墓 | 中世 |
| 48 | 岡山本陣跡 | その他遺跡 | 中世、近世 |
| 49 | 一本松遺跡 | 集落跡 | 弥生～中世 |
| 50 | お茶屋屋敷跡 | 城館跡 | 近世 |
| 51 | 竜神塚古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 52 | 林Ａ遺跡 | 散布地 | 弥生～中世 |
| 53 | 林Ｂ遺跡 | 散布地 | 弥生～中世 |
| 54 | 林Ｃ遺跡 | 散布地 | 弥生 |
| 55 | 林Ｄ遺跡 | 散布地 | 弥生～中世 |
| 56 | 林Ｅ遺跡 | 集落跡 | 弥生～古代・近世 |
| 57 | 郭町Ａ遺跡 | 散布地 | 弥生 |
| 58 | 大垣城跡・城下町 | 城館跡 | 近世 |
| 59 | 大垣藩校敬教堂跡 | 城館跡 | 近世 |

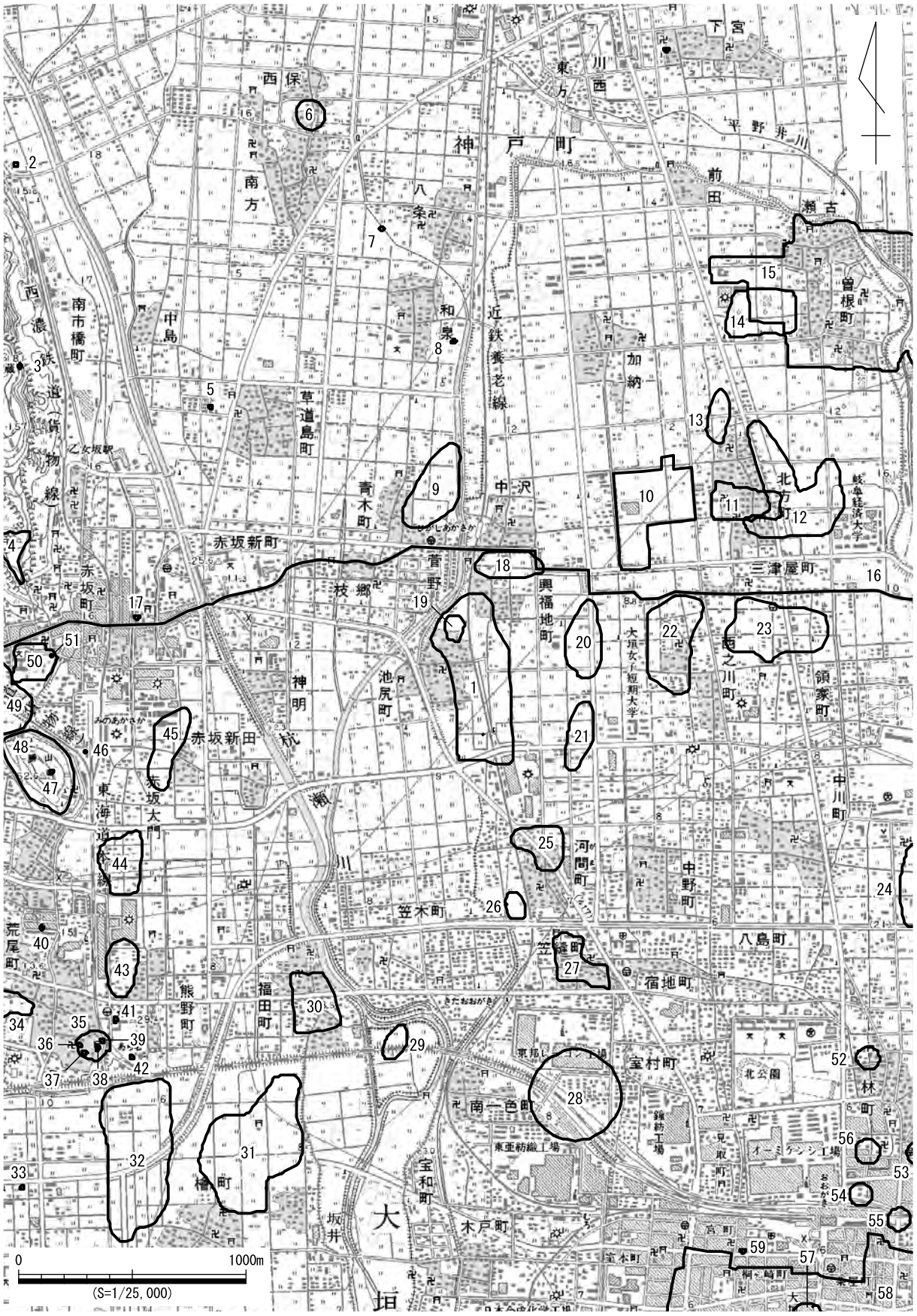


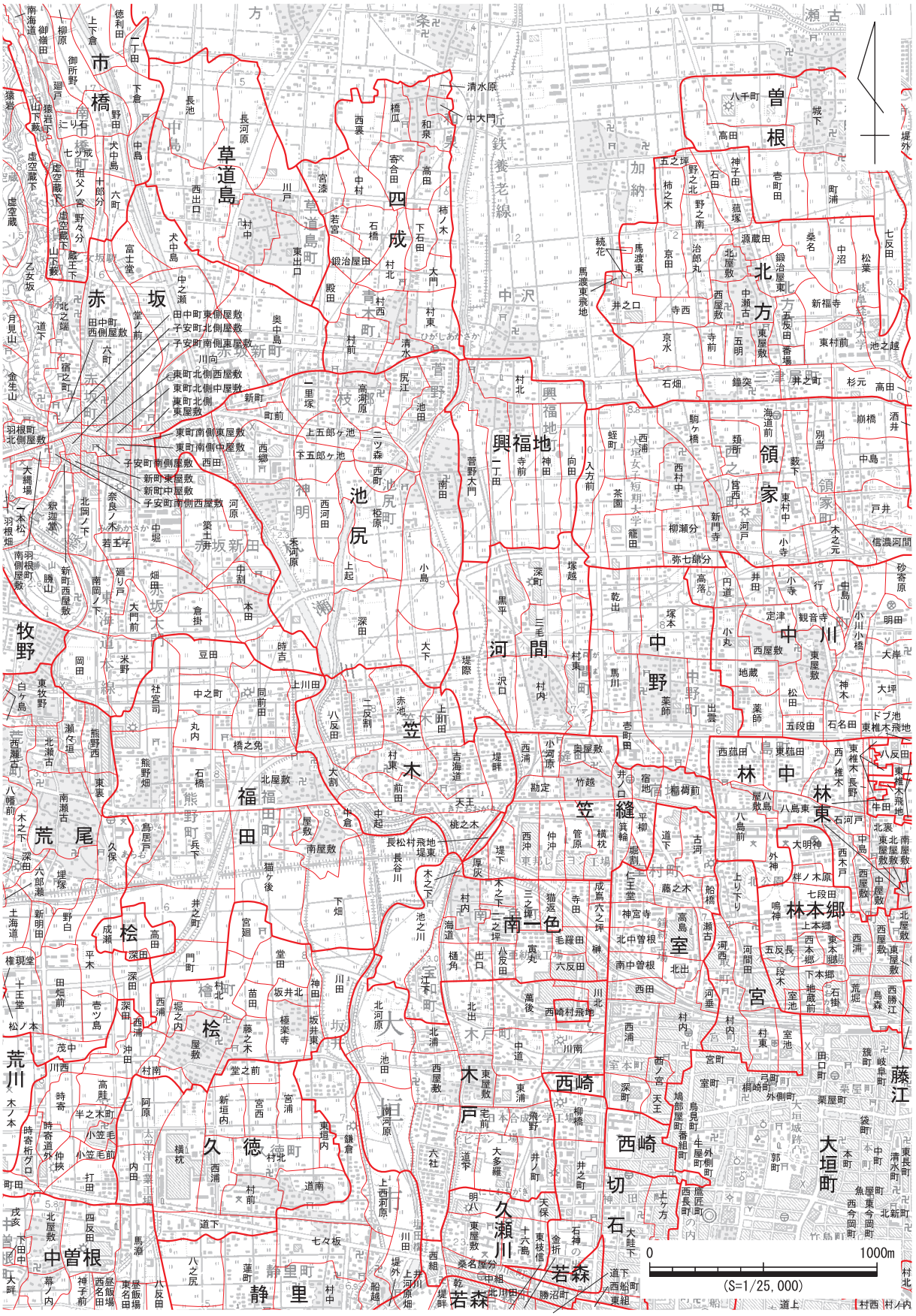

図６　周辺遺跡位置図　（国土地理院発行1:25,000地形図「大垣」使用）

古墳時代　古墳時代前期から中期には、西方の扇状地や昼飯町の台地部及びその周辺に、粉糠山古墳、矢道長塚古墳、昼飯大塚古墳など、大型の前方後方墳や前方後円墳が集中し、この地域に一大勢力が存在していたことをうかがわせる。荒尾南遺跡の集落跡は、古墳時代前期に衰退し、中期以降はＣ地区を中心に遺物が確認されている程度である。古墳時代後期を迎えると、金生山やその山麓に 100 基を超す群集墳が形成されている。東町田遺跡では、この時期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が確認されており、集落跡が営まれていたことがわかる。

飛鳥・奈良・平安時代　奈良時代以降、不破郡垂井町に美濃国府、不破郡関ヶ原町に不破関が置かれ、大垣市に美濃国分寺、垂井町に美濃国分尼寺が造られたため、西濃地域は古代美濃国の政治的中枢となった。興福地遺跡（１）は平成元年に遺跡の南東端を調査しており、奈良時代と平安時代末から鎌倉時代初頭の掘立柱建物を各１棟検出し、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、瓦、志摩式製塩土器、白磁、ふいご羽口等の遺物が出土し、中世美濃最大の伊勢神宮領であった「中河御厨」に比定されている。桧遺跡（31）では 10 世紀後半の掘立柱建物跡、総柱建物跡が検出され、地鎮等の祭祀、火災による一括廃棄の遺物出土が知られている。また、300 点以上の緑釉陶器片、墨書・ヘラ書きなどの文字関連資料や硯・転用硯、石帯、鋺（かなまり：銅椀）、銀象嵌製品、鍛冶関連遺物が出土している。塚越遺跡(21)では平安時代から鎌倉時代の土坑が検出され、８世紀の須恵器も出土している。興福地向田遺跡(20)は古代から中世の遺物散布地として知られている。一本松遺跡（49）では奈良時代の住居跡が検出され、須恵器、土師器、瓦、鉄滓が出土し、位置的に古東山道に面している。南一色遺跡（28）からは「美濃」刻印須恵器が採集されている。東町田遺跡では８世紀前半と９世紀前葉の火葬墓２基が確認されている。北方京水遺跡(10)は微高地上の集落跡から溝や柱穴を検出し、当遺跡と同時期の古代末から中世初頭の遺物が出土している。曽根城跡（15）では八幡神社周辺で須恵器が発掘調査で出土している。

南一色遺跡周辺では、大井荘関係文書等に基づく大井荘条里、安八郡条里の復元が、また、桧遺跡・荒尾南遺跡周辺では、不破郡条里の復元がされている。杭瀬川が安八郡と不破郡の郡界をなしていたことが安八郡条里の復元であきらかとなった。興福地はその名から奈良興福寺の荘園であったとも推測され、中川には伊勢神宮領の中河御厨があったと比定され、大垣市域では微高地上に古代から中世の荘園時代の遺跡が散在的に展開する可能性が考えられている（大垣市教育委員会 1997）。また、興福地遺跡と塚越遺跡の一帯は、古代の地方行政制度である国郡郷制では安八郡那珂郷に比定され、『和名類聚抄』に見える。この一帯には奈良時代に始まり中世を主体とした集落、あるいは公的な意味を持つ施設の存在を想定することができる（大垣市 2013）。また、「中川」の大字名の北には「領家」の大字名、「興福地」の南の「河間」には「三毛」の小字名が見られ、この地が古代から中世において重要な地であったことを考えさせる（図７参照）。

なお、養老年間（西暦 717～723 年）の駅伝制で定められた駅路のうち、大垣市内を通過する東山道は、その道筋の全容は定かでないものの、大垣付近では、赤坂宿と垂井宿を結び、赤坂湊から東に直進して三ツ屋付近の中山道を通過する初期東山道のルートを示す説がある。また、長良川西岸の安八郡墨俣神社（大垣市墨俣町）付近は、長良川と木曽川が合流する地点で、古代・中世には尾張国との国境であった。東山道と東海道を連絡する道も整備されていたと考えられ、水陸交通の要衝として注目される地域である。承和２（835）年六月の太政官符は墨俣川（木曽川）を「東海・東山の要路」と




大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書』小字図2,3,4,6,7,8を合成

**図７　小字図　（国土地理院発行1:25,000地形図「大垣」使用）**

とした上で渡船を増やして両岸に布施屋を建設することを命じている。この経路は延喜式の主要路として存続し、その機能は後の鎌倉街道、美濃路に受け継がれていたようである。郡には役所として郡家が置かれ、郡家は交通の要衝に置かれることが多い。安八郡家比定地である神戸町には式内社の宇波刀神社がある（大垣市 2013）。

平安時代末から鎌倉時代初頭の時期に、大垣市北西部を中心とした西濃地方にはいくつかの経塚が確認されている。金生山中腹には 12 世紀頃に造営された経塚があるとされ、経筒、銅鏡片、火打金等が伝えられている。金生山中腹にある明星輪寺には「久安二二年（久安４年：1148）」銘のある妙法経碑があり県重要文化財に指定されている。岡山麓の北東部に経塚があり石経と曼荼羅を埋めた、さらに岡山の四方にも経塚があったと『大垣藩地方雑記』に記載がある。他には静里町の正円寺経塚、上石津町の観音寺経塚、養老町の多岐神社経塚にはいずれも、文治５（1189）年の妙法経碑があり、この地域に４例知られている（大垣市 2013）。

<u>鎌倉時代以降</u>　中世前期：元円興寺跡は大垣市北西部谷沿いの山間部にある古代に創建され中世以降に栄えた山岳寺院で、64 の平坦面が残り、５ヶ所に礎石、石積み、土塁の他、五輪塔や石仏もみられる。遺構群北の緩斜面に中世墓が確認され、周辺部で灰釉四耳壺の小片が採集されている。岡山の東麓にある安楽寺の裏山一帯には広範囲に中世墓群があったと伝えられている。岡山の頂上付近や安楽寺の石造供養塔群の中には古い宝篋印塔や数多くの一石五輪塔がある。岡山では 13 世紀前半の瀬戸灰釉四耳壺、14 世紀の常滑の甕が採集されている。花岡山古墳の後円部石室上部の中世撹乱層から美濃須衛産四耳壺が１点出土している。墳丘の一部に造営された中世墓の蔵骨器として使われたものと思われる。曽根八千町遺跡（14）では、区画溝に囲まれた掘立柱建物跡が検出され 12 世紀後半～13 世紀初頭の屋敷地が確認されると供に、木棺墓が検出され、櫛、鏡、山茶碗、漆器、青磁、宋銭などの副葬品が出土している。桧遺跡（31）からは、鎌倉時代を中心とした溝、土坑、区画溝、柱穴等を検出し、山茶碗、土師器皿、伊勢型鍋、箸、下駄、鉄製鋤先が出土し、山茶碗には約 40 点の墨書がある。北方京水遺跡（10）では微高地上に集落跡が検出され集落の西には鎌倉時代の水田が伴う。水田跡は２面検出され、洪水堆積層でパックされた足跡や、洪水対策で造られた堰跡が検出されている。
中世後期：曽根城跡（15）は稲葉氏によって築城されたといわれ、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いの後で廃城となっている。本丸北部と東部の発掘調査で東西に並ぶ石垣の列が検出され、本丸推定地周辺部で区画溝や井戸を検出している。
近世：岡山本陣跡（48）に関ヶ原の戦いにおいて東軍の本陣を慶長５年８月 24 日に構えている。東軍の勝利により岡山を「勝山」と改めている。勝山の北 500ｍには中山道（16）赤坂宿、お茶屋屋敷跡（50）があり土塁跡、空堀跡が残っている。大垣城跡・城下町（58）の調査では堀の調査と町屋の調査が行われている。太鼓門推定地付近の調査で溝・土坑が検出され、金箔瓦、土師器皿、箸、下駄等が出土している。

当遺跡周辺には弥生時代から近世にかけての遺跡が数多く分布し、特に奈良時代から鎌倉時代の遺跡が大垣市北部に多く分布するようである。平安時代から鎌倉時代の墓域が金生山周辺に分布し、東山道などの古道周辺に遺跡が広がっているようである。

# 第３章　調査の成果

## 第１節　基本層序と遺構検出面

当遺跡は大垣市北西部に広がる沖積平野の扇状地帯にあたる。空中写真の判読では扇状地の微地形である旧中州（微高地）と旧河道が予察できる。これらは、砂や砂質シルトなどの洪水堆積層に薄く覆われ埋没しているため、現在の地表はほぼ平坦である。当遺跡北東部には、空中写真の判読で北西―南東方向に伸びる埋没旧河道が明確に読み取れる。埋没旧河道の方向からみて、当遺跡周辺の扇状地が主に古杭瀬川によって形成されたと推定できる。当遺跡は南北方向に長く広がっており、北半分は比較的古い集落の微高地上に位置し、南半分は埋没した微高地上に位置して、鎌倉時代以降に埋没したと考えられる（大垣市教育委員会 1997）。

西地区は包含層が比較的厚く堆積していたが、東地区は表土、水田耕作土を重機で掘削してすぐに第１面を検出した。東地区第２面は、遺構検出面となるⅣ層上面と遺構埋土の土色に明瞭な違いがあり、比較的容易に検出することができたが、第１面の SE3、SD4 は遺構検出面となるⅢ層上面土色の違いが微妙で、完形に近い遺物が出土した範囲の土のしまり具合をもとに検出した。西地区においても同様で、第２面は遺構検出が比較的容易であったが、第１面は土色にあまり違いがなく、Ⅲ層には鉄分が多く含まれるのに対して遺構埋土は鉄分を含まず堅くしまるという違いで検出している。結果的にⅢ層上面から５㎝ほど掘り下げて遺構を検出している。

調査時には伏流水の湧水があり、西地区 SP048 で標高 7.77ｍの高さに、東地区 SE1 で 7.85ｍ、SE2 で 7.85ｍ、SE3 で 8.00ｍの高さに湧水の満水面がある。西地区の南と西の壁面で現在の水田と遺構面の間には、植物の根につたわってたまる鉄分（暈管状の鉄移動）が高さ約 30㎝の範囲でみられ、地下水位の上下変動が激しいことがわかる。建物を建てるには条件はよくないうえに微高地の東西方向の幅は約 60ｍと広くはない。このように地形的に制約を受ける場所に立地する点がこの遺跡の特徴である。以下、基本層序のⅠ層からⅣ層までの詳細及び遺構検出面について記載する。

**Ⅰ層　10YR4/2 灰黄褐色砂質土～10YR3/2 黒褐色砂質土　表土**

調査区全面で確認することができた。近代から現代の水田耕作土と床土などをまとめてⅠ層とした。層厚は約 0.05ｍ～1.0ｍである。弥生時代から近現代までの遺物を含む。

**Ⅱ層　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　遺物包含層**

調査区全面で確認することができた。層厚は約 0.05ｍ～0.15ｍである。弥生時代から鎌倉時代の遺物を含み、層除去後に、中世の柱穴、溝跡、井戸跡を確認した。

**Ⅲ層　10YR4/1 褐灰色粘土～2.5Y3/1 黒褐色粘土　遺物包含層　上面第１面遺構検出面**

調査区全面で確認することができた。層厚は約 0.05ｍ～0.20ｍである。奈良時代から鎌倉時代までの遺物を含む。ⅢとⅢ-2 上面から遺構の堀込が観察できるが、Ⅲ-2 上面でのみ遺構を検出した。

**Ⅳ層　5Y4/1 灰色粘土～7.5Y4/1 灰色砂質土　上面第２面遺構検出面**

調査区全面において認められ、層厚は表土から約 0.20ｍ～0.90ｍであった。古墳時代から平安時代の遺物を含む。上面で平安時代の遺構を検出した。径１～10㎝の亜角礫を含む下層から湧水がある。

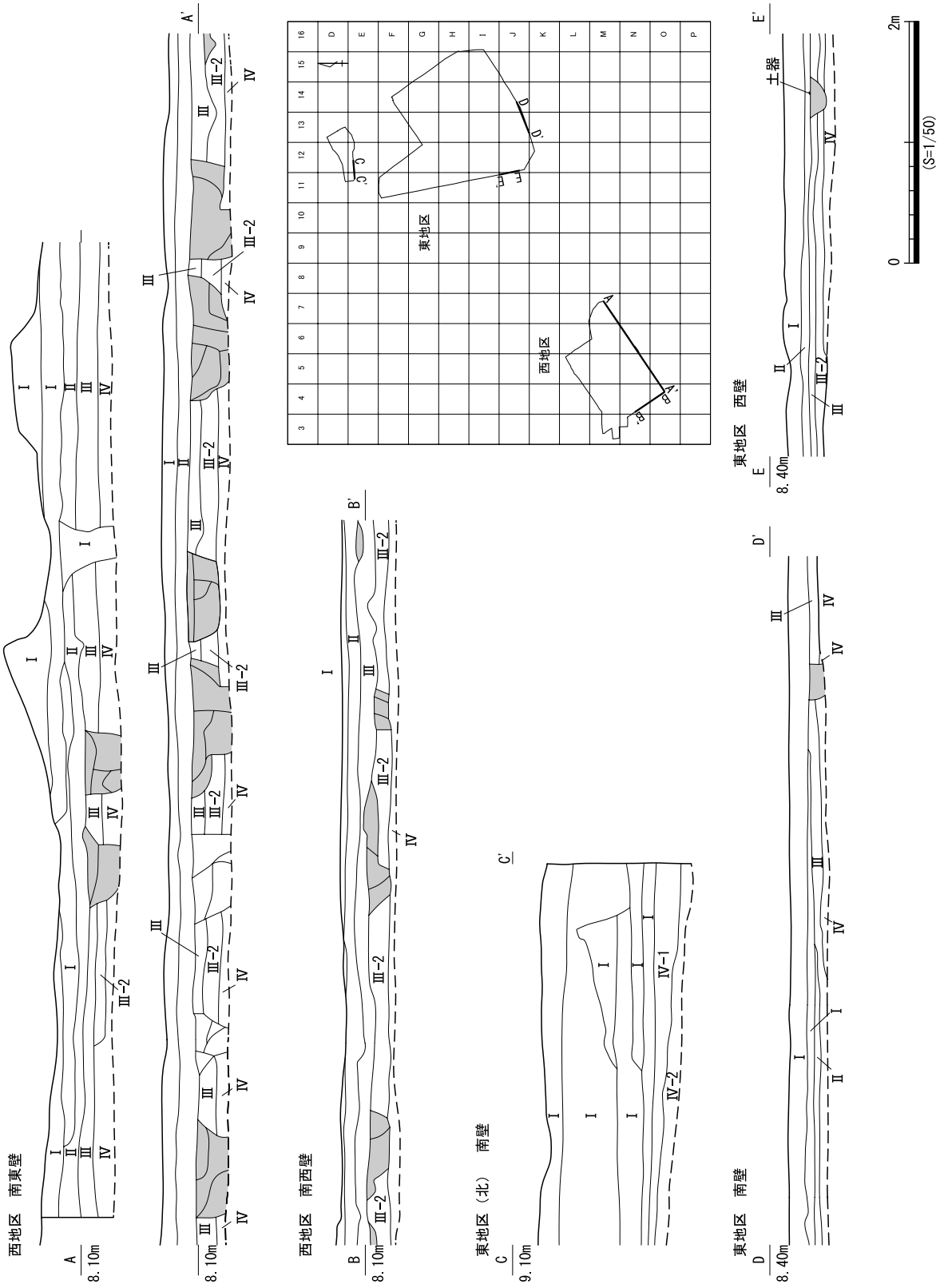

西地区　南東壁
A
8.10m
A'
8.10m
西地区　南西壁
B
8.10m
B'
東地区（北）　南壁
C
9.10m
C'
東地区　南壁
D
8.40m
D'
東地区　西壁
E
8.40m
E'
土器
東地区
西地区
0
2m
(S=1/50)

図８　基本層序図

# 第２節　遺構概要

調査では、第１面（Ⅲ層上面）と第２面（Ⅳ層上面）を遺構検出面とし、平安時代前期と平安時代末から鎌倉時代初頭の掘立柱建物、掘立柱塀、柵、溝、井戸、土坑などを検出した。遺構出土遺物から、

第１面（Ⅲ層上面）の時期を平安時代末から鎌倉時代初頭（猿投窯第５型式期）

第２面（Ⅳ層上面）の時期を平安時代前期（美濃窯光ヶ丘１号窯式期から丸石２号窯式期）

と考える。第４節で第２面検出遺構と遺物について、第５節で第１面検出遺構と遺物について記載する。なお、東地区第２面においては、遺構出土遺物をみると、本来なら第１面で検出できた可能性のある遺構（SE2、SK10 など）があるが、これらは検出した第２面において掲載している。遺構の種類と検出数は、表３のとおりである。そのうち、単独の柱穴（SP、以下、括弧内のアルファベットは遺構略号を示す。）は、遺構内の堆積土中で柱痕跡を確認したものである。なかには掘立柱建物や柵である遺構も存在する可能性がある。しかし、発掘調査時から整理等作業にかけて、同一規模の柱穴のまとまりや並びを確認できなかったため、今回は単独の柱穴として報告する。以下本書における遺構の分類、計測方法について述べる。

**表３　検出遺構一覧表**

| 遺構の種類 | 略号 | 平安時代前期 | 平安時代末から鎌倉時代初頭 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 塀・柵 | SA | 0 | 8 | 8 |
| 掘立柱建物 | SB | 0 | 3 | 3 |
| 溝 | SD | 2 | 2 | 4 |
| 井戸 | SE | 1 | 2 | 3 |
| 土坑 | SK | 15 | 5 | 20 |
| 単独の柱穴 | SP | 96 | 29 | 125 |
| 自然流路 | NR | 1 | 0 | 1 |
| 掘立柱建物の柱穴 | P | 0 | 8 | 8 |
| 塀・柵の柱穴 | P | 0 | 24 | 24 |
| 合計 | | 115 | 81 | 196 |

## １　遺構の分類

今回検出した遺構は地面に掘りこまれた遺構（ピット・土坑等）で、遺構の種類は掘立柱塀、柵、掘立柱建物、溝、井戸、土坑、柱穴、自然流路に分け、各遺構の分類は、形状と規模、構造から判断した。なお本書では、柵や掘立柱建物のように複数の遺構の組み合わせによるものは、SB1-P1 のように併記した。以下に各遺構の分類基準を概述する。

### 塀・柵（略号 SA）

直線的あるいは屈曲して規則的に線上に並んだ複数の柱穴によって構成される遺構で、柱穴の平面形状が方形で柱間が１ｍ以上と広いものを塀､柱穴の平面形状が円形で直径 25cm 以下と規模が小さいものを柵とした。なお、確認した柱穴の略号はＰとした。

### 掘立柱建物（略号 SB）

向かい合う２辺以上が方形に配置されると想定できるように、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成される遺構を、掘立柱建物とした。なお、確認した柱穴の略号はＰとした。

### 溝（略号 SD）

地面を掘りくぼめた遺構の内、上端の短軸（幅）に対して長軸（長さ）が３倍以上の長さを有する遺構を溝とした。

**井戸（略号 SE）**

深い円筒形の形状を示し、地下水面まで掘削されたものを井戸とした。平安時代前期の井戸 SE1 は、曲物井戸枠を持ち掘形平面形は楕円形を呈する。平安時代末から鎌倉時代初頭の井戸は２基あり、素堀り井戸で、２基とも井戸枠を持たず、上部と下部の２段構成になっている。SE2 の上部の掘形平面形は不整方形で、下部は上部に比べ一回り小さい不整方形を呈している。SE3 は上部の掘形平面形は不整円形で、下部はいびつな方形を呈している。SE3 では井戸を閉じる際の神送りの祭りが行われ、上部土坑内に祭りに使用した道具と思われる、完形の山茶碗等が出土している。

**土坑・柱穴（略号 SK・SP）**

穴状遺構のうち、前述した各分類に当てはまらない比較的規模の小さい遺構群をここに分類した。柱穴は、柱穴跡もしくは柱穴状の掘形、柱痕を持つ穴とし、土坑はそれ以外の穴を示す。便宜上、直径 0.5m以下を柱穴、以上を土坑とした。穴の中でも、柱痕跡・柱材があり掘立柱建物・柵等の柱穴になる可能性があるが単独で存在するものについては規模に関わらず柱穴とした。

土坑は、形が楕円形あるいは隅丸方形でほぼ真っ直ぐに掘り下げた穴で、柱痕跡が無いものとした。

**自然流路（略号 NR）**

幅が広く、自然の水流により形成された窪地状を呈しているもので、溝が人によって造成されたと判断されるものに対して、自然流路はそうではないものである。

**２　遺構の計測**

各遺構の規模は遺構一覧表に示した。柱痕跡の大きさが分かるものは計測を行った。明らかに撹乱や他の遺構によって破壊されたり、調査区外に延びたりしている場合は括弧書きで残存値を示した。

**溝**

上端の幅は最大幅で計測し、深さは一番深い位置で計測した。

**土坑・柱穴**

方形の遺構については、長軸と短軸は、方形遺構の各辺中央に直交する軸を結んだ線の長さを測定した。それ以外については、長軸と短軸を計測した。深さは最も深い位置で計測した。

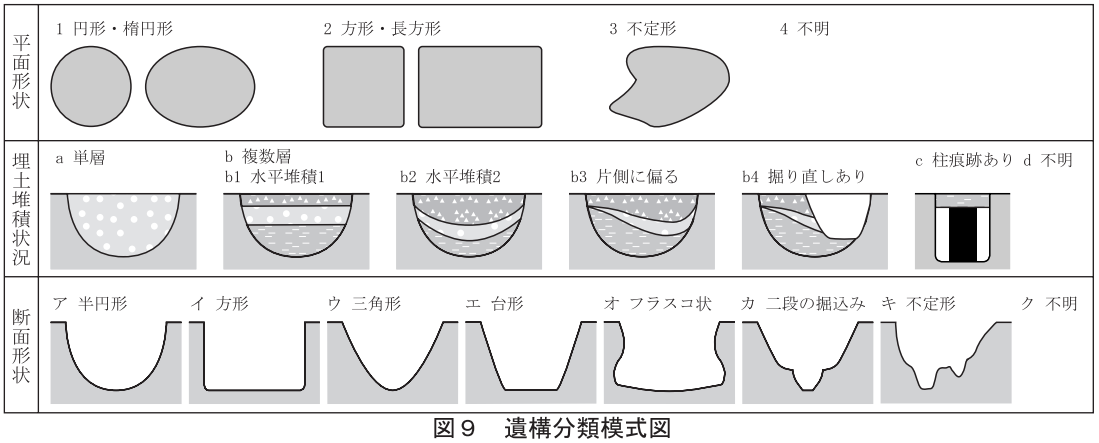



図９　遺構分類模式図

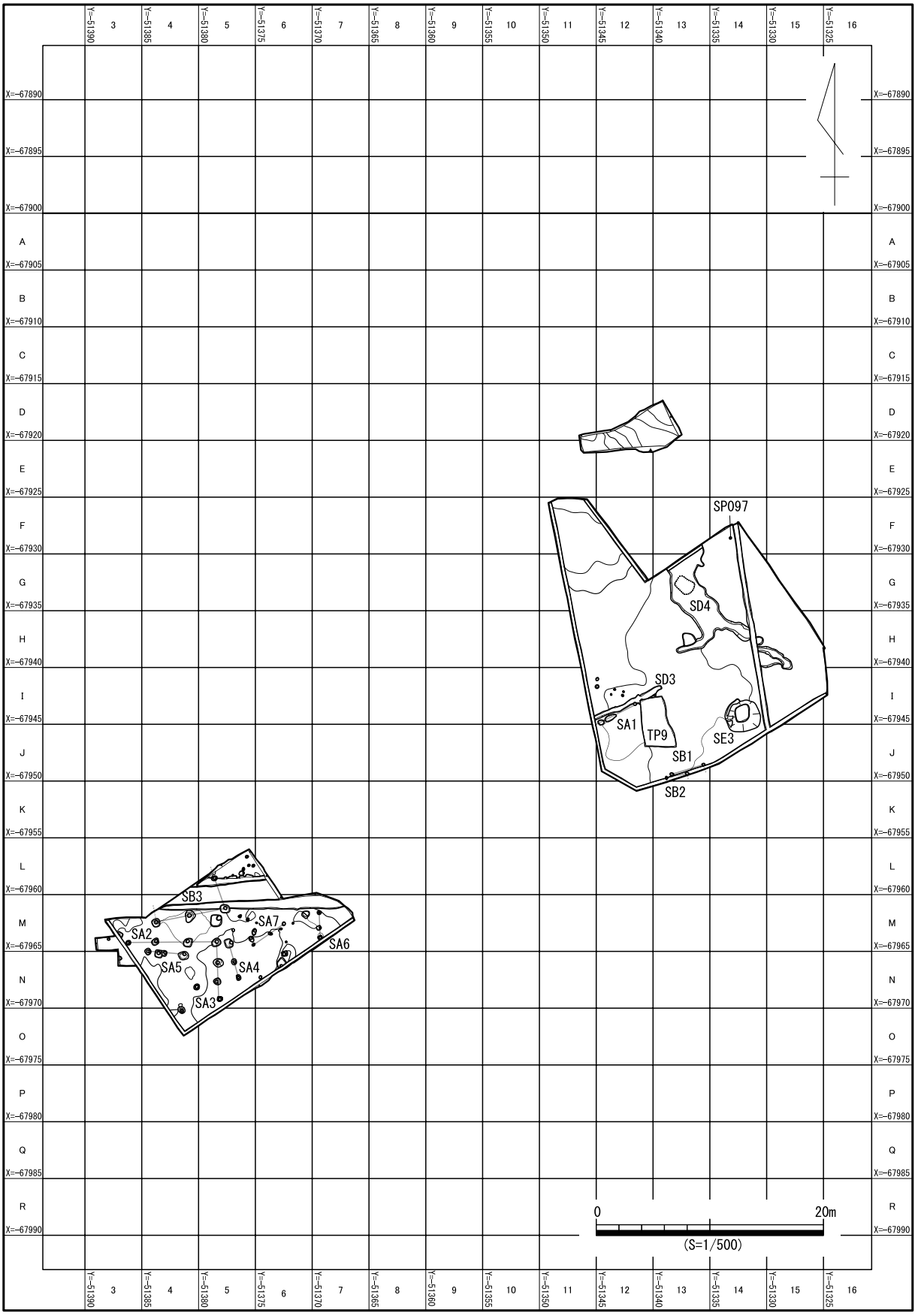



図10　第１面遺構全体図

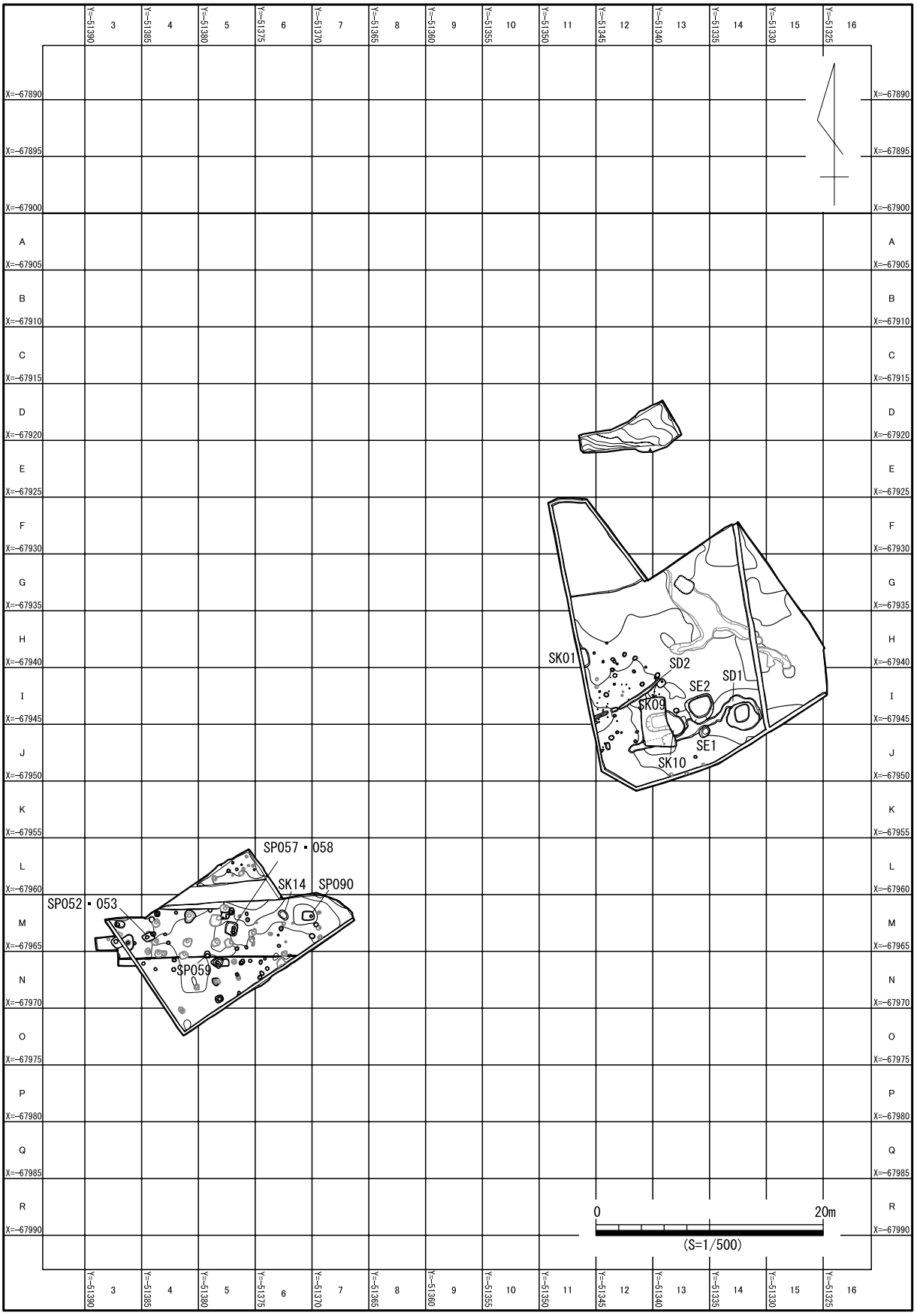



図11　第２面遺構全体図

# 第３節　遺物概要

## １　出土遺物数と掲載遺物数

出土遺物数は、接合後の破片数合計 4,010 点である（表４）。このうち、平安時代前期から鎌倉時代前期のものが断続的にあり、弥生土器、古墳時代の土師器が極少数だが出土している。平安時代末期から鎌倉時代初頭の山茶碗が、全体の出土遺物数に対して約 47.3％と最も多い。土師器は時期がわからない小破片がほとんどであるのでこれを除くと、山茶碗に次いで多いのが灰釉陶器 13.8％、中世土師器 7.6％である。なお、接合比率は全体に低い。

掲載遺物数は合計 278 点であり、接合後破片数の 6.9％である。その抽出方法は、遺構出土遺物のうち、遺構の性格や時期等を検討する上で必要なものや、遺物包含層出土遺物のうち、遺跡の性格を端的に示すものや分類別の代表的なものを中心に選択している。

**表４　出土遺物点数等一覧表**

| 種別 | 西地区 | | 東地区（TP9を含む） | | 興福地遺跡：合計 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 接合前破片数 a | 接合後破片数 b | 接合前破片数 a | 接合後破片数 b | 接合前破片数 a | 接合後破片数 b | 接合比率 | bの全体に対する割合(%) | 掲載点数 c | c/b |
| 弥生土器・古墳土師器 | 3 | 3 | 45 | 45 | 48 | 48 | 0.00 | 1.20 | 3 | 0.063 |
| 古代土師器 | 0 | 0 | 158 | 145 | 158 | 145 | 8.23 | 3.62 | 12 | 0.083 |
| 中世土師器 | 22 | 18 | 318 | 287 | 340 | 305 | 10.29 | 7.61 | 27 | 0.089 |
| 時期不明土師器 | 31 | 28 | 689 | 689 | 720 | 717 | 0.42 | 17.88 | 0 | 0.000 |
| 須恵器 | 1 | 1 | 131 | 124 | 132 | 125 | 5.30 | 3.12 | 13 | 0.104 |
| 灰釉陶器 | 7 | 6 | 583 | 547 | 590 | 553 | 6.27 | 13.79 | 53 | 0.096 |
| 緑釉陶器 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0.00 | 0.02 | 1 | 1.000 |
| 山茶碗 | 141 | 135 | 1831 | 1760 | 1972 | 1895 | 3.90 | 47.26 | 108 | 0.057 |
| 中世陶器 | 0 | 0 | 42 | 42 | 42 | 42 | 0.00 | 1.05 | 3 | 0.071 |
| 中国製磁器 | 0 | 0 | 9 | 8 | 9 | 8 | 11.11 | 0.20 | 7 | 0.875 |
| 石器・石製品 | 0 | 0 | 10 | 10 | 10 | 10 | 0.00 | 0.25 | 5 | 0.500 |
| 土製品 | 0 | 0 | 12 | 11 | 12 | 11 | 8.33 | 0.27 | 7 | 0.636 |
| 木製品 | 6 | 6 | 83 | 83 | 89 | 89 | 0.00 | 2.22 | 39 | 0.438 |
| 種子 | 1 | 1 | 41 | 41 | 42 | 42 | 0.00 | 1.05 | 0 | 0.000 |
| 炭化物 | 1 | 1 | 18 | 18 | 19 | 19 | 0.00 | 0.47 | 0 | 0.000 |
| 合計 | 213 | 199 | 3971 | 3811 | 4184 | 4010 | 4.16 | 100.01 | 278 | 0.069 |

## ２　時期区分

本報告書における時期区分は一般的に使用されている時代呼称を用い、その年代観に対応する土器様式等は既存の研究に従った（表７）。また、本報告書における中世はおよそ平安時代末期から安土・桃山時代、近世はおよそ江戸時代に対応する。なお、出土した遺物について、以下の方々から土器様式名、産地、時期などの指導を得た。しかし、本書における記載内容の責任は編集者にある。

須恵器・灰釉陶器：渡邉博人（各務原市）、　中近世陶磁器：藤澤良祐（愛知学院大学）、

石器・石製品：長屋幸二（岐阜県博物館）

## ３　遺物概要

ここでは種別ごとの所属時期、分布などについて記す。

**弥生土器・土師器**　弥生土器は破片につき時期不明である。土師器は弥生時代終末期から古墳時代中期のものが少数ある。弥生土器、土師器はほとんどが東地区からの出土である。弥生時代と古墳時代の時期の遺構は発掘区から検出していない。試掘坑 TP1 から TP8 では遺構面となる層は確認されてい

ないため、北の方向からの古杭瀬川の氾濫による流れ込みと考える。

**古代土師器・中世土師器**　古代の土師器には７世紀から８世紀の長胴甕の胴部破片、清郷型鍋があり、中世の土師器にはロクロ土師器皿、土師器皿、伊勢型鍋がある。土師器皿は 12 世紀から 13 世紀のもので SE3 から多く出土している。ロクロ土師器は SD4、SE3、SK09、SK10 から出土している。10 世紀から 11 世紀の清郷型鍋、10 世紀（平安時代中期）から 12 世紀（鎌倉時代前期）の伊勢型鍋が出土している。伊勢型鍋は 12 世紀のものが多く出土している。清郷型鍋が第２面の灰釉陶器に、伊勢型鍋が第１面の山茶碗にともなって出土している。伊勢型鍋はその多くが SE3 からの出土である。

**須恵器**　須恵器は８世紀後葉のものもあるが、ほとんどが９世紀初頭のもので、美濃須衛産である。猿投産の甕の小破片も出土している。須恵器のほとんどが東地区の西側 F11 から I11 にかけて多く出土し、西地区北の TP10 からも出土している。発掘区からは須恵器の時期の遺構は検出していない。西地区の北で東地区の西の範囲に須恵器の時期の遺構が広がると考えられる。佐波理写しの蓋や、摘み蓋や有台坏の転用硯がある。また、灰釉陶器の時期と思われる緑釉陶器も東地区 J12 から出土しており、官衙遺構が近隣に所在する可能性も考えられる。

**灰釉陶器・緑釉陶器**　出土遺物の所属時期は美濃窯編年の９世紀後葉光ヶ丘１号窯式期から明和 27 号窯式期までである。西地区は SP090 掘形埋土から、東地区は SD1、SE1、SK9、NR1 から多く出土している。碗・皿以外には、深碗、輪花碗、段皿、香炉、瓶、甕がある。生産地は美濃須衛窯、美濃窯が少数あり、ほとんどが尾張産と思われる。美濃須衛産の甕が SE3 から出土している。NR1 出土の碗に「大」、包含層出土瓶の外面に「大」の墨書がある。灰釉陶器の時期と思われる緑釉陶器が１点出土している。壺の底部破片で、底部外面にまで緑釉がかかっている。碗、皿以外の器種が豊富であることからも一般集落ではない可能性が考えられる。

**山茶碗・中世陶器・中国製磁器**　平安時代後期から鎌倉時代前期まではほぼ連続してあり、12 世紀から 13 世紀の常滑の甕の胴部破片が少数出土しているが、古瀬戸・大窯・登窯が皆無に近い。鎌倉時代の中国製磁器（青磁・白磁）も東地区 SD4、SE3 から多く出土している。

山茶碗の出土位置は調査区全体に広がっているものの、東地区から多く出土している。所属時期は、猿投窯産が第３～６型式期で第５型式期のものがほとんどである。ほとんどが碗と皿で、片口鉢と広口瓶が少数ある。美濃窯産では浅間窯下１号窯式期のものが少数ある。美濃須衛産の小型片口壺が SE3 から１点出土している。碗の中には少数であるが美濃須衛産のものもある。内面に漆の付着したものや、内外面に煤が付着しているものがある。大垣市で出土する山茶碗は猿投窯産が多く、故意に煤を付けているものが多く出土しているようである。また、山茶碗には内面側から故意に打ち欠いているものが SE3 から多く出土している。SE3 出土の第５型式期の碗・皿に墨書のあるものが多い。墨書には「十」「大」「上」や花押と思われるものもある。加工円盤もある。SE3 上部から出土している完形の山茶碗等は井戸を閉じる祭りに使用した道具と考えられるので、煤の付着、打ち欠き、墨書は祭祀に関係している可能性が高い。

**石器・石製品**　出土遺物の所属時期は中世と考える。砥石、叩石、磨石で SE1、SE2、SE3、SK10 からの出土で被熱しているもの、煤が付着しているものもあり、井戸の祭りに関係している可能性がある。

**土製品**　土錘が少数あり、SD4、SE2、SE3 から出土している。形状は棒形で太く長いものと細く短いものの２つに分類できる。

**木製品**　出土遺物の所属時期は中世と考える。掘立柱建物の柱穴から出土した柱材の建築部材、織機関係具、容器、装身具、網組み製品、祭祀関係具、板材がある。柱材以外のほとんどが SE3、SK10 からの出土で、井戸を閉じる際の祭祀に使用した道具と考える。

**種子**　SD4 から 12 点、SE2 から３点、SE3 から 13 点出土している。ほとんどがスモモの種である。

## ４　掲載した遺物実測図の凡例

本報告書で掲載した遺物実測図の詳細は、以下のとおりである。

・付着物などのトーン表記は、アミ 80％が墨痕範囲、アミ 40％が漆等付着物・木製品炭化・石器使用痕範囲、アミ 20％が煤付着範囲、アミ 10％が緑釉範囲を示す。

**表５　木製品・種子出土一覧表**

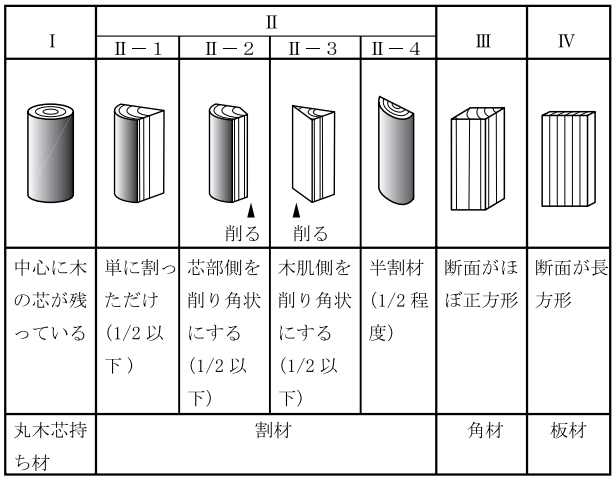
| 区分 | 器具 | | | | | | | | 部材 | 加工材・残材 | | | | | | 木製品 | 種子 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 器種 | 装身具 | | | 紡織具 | 容器 | | 祭祀具 | 網組製品 | 建築部材 | 板材 | 残材 | | | | | | |
| 分類／遺構名 | 柄 | 下駄 | 扇子の骨 | 手押木 | 曲物 | 鞘 | 斎串 | 笊 | 柱材 | 板状 | 端材 | 筒 | 樹皮材 | 木屑 | 用途不明 | 総計 | スモモ |
| SE1 | | | | | 4 | | | | | | | 2 | | | | 6 | 1 |
| SK10 | 1 | | | | | | | 1 | | 3 | 1 | | 1 | | 1 | 8 | 1 |
| SK16 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 1 |
| NR1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | 0 |
| SB1 | | | | | | | | | 2 | | | | | | | 2 | 0 |
| SB2 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | 0 |
| SD3 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 0 |
| SD4 | | | | | | | | | | | | | | | 5 | 5 | 12 |
| SE2 | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 4 | 3 |
| SE3 | 1 | 3 | 3 | 1 | | 1 | 3 | 2 | | | 5 | | 1 | | 28 | 48 | 13 |
| SP097 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | 0 |
| SP109 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 0 |
| SA2 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 0 |
| SA3 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | 0 |
| 包含層 | | | | | | | 1 | | | | | | | | 8 | 9 | 11 |
| 総計 | 2 | 3 | 3 | 1 | 4 | 1 | 6 | 3 | 3 | 3 | 6 | 2 | 2 | 1 | 49 | 89 | 42 |

**表６　石器・石製品一覧表**

| 石材／器種 | 花崗岩 | 斑れい岩 | ホルンフェルス | 安山岩 | 流紋岩 | 砂岩 | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 磨石 | 3 | | | 3 | | | 6 |
| 叩石 | | | | | 1 | | 1 |
| 砥石 | | 1 | 1 | 1 | | | 3 |
| 総計 | 3 | 1 | 1 | 4 | 1 | 0 | 10 |

| 遺構／器種 | SE1 | SK4 | SD4 | SE2 | SE3 | SK10 | 包含層 | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 磨石 | 1 | 1 | 2 | 1 | | | 1 | 6 |
| 叩石 | | | | | | 1 | | 1 |
| 砥石 | | | 1 | 1 | 1 | | | 3 |
| 総計 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 10 |

**木取りの分類**




**先端形状の分類と加工状況の分類**

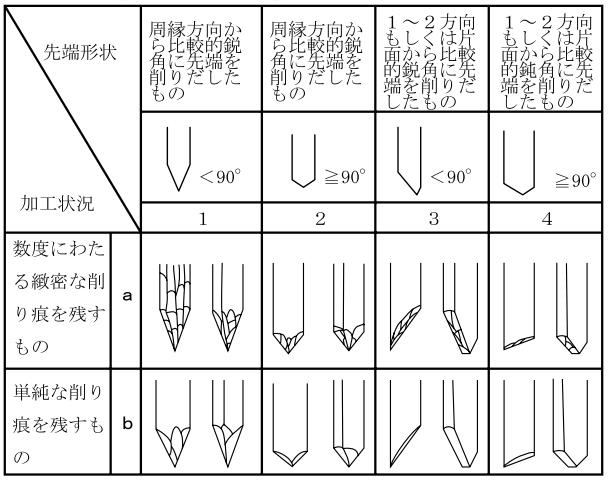



**図 12　木製品細部分類**

表７　編年対応表

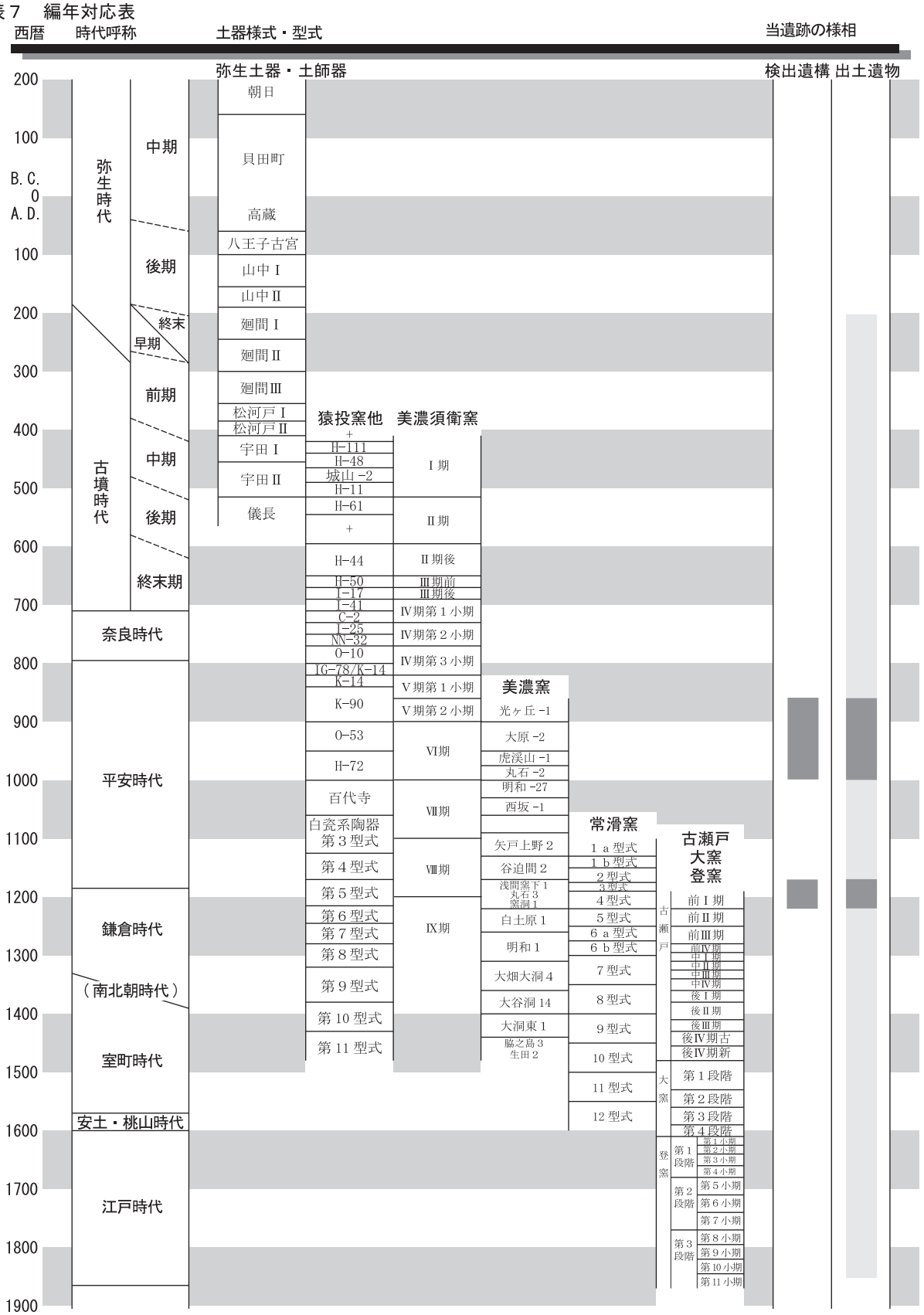



表７の参考文献

赤塚次郎 2002「総説　土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観２　弥生・古墳文化　土器Ⅱ』小学館
早野浩二 2003「東海・中部地方の土器」『考古資料大観３　弥生・古墳時代　土器Ⅲ』小学館
斎藤孝正 1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録　第３巻　東日本編Ⅰ』
渡邉博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』
多治見市教育委員会 1997『大針台４・５号窯発掘調査報告書』
多治見市教育委員会 2003『松坂８～11 号窯発掘調査報告書』
中野晴久 1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』

# 第４節　第２面の遺構・遺物（平安時代～鎌倉時代初頭）

**東地区第２面（平安時代前期）**

Ⅲ層を掘り下げて検出している。I12 グリッドの第１面で検出した SD1 や SP032 の底部で第２面の遺構上部が見えており、I12 グリッドから掘り下げ、更に東へと掘り進めている。

**SD1（遺構図、出土遺物：図 13）**

東地区南、I13、J13、I14、J14 グリッド、標高 7.91m～7.97mに位置する。東西方向に細長く、SE1、SE2、SE3、SK10 に添うように蛇行しているようにもみえる。SE1、SE2、SE3、SK10 に切られる。試掘坑 TP9 でも SD1 の一部が検出されている。地形は西が高く東が低い。地山に比べると埋土がやや黒いという状況で検出している。特に I14 グリッドははっきりと検出できるまで掘り下げているが SD1 に伴うと考えた灰釉陶器１、３、４の出土標高が 7.894m～7.968mであることから考えると、本来の生活面は 7.968mであった可能性が高い。SE1 に伴う溝と考えるが、SE3 の北東部に回り込むように添

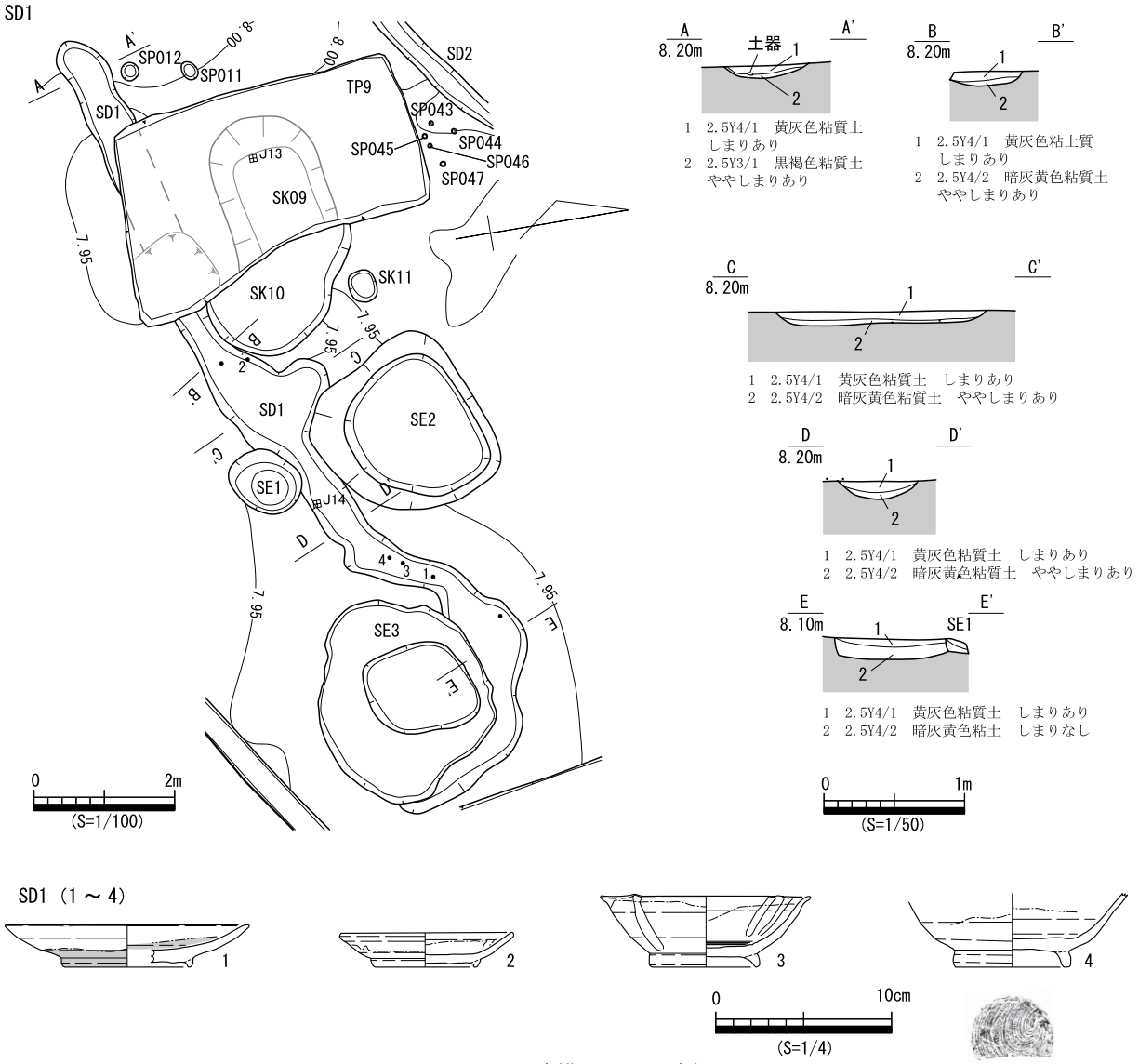



図 13　SD1 遺構図、出土遺物

うところを見ると、SE3 の下層と関連している可能性もある。SE3 の湧水満水時には SD1 の標高 7.8m（１の出土位置）のところまで水がオーバーフローしていた。この状況をみると、もし SE3 の下層が SE1 と同時期に機能していた場合は、水切り溝というより、井戸周辺の作業場であったかもしれない。斜面に直交する方向でやや孤を描いており軸は N-65°-E で同時期の SD2 と形状が類似しほぼ平行する。第１面で検出した SE3、SB1、SB2 の性格から、SE1 は屋敷に伴う井戸になる可能性があり、また、SD1、SD2 は屋敷の区画溝のような性格をもつと考えられるが、第２面では掘立柱建物になりそうな遺構を検出していない。

出土遺物は古代土師器４点、中世土師器５点、須恵器１点、灰釉陶器 17 点、山茶碗 15 点で、灰釉陶器１から４を掲載している。１は内外面に煤が付着し、３は４弁の輪花碗で浅く指で撫でつけて輪花を形成している。本遺構の所属時期は出土した灰釉陶器から、美濃窯大原２号窯式期の新しい時期から丸石２号窯式期の 10 世紀後半と考える。

**SD2（遺構図：図 14）**

東地区第２面調査区西、I12 グリッド、標高 8.02mに位置する。SP001 を切っている。第１面の SD3 とほぼ同じ位置にあり、軸は N-55°-E でSD3に比べると 10°西に振っている。北に自然流路 NR1、南に SB1、SB2 の掘立柱建物がある位置にあり、SD3 と同様の区画施設と考える。

出土遺物は灰釉陶器３点である。本遺構の所属時期は出土遺物と形状等から SD1 と同時期ということから 10 世紀後半と考える。

**SE1（遺構図：図 15、出土遺物：図 16）**

東地区南、J13、J14 グッリッド、標高 7.95 mに位置する。平面形状楕円形、断面方形で径 48cm の木製曲物を３段に組んだ井戸枠（７～９）を持ち、土坑底面と井戸枠底の高さがほぼ同じで、検出面から 69cm 下で湧水している。井戸枠の北東に曲物の底板（10）が出土している。井戸枠を据えた時に一緒に埋められたと考える。SD1 が井戸横の溝として、SE1 に伴うようである。SE1 は SD1 を切っている。被熱した石（13）が土坑の西に伴う。井戸枠を固定する土、井戸が埋まった時の土から灰釉陶器の破片が出土している。

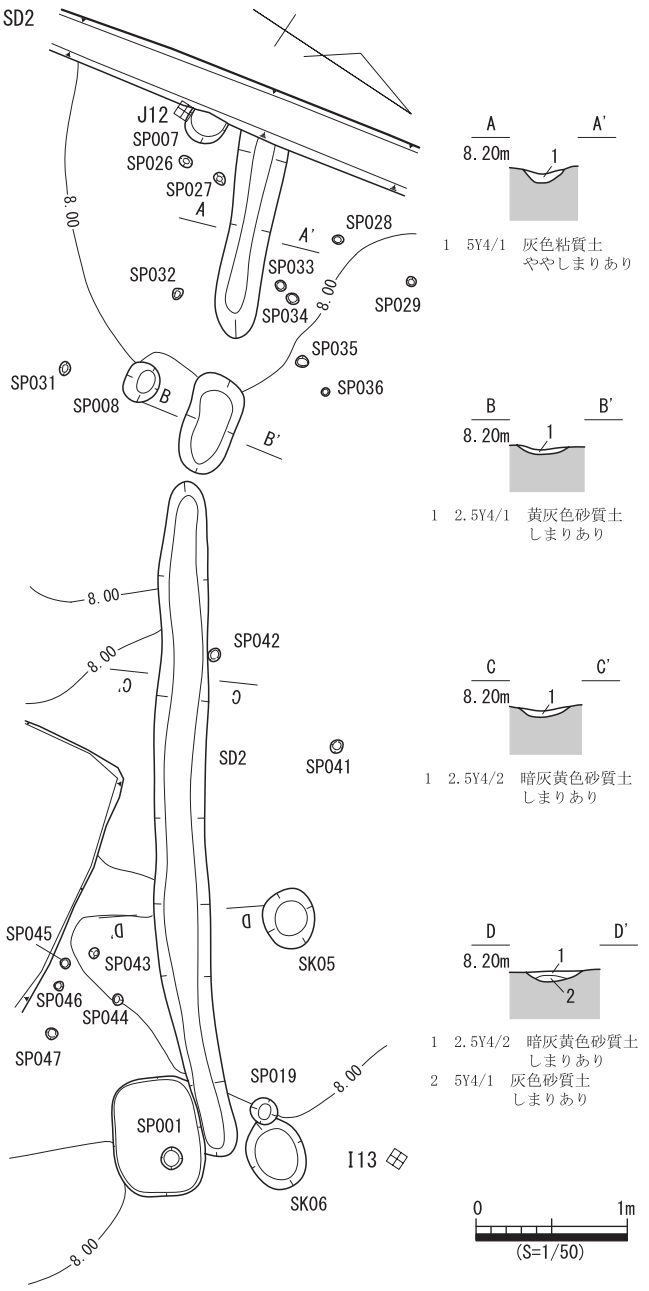



図 14　SD2 遺構図

出土遺物は灰釉陶器９点、石器１点、スモモの種子１点で、５～13 を掲載している。５は光ヶ丘１号窯式期の灰釉陶器輪花碗口縁部の破片で、井戸内埋土最下層から出土している。６は時期不明の灰釉陶器碗の口縁部破片で、井戸廃絶時の埋め土から出土している。７～９は曲物の側板で樹種はヒノキである。７が上から一段目、８が上から２段目、９が上から３段目で重なって井戸枠になっている。曲物の側板は、幅９～10cm、長さ 185cm、厚さ５㎜の柾目板材の内面に罫引き線を引き、丸めて重なった所を桜と思われる幅１cm の樹皮で綴っている。これを一つの単位とすると７は２つ、８は３つ、９は１つと外側に 2.5cm 幅のものを重ねてつくられている。土坑の中で７は８の外側に重なり、９は８の内側に重なって井戸枠となっていたようである。９の最下部には 10 の底板が付いていたと考える。底板が付いていた時の釘穴や釘穴には木釘が残存している。板材が重なる部分を正面にすると、左右両側最下部に３つの釘穴がそれぞれに空いている。７は地表面に近いためか検

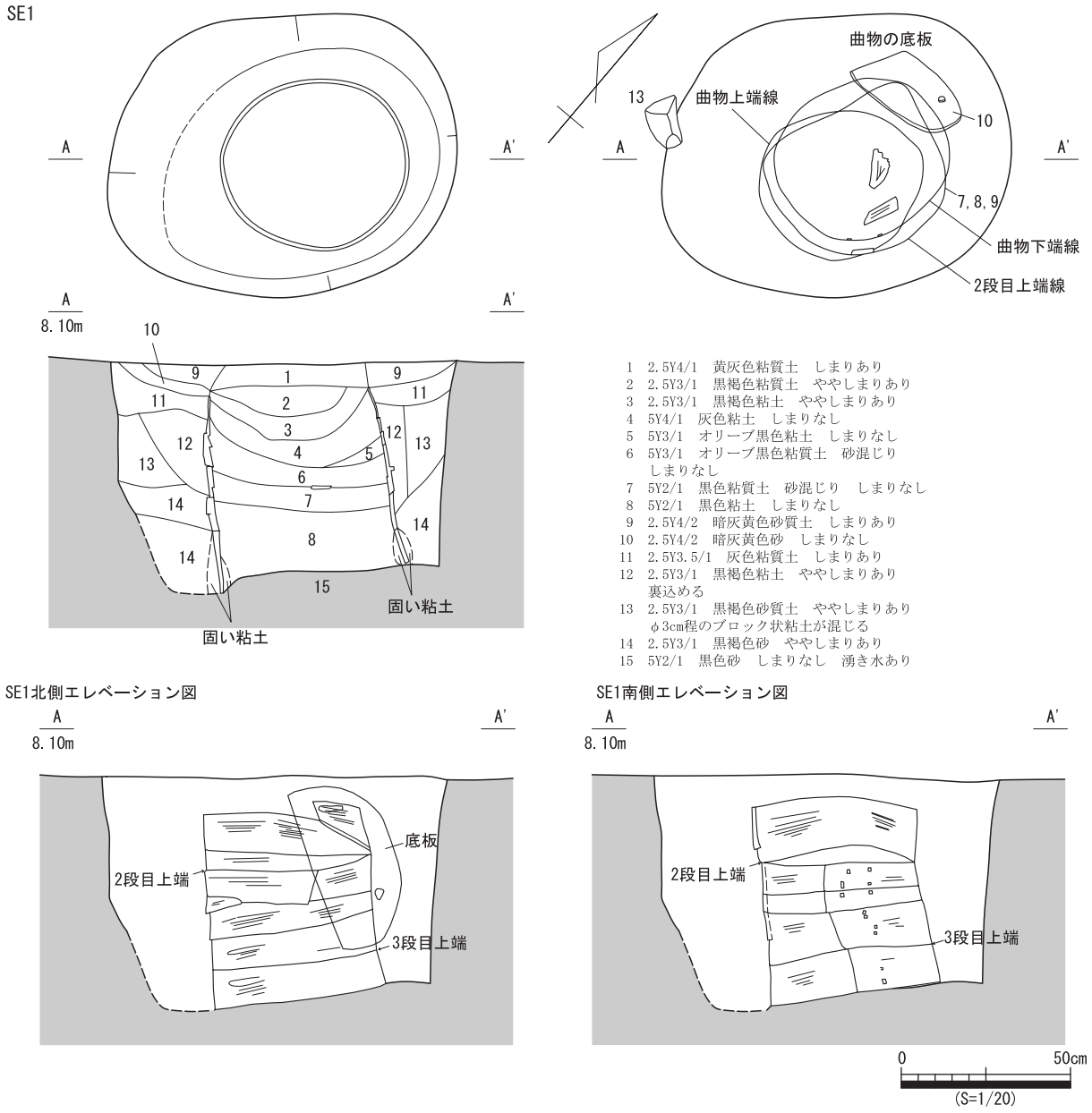



図 15　SE1 遺構図

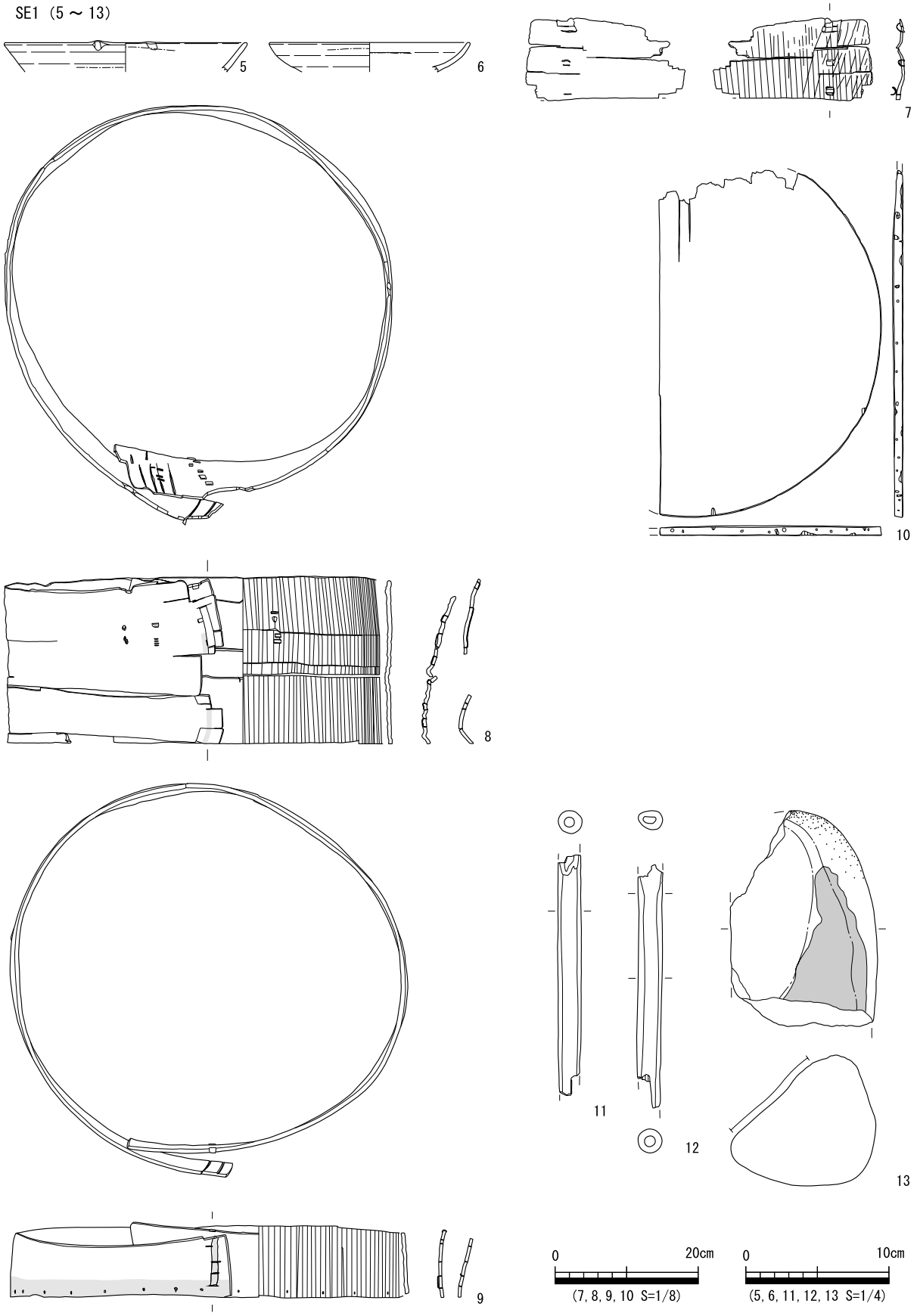



図 16　SE1 出土遺物

出時ですでに乾燥が進み、８、９に比べると残存状況が悪く、取上時にはばらばらの状況であった。そのため７は一部のみを図化している。10 は底板で一部折損している。側面には木釘の穴があり、木釘が残っている部分もある。厚さ 1.5cm、直径 48cm で、９の底板であったと考える。11、12 はウツギ属で中空の植物で、井戸の空気抜きに使ったかどうかは不明であるが、井戸枠付近から出土している。13 は花崗岩製の磨石で、被熱している。被熱による割れのためか欠損している。13 は故意に持ち込まれ井戸の西に据えられ、何らかの祭りを行った痕跡であるとも考えられる。

本遺構の所属時期は、埋土内から出土した遺物から、９世紀後半頃から使用を開始したと考えられる。また、廃絶時期は６の時期が不明であるが、SE1 に伴う SD1 から出土した遺物から 10 世紀末まで使用されていたのではないかと考えられる。深さ 69cm と井戸にしては浅いが、調査時にも西側から夏でも冷たい清らかな水がこんこんと湧き出ていた。

**SK01（遺構図、出土遺物：図 17）**

東地区西壁面際第２面、H11 グリッド、標高 8.02ｍに位置する。調査区西壁に近く、西壁際土層観察トレンチ掘削時から須恵器等の遺物が多数出土している（第３章第６節参照）。西に須恵器の時期の遺構が広がるようである。

出土遺物は須恵器１点、灰釉陶器２点で、39 を掲載している。39 は東濃産灰釉陶器瓶の底部破片で詳細な時期は不明である。検出面および周辺遺構の時期から、本遺構の所属時期は 10 世紀平安時代と考える。

**SK03（遺構図、出土遺物：図 17）**

東地区西壁面際第２面、H11 グリッド、標高 8.02ｍに位置する。平面形楕円形で周辺に同規模の土坑が分布するが規則的には並ばないようである。東地区の土坑が分布する平坦面の北端にあたり、これより北は NR1 に向かって低く傾斜していく。

出土遺物は須恵器１点、灰釉陶器２点で、40 を掲載している。40 は虎渓山１号窯式期の段皿で口縁部の破片である。本遺構の所属時期は出土遺物から、10 世紀後半と考える。

**SK09（遺構図、出土遺物：図 18）**

東地区西南第２面、I、J12、13 グリッド、標高 7.97ｍに位置する。試掘確認調査では土坑を検出しているが、埋め戻し状況や土層確認が難しく、本調査では検出できなかった。出土遺物から、SK09 と SK10 は切り合い関係にあり SK10 が SK09 を切ると考える。

出土遺物は須恵器２点、灰釉陶器４点、山茶碗５点、中世土師器 15 点で、41～

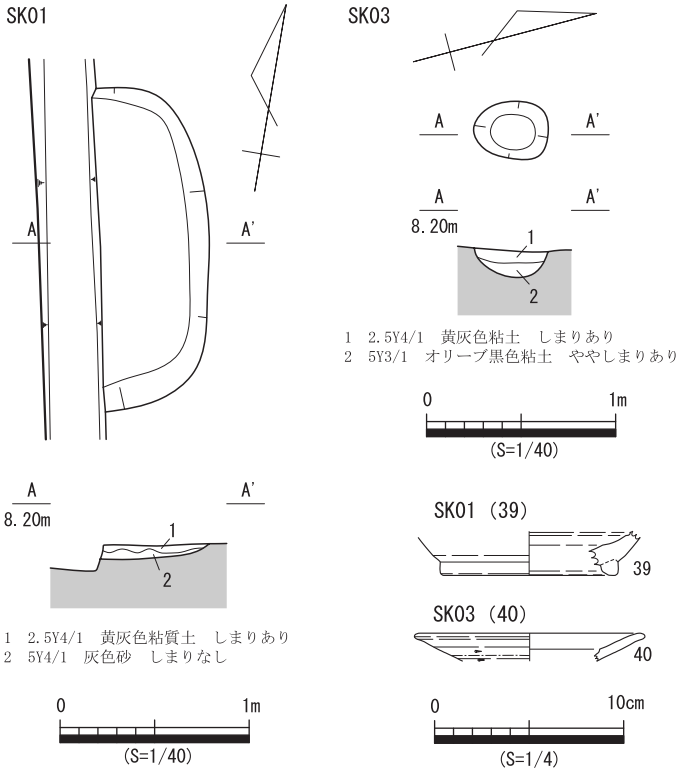



図 17　SK01、SK03 遺構図、出土遺物

44 を掲載している。41 はロクロ土師器皿底部破片、42、43 は美濃窯産丸石２号窯式期灰釉陶器の段皿、44 は尾張型山茶碗第４型式期の碗底部破片で内外面に煤が付着している。本遺構の所属時期はほぼ完形の段皿２点が出土していることから 10 世紀後半と考える。

**SP001（遺構図、出土遺物：図 18）**

東地区中央第２面、I13 グリッド、標高 8.00mに位置する。平面形状は方形で柱痕跡をもつ。SD2 に切られる。方形の掘形に比べて柱痕跡が深く小さいため、時期差があるか布掘り状と考える。SA1-P1、P2 が SD33 の南に沿う柵列であるのと同様に、SP001、SP007、SP008 が SD2 の南に沿う柵列になる可能性もあるが、SP001 と SP008 の間が空きすぎる。

出土遺物は、古代土師器１点、須恵器１点、灰釉陶器２点で、45、46 を掲載している。45 は清郷型鍋、46 は東濃産灰釉陶器の瓶の肩部破片で詳細な時期は不明である。SP007、SP008 と同時期と考え、

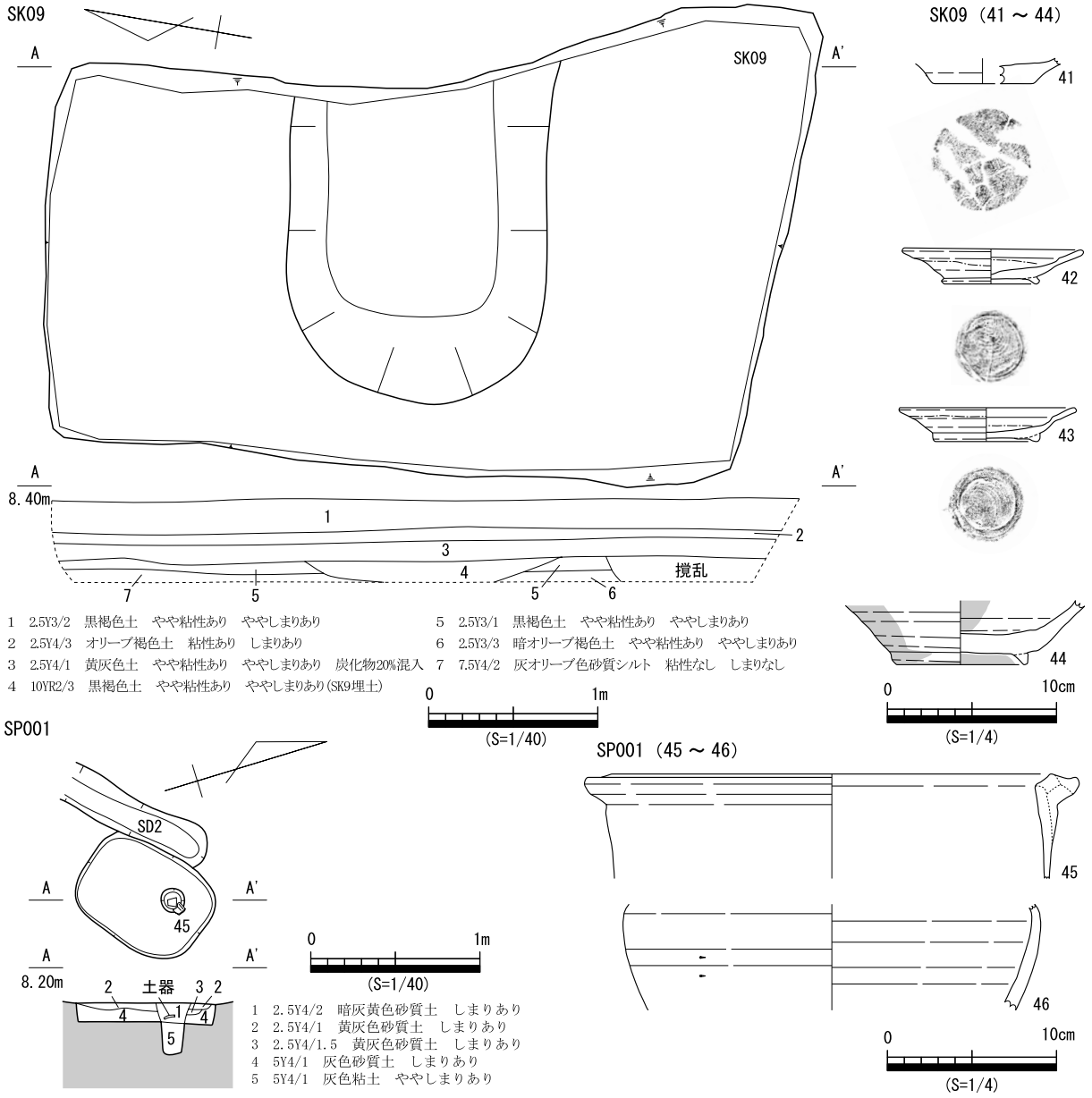



図 18　SK09、SP001 遺構図、出土遺物

本遺構の所属時期は平安時代と考える。

**NR1（遺構図、出土遺物：図 19）**

東地区北西隅、F11、F12、G11、G12 グリッド、標高 7.9mに位置する。東地区北と南の間にある東西方向で東へ流れる現在の水田用用水路の近くに位置し、平安時代当時も周辺に比べて同じ場所が最も低かったと考えられる。東地区の地形は北西と東に向かって低くなっていき、微高地の東端を調査したと考えられる。

出土遺物は古代土師器１点、中世土師器２点、須恵器 11 点、灰釉陶器 12 点、山茶碗１点、木製品１点で、47～53 を掲載している。47 は美濃須衛産須恵器のミニチュア壺の口縁部破片でⅣ-3 期（８世紀後葉）のものである。48 は清郷型鍋、49 は美濃窯産灰釉陶器光ヶ丘１号窯式期の碗で三日月高台を持ち、内面に使用痕、底部外面に「大」の墨書がある。50、51 は美濃窯産灰釉陶器大原２号窯式期

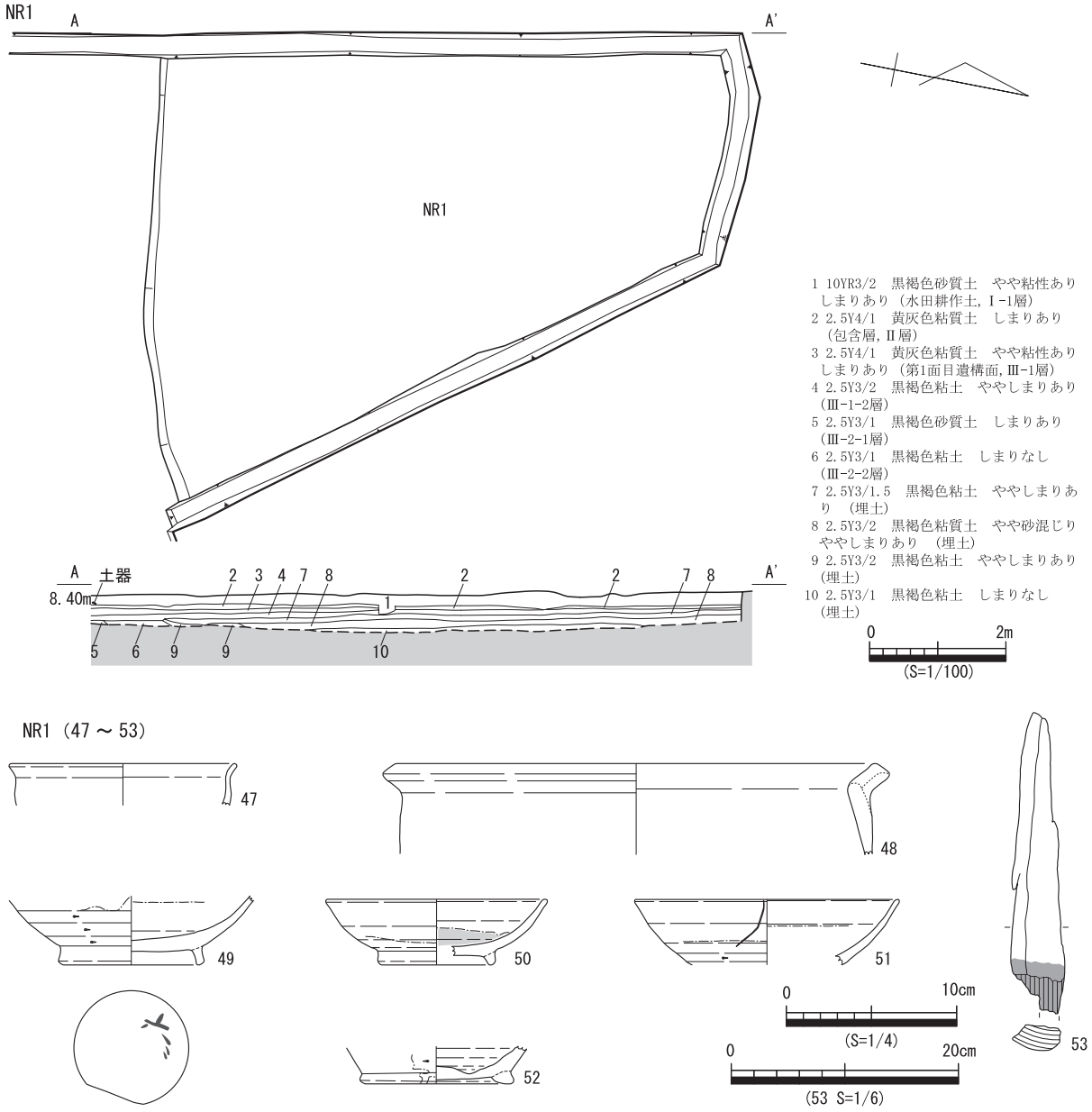



図 19　NR1 遺構図、出土遺物

の碗である。50 は内面に煤が付着し、51 は口縁部外面に焼成前のヘラ描きのようなものがある。52 は東濃産灰釉陶器瓶で詳細な時期は不明である。53 は下端部を尖らせた後に炭化しており一部炭化の影響で欠損している。斎串のようなものと考える。この自然流路の所属時期は灰釉陶器が多く出土していることから平安時代と考える。東地区北西からは須恵器も多く出土しており、この時期の遺構は確認されていないが、東地区北西に遺構が分布する可能性が考えられる。

**東地区第２面（平安時代末～鎌倉時代初頭）**

**SE2（遺構図：図 20、出土遺物：図 21）**

東地区南、I13、I14 グリッド、標高 7.99ｍに位置する。完形の山茶碗が見え始めて、地山よりやや黒色で検出している。平面形状は不定形で、北側半分は方形、南側半分はやや円形を呈し、SD1 を切っている。上層と下層の２段の掘込をもち、下層の北側は急だが、南側は緩やかに傾斜する。上層と下層の形状はほぼ同じで下層が小さい。井戸枠は無く、確実にあったという痕跡もなかった。湧水満水時の水面標高は 7.75ｍで、ちょうど下層の上面で湧水がとまる。

上層掘削時に南隅、西隅、北東隅からほぼ完形の山茶碗が出土している。内面を上にしたもの２点（24、29）が西隅から、底部を上にしたもの２点（25、28）が北東隅と南隅から出土している。下層からも山茶碗等が出土している。井戸を埋める際に祭りを行っている SE3 に比べると、簡易的な祭祀を行い埋め戻したかもしれない。SE2 と SE3 は近くにあるため SE2 を閉じてから SE3 を使用している

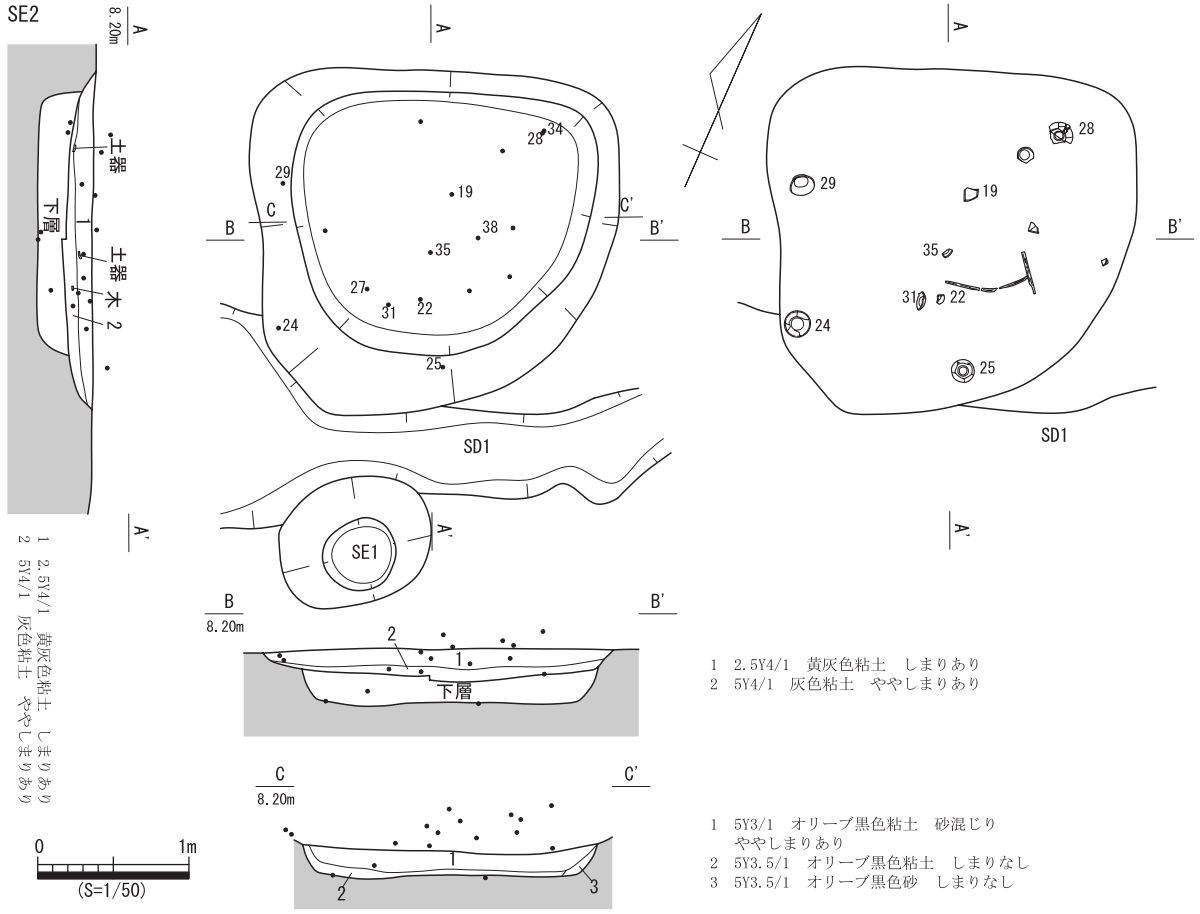



図 20　SE2 遺構図

と考える。

出土遺物は古代土師器１点、中世土師器 22 点、須恵器１点、灰釉陶器４点、山茶碗 87 点、土錘１点、木製品４点、石器２点、スモモの種子３点が出土し、14～38 を掲載している。14、15 は伊勢型鍋で、15 は頸部に２段の刺突があるようにもみえる。16 は土師器皿、17 は土錘、18 は美濃窯産灰釉陶器で虎渓山１号窯式期の深碗の底部破片である。19 は尾張型山茶碗第４型式期の碗で内面に使用痕があり、煤が付着している。20～22 は尾張型山茶碗第５型式期の皿で、20 の底部外面には「十」の墨書がある。23～32 は尾張型山茶碗第５型式期の碗で、23、25、30、31 は内外面に煤が付着し、27 は外面に煤が付着している。33 は尾張型山茶碗第５型式期の片口鉢、34 は尾張型山茶碗第６型式期の碗で内面に使用痕跡があり外面に煤が付着している。35 は白磁の碗の胴部破片、36 は常滑の甕胴部破片で押印帯がある。37 は砥石で両面に砥面がある。38 は磨石で一部磨面があり、被熱による割れか、割れた後に全面に煤が付着している。

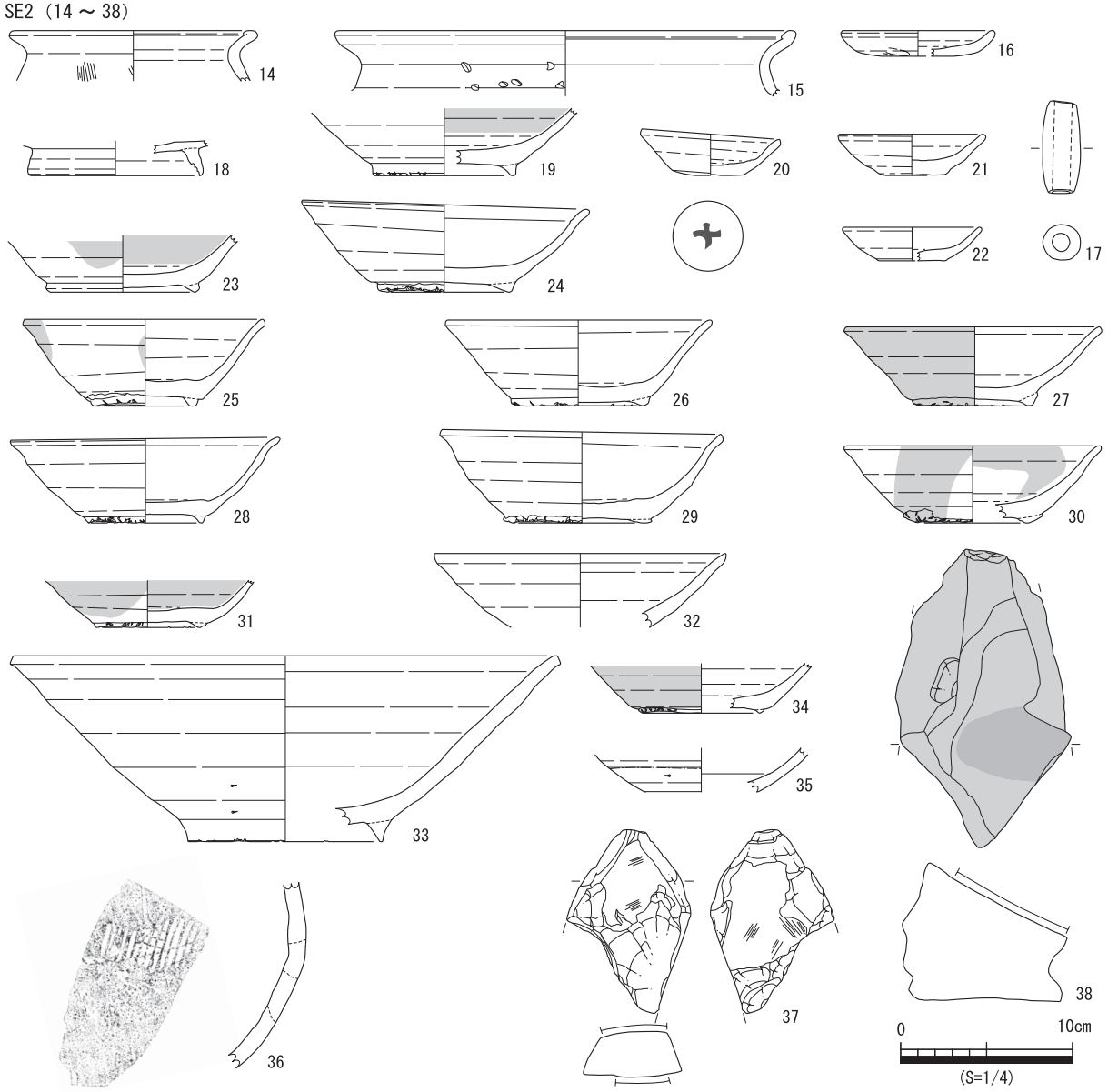



図 21　SE2 出土遺物

本遺構の所属時期は尾張型山茶碗第５型式期の遺物が多く出土していることから平安時代末から鎌倉時代初頭（12 世紀末から 13 世紀初頭）と考える。

**SK10（遺構図：図 23）**

東地区南、I13、J13 グリッド、標高 7.97mに位置する。試掘坑 TP9 の東で検出した。直径約 2.5m の楕円形を呈し、SD1 を切る。深さが 20cm と浅く井戸にはならなかったが、SE3 と出土遺物が類似している。黒と白を意識した完形の山茶碗、笊、木簡が出土している。SE3 に伴う祭祀を行って埋め戻した可能性が考えられる。完形の山茶碗２点（57、58）は内面を上にして据えられ、２点の内の１点

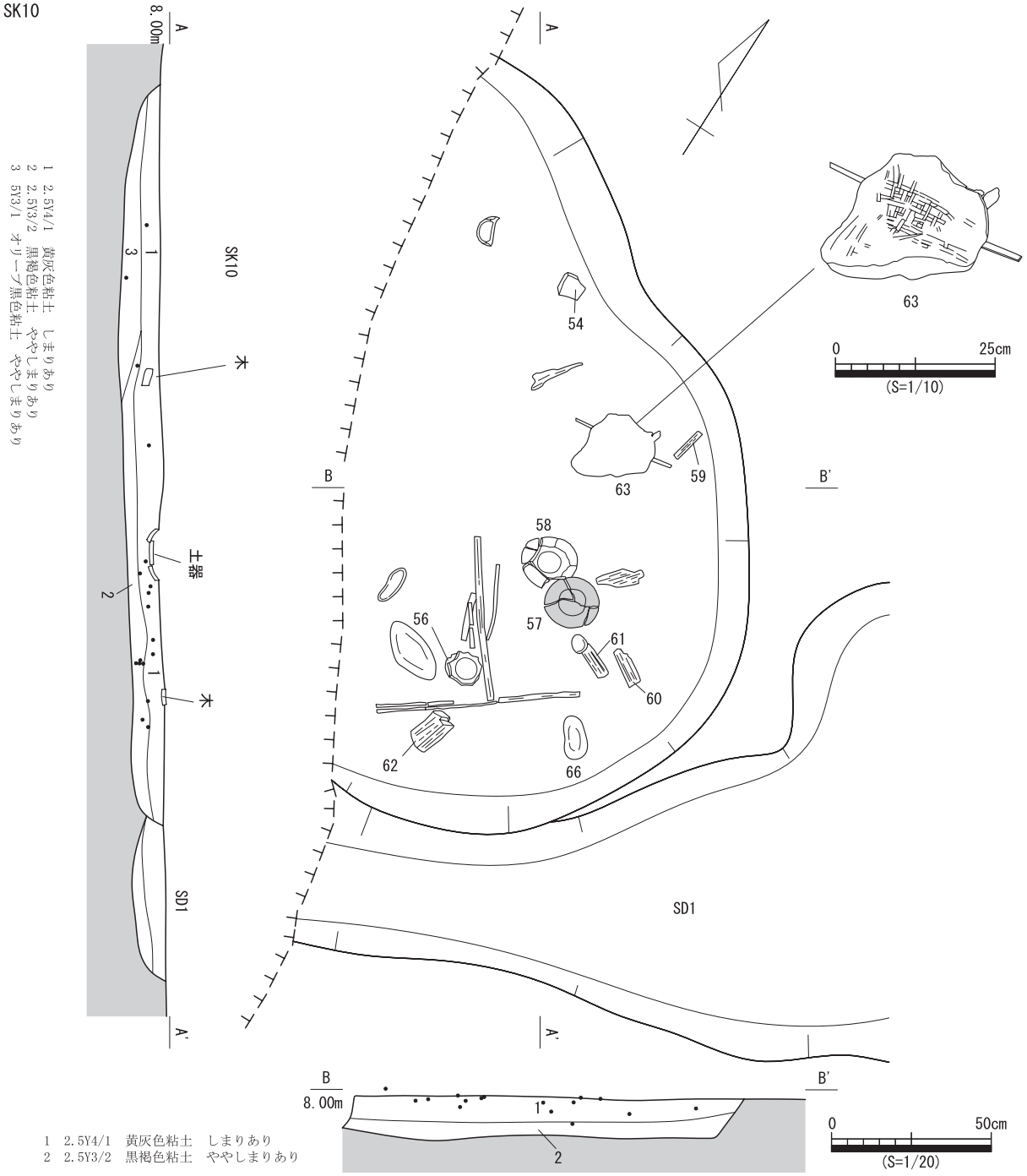



図 22　SK10 遺構図

57 は内外面に煤が付着している。黒色土器を意識して故意に煤を付着させ、祭りに使用された土器と考える。58 は口縁部に内面からの打ち欠きがある。この打ち欠きも、神に捧げる前に故意に行ったものと考える。

出土遺物は弥生土器２点、古代土師器１点、中世土師器４点、灰釉陶器２点、山茶碗 24 点、木製品８点、石器１点、スモモの種子１点で、54～66 を掲載している。54 はロクロ土師器皿で、底部外面に回転糸切り痕があるが全面が摩耗している。55 は尾張型山茶碗第４型式期の碗の底部破片で、内外面に煤が付着している。また、底部外面に「大」かの墨書があり、底部内面には焼成前についた稲藁のような植物繊維痕がある。56 は尾張型山茶碗第５型式期の皿で、外面に煤が付着している。57、58 は尾張型山茶碗第５型式期の碗である。59 は板材で裏面に４文字分の墨痕がある。赤外線写真撮影で見たが判読はできなかった。上部にある穿孔に木釘が残っている。表面下部には刃物痕が多数見られる。60 は板材で裏面は剥離している。表面が黒かったため赤外線写真撮影を実施したが墨痕は無かった。61 は板材で表面に刃物痕がある。59～61 の板材は大きさもそろっている。62 は角材の端材、63 は笊、64 は笊の下から出土した。樹種はスギで柄のようなもので、全面に漆かが付着している。65 は桜と思われる樹皮の留紐で笊の側から出土している。66 は叩石で上下端部に叩き痕がありほぼ全面に煤が付着している。

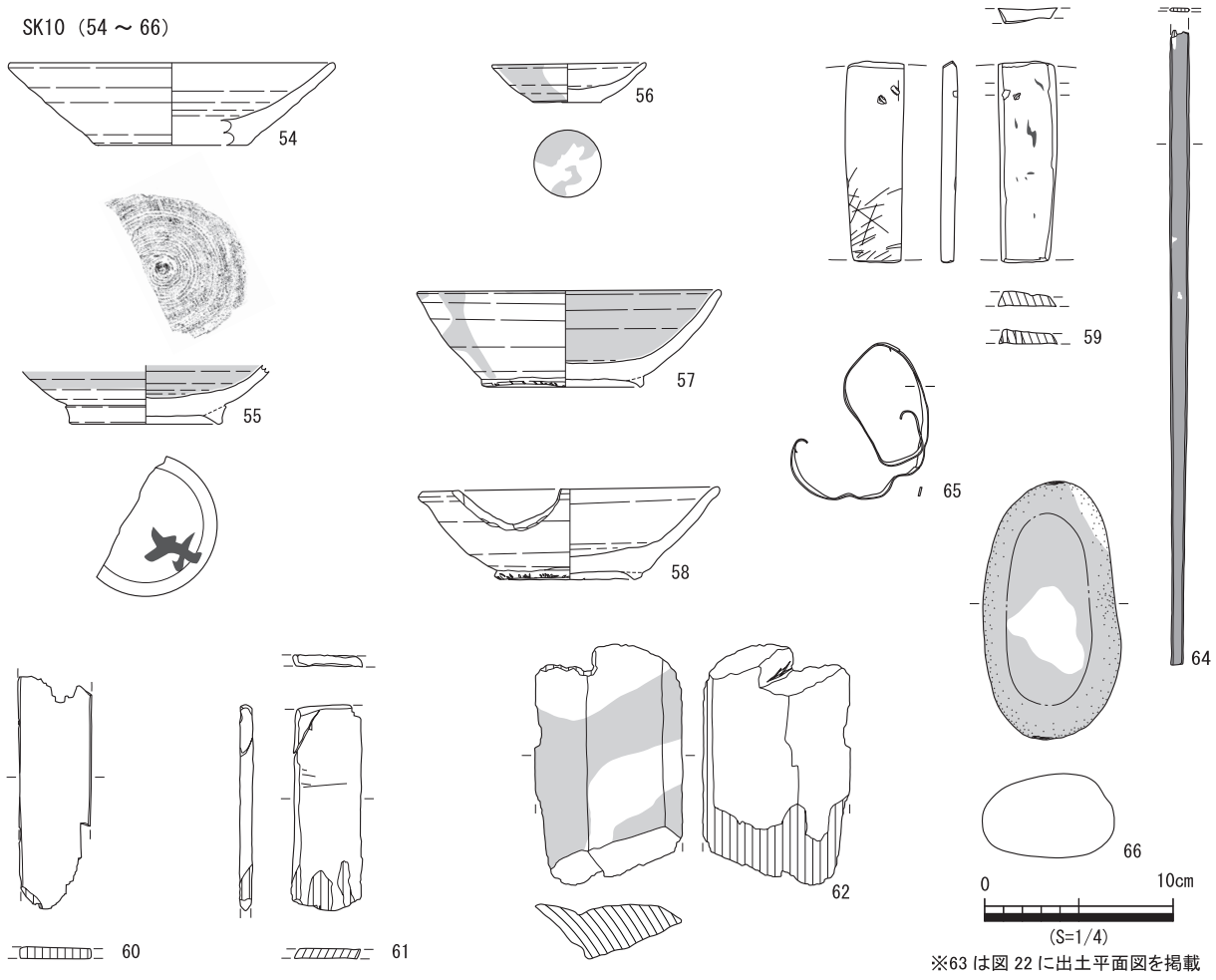



図 23　SK10 出土遺物

本遺構の所属時期は主な出土遺物が尾張型山茶碗第５型式期であることから、平安時代末から鎌倉時代初頭（12 世紀末から 13 世紀初頭）と考える。

**西地区第２面（平安時代前期）**

Ⅲ層を掘り下げてⅣ層上面で検出している。地山が黄色で、遺構埋土が灰色であること、遺構と地山との境に鉄分が帯状に堆積し、遺構埋土中には鉄分が含まれないこと、地山に比べて遺構埋土が硬いことによって遺構を検出した。第１面に比べると、大型の方形の掘形を持つ柱穴が少なく、円形の小規模な柱穴が第２面で検出した柱穴の大半をしめる。第１面に比べると第２面は遺跡の規模が小さい。言い換えると平安時代前期に作られた柵列が、平安時代末～鎌倉時代初頭に規模を拡大して掘立柱塀となるようである。第１面で検出した遺構より規模が大きくなる形で検出している遺構もある。これらの柱穴断面は浅い擂り鉢状を呈しており、柱穴底面より柱痕跡底面が低く下がっている。平安時代前期より平安時代末～鎌倉時代初頭に幅は狭くなるが、より深くして同位置で建て直しがあったと考えられる。

地下水の水位の上下が 30cm 以上あり、建物を建てる環境には適していないことが壁面土層の暈管状鉄分の沈着範囲から観察できる。調査中にも標高 7.5～7.8m まで湧水の水面が上がっている。そのような地形にあるにも関わらず柱痕跡が直径 30cm もある柱をもつ建物が建てられ、さらには、柱痕跡底面には礎板や石などが置かれていない。柱穴の中には、柱穴底面より柱痕跡底面が低く下がっているものがある。本来は柱穴底面の高さまでであった可能性が考えられ、柱痕跡埋土下部は掘りすぎの可能性もある。あるいは、柱穴底面と柱痕跡底面の高さの違いは柱の重みもしくは、地下水位の上下動で地盤がゆるくなった影響で柱が下がった痕跡の可能性も考えられる。残念ながら、調査後に断ち割ってこの仮説を検証していない。壁面の土層堆積状況からは洪水にあった痕跡は確認できなかったが、発掘区は遺跡範囲の南東の隅で微高地の末端部にあたる。美濃地方では 12 世紀に洪水が多発し、北方京水遺跡の水田が被害を受けた杭瀬川の氾濫の影響を、興福地遺跡の微高地末端部で受けている可能性もある。建物を建てるにはとても適しているとはいいがたい土地に大規模な建物を短期間に建てる必要があったようである。出土遺物は尾張型山茶碗第５型式にピークがあるが、その後の遺物が全く出土していないことから、人々がより安定した土地へ移ったことを示唆している。

**SP051（遺構図：図 24）**

西地区西第２面、M3 グリッド、標高 7.99ｍに位置する。SP064 に切られている。SA2-P1 が柱痕跡になると柱痕跡径 32cm、深さ 18cm になる。周辺の西地区西には掘形が方形の柱穴があるが（SP048、SP049、SP051、SP053）、これらが建物や塀になるかどうかは不明である。

出土遺物は無いが、本遺構の所属時期は検出面から平安時代前期と推定される。

**SP052・SP053（遺構図：図 24）**

西地区西第２面、M4 グリッド、標高 8.02ｍに位置する。SP052 は SP053 を切っている。SP053 は柱穴に比べると直径 18cm とやや大きい柱痕跡を持つ。周辺にある同規模の柱穴には SP050 がある。南には同規模のものはないので北へ続く可能性が考えられる。

出土遺物は無いが、本遺構の所属時期は検出面から平安時代前期と推定される。

**SP057・SP058（遺構図：図 24）**

西地区中央第２面、M5 グリッド、標高 8.01ｍに位置する。SP057 の柱痕跡埋土は灰色粘土で、第１

面で検出した SB3-P2、SB3-P3 の柱痕跡埋土と同じである。SP057 は SP058 の柱痕跡より古く、SP058 と柱穴を同じにしていると考える。SP057 と SP058 の間にボーリング調査の穴がある。周辺には、SP056 の近くに SP055、SP057 の近くに SP058 と、近距離に２つずつ柱痕跡がある。微妙な時期差がある状況でこの付近に柱を立てる必要があったようである。SP056 の柱痕跡径は 20cm、SP055、SP057、SP058 の柱痕跡径は 15cm である。

出土遺物は無いが、本遺構の所属時期は検出面から平安時代前期と考える。

**SP059（遺構図：図 24）**

西地区中央第２面、M5 グリッド、標高 8.00ｍに位置する。柱痕跡径が 25cm と大きい。埋土は 2.5Y4/1 黄灰色粘土で第１面 SB3-P2、SB3-P3 に近いが、SP059 は第２面で検出している。また、SP059 周辺に同規模同平面形で埋土の色が同じものはない。

出土遺物は無いが、本遺構の所属時期は検出面から平安時代前期と考える。

**SP060～SP062（遺構図：図 25）**

西地区南第２面、N5 グリッド、標高 8.01ｍ～8.04ｍに位置する。Ⅲ層を掘り下げてⅣ層上面で検出している。SP060 は SA3-P2 より 10～20cm 幅が広くなる。埋土は暗灰黄色粘土で、SA3-P2 の柱穴埋土上層と土色が同じである。SA3-P2 の柱穴底面とは高さが異なる。SA3-P2 と柱痕跡を同じくすると考え

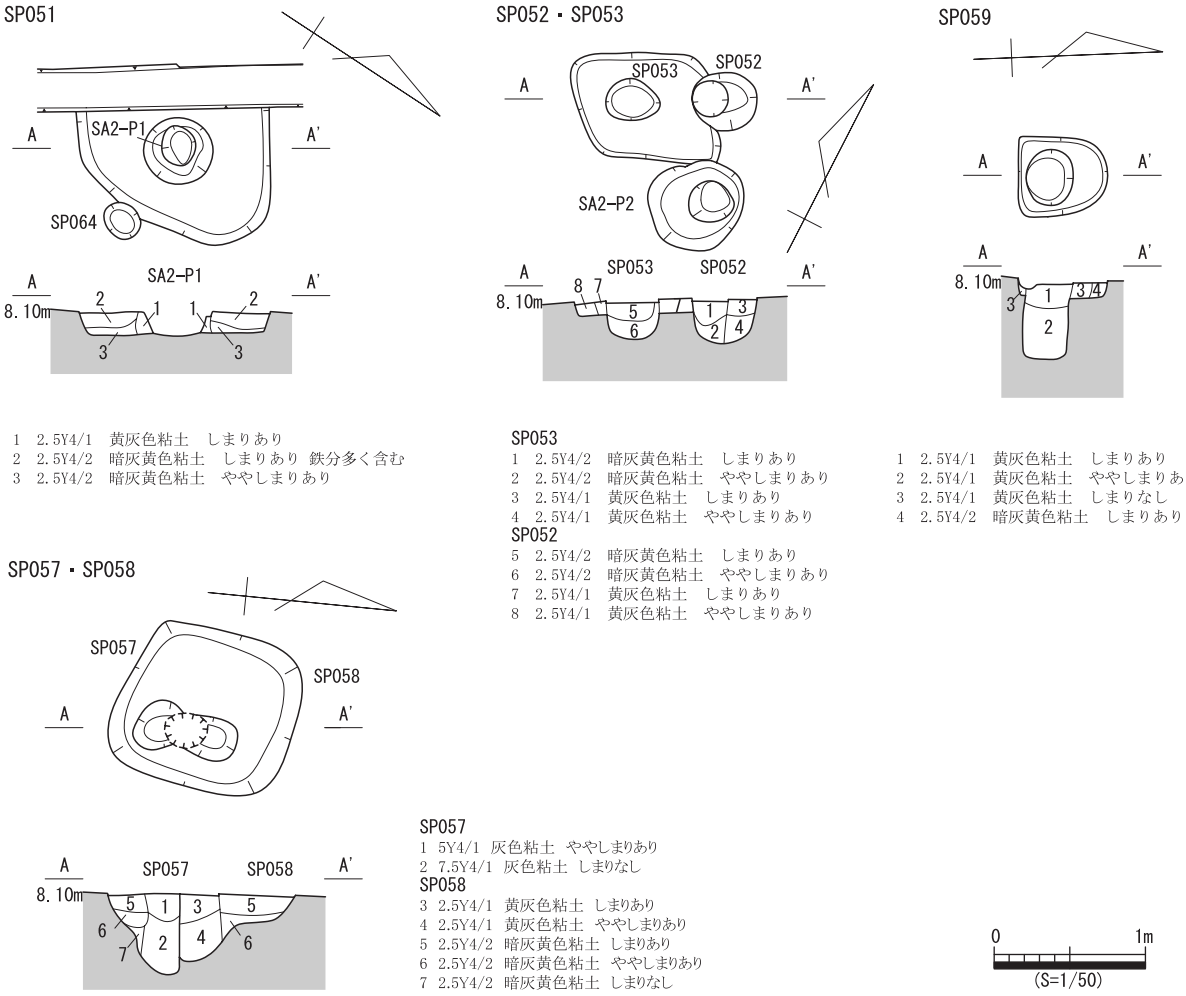



図 24　SP051～SP053、SP057～SP059 遺構図

ると、柱穴の底面より柱痕跡の底面が低くなる。SA3-P2 の掘り残しの可能性もあるが、柱穴底面の高さの違いが時期の違いを表している可能性も考えられる。平安時代前期より平安時代末～鎌倉時代初頭により深く、幅は狭くなって同位置で建て直しがあったと考えられる。同様に SP061 は SA3-P3 より浅く西に広がり SA3-P3 が柱痕跡になるか。SA3-P3 の柱穴埋土上層とは土色が異なり柱穴底面の高さが異なる。SA3-P3 と柱痕跡を同じくすると考えると、柱穴の底面より柱痕跡の底面が低くなる。SP062 は SA3-P4 の下層で検出し、SA3-P4 が柱痕跡になるか。同じようにⅣ層上面で、第１面で検出した遺構より規模が大きくなり柱穴の底面より柱痕跡の底面が低くなる形で検出している遺構（SP054、75、81、89）がある。

出土遺物は無いが、本遺構の所属時期は検出面から平安時代前期と推定される。

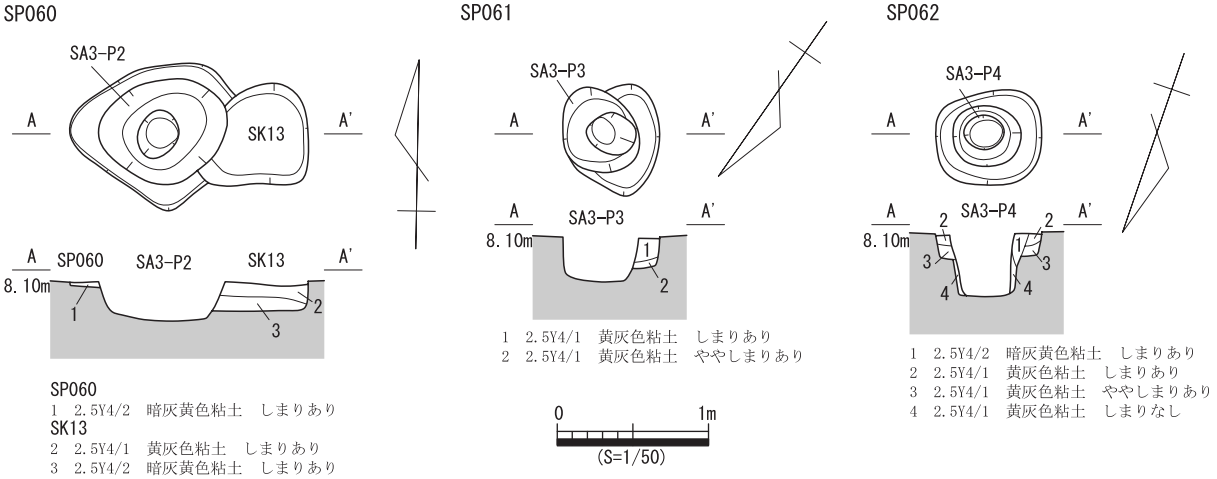



図 25　SP060、SP061、SP062 遺構図

## SP090（遺構図、出土遺物：図 26）

西地区東第２面、M6、M7 グリッド、標高 7.93ｍの位置にある。西地区では一番低いところで検出している。柱痕跡径 18cm、深さ 17cm である。すぐ西で検出した SK14 には柱痕跡がなく、周辺には同形状同規模の柱穴が無い。同じような遺構は北へ広がるか。

出土遺物は北西角の柱穴埋土３から灰釉陶器１点が出土し 67 を掲載している。67 は虎渓山１号窯式期の灰釉陶器皿である。本遺構の所属時期は出土遺物から平安時代前期 10 世紀後半と考える。

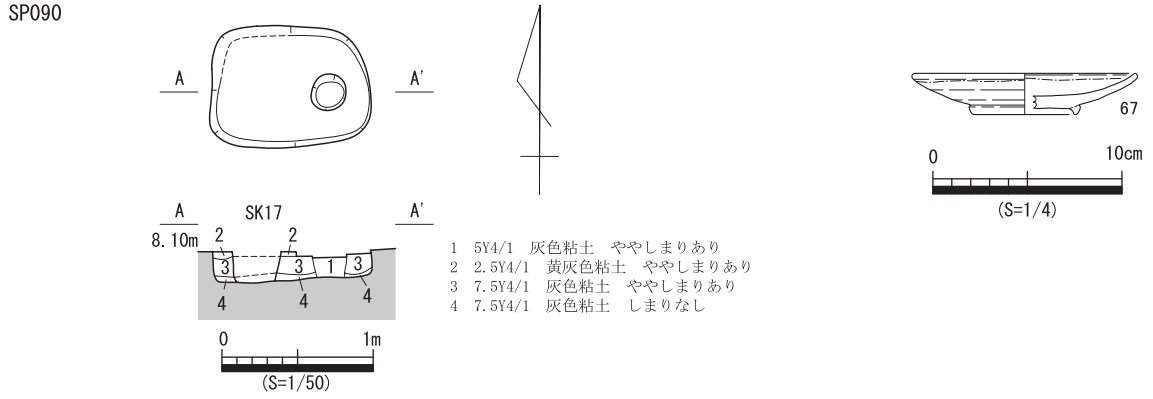



図 26　SP090 遺構図、出土遺物

# 第５節　第１面の遺構・遺物（平安時代末～鎌倉時代初頭）

## 東地区第１面（平安時代末～鎌倉時代初頭）

東地区１面からは、総遺物数の約 95％（表４参照）が出土し、東地区は西地区に比べて多数の遺物が出土している。東地区は生活の場であったのに対して、西地区は非日常の場であったと考えられる。掘立柱建物の柱材が長さ約 35cm 残存しており、本来の生活面は約１ｍ上であったと考えられる。掘立柱建物の柱材の AMS 分析結果からは東地区第１面は平安時代後期から鎌倉時代初頭になり、東地区遺構出土遺物の時期とほぼ同時期になる。

### SA1（遺構図、出土遺物：図 27）

東地区西側、Ｉ・J12、J13 グリッド、標高 8.05ｍに位置する。北西方向に平坦面が続いていく。SD3 に平行して検出し、底面はほぼ平らで浅い。底面には第２面目の遺構が見えている。区画溝 SD3 の内側にある柵列となる可能性が高い。P3、P4 が SD3 を切っている。P1 から P4 をつないだ線が SD3 に平行するため、P1、P2 は布掘りのようなものと考える。北には自然流路、南には SB1、SB2 があり、SD3 同様、区画施設になると考える。SD3 より新しい。

出土遺物は古代土師器２点、中世土師器１点、須恵器１点、灰釉陶器７点、山茶碗１点が出土し、68 を掲載している。68 は東濃型灰釉陶器短頸壺の口縁部破片で詳細な時期は不明である。本遺構の所属時期は検出面から平安時代末～鎌倉時代初頭と推定される。

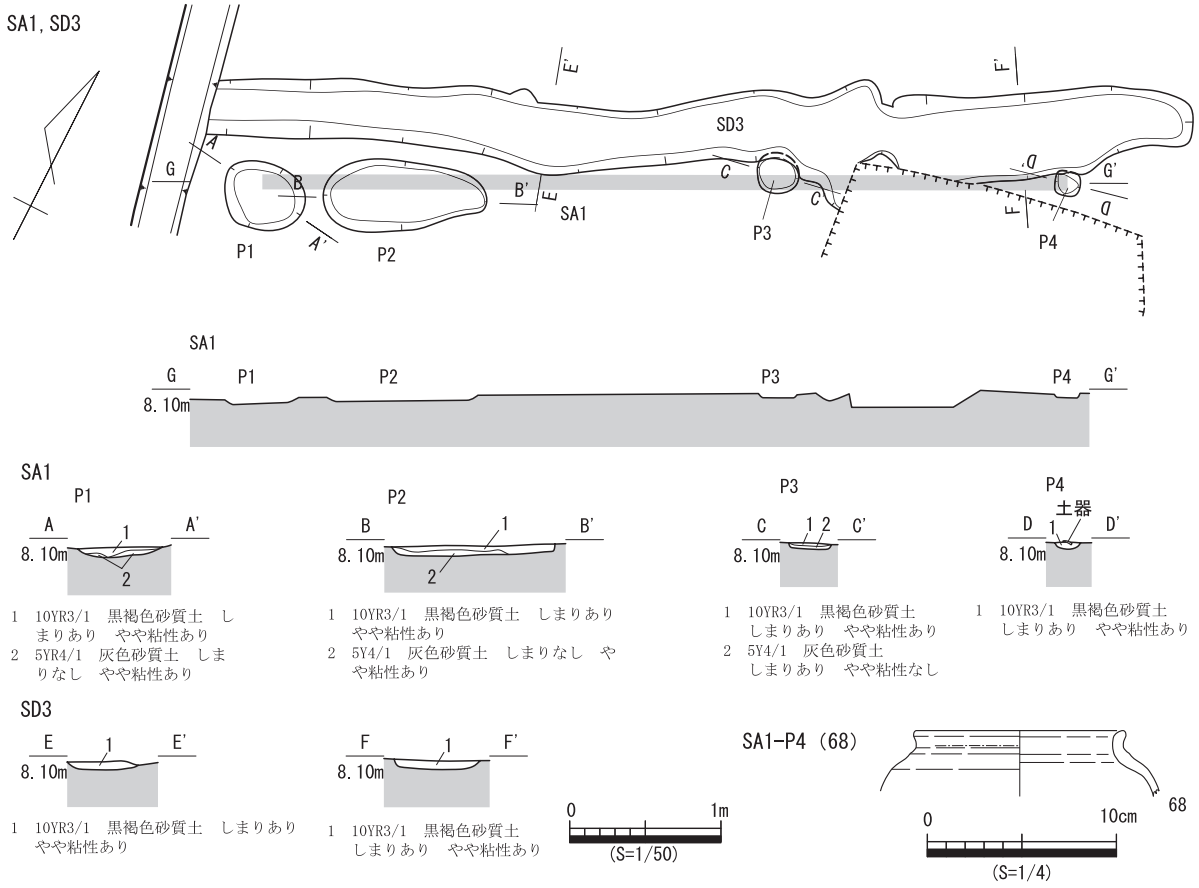



図 27　SA1、SD3 遺構図、SA1 出土遺物

**SB1（遺構図：図 28、出土遺物：図 29）**

東地区南側、J13 グリッド内、標高 8.05ｍに位置する。同じ平坦面上に SB1-P1、P2、SB2-P1、P2 を検出している。SB1-P1、P2 には直径 15cm の芯持ち材の柱材が残る。柱材の下部が方形で上部が円形、くびれ部があり柱材運搬時に縄をかけるためのものと考えられる。柱材は AMS 分析を実施している（第４章参照）。柱材がやや北へ傾いているのは、重機での表土掘削時に上部を重機でひっかけているためである。掘立柱建物の北辺になり、平坦面が続く南へ建物の中心があると考える。P1、P2 を結んだ東西方向の軸は N-73°-E で、これに直交する南北方向の軸は真北より西へ 17 度振っており、SB2 とは約４度異なるため、多少の時期差がある。SB1 は SD3 と同時期と考える。SB2 の軸が SB1 にくらべより真北に近いことから SB1 が古く SB2 が新しいと考える。柱材(69、70)の残存状況から、本来の遺構面は約１ｍ上にあり、削平を受けていると考える。

出土遺物は無いが、柱材（69、70）の AMS 分析結果から、本遺構の所属時期は平安時代後期～鎌倉時代初頭と考える。

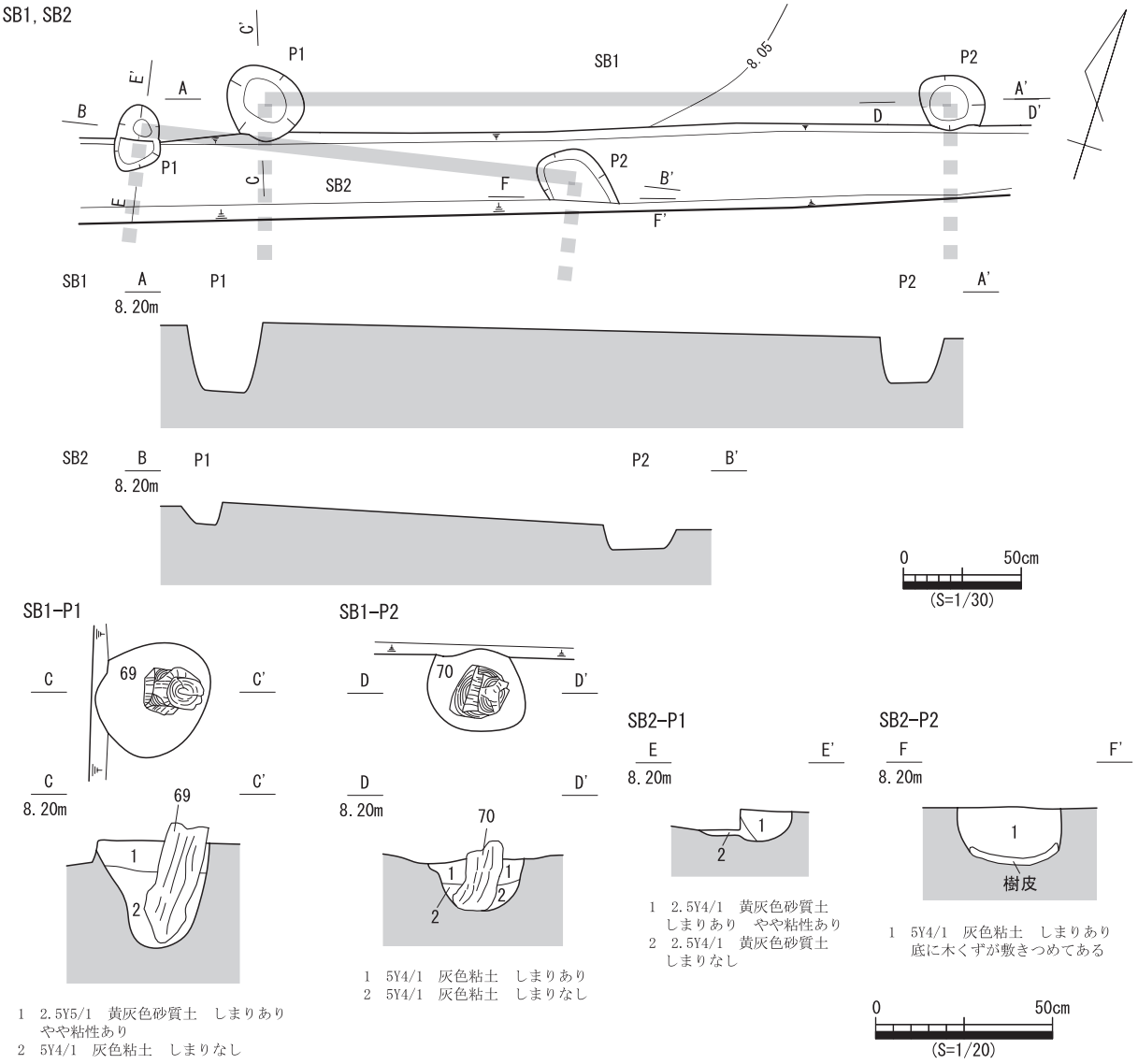



図 28　SB1、SB2 遺構図

**SB2（遺構図：図 28、出土遺物：図 29）**

東地区南側、J13 グリッド内、標高 8.01ｍに位置する。浅く検出したため柱痕跡は不明である。P2 の底面に木屑が敷き詰めてあり、礎板のかわりに敷き詰めたものかもしれない。掘立柱建物の北辺を検出し、平坦面が続く南に建物の中心があると考える。P1、P2 を結んだ東西方向の軸は N-77°-E で、これに直交する南北方向の軸は真北より西へ 13 度振っており SB2 の軸が SB1 にくらべより真北に近いことから SB2 の方が新しいと考え、ほぼ同位置で規模が小さくなって、あるいは SB1 が東西方向に長く、SB2 は南北方向に長い配置で建て替えている可能性もある。

P2 から山茶碗の口縁部破片（71）が１点出土しており尾張型山茶碗第５型式期であることから、本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SD3（遺構図：図 27、出土遺物：図 29）**

東地区西側、I12、13 グリッド、標高 8.05ｍに位置し西側に平坦面続く。SA1 に平行して検出し SA1-P3、P4 に切られている。浅く残存状況はよくない。北には自然流路、南には SB1、SB2 があり、SA1 同様、区画施設になると考える。SA1 より古く、SB1 と溝の方向性が似ているので SB1 と同時期と考える。

出土遺物は須恵器２点、灰釉陶器２点、山茶碗１点、木製品１点が出土し、72 を掲載している。72 は碗の口縁部破片で尾張型山茶碗第５型式期である。本遺構の所属時期は出土遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SD4（遺構図：図 30、出土遺物：図 31）**

東地区北東部、G13、G14、H13、H14 グリッド内、標高 8.05ｍ～8.06ｍ、北へ傾斜するところに位置する。地山に比べると埋土はやや黒く硬い。残りの良い遺物が検出時に見えている。SK16 を切り、平

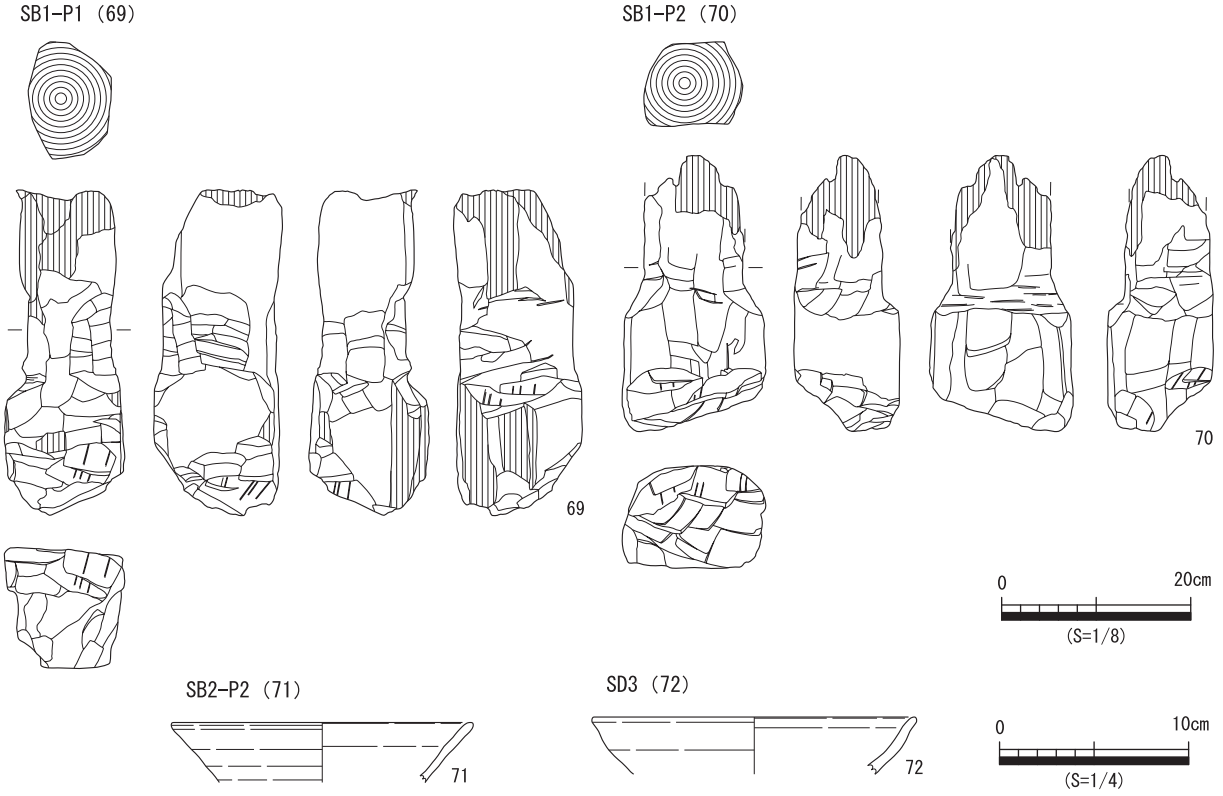



図 29　SB1、SB2、SD3 出土遺物

面方形の攪乱に切られる。西からと東からの支流が一つに集まって南から北の低い方へ流れる。東からの支流は、北が深く、深い部分から遺物が多く出土している。断面形状は幅の広いところは逆台形、浅いところは半円形を呈する。SE3 と同時期と考える。

出土遺物は古代土師器９点、中世土師器 23 点、須恵器１点、灰釉陶器 35 点、山茶碗 250 点、中世陶器 10 点、中国製磁器３点、土錘２点、木製品５点、石器３点、スモモの種子 12 点が出土しており、

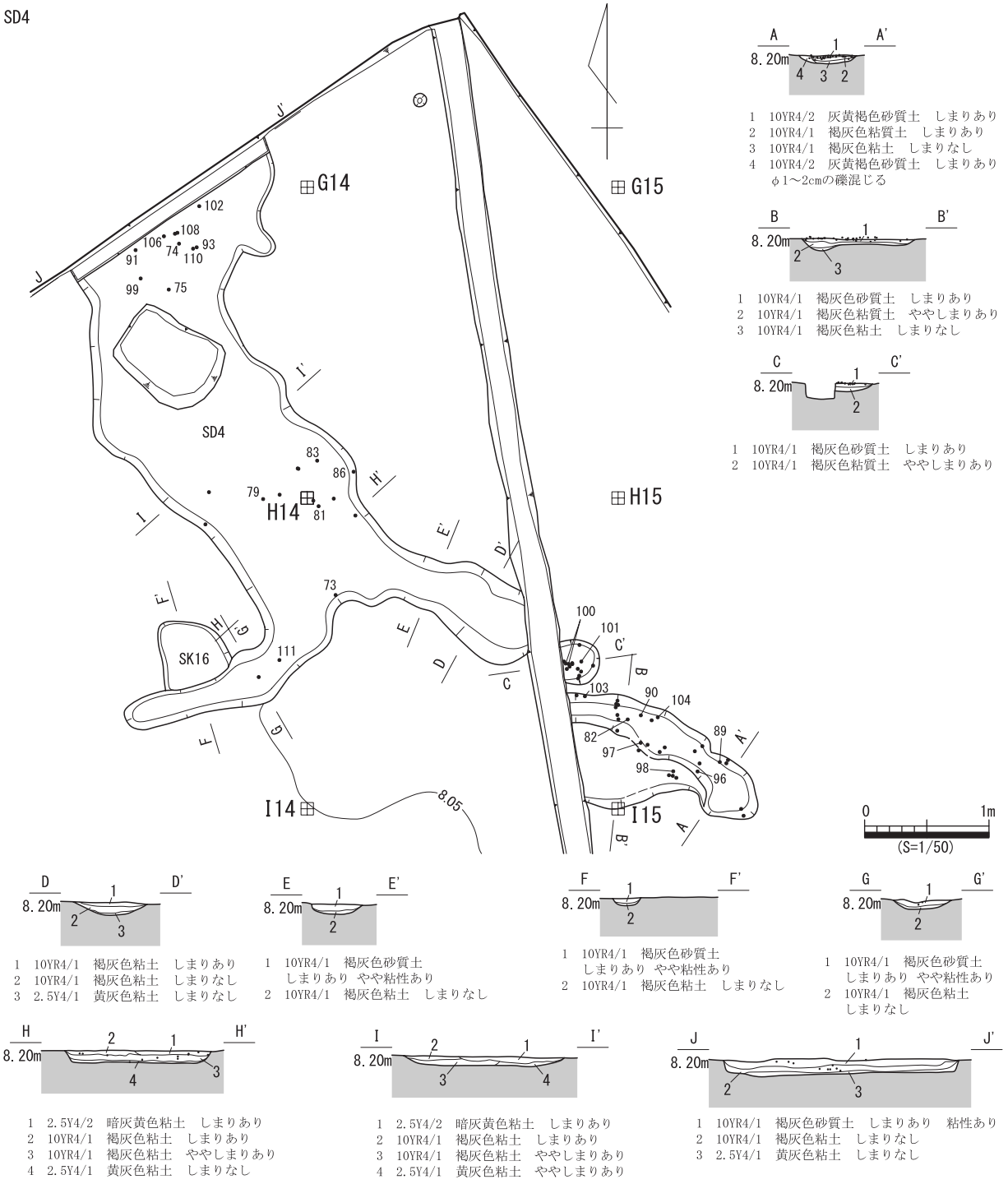



図 30　SD4 遺構図

73～111 を掲載している。73、74 はロクロ土師器皿、75 は土錘、76～82 は灰釉陶器で 77 が猿投産、81 が美濃須衛産、82 が東濃産の瓶で、虎渓山１号窯式期のものが多く出土している。83～89、93～106 は尾張型山茶碗で第３型式期と第４型式期のものも含まれるが多くは第５型式期のものである。90、91 は美濃須衛産、92 は東濃産の山茶碗で尾張型山茶碗第４型式期並行のものである。山茶碗の中には内面や内面と外面の両面に煤が付着しているものがある。106 は口縁部を内面側から故意に打ち欠いているようである。107～109 は中国製白磁の破片で、110、111 は常滑の甕の破片である。

本遺構の所属時期は出土遺物の主体が尾張型山茶碗第５型式期の時期のものであることから、平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

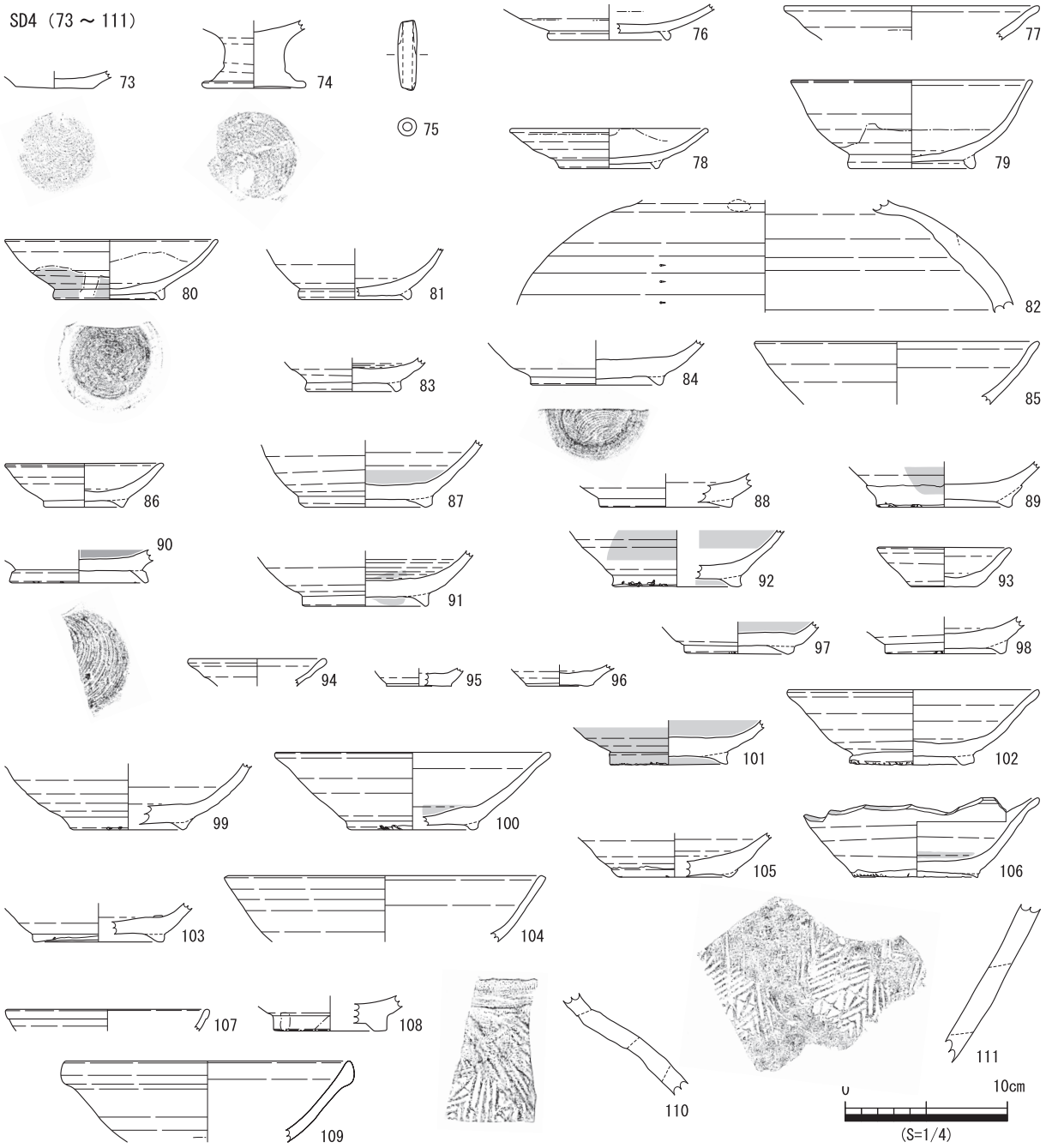



図 31　SD4 出土遺物

**SE3（遺構図：図 32、33、出土遺物：図 34～37）**

Ⅰ、J14 グリッド内、東地区南壁から約１ｍ北、標高 8.10ｍで、東地区では一番標高が高い所に位置する。微高地の東端部にあたり東と北へ低くなる。平面形状は上層が不整円形、下層は方形を呈する。地山の土より硬くしまり、完形の山茶碗の口縁部が数点見え、硬くしまる範囲は約３ｍの円形で検出している。表土掘削後の精査時に検出している。包含層がほとんど残っていない状況で当初遺構と認定し難い状況であったが、完形遺物が多く見えていたため遺構として検出した。断面形状は上層が擂鉢状、下層がほぼ平坦である。上層は中央部を最後に埋めたようにみえる。下層は灰色粘土で上層の土とは大きく異なる。上層は黄灰色と黒褐色の粘土と砂質土で大きく３層に分かれる。最下層から湧水する。湧水満水時の水面標高は 8.00ｍである。第２面目へ掘り下げ時に SE3 に切られる SD1 を検出した。SD1 から出土した破片と SE3 埋土 1、2 から出土した破片が接合しているもの（143、147）があり、SD1 が SE3 に沿うようにあることから SE3 に伴う溝になる可能性もあるのだが、検出面の違い

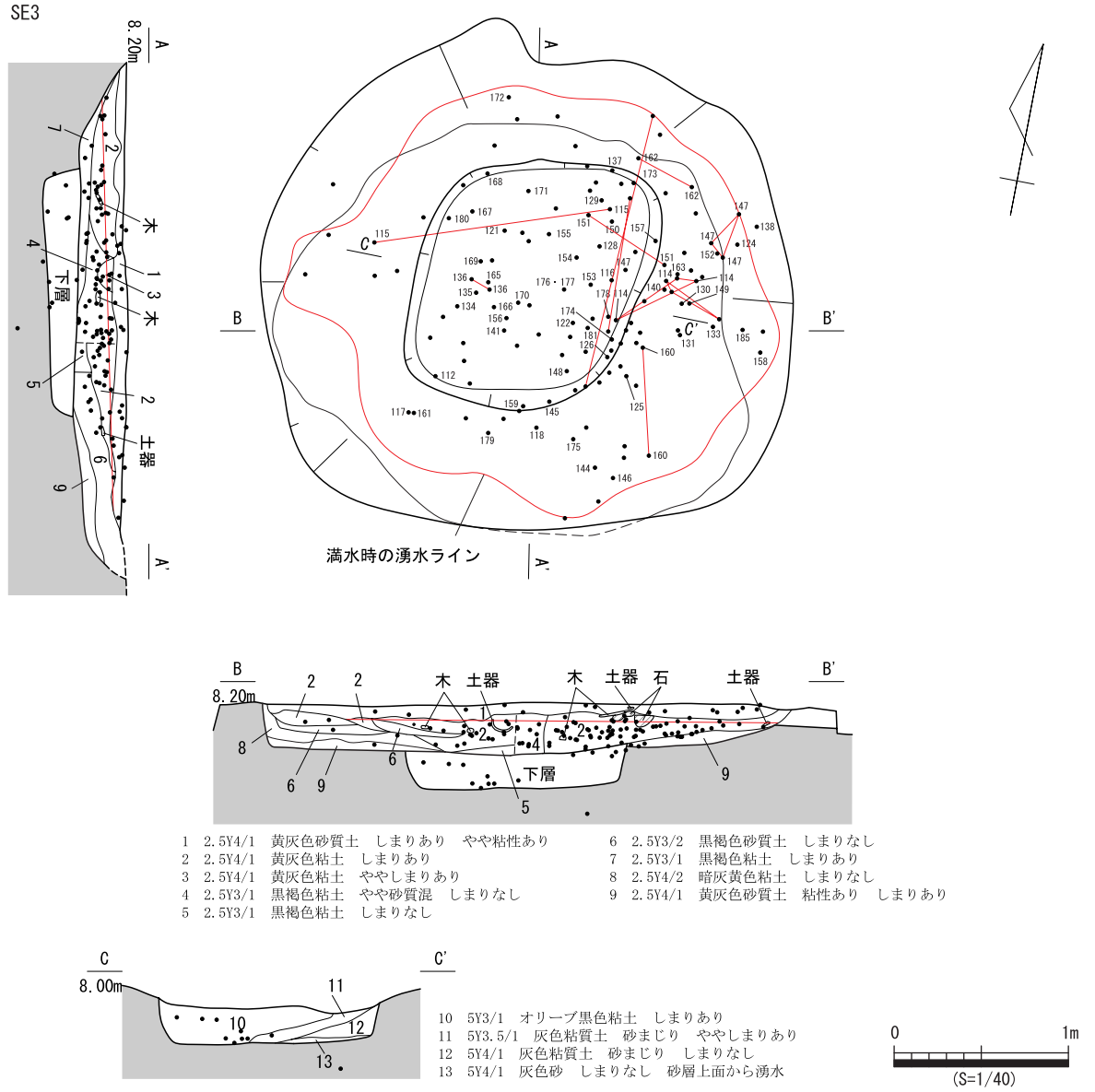
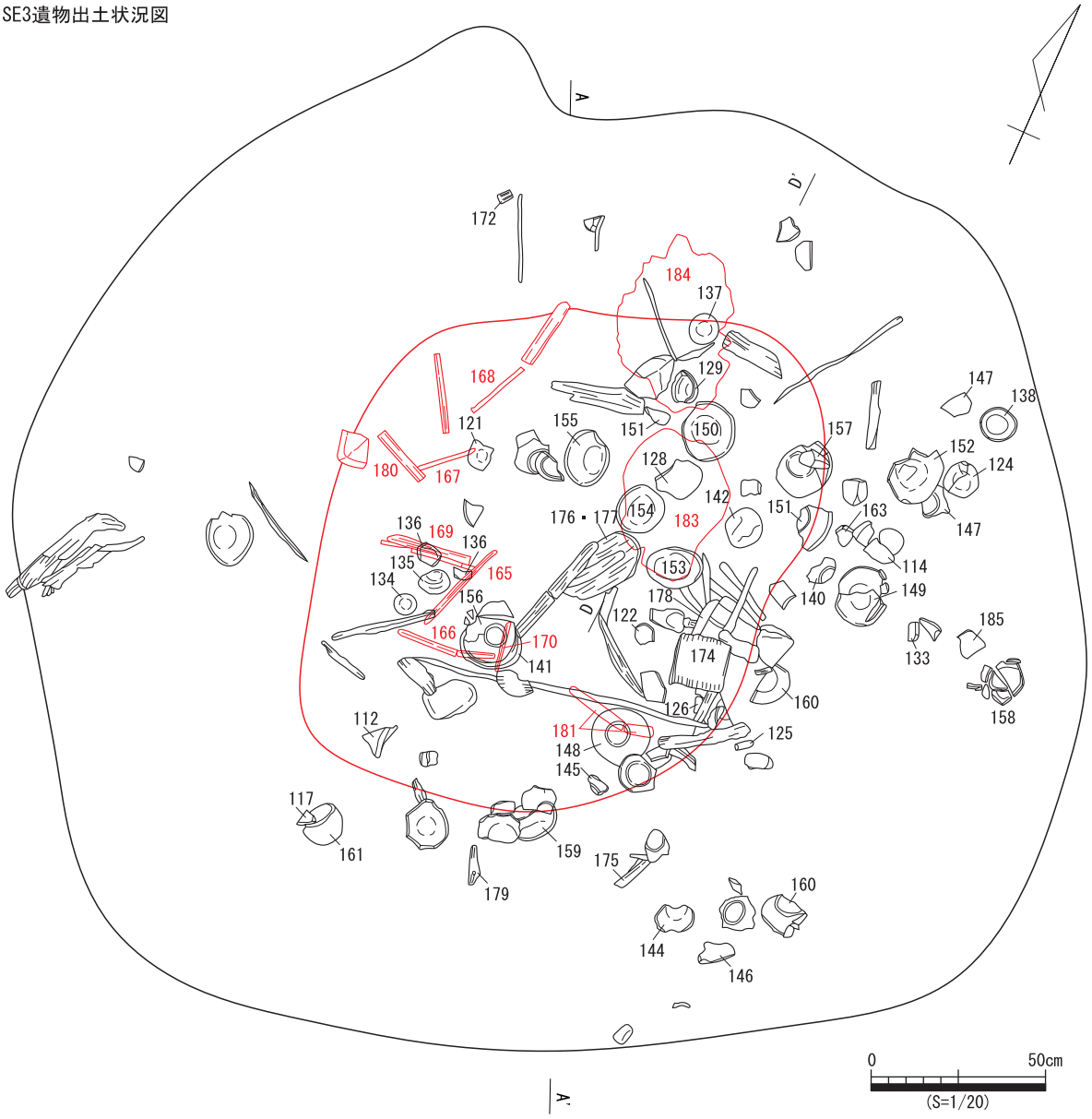



図 32　SE3 遺構図（１）

SE3遺物出土状況図




SE3笊出土状況図

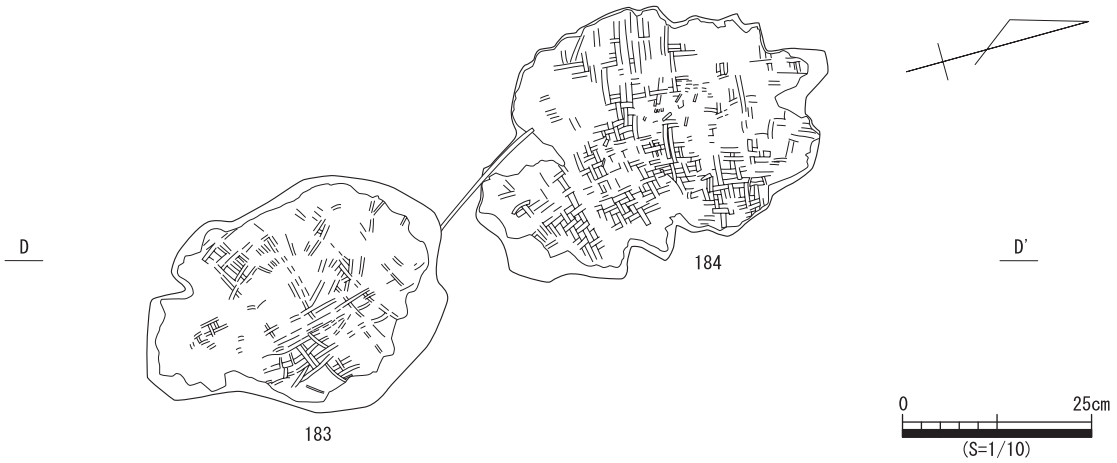



図 33　SE3 遺構図（２）

からSD1とは同時期にならないと判断する。SE3に伴う溝は北にあるSD4が考えられるが３m離れている。SE3の約５m南西に掘立柱建物SB1、SB2があるため建物に伴う井戸と考える。井戸周辺に井戸に関連する柱穴は確認していない。周辺から遺物が多く出土しているため、生活に伴う井戸と考える。上層から多数の完形に近い山茶碗と木製品が、上層底部からは笊が２点出土し、笊の下には伊勢型鍋の胴部が出土している。下層からは扇子の骨３本（165、166、167）と斎串（168、169、170）が出土している。また、上層には井戸の神様の住まいの「まなこ」として使用したと考えられる美濃須衛産小型片口壷（161）が出土している。上層から出土した山茶碗は口縁部を故意に打ち欠いたものや故意に煤を付着させたものが出土しており、祭りを行っていると考える。まなこが上層から出土していることから神送りの祭りを行ったと考える。まなこは井戸使用時には井戸の神の住まいとして井戸底で使用し、井戸を埋める前に井戸底から取り出したと考える。161の口縁部の打ち欠きはまなことして使用する前の神迎えの祭りで打ち欠いたと考えられる。下層から出土した木製品は井戸を閉じる際に井戸の周辺に挿して結界を張るために使用した斎串と考える。斎串を下層に捨てた後に下層を埋め、上層には井戸を閉じる際に使用した祭りの道具をまとめて捨てていると考える。SE1→SE2→SE3の順に井戸を作って使用し、この地を去る前に、最後に使用していたSE3で井戸を閉じる祭祀を行ったのではないかと考える。上層から出土した土器の接合関係や出土状況をみると、北東方向から井戸の中心に向かって一度に流し入れたようである。下層の斎串は北西と西から投入している。

出土遺物は古代土師器１点、中世土師器94点、須恵器１点、灰釉陶器21点、山茶碗242点、中世陶器３点、中国製磁器３点、土錘３点、木製品48点、石器１点、スモモの種子13点が出土し、112～185を掲載している。

112～116は伊勢型鍋で内外面に煤や炭化物が付着している。117～120はロクロ土師器皿、121～124は土師器皿で12～13世紀のものである。125～127は土錘で太く長い棒形である。128は美濃須衛産灰

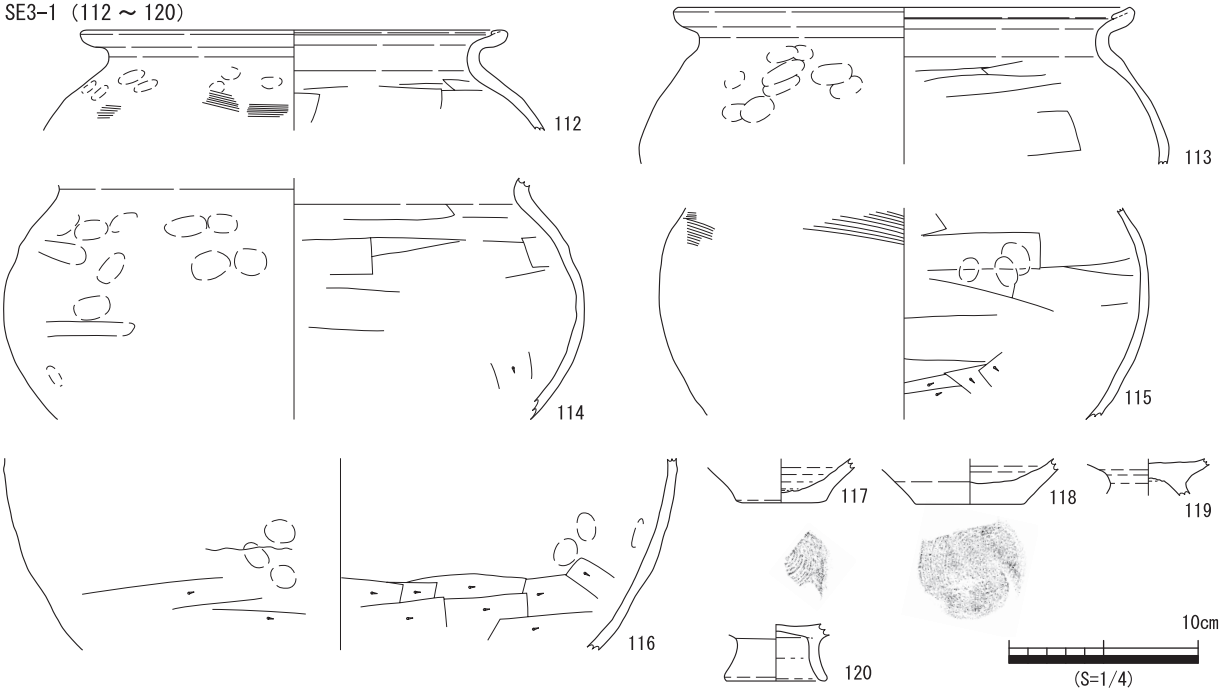



図34　SE3出土遺物（１）

釉陶器甕の胴部破片で、外面に粗い叩きがある。129～132 は尾張型山茶碗第３、４型式期の小碗・碗で、132 は加工円盤である。133 は美濃窯浅間窯下１号窯式期の碗の底部破片で内面に使用痕跡がある。134～140 は尾張型山茶碗第５型式期の皿で、135 には底部外面に花押と思われる墨書が、136 には底部外面に「大」の墨書が、137 には底部外面に「大」の墨書が、138 には底部外面に「上」の墨書がある。140 は口縁部を故意に打ち欠いている。141～160 は尾張型山茶碗第５型式期の碗で、口縁部を故意に打ち欠いているものは 147、148、149、154、155、156、157、160 で、内外面に煤が付着しているものは 141、142、145、152、153、154 で、内外面と打ち欠きの割れ口にも煤が付着するものは 147、155、156 である。土器の口縁部を故意に打ち欠いたり、煤を故意に付着させたりする行為は、祭りに使用する土器に施されるものと考えられる。150 の底部外面には花押と思われる墨書がある。161 は美濃須衛産小型片口壺で山茶碗の時期のものである。片口の傍の口縁部を、内面側から故意に打ち欠いている。底部外面には下駄歯状圧痕がある。胴部下半内面には入れ子状で焼成した痕跡がある。美濃須衛産の壺や甕などの大型品は、貴族や寺社からの特注品と考えられており、県内での出土例は消費地では柿田遺跡、野笹遺跡、生産地では稲田山 16 号窯、船山北３号窯がある（第５章参照）。162 は美濃須衛産の甕胴部破片で山茶碗の時期のものである。163 は青磁皿で 12～13 世紀のもの、164 は白磁碗の口縁部破片である。

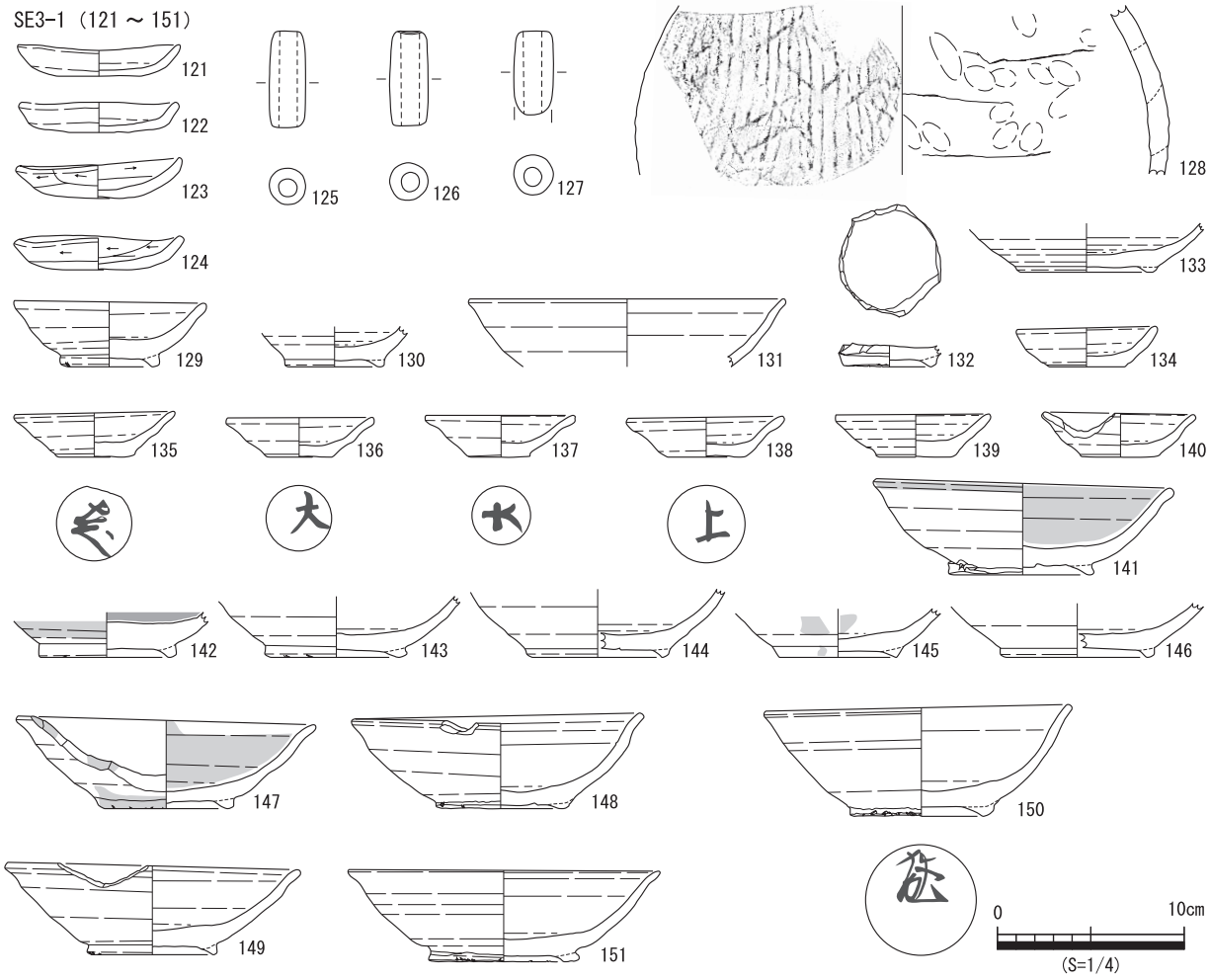



図 35　SE3 出土遺物（２）

165～167 は扇子の骨で、樹種は３本ともトウヒ属である。トウヒ属は高山に分布する樹木で遺跡周辺には生育していないことと、檜扇や扇子はほとんどがヒノキやスギでつくられており、なぜトウヒ属なのかが大きな疑問である。165 は扇子の親骨で要が残存している。上端部は折損している。166 は扇子の中骨で墨書の文字があり、表面の文字は肉眼でも文字があることが確認できた。赤外線写真撮影を実施したところ、表面に７文字以上、裏面にも６文字ほど墨書があることがわかったが、表面の一文字以外は判読できなかった（第４章２節参照）。167 は扇子の親骨で上端と下端の両端部が折損している。165～167 は形状が類似しており、同じ扇子の骨と考えられるが、これらは近くから出土しているが、骨が束になった状況では出土していない。それぞれ方向もばらばらで出土しており、扇子の骨は最低でも５本はあると考えられるので、扇子の状態で捨てられたわけではないと判断した。166 の両面にある文字も、扇子の紙がはずされ骨がばらばらになった状況で両面に書かれたと考えられる。165～167 の傍には 168～170 が出土しており、よく似た細長い棒状のもので 168 には両面に刃物痕がある。これらはまとまって井戸下層北西隅から出土していることから 165～170 は斎串であると考えた。171、172 は板材で同一であった可能性が高いが接点はない。171、172 ともに赤外線写真撮影で表面に墨痕を確認している。両方ともに表面に刃物痕があり、更に上下端部を刃物で切断し、171 には樹皮の留紐が残っている。173～175 は板材で、174 は一部炭化している。表面に刃物痕がたくさんあるのと上下端部を切断している点では 171、172 と類似している。176～178 は下駄で、176、177 の樹種はセンダン、178 は広葉樹である。176、177 は削り出しの歯をもち同一個体の可能性が高いが接点はない。179 は織機の手押木の可能性がある。161 のすぐ傍から出土している。180 は竹を扁平に

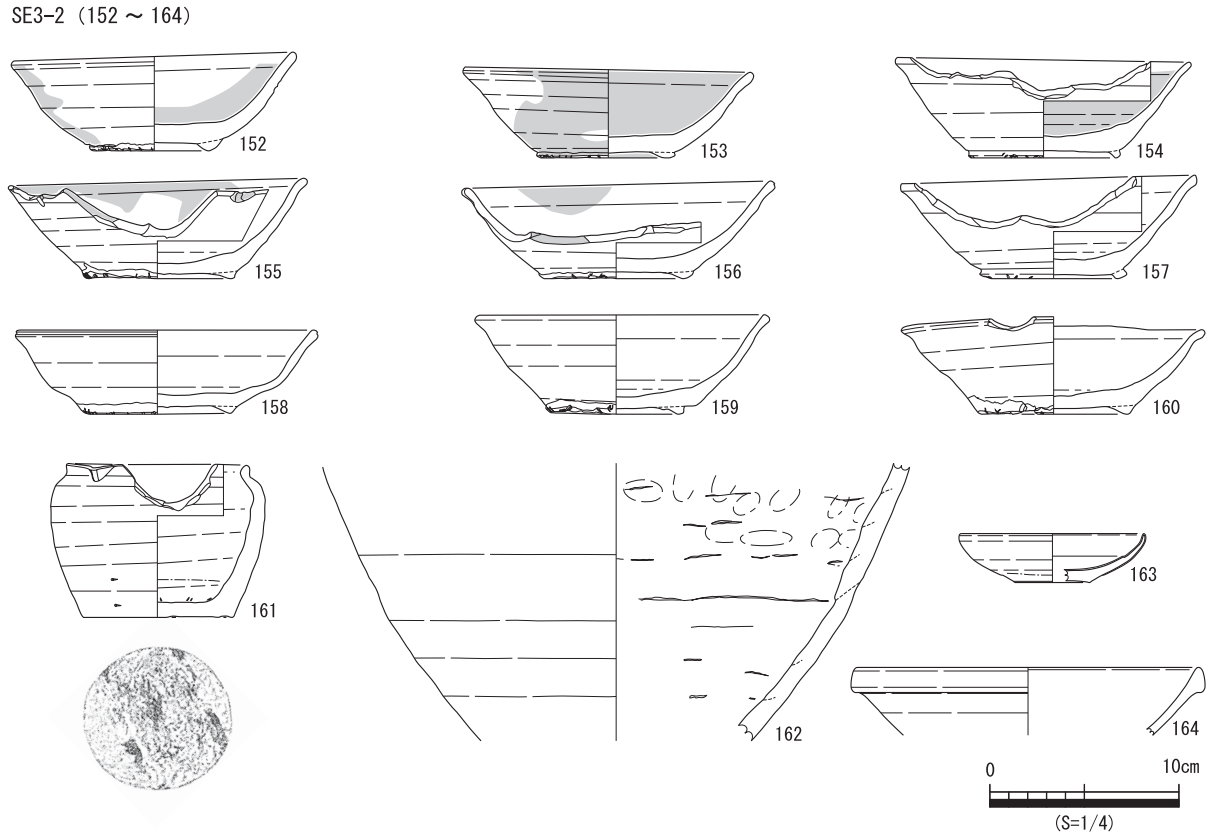



図 36　SE3 出土遺物（３）

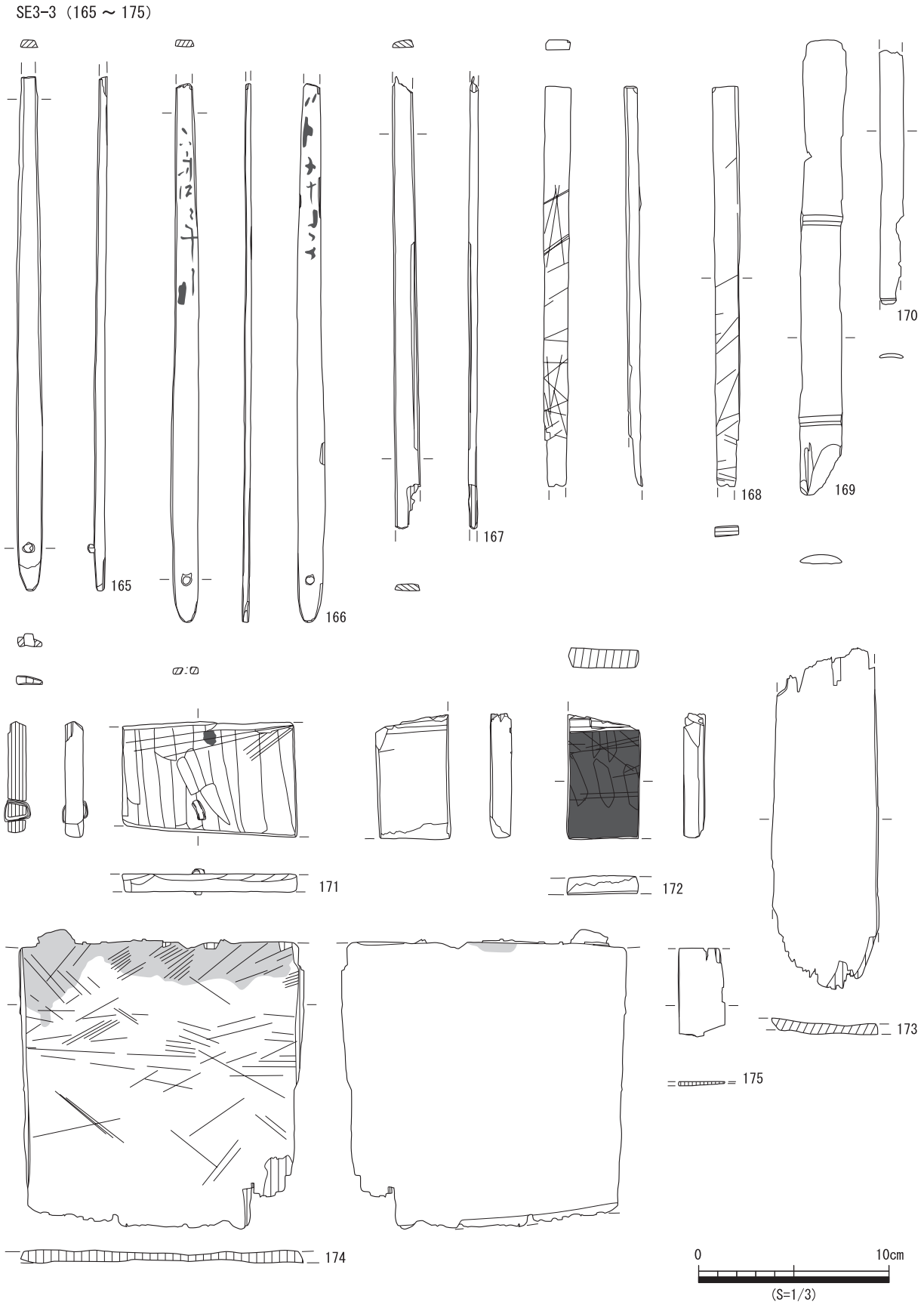



図 37　SE3 出土遺物（４）

加工した鞘かと当初考えていたが、節を抜かれてつぶれたものの可能性もある。181 は井戸底から出土している。先端部は断面が楕円形、握る部分は円形になるように全面を磨きに近い削りで成形しており、祭りに使用する道具のようなものか、あるいは農具の柄にも見える。中世より古い時期のものである可能性がある。183 の樹種はイネ科、184 はヒノキで、出土当初は籠と考えたが井戸の祭祀具には笊が使用されることから笊ではないかと考える。185 は破片だが砥面調整敲打痕があることから砥石と考える。全面に煤が付着している。

本遺構の所属時期は、主体となる遺物が尾張型山茶碗第５型式期であることから、平安時代末～鎌倉時代初頭と考えられる。

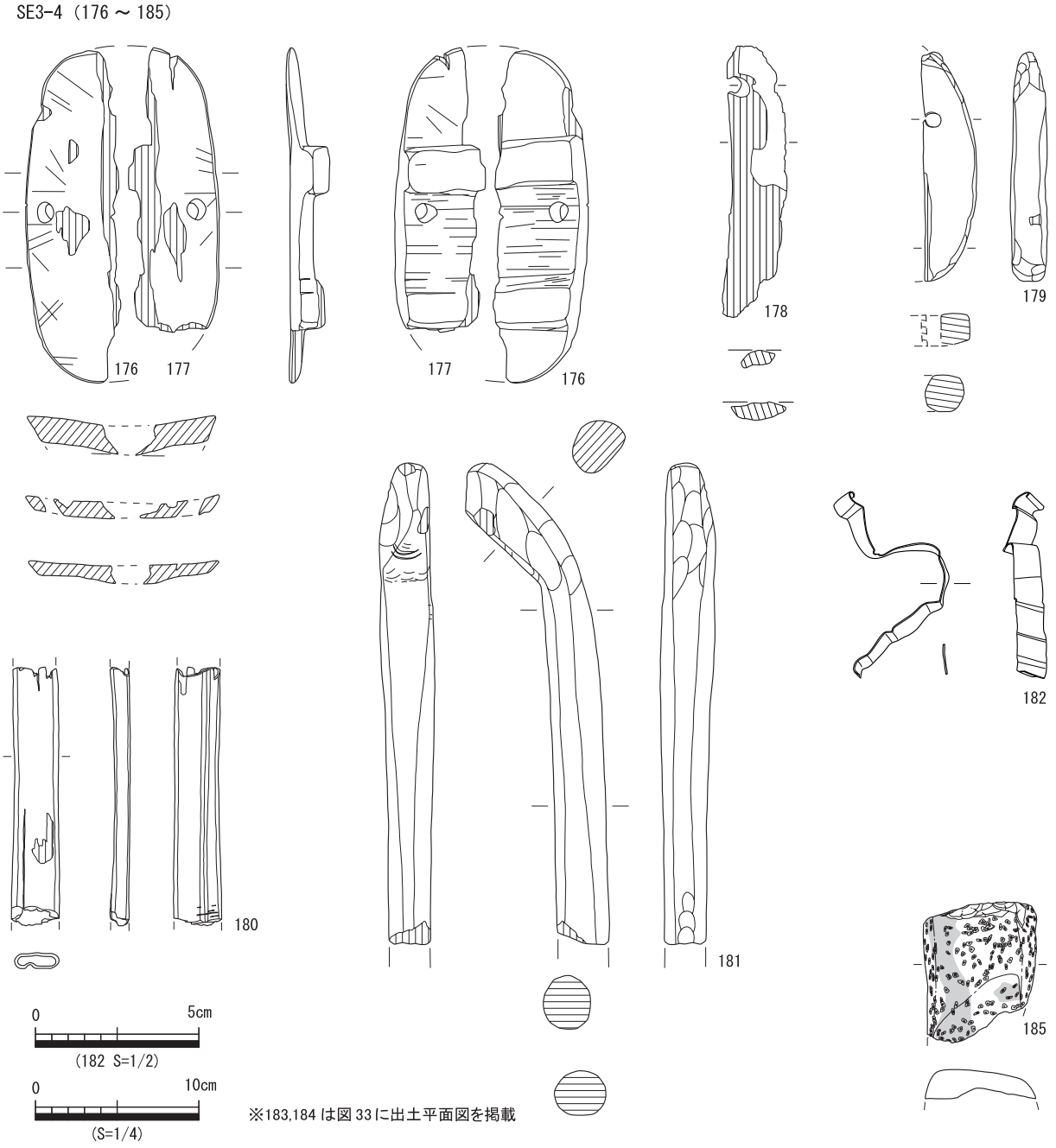



図 38　SE3 出土遺物（５）

**SP097（遺構図、出土遺物：図 39）**

東地区北東端 F14 グリッド、標高 8.03ｍで北へ傾斜する境にあり SD4 の東に位置する。直径６cm の芯持ち丸太材 186（芯は腐食してほとんど残っていない）が残存し、AMS 分析の結果、平安時代後期～鎌倉時代初頭という結果が出た。周辺に同様の柱穴は無いため、SD4 の東側に沿って北の発掘区外へ続くものと考える。SB1 の柱材に比べると細く、柱材の太さから柵のようなものになると推定する。

出土遺物は無いが、柱材の AMS 分析結果から、本遺構の所属時期は平安時代後期～鎌倉時代初頭と考えられ、SB1、SB2 と同時期に存在したと考える。

**SP098・099（遺構図、出土遺物：図 39）**

東地区西 I12 グリッド、標高 8.04ｍ～8.05ｍに位置する。西側に平坦面、遺構面が続く。西側の西壁壁面トレンチからは須恵器などの遺物が多数出土し、SP098・099 以外に大きさが似たものは周辺からは検出されていない。SP099 には径 10cm の柱痕跡が断面から観察できる。

出土遺物は SP098 から中世土師器が６点あり、187 を掲載している。187 は伊勢型鍋で内外面に煤が付着している。時期は伊勢型鍋でも古い時期のものと考えられ、遺構底面から出土していることから混入と考える。本遺構の時期は検出面から平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

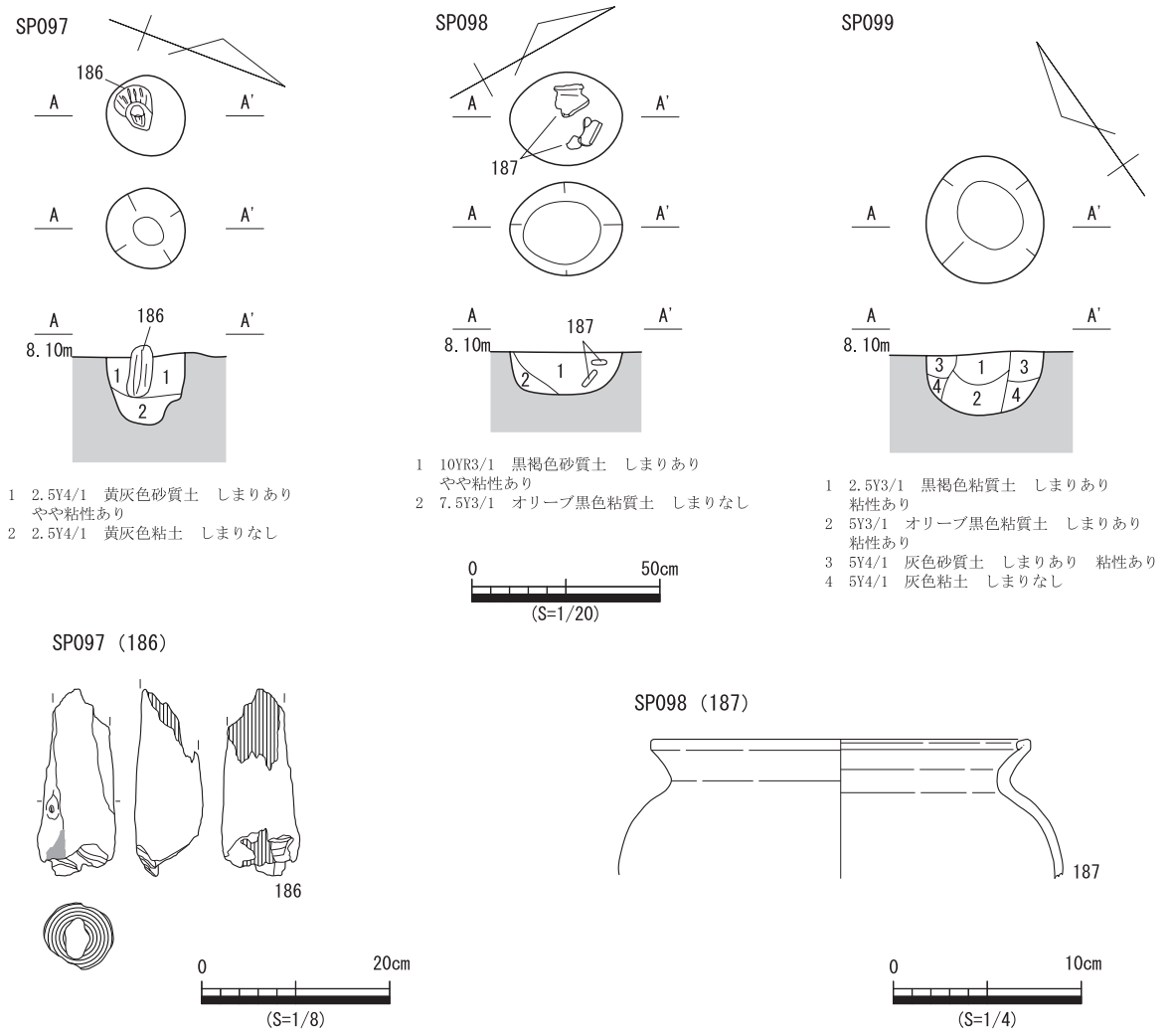



図 39　SP097～SP099 遺構図、SP097・SP098 出土遺物

**西地区第１面（平安時代末～鎌倉時代初頭）**

西地区第１面で検出した遺構からは、遺物が少数しか出土していない。西地区北の SK20から尾張型山茶碗第５型式期の碗が出土していること、包含層から尾張型山茶碗第４型式～第７型式期が出土していること（図46参照）、包含層を掘削しすぐに検出していることから、東地区第１面とほぼ同時期と考え平安時代末～鎌倉時代初頭と推定する。

西地区第１面西半分からは掘形が方形で柱痕跡のある柱穴を多数確認している。西地区第１面の柱穴群の多くは、遺構検出面の土色に近い色で、遺構検出面には鉄分が多いのに比べ、遺構埋土は鉄分が少なく硬くしまっているという違いで検出しているため、検出には少し時間を要している。遺構検出に関しては、平面検出に入る前に、西地区南と西に土層観察トレンチを入れて壁面断面に遺構と考えられる土層堆積を確認し、それに基づいて判断している。中には、SB3-P1～P3のように柱痕跡部分が青色、柱穴部分が黄色で地山とははっきりした色の違いで検出しているものもある。

M5グリッド中央以西は平坦な地形で、方形の柱穴が分布するのに対して、M5グリッド中央以東は東に行くほど地形が低くなり、小規模な柱穴群が分布している。西半分の方形の柱穴群の中には東西方向の柱穴列になりそうなものと南北方向の柱穴列になりそうなものがある。これらは掘立柱塀にはなるが、残念ながら掘立柱建物にはなりそうにないようである。というのは、柱痕跡と柱痕跡の間の距離が南北方向のものと東西方向のものとで異なること､軸が異なり直交しないことがその理由である。東西、南北のそれぞれで柱穴列の軸が異なるものもある。軸が異なることから建て替えが行われ、少なくとも３時期はあると考えられる。それは、①SB3、SA4、②SA2、SA3、SA6、③SA5、SA8の３時期である。

西地区南が標高8.11ｍであるのに比べると、西地区北は標高8.08ｍとやや低くなるようである。試掘調査で北東方向の TP10から土坑が検出されているので、遺跡は発掘区の北に続き、西地区南壁面土層の観察から、発掘区の南へも続くと考えられる。西地区北には SB3-P1以外は小規模の柱穴が分布しているのみである。西地区北を横断する東西方向の市道付近は、市道を作った際の削平を受けているようである。

西地区南西壁土層断面観察で、柱穴をいくつか確認している。西地区の西にも柱穴群がある可能性が高いが、試掘確認調査結果から、西地区の西は SP114よりも西で土の堆積が変化するようで、西への遺跡の広がりはあまり期待できないようである。N4グリッドでは柱穴を検出できなかったので、SP108に関連する遺構は南に広がると考えられる。

西地区第１面の調査により、南北方向に約15ｍの幅で微高地が広がると考えられ、地形的に制約されている場所に、目隠しの役割をはたしていたと考えられる東西方向と南北方向の掘立柱塀が、柱穴痕のはっきりしている SB3の南にあることから、遺跡の中心となる建物が北に広がると考えられる。東地区は遺物が多数出土し生活の場であったのに対し、西地区は遺物が少数で非日常の場であったと考える。この二つの空間は同時期に存在し連動していたと考え、西地区の区画施設や建物跡の廃絶時期は、東地区 SE3の廃絶時期と同じであると考えている。

**SA2（遺構図：図40）**

西地区西第１面、M3、M4、M5グリッド、標高8.07ｍ～8.12ｍに位置する。SA2-P1、P2、P4は柱痕跡が大きい柱穴（SB3-P1、P2、P3）とは異なり、検出面の土色に近い色で検出した。P3は柱痕跡が黄色

で地山とははっきりした色の違いで検出した。柱穴の大きさに違いがあるが柱痕跡が直線上にあり、P2と P3の間がやや広いがほぼ等間隔に柱痕跡が並び、東西方向の掘立柱塀になると思われる。P1、P2、P4は柱痕跡径25cm、P3の柱痕跡は径19cm である。軸は N-89°-E で真北に対して直角である。真北方向の軸をもつ SA3、SA6と同時期に存在したと考える。

出土遺物はないが、検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

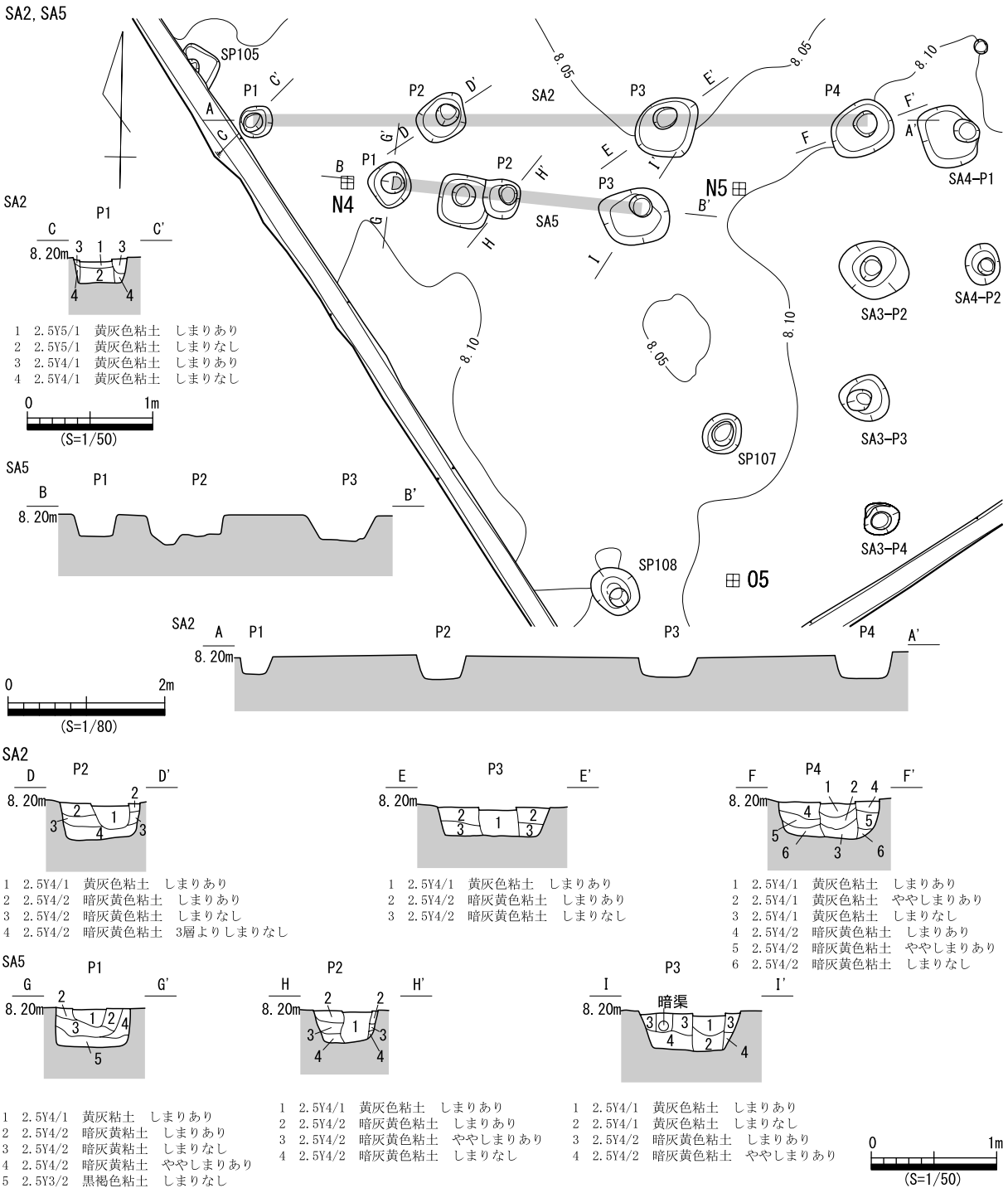



図 40　SA2、SA5 遺構図

## SA3（遺構図、出土遺物：図 41）

西地区西第１面、N5、M5 グリッド、標高 8.12m～8.13mに位置する。P1～P3 は検出面に鉄分が多いのに比べ、遺構埋土は鉄分が少なく硬くしまっているという違いで検出した。P4 は柱痕跡が黄色で地山とははっきりとした色の違いで検出した。P1、P2、P3、P4 で南北方向の掘立柱塀になると思われる。P1 は柱痕跡径 25cm、SA3-P2、P3、P4 の柱痕跡径は 20cm である。東西方向の掘立柱塀 SA2 とは柱間の長さが異なる。軸は N-2°-W でほぼ真北方向を向く。SA2 に対して直角であるので、SA2 と SA3 は同時期に存在したと考える。他には SA6 と軸を同じくし、SA2、SA3、SA6 は同時期に存在したと考える。西地区南東壁土層断面観察で柱穴をいくつか確認しており、この掘立柱塀はまだ南に続く可能性が考えられる。

出土遺物は木製品１点(188)で下端部先端を尖らせ炭化していることから斎串と考える。時期の分か

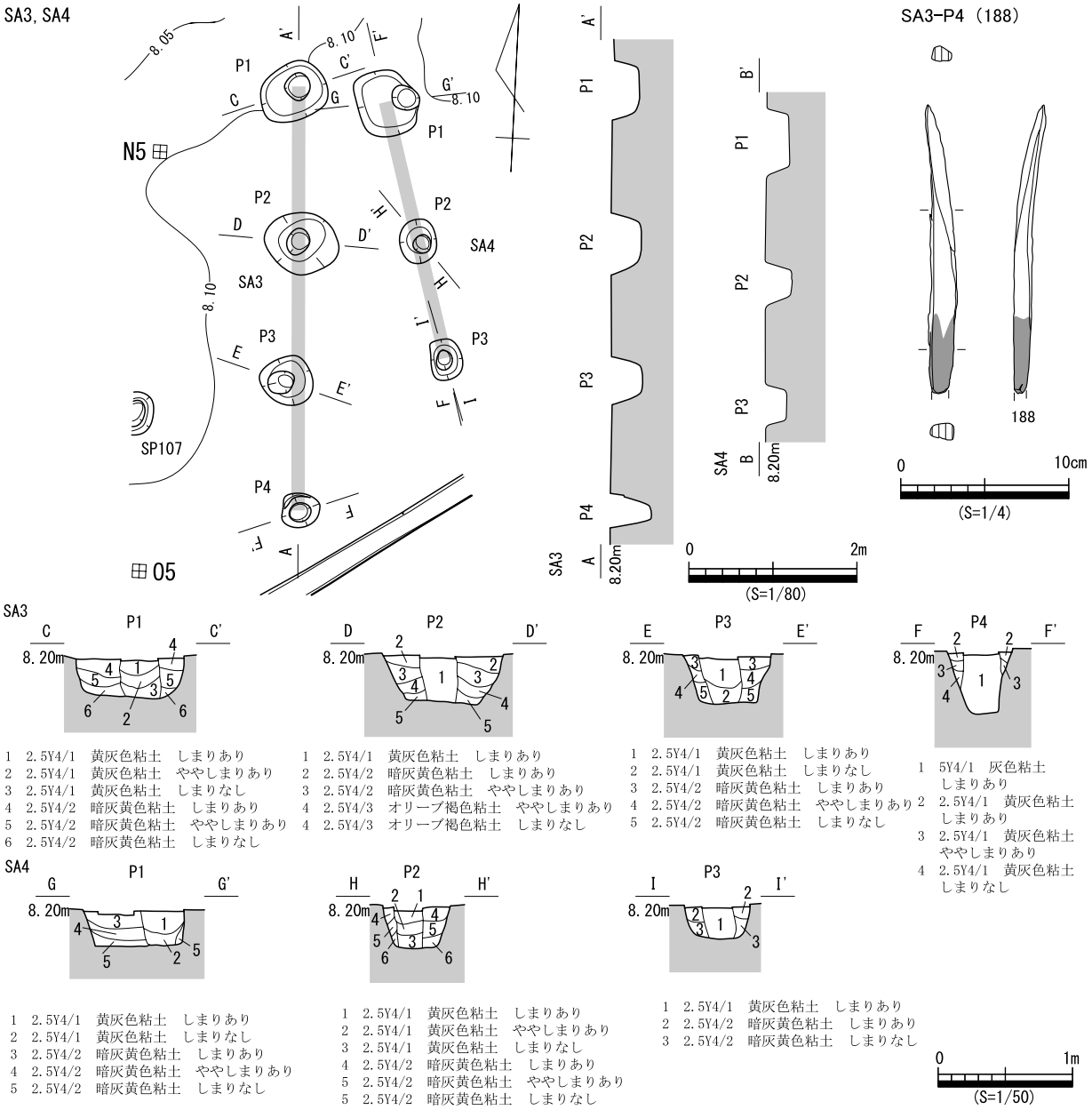



図 41　SA3、SA4 遺構図、SA3 出土遺物

る土器は出土していないが､検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と推定される。

**SA4（遺構図：図 41）**

西地区西第１面、N5、M5 グリッド、標高 8.11m～8.13mに位置する。検出面に鉄分が多いのに比べ、遺構埋土は鉄分が少なく硬くしまっているという違いで検出した。P1、P2、P3 で南北方向の掘立柱塀になると考える。柱痕跡の径は P1、P3 が 20cm、P2 が 15cm である。SA3 とは軸が異なり軸は N-11°-E で真北方向に対して西に振っている。SA4 と軸を同じくし同時期と考えられるのは SB3 である。SA3 は SA4 と距離が近く軸が異なるので同時期には存在していないと考える。

出土遺物は P1 から灰釉陶器１点が出土しているが、下層の遺物の混入と考える。本遺構の所属時期は検出面から平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SA5（遺構図：図 40）**

西地区西第１面、M4、N4 グリッド、標高 8.09～8.10mに位置する。検出面に鉄分が多いのに比べ、遺構埋土は鉄分が少なく硬くしまっているという違いで検出した。P1、P2、P3 で東西方向の掘立柱塀になると思われる。P3 は現代の排水暗渠に切られている。P1、P2 の柱痕跡径は 15cm、P3 の柱痕跡径は 20cm である。SP106 も同じ柱筋上にあるが柱間が異なり P2 に切られるため、やや時期が異なるようである。軸は N-86°-W で東に振っている。同様に東に軸を振るのは SA8 がある。

出土遺物は無いが、検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SA6（遺構図：図 42）**

西地区東第１面、M7 グリッド、標高 8.05m～8.10mに位置する。西地区で一番標高が低いところから検出し、柱穴掘形検出の段階で P1 は径 12cm、P2 は径 14cm、P3 は径 18cm の柱痕跡を確認している。西地区西にある掘立柱塀に比べると方形の掘形をもつが柱穴の規模が小さい。ちょうどこの柱列周辺が西地区では一番低くなり地形の変化点にある掘立柱塀である。軸は N-2°-W で SA2、SA3 と同じ軸をもち同時期に存在していたと考える。

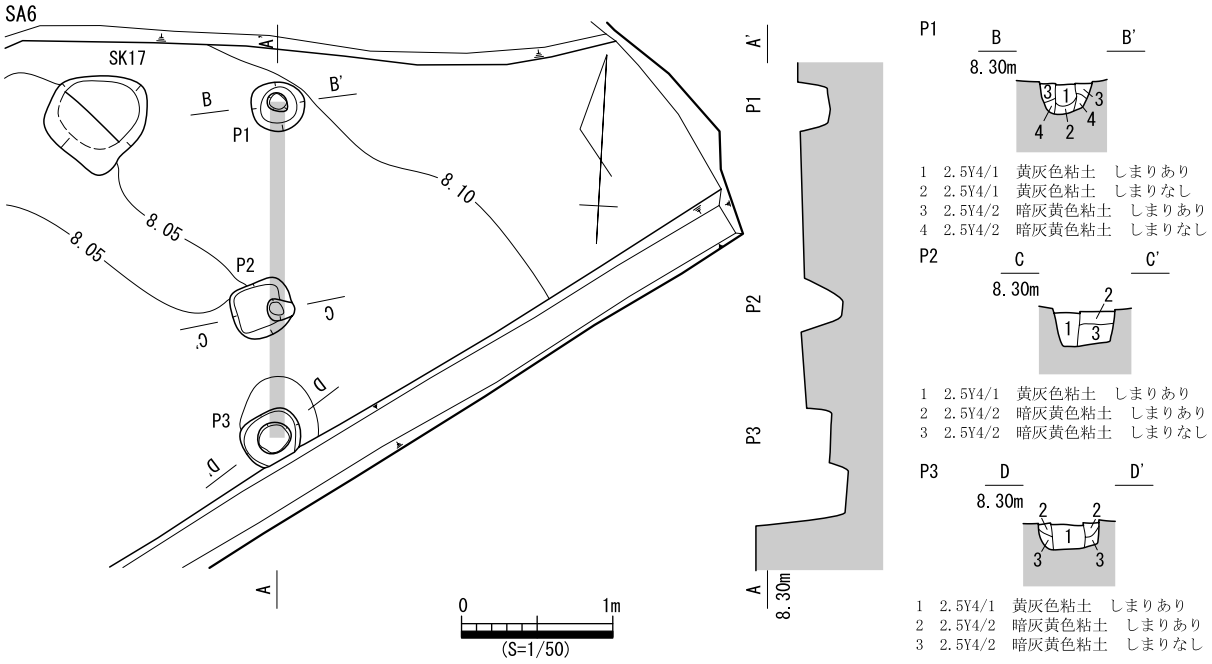



図 42　SA6 遺構図

出土遺物は無いが、検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SA7（遺構図：図 43）**

西地区東第１面、M5、M6 グリッド、標高 8.09m～8.11mに位置する。方形の柱穴以東の小規模柱穴群の中に位置する。掘立柱塀と比べると、柱穴列の軸を大きく振るのが特徴で、柱穴の大きさから考えると柵のようなものになりそうである。軸は N-55°-E で、同じ軸をもつ遺構は周辺にない。柱痕跡径 15cm～18cm、深さ 30cm～35cm と深い。同じような柵になる SA8 に比べると柱間が広い。

出土遺物は無いが、検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SA8（遺構図：図 43）**

東地区中央第１面、M5、M6 グリッド、標高 8.04m～8.05mに位置する。方形の柱穴以東の小規模柱穴群の中に位置する。西地区北にある東西方向の市道を造る際に削平を受けており、当時の遺構面よりやや低くなっている。実際には西地区北隅と同じ高さであったと考える。柱痕跡径 10cm～15cm、深

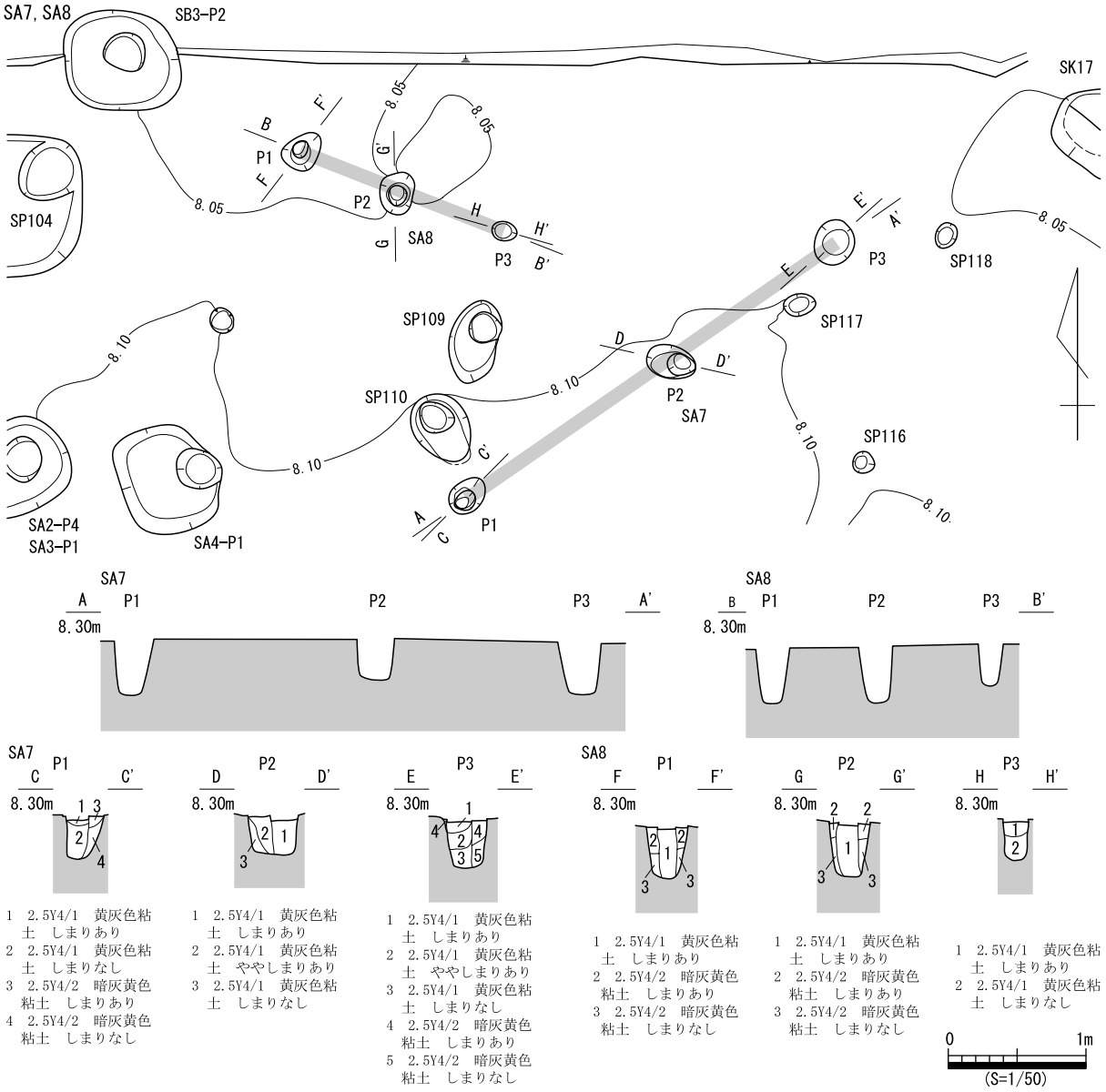



図 43　SA7、SA8 遺構図

さ 30cm～40cm と深い。軸は N-68°-W で、同様に直交する軸が東に大きく振るのは SA5 である。SA8 と SA5 は同時期に存在していた可能性が高い。

出土遺物は無いが、検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SB3（遺構図、出土遺物：図 44）**

西地区北中央第１面、L5、M4、M5 グリッド、標高 8.05ｍ～8.10ｍに位置する。M5 グリッド中央以西には平面形状方形、断面形状方形で底面が平坦な柱穴が多く分布し、SB3-P1～P4 はこれらの北にある。P1 以東は小規模な柱穴が見られる。東地区北にある東西方向の市道を造る際に削平を受けており、SB3 付近は当時の遺構面よりやや低くなっていると考えられ、西地区南の 8.11ｍより更に約１ｍ上に当時の生活面があったと考える。P1 は柱痕跡部分が青色、柱穴部分が黄色で、地山の色とはかなりはっきりとした色の違いで検出した。検出時に柱痕跡を確認している。P1、P2、P3 は柱穴底面より柱痕跡底面が低く下がっている。本来は柱穴底面の高さまでであった可能性が考えら、柱痕跡埋土２の部分は掘りすぎの可能性もある。柱痕跡底面には礎石や礎板、土器破片などがない。柱痕跡の径が 30cm と大きいのにもかかわらず、礎石や礎板を伴わない点はかなり疑問であるが、神社建築には礎石を使用しないことから、神社建築であるため使用しなかったという可能性もある。地下水の水位の上下が 30cm 以上あることが西地区西南壁面土層の暈管状鉄分沈着範囲から観察できる。現在でも西地区西では標高 7.5ｍ～7.8ｍまで湧水の水面が上がる。柱穴底面と柱痕跡底面の高さの違いは柱の重みで柱が下がった痕跡か、水位の上下の影響で柱が下がった痕跡か、あるいは掘りすぎの可能性が考えられる。

P2～P4 は東西方向に直線上に並び軸は N-78°-E である。P2 は柱痕跡直径が 30cm、P3 は柱痕跡直径が 23cm、P4 は柱痕跡直径が 20cm である。また P1 は東西方向の柱穴列から北にあり、柱痕跡直径が 20cm ある。P1～P3 は埋土が同じである。P2～P4 の東西方向の軸と P1、P2 の柱を結んだ線は直交せず直交の方向より７°西に振っているため、掘立柱建物になるのは難しいと考えるが、柱痕跡直径が大きいこと、掘立柱塀の柱痕跡よりはっきりと検出できたことから、P2 と P3 で二本柱の門か、あるいは P1 も含めて四本柱の門にならないかと考えている。陸奥国関和久官衙遺跡館南門（奈良文化財研究所 2010）のように、掘立柱塀の途中に門があるような部分ではないかと考える。P1～P3 以外で埋土が同じものは SA3-P3 だが南に離れてしまう。SB3-P1～P4 に関連する柱穴は北へ続くようである。

柱痕跡径 30cm 程の中世の掘立柱建物として柿田遺跡 SH38 に類似する。神社建築のようなものになるかと考えられている。SH38 周辺には東西と南北方向の柵列が多数検出されており、当遺跡検出の SA2～SA8 や SB3 と遺構の性格が似ている可能性が高い。SB3 と同時期に存在していた遺構は軸が同じことから SA4 が考えられる。SA2、SA3 は SB3 とは軸が異なるために同時期に存在していたとは考えにくいが、遺跡は発掘区の北と南に続く様相をみせているので、SA2、SA3 に伴う建物跡は今回の調査では確認されていないと考えられる。西地区は東地区に比べて極端に出土遺物が少ないことから、役所の中枢や目隠しを多く伴う神社建築のような非日常の空間であったのではないかと考える。

出土遺物は P2 から須恵器（189）が１点出土しているが、遺構の時期より古い物で混入と考える。検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SK20（遺構図、出土遺物：図 45）**

西地区北第１面、L5 グリッド、標高 8.10ｍに位置する。西地区南が標高 8.11ｍであるのに比べると、西地区北は標高 8.08ｍとやや低くなるようである。試掘調査で発掘区の北東に位置する TP10 か

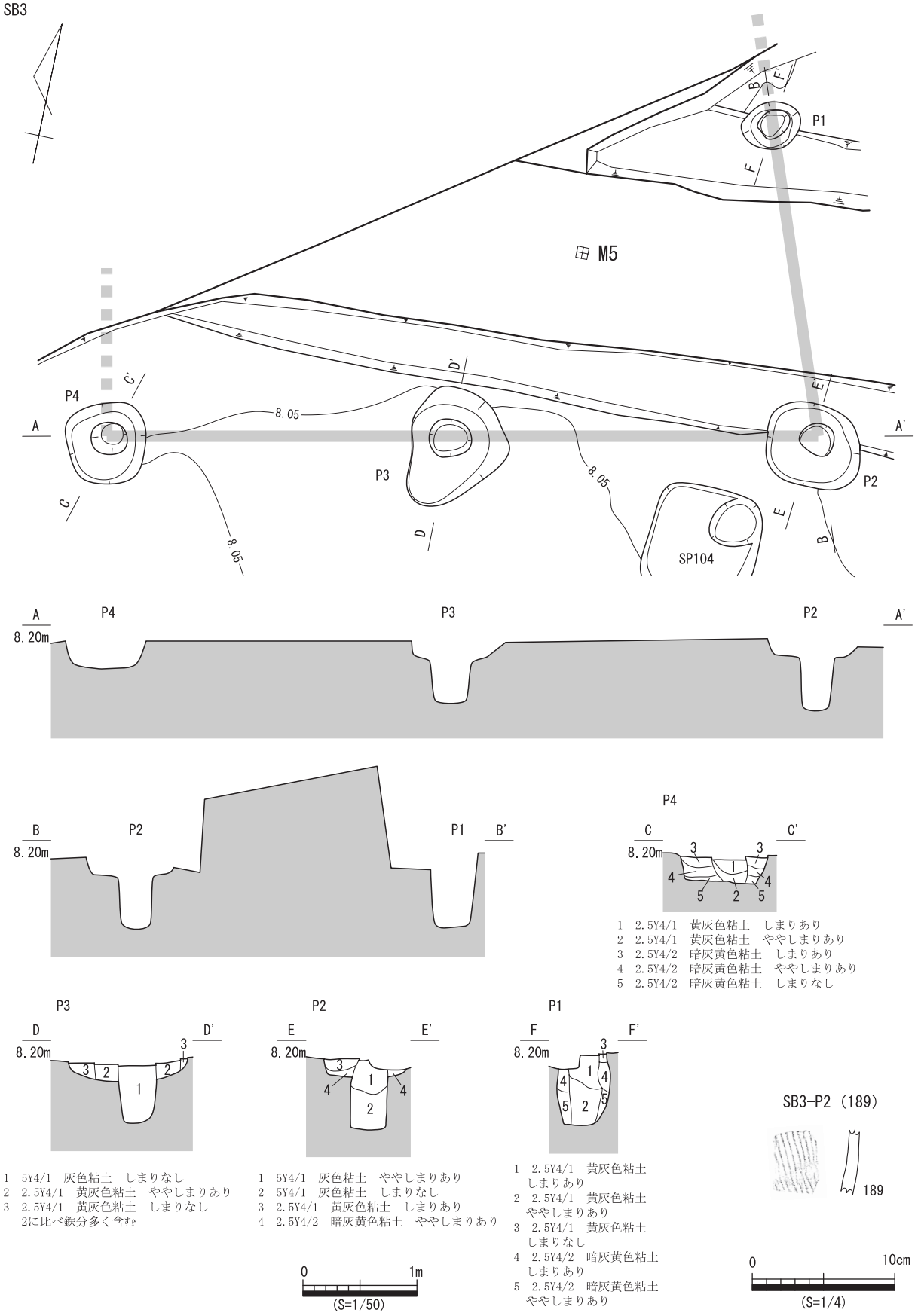



図 44　SB3 遺構図、出土遺物

ら土坑が検出されているので、遺跡は北に続くと考えられる。周辺にはSB3-P1以外は小規模の柱穴が分布している。SK20のそばのSK17～SK19は大半が市道造成時の削平を受けているか、あるいは削平痕跡である可能性も考えられる。

出土遺物はSK20から山茶碗が１点出土しており、190で掲載している。190は尾張型山茶碗第５型式期の碗の底部破片である。出土遺物から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SP107、108（遺構図：図45）**

西地区西第１面、M5、N4、N5、O4グリッド、標高8.06m～8.11mに位置する。SP107は柱痕跡径18cm、SP108は柱痕跡径18cmで、柱穴の大きさや形状ではSA3やSA4の柱穴群に類似するが、柱列状に並ぶ柱穴が周辺にない。これらの柱穴に関係する遺構は南に広がると考える。

出土遺物は無いが、検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

**SP109・110（遺構図、出土遺物：図45）**

東地区中央第１面、M5、M6グリッド、標高8.09m～8.11mに位置する。方形の柱穴群以東の小規模柱穴群の中に位置し、平面形状は楕円形を呈し、柱痕跡径が約20cmあるが同規模の柱穴が周辺に無い。

出土遺物はSP109から山茶碗１点、木製品１点が、SP110から山茶碗１点が出土し、SP109から出土した191を掲載している。191は尾張型山茶碗第４型式期の碗の底部破片である。出土遺物と検出面から本遺構の所属時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と考える。

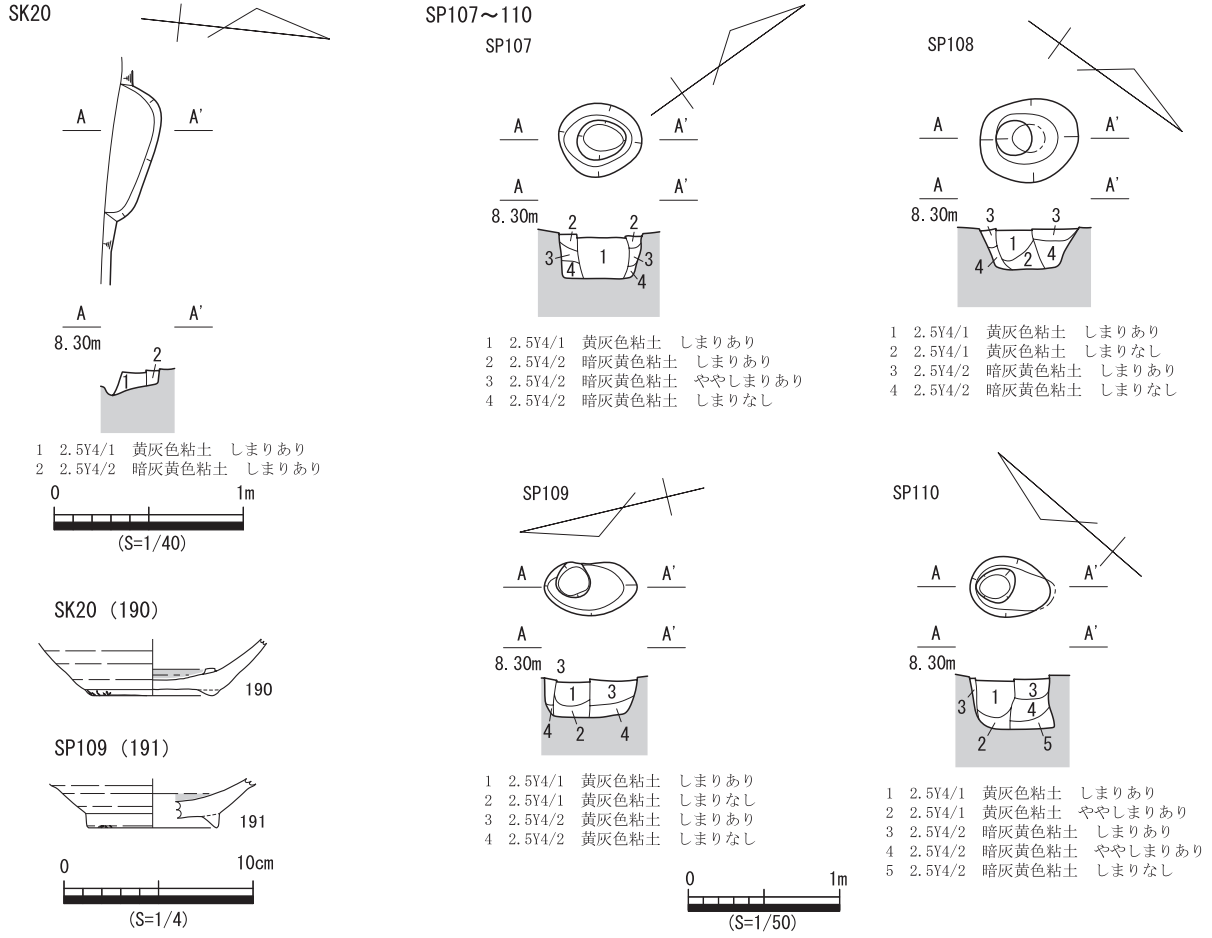



図45　SK20、SP107～SP110遺構図、SK20、SP109出土遺物

## 第６節　遺物包含層出土遺物

ここではⅠ層（表土）、Ⅱ層（第１面包含層）、Ⅲ層（第２面包含層）から出土した遺物を遺物包含層出土遺物として、主に残存状況のよいもの、遺構から出土した遺物と時期が異なり周辺にその時期の遺跡を想定するために掲載する必要があると思われたものを抽出している。西地区、東地区ともに、当時の生活面は遺構残存深から考えると検出面より約１ｍ上にあったと考えられる。そのため包含層遺物にはそれぞれの遺構面に関連している遺物が出土していると考える。西地区と東地区は約 20ｍ離れているが第１面、第２面はそれぞれにほぼ同時期と考えている。ここでは、遺物包含層出土遺物を、西地区と東地区とに分けて掲載している。今回の発掘区外にあたる試掘確認調査の TP10、11、12 の表土で出土した遺物もこの節で掲載している。掲載した遺物について特に報告が必要なものについて記述している。各時期及び種別毎の遺物概要については、第３章３節遺物概要に記載している。

**西地区遺物包含層出土遺物（図 46）**

西地区は遺構出土遺物が極めて少なく、遺物包含層出土遺物は遺構の時期を推定するために重要と考えている。西地区包含層出土遺物は東地区遺構出土遺物と時期がよく似ているが、尾張型山茶碗第４型式期のものがやや多い傾向にある。西地区包含層出土遺物を 192～200 で掲載している。192、193 は西地区北の約 25ｍ北の TP10 から出土している。192 は美濃須衛産須恵器の鉄鉢底部破片でⅤ-1 期（９世紀中頃）のもの、193 は美濃窯虎渓山１号窯式期の段皿底部破片である。これらの出土と東地区北西の須恵器の出土から、西地区北から東地区西の発掘区外の範囲に、今回の調査では確認されていない須恵器の時期の遺構が広がる可能性が考えられる。また、同じ範囲に平安時代前期の遺構の広がりも想定できる。194～196 は尾張型山茶碗第４型式期、197 は第５型式期、198 は第６型式期、199 は第７型式期のものでやや第４型式期のものが多い。198 は口縁部を故意に打ち欠き、内外面割れ口にも煤が付着しており、東地区 SE3 から出土したものと類似することから祭りに使用されたものと考えられる。西地区周辺でも祭りが行われていることが考えられる。200 は西地区の西へ約 100ｍの位置で調査した TP12 から出土した青磁碗口縁部破片で、内面に飛雲文がある。試掘確認調査では遺構は確認されていないが、今回の調査で出土した遺物と時期が同じである。

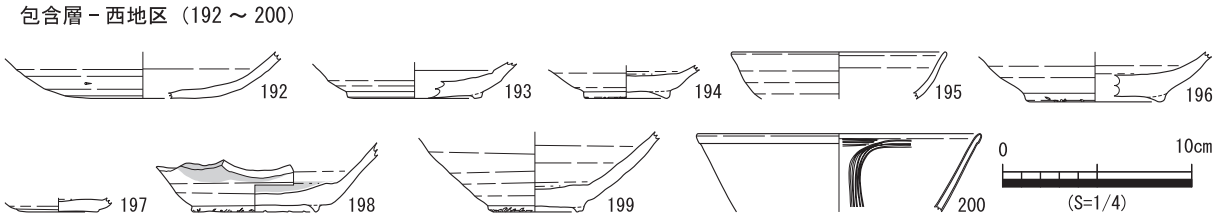



図 46　包含層出土遺物（１）

**東地区遺物包含層出土遺物（図 47、48）**

東地区包含層出土遺物を 201～278 で掲載している。201 は弥生土器、202、203 は古墳時代の土師器で杭瀬川氾濫域にこの時期の遺跡がある可能性が考えられる。204、205 は長胴甕の胴部破片である。206、207 は伊勢型鍋で伊勢型鍋でも古い時期のものである。208～215 は清郷型鍋で主にⅢ層から出土している。口縁部の形状が多種あり、遺構出土の灰釉陶器の時期（平安時代前期）に人々が連綿と生活していた痕跡であると考える。

包含層－東地区（201 ～ 232）

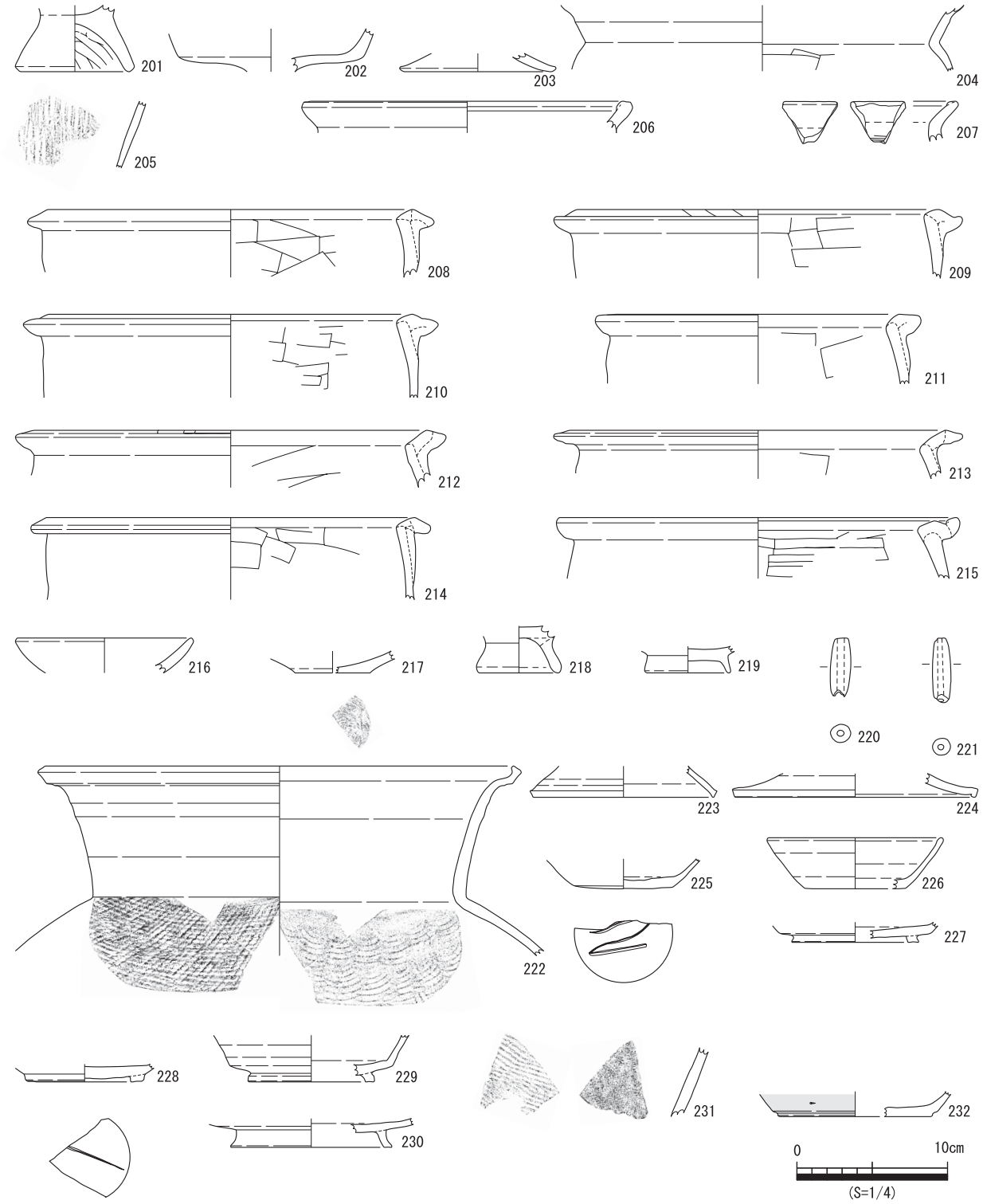



図47　包含層出土遺物（２）

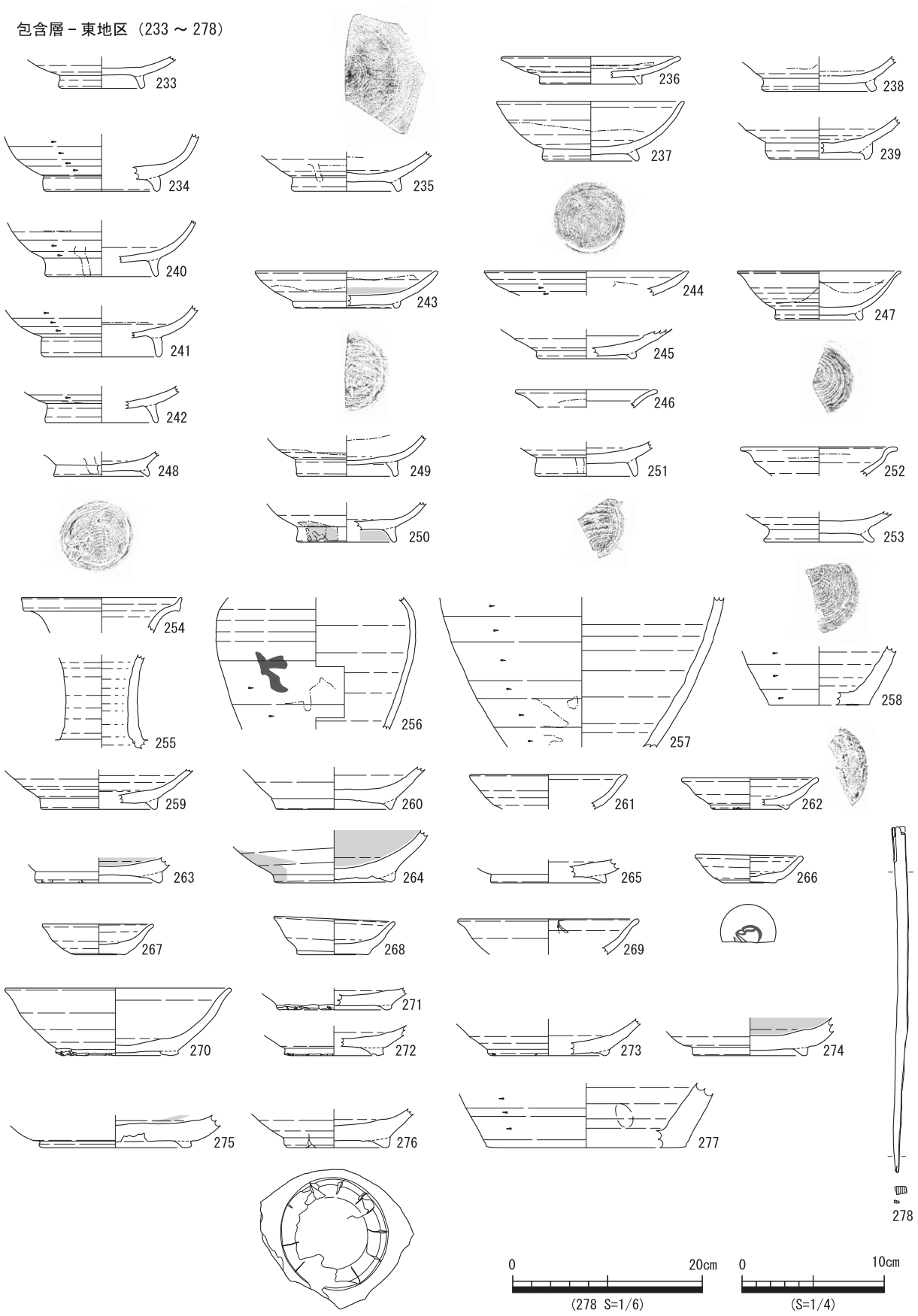



図 48　包含層出土遺物（３）

222～231 はすべて美濃須衛産須恵器でほとんどがⅤ-1 期（９世紀中頃）のものである。222 はⅣ-3 期（８世紀後葉）の甕で、掲載していないがこれとほとんど同じ大きさで口縁部の形状がやや異なる別個体の甕がある。223 は佐波理写しの蓋、224 は摘み蓋の転用硯で内面に墨が付着している。225 は無台坏の底部破片で底部外面に使用痕跡とヘラ記号がある。227 は有台坏の転用硯で底部内面に墨が付着している。228 は有台坏で底部外面にヘラ記号がある。232 は緑釉陶器で、水瓶か壺の底部破片である。胴部外面と底部外面にも緑釉がかかっている。緑釉陶器は灰釉陶器に伴う時期と考える。

233～258 は灰釉陶器で、233 は光ヶ丘１号窯式期の碗、234、235 は大原２号窯式期の碗と深碗、236～242 は虎渓山１号窯式期の皿、碗、深碗で、243～251 は丸石２号窯式期の皿、段皿、碗、深碗で、253 は明和 27 号窯式期の深碗である。深碗が大原２号窯式期から明和 27 号窯式期まで連綿とあり、段皿は大原２号窯式期にある。252 は詳細な時期は不明であるが、段皿か香炉の口縁部破片になると思われる。254～258 は瓶で、詳細な時期は不明であるが東濃産と考えられる。256 は瓶の胴部破片で外面に「大」の墨書がある。

259～271 は尾張型山茶碗、272 は東濃型と思われる第５型式期並行の山茶碗、273～276 は美濃須衛産で第４、５型式期並行の山茶碗で、遺構出土のものと同じ時期のものが出土し、第５型式期のものが最も多く出土している。266 は第５型式期の皿で底部外面に花押と思われる墨書がある。276 の高台には、故意に入れたのか等間隔に刻みが入っている。277 は 12 世紀頃の猿投産の広口瓶の底部破片である。

278 は NR1 上の包含層から出土しており、形状から斎串と考える。

西地区と東地区の遺物包含層出土遺物はほぼ同じ時期のものでよく似た傾向を示しているといえる。西地区から 25m離れた TP9 から９世紀中頃の須恵器、虎渓山１号窯式期の段皿が出土し土坑も確認されていることから須恵器の時期の遺構や、今回の発掘区で確認されたのと同じ時期の遺構が北へ広がる可能性が考えられる。

西地区、東地区の遺物包含層出土遺物の中には９世紀の中頃の須恵器に佐波理写しの蓋、鉄鉢、転用硯があり、すべて美濃須衛産であること、灰釉陶器に伴うと考えられる緑釉陶器があることから、９世紀に官衙的な遺跡がこの地で機能しており、その基盤は８世紀後葉から準備されているといえよう。平安時代前期の遺物がまとまって出土していることが今回の調査の特徴である。

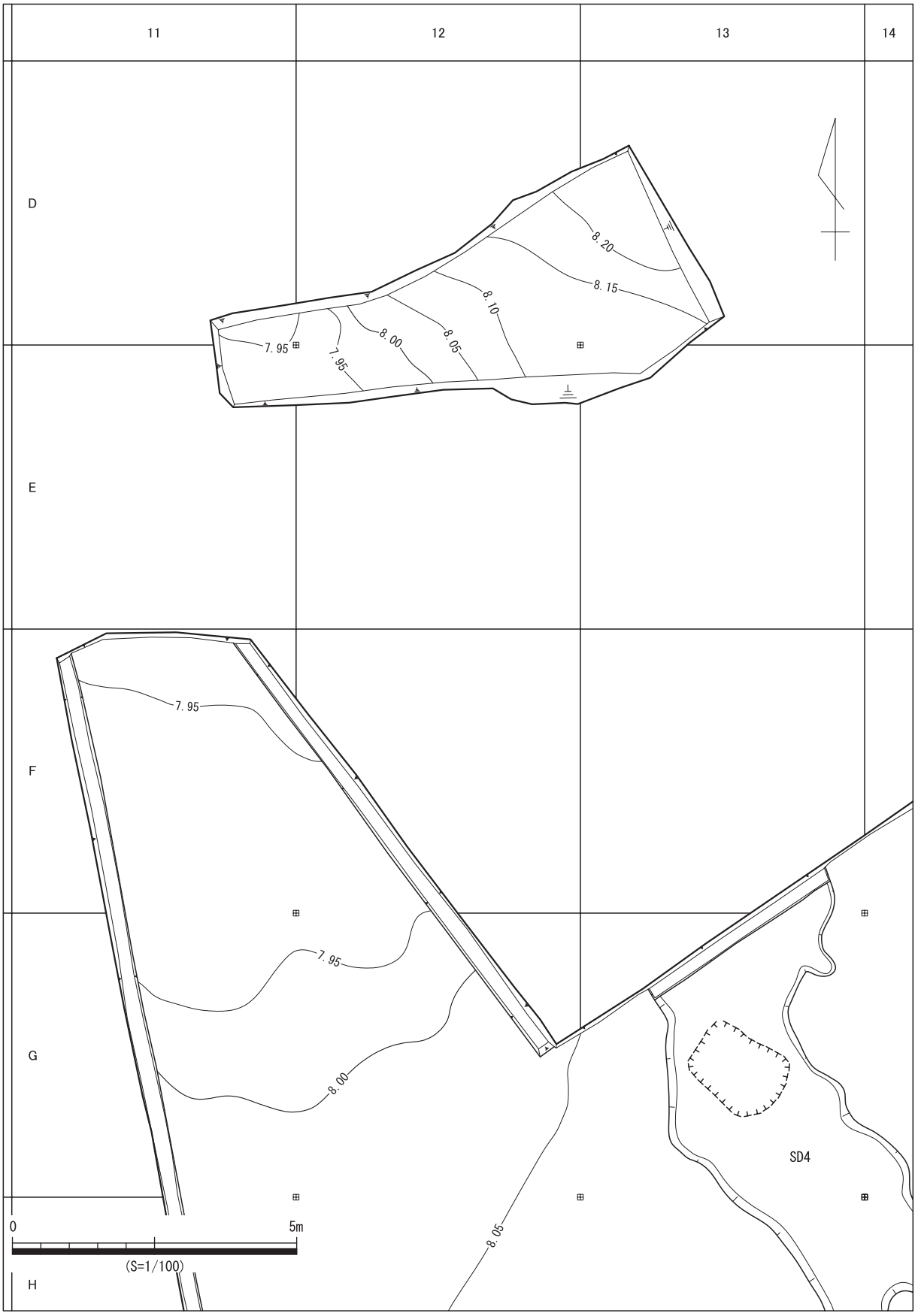



図49　第１面遺構全体図分割図１

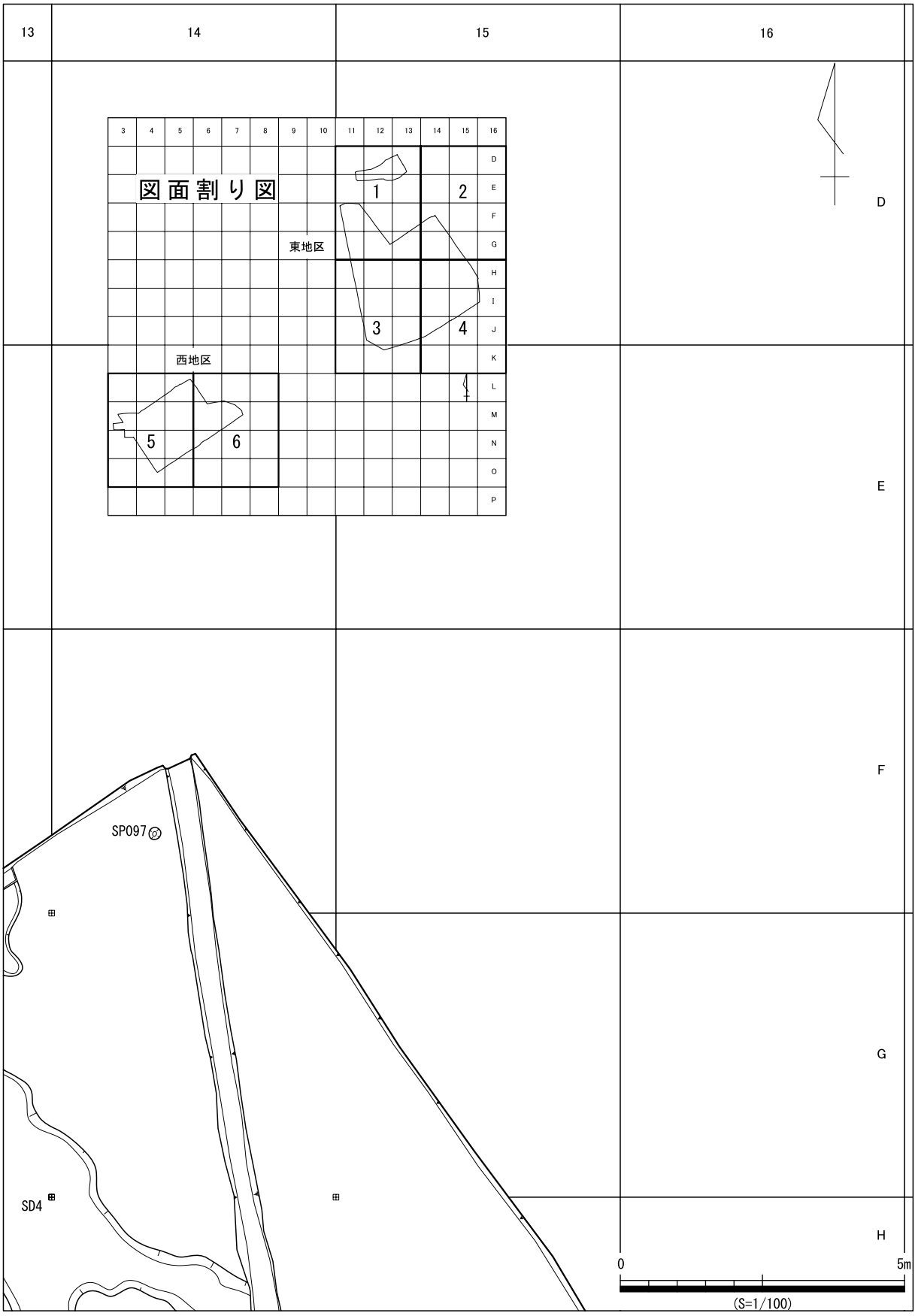



図50　第１面遺構全体図分割図２

図51　第１面遺構全体図分割図３

図52　第１面遺構全体図分割図４

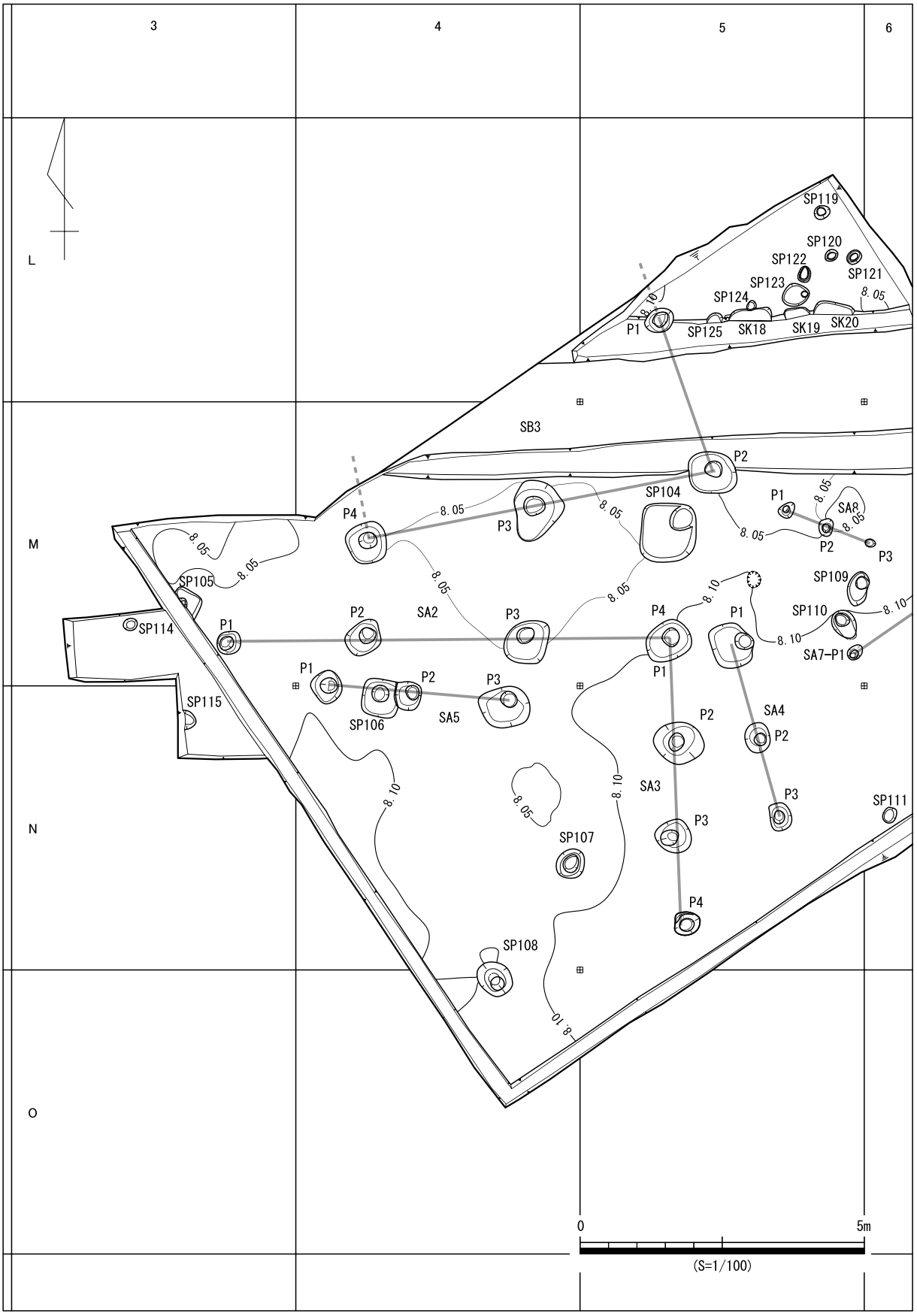



図53　第１面遺構全体図分割図５

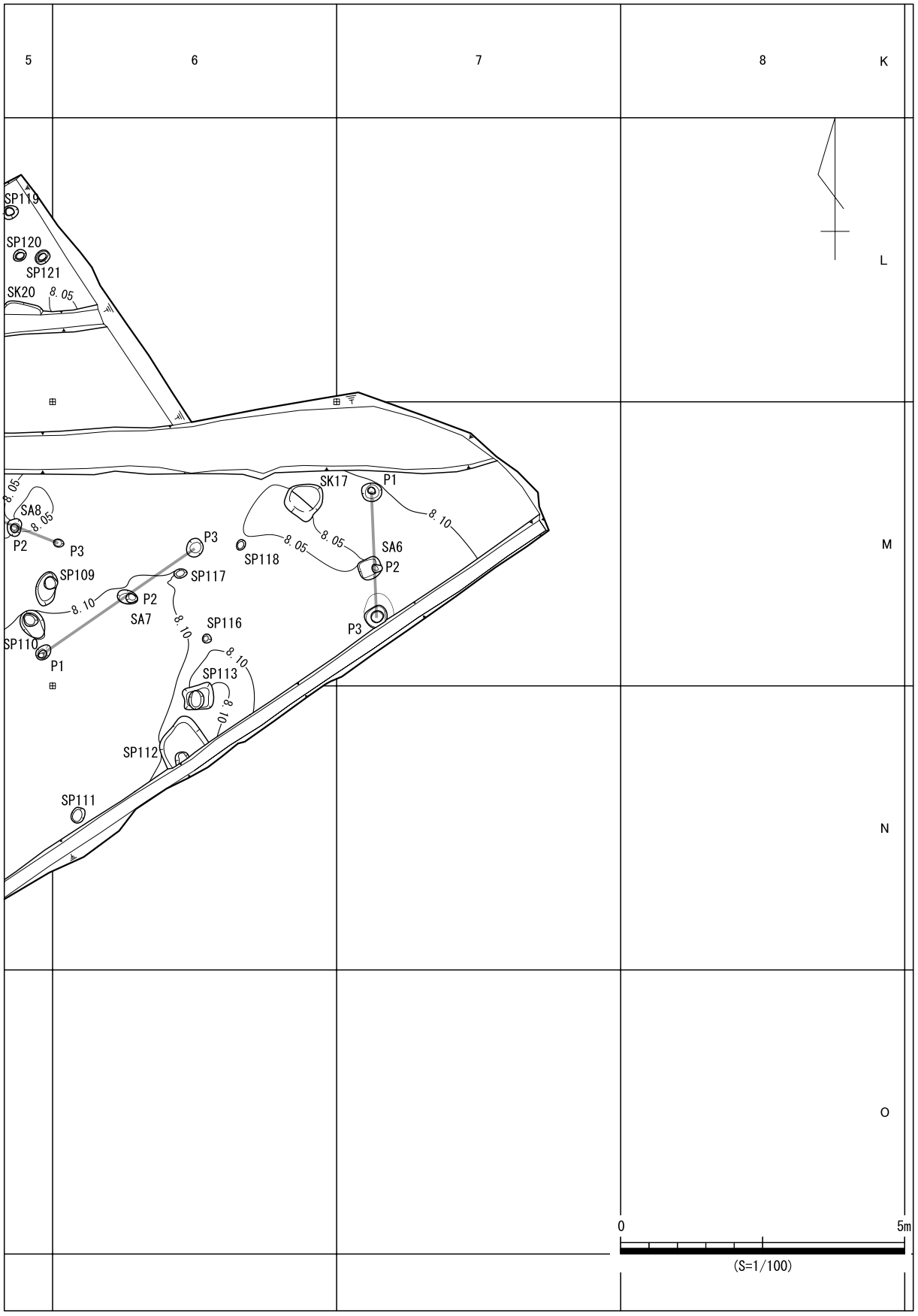



図54　第１面遺構全体図分割図６

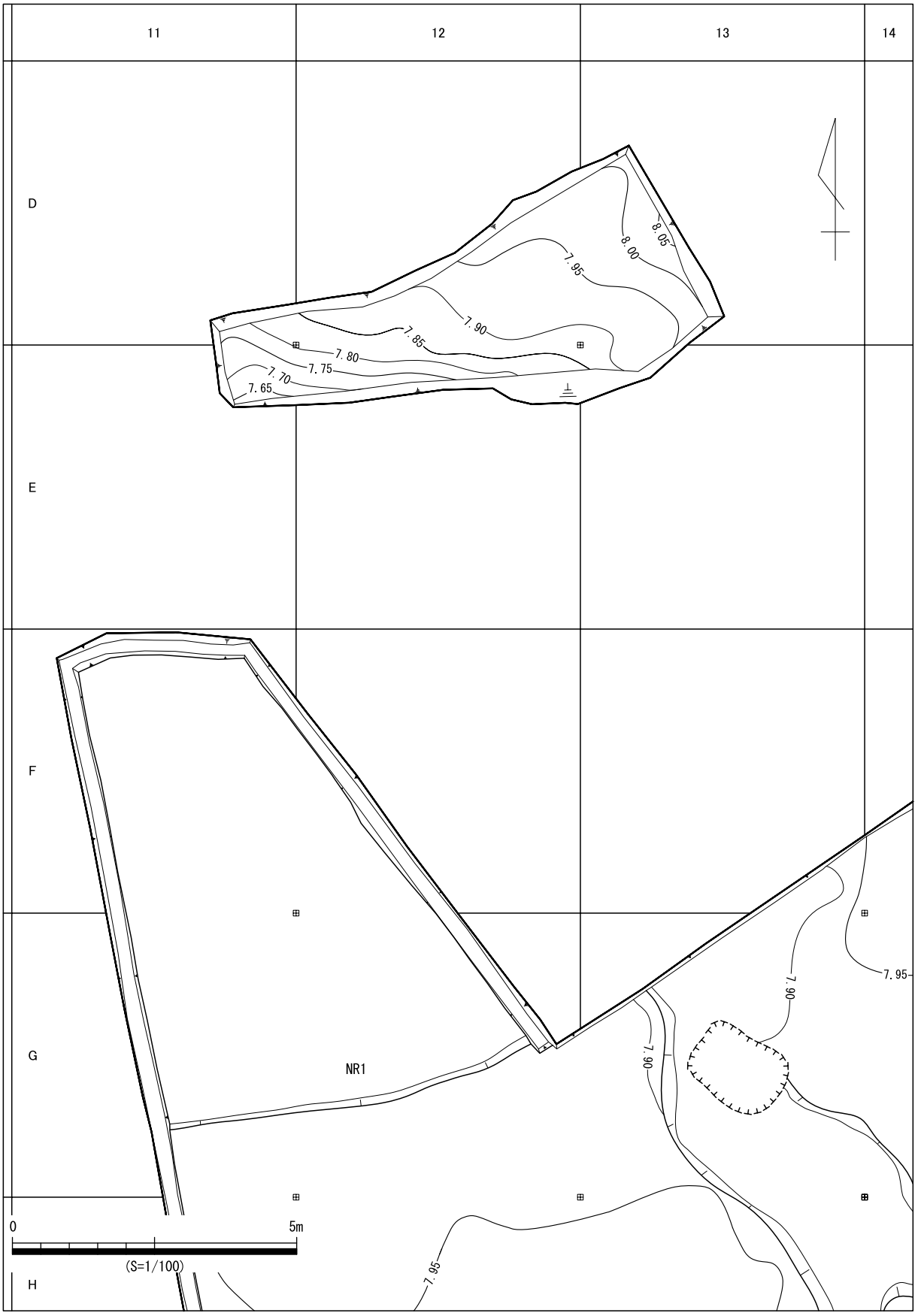



図55　第２面遺構全体図分割図１

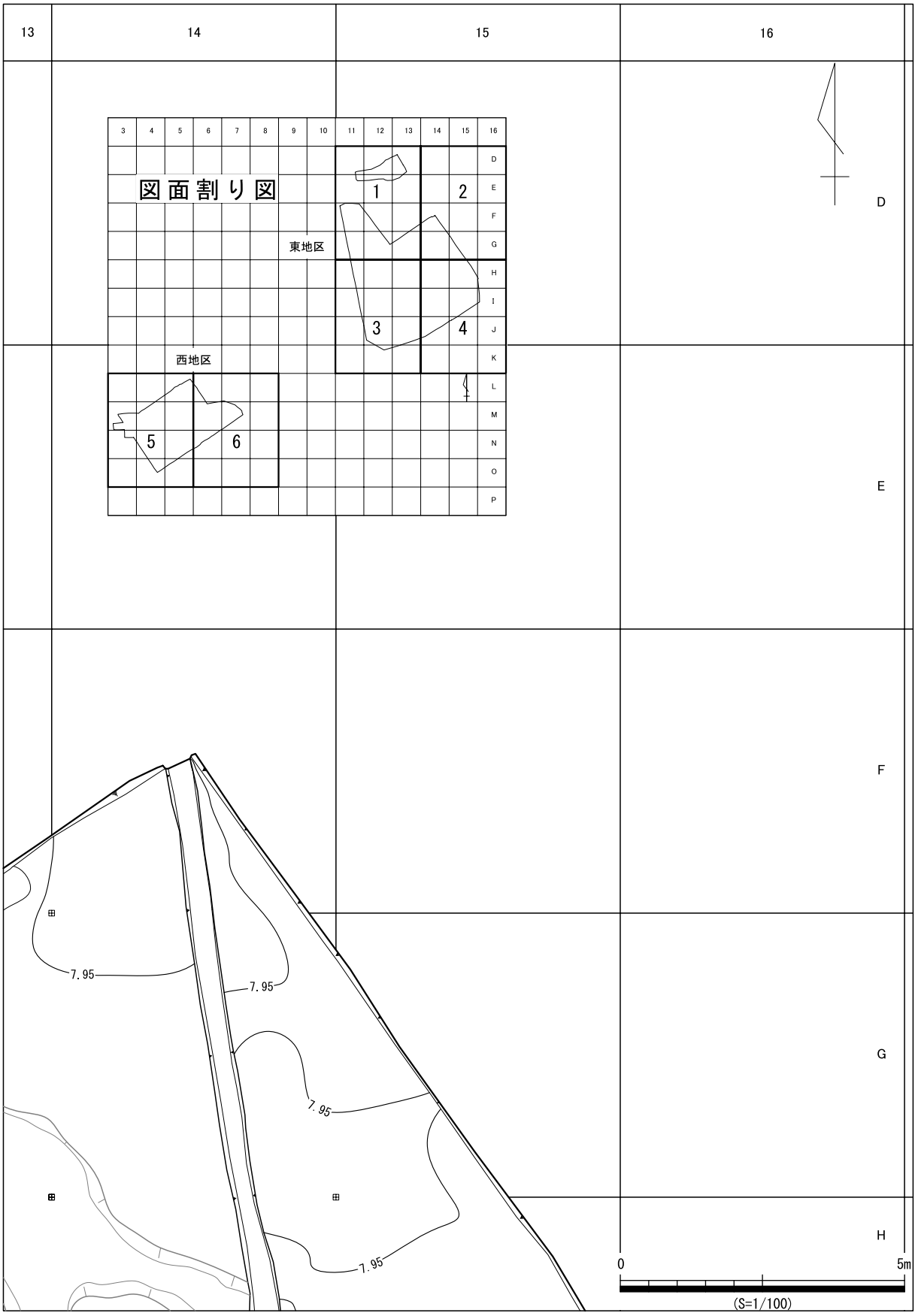



図56　第２面遺構全体図分割図２

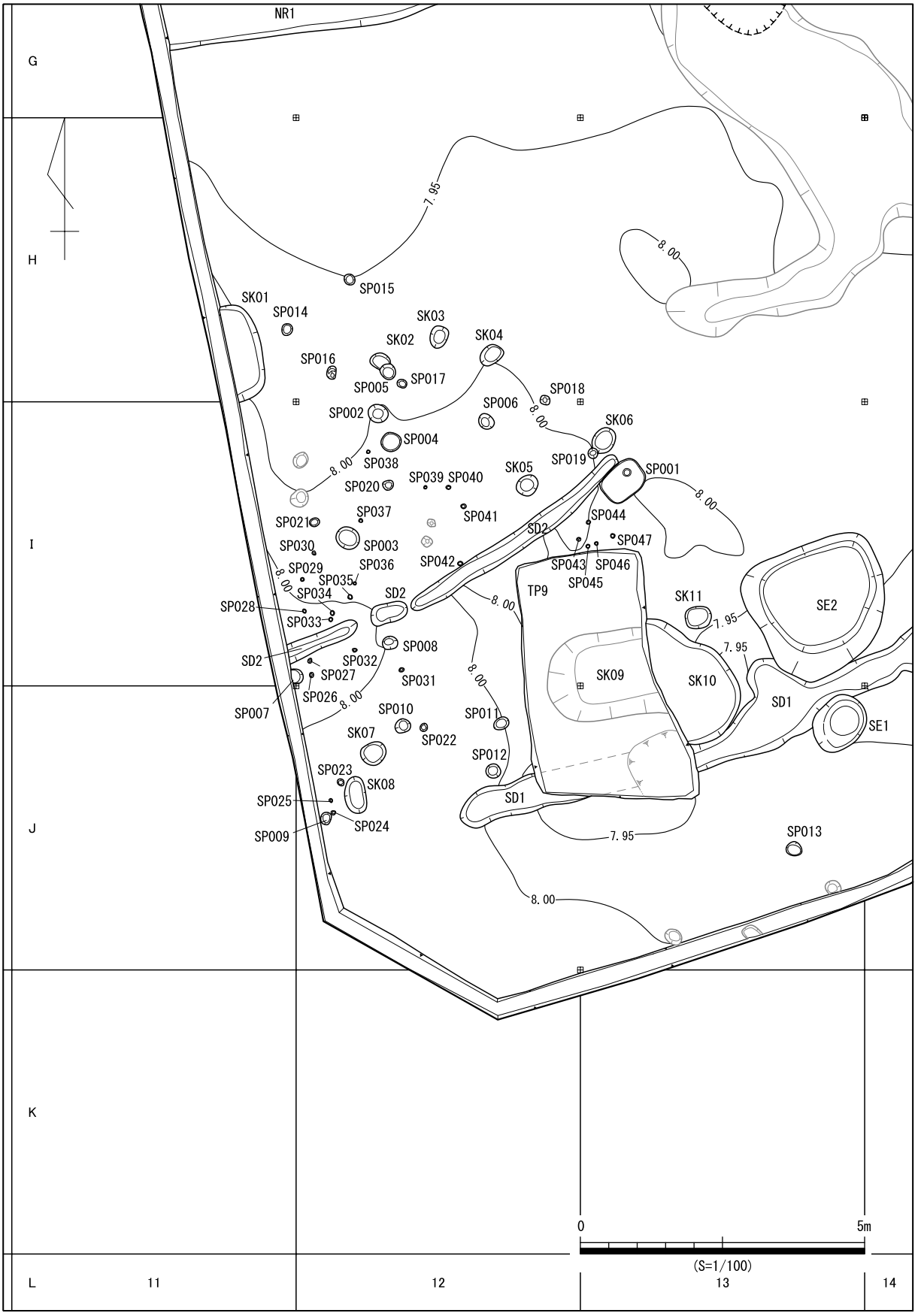



図57　第２面遺構全体図分割図３

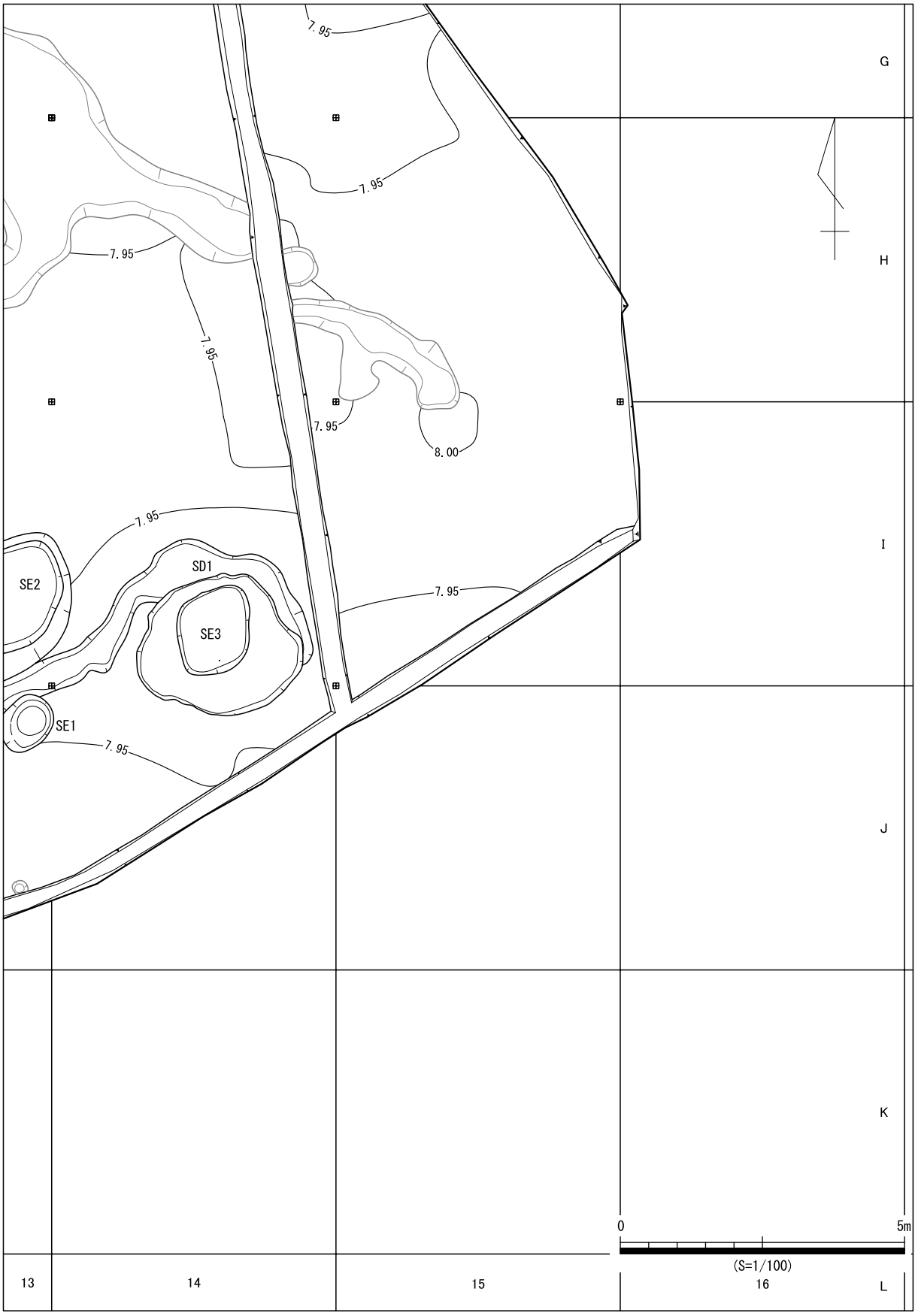



図58　第２面遺構全体図分割図４

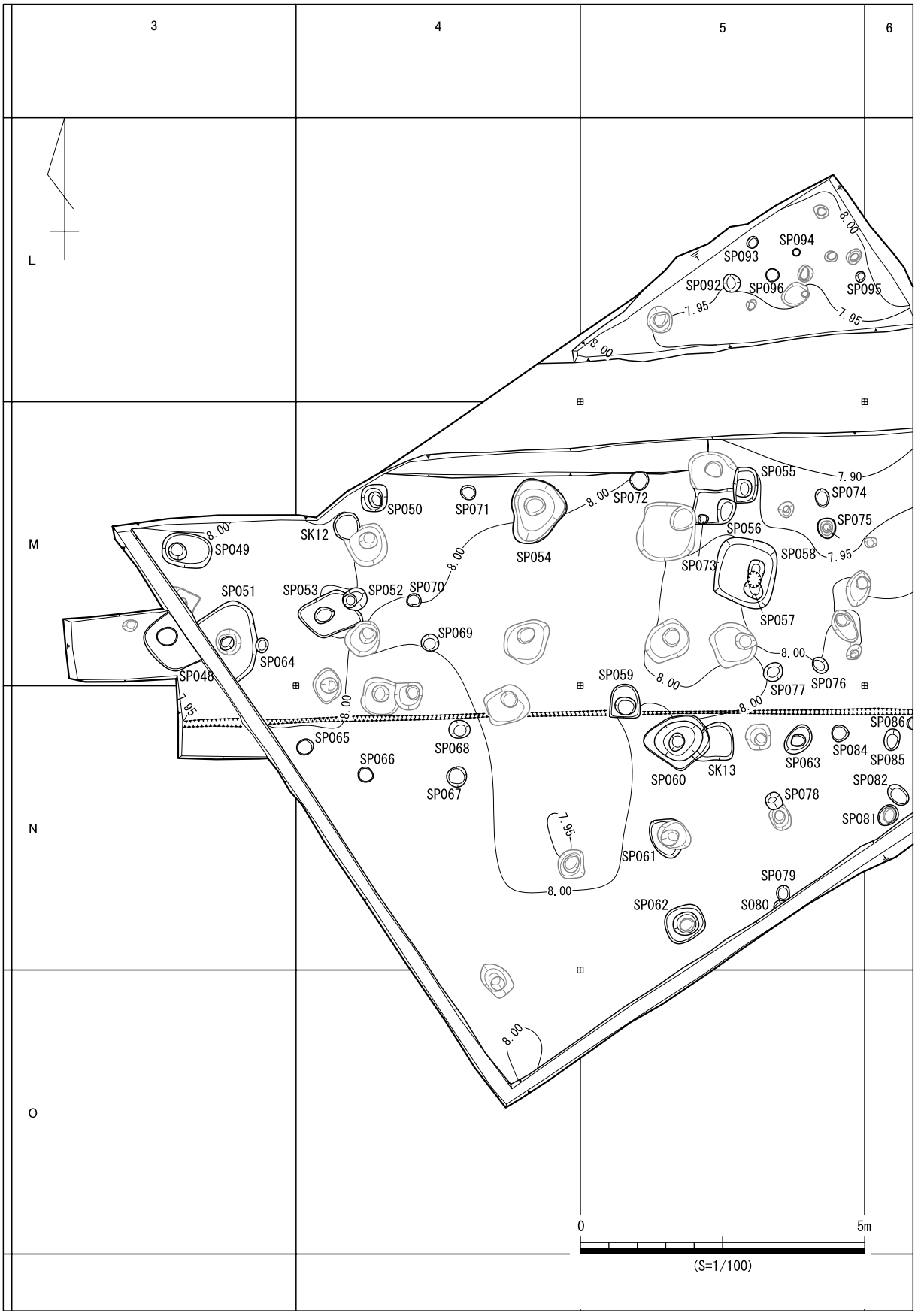



図59　第２面遺構全体図分割図５

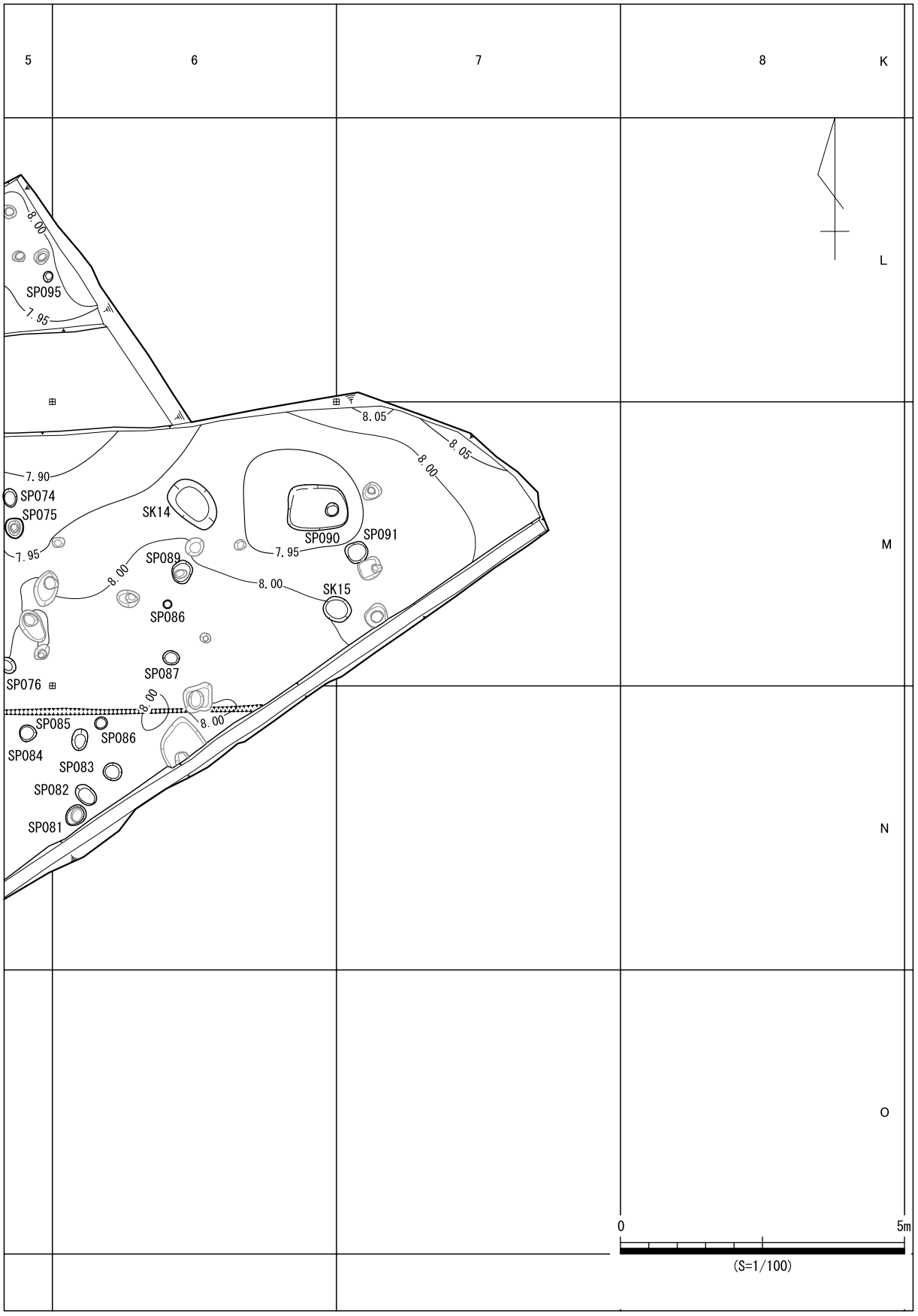



図60　第２面遺構全体図分割図６

## 表８　遺構別遺物出土点数表

| 遺構名 | 地区名 | 検出面 | 遺構時期 | 弥生・土師器 | 古代土師器 | 中世土師器 | 須恵器 | 緑釉陶器 | 灰釉陶器 | 山茶碗 | 中世陶器 | 中国製磁器 | 土製品 | 木製品 | 石器・石製品 | 種子 | 炭化材 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD1 | 東 | Ⅳ | 平安前 | 10 | 4 | 5 | 1 | | 17 | 15 | | | | | | | | 52 |
| SD2 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | | | | | 3 | | | | | | | | | 3 |
| SE1 | 東 | Ⅳ | 平安前 | 1 | | | | | 9 | | | | | 6 | 1 | 1 | 2 | 20 |
| SK01 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | | | 1 | | 2 | | | | | | | | | 3 |
| SK03 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | | | 1 | | 2 | | | | | | | | | 3 |
| SK04 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | 1 | | | | 2 | 1 | | | | | 1 | | | 5 |
| SK07 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | | | 2 | | | | | | | | | | | 2 |
| SK09 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | | 15 | 2 | | 4 | 5 | | | | | | | | 26 |
| SP001 | 東 | Ⅳ | 平安前 | 1 | 1 | | 1 | | 2 | | | | | | | | | 5 |
| SP004 | 東 | Ⅳ | 平安前 | 2 | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| SP007 | 東 | Ⅳ | 平安前 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| SP010 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | 2 |
| NR1 | 東 | Ⅳ | 平安前 | | 1 | 2 | 11 | | 12 | 1 | | | | 1 | | | | 28 |
| 東地区平安遺構出土小計 | | | | 15 | 8 | 22 | 19 | 0 | 54 | 22 | 0 | 0 | 0 | 7 | 2 | 1 | 2 | 152 |
| SA1 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | 9 | 2 | 1 | 1 | | 7 | 1 | | | | | | | | 21 |
| SB1 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | 1 | | | | | | | | | | 2 | | | | 3 |
| SB2 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | 2 |
| SD3 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | 1 | | | 2 | | 2 | 1 | | | | 1 | | | | 7 |
| SD4 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | 51 | 9 | 23 | 1 | | 35 | 250 | 10 | 3 | 2 | 5 | 3 | 12 | 3 | 407 |
| SE2 | 東 | Ⅳ | 鎌倉初 | 17 | 1 | 22 | 1 | | 4 | 87 | | | 1 | 4 | 2 | 3 | 2 | 144 |
| SE3 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | 113 | 1 | 94 | 1 | | 21 | 242 | 3 | 3 | 3 | 48 | 1 | 13 | | 543 |
| SK10 | 東 | Ⅳ | 鎌倉初 | 2 | 1 | 4 | | | 2 | 24 | | | | 8 | 1 | 1 | | 43 |
| SK16 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | 9 | | 2 | | | 1 | 7 | | | | | | 1 | | 20 |
| SP097 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| SP098 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | 7 | | 6 | | | | | | | | | | | 1 | 14 |
| SP099 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| SP101 | 東 | Ⅲ | 鎌倉初 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 東地区鎌倉遺構出土小計 | | | | 211 | 14 | 152 | 6 | 0 | 73 | 613 | 13 | 6 | 6 | 70 | 7 | 30 | 6 | 1,207 |
| SP054 | 西 | Ⅳ | 平安前 | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| SP090 | 西 | Ⅳ | 平安前 | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| SA2 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | 2 |
| SA3 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| SA4 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | 3 | | | | | 1 | | | | | | | | | 4 |
| SB3 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| SK20 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| SP104 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| SP109 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | 2 |
| SP110 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| SP114 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| SP121 | 西 | Ⅲ | 鎌倉初 | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 西地区遺構出土小計 | | | | 6 | 0 | 1 | 1 | 0 | 3 | 3 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 17 |
| 遺構出土小計 | | | | 232 | 22 | 175 | 26 | 0 | 130 | 638 | 13 | 6 | 6 | 80 | 9 | 31 | 8 | 1,376 |
| TP9 | | | Ⅰ層 | 3 | | 1 | | | 13 | 15 | 2 | | | | | | | 34 |
| TP9 | | | Ⅱ層 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | 2 |
| TP9 | | | Ⅲ層 | 2 | 2 | | | | 2 | 1 | | | | | | | | 7 |
| 東地区包含層 | | | Ⅰ層 | 30 | 3 | 4 | 2 | | 24 | 156 | 6 | | 2 | | | | | 227 |
| 東地区包含層 | | | Ⅱ層 | 230 | 30 | 43 | 39 | | 162 | 688 | 15 | 2 | 2 | 2 | | 3 | 1 | 1,217 |
| 東地区包含層 | | | Ⅲ層 | 242 | 88 | 64 | 58 | 1 | 213 | 265 | 5 | | 1 | 3 | | 7 | 9 | 956 |
| 東地区包含層 | | | Ⅳ層 | 1 | | 1 | | | 6 | | 1 | | | | | | | 9 |
| 東地区包含層出土小計 | | | | 508 | 123 | 113 | 99 | 1 | 420 | 1,125 | 29 | 2 | 5 | 6 | 1 | 10 | 10 | 2,452 |
| 西地区包含層 | | | Ⅰ層 | | | | | | 1 | 21 | | | | | | | | 22 |
| 西地区包含層 | | | Ⅱ層 | 21 | | 15 | | | 1 | 77 | | | | 2 | | | 1 | 117 |
| 西地区包含層 | | | Ⅲ層 | 4 | | 2 | | | 1 | 34 | | | | 1 | | 1 | | 43 |
| 西地区包含層 | | | Ⅳ層 | | | | | | | | | | | | 0 | | | 0 |
| 西地区包含層出土小計 | | | | 25 | 0 | 17 | 0 | 0 | 3 | 132 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 1 | 182 |
| 包含層出土計 | | | | 533 | 123 | 130 | 99 | 1 | 423 | 1,257 | 29 | 2 | 5 | 9 | 1 | 11 | 11 | 2,634 |
| 合計 | | | | 765 | 145 | 305 | 125 | 1 | 553 | 1,895 | 42 | 8 | 11 | 89 | 10 | 42 | 19 | 4,010 |

数値はいずれも接合後の破片数である。

## 表9　遺構観察表(1)

| 遺構名 | 地区名 | 地区割り | 検出面 | 堆積状況 | 断面形状 | 平面形状 | 底面形状 | 規模（m） | | | | | 柱痕規模（m） | | | 切り合い | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 上端 | | 下端 | | 深さ | 上端 | 下端 | 深さ | ＜切られる | ＞切る | |
| | | | | | | | | 長軸長 | 短軸長 | 長軸長 | 短軸長 | | | | | | | |
| SA1-P1 | 東 | I,J12 | Ⅲ | a | Ⅰ | a | a | 0.55 | 0.45 | 0.45 | 0.36 | 0.07 | － | － | － | | | |
| SA1-P2 | 東 | I12 | Ⅲ | a | Ⅰ | a | a | 1.07 | 0.46 | 1.01 | 0.36 | 0.09 | － | － | － | | | |
| SA1-P3 | 東 | I12 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.28 | 0.25 | 0.24 | 0.21 | 0.03 | － | － | － | | SD3 | |
| SA1-P4 | 東 | I13 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.19 | 0.18 | 0.14 | 0.11 | 0.04 | － | － | － | | SD3 | |
| SA2-P1 | 西 | M3 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.40 | 0.40 | 0.32 | 0.32 | 0.21 | 0.25 | 0.25 | 0.21 | | | |
| SA2-P2 | 西 | M4 | Ⅲ | b | ア | b | b | 0.66 | 0.53 | 0.51 | 0.43 | 0.30 | 0.28 | 0.19 | 0.22 | | SP053 | |
| SA2-P3 | 西 | M4 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.74 | 0.73 | 0.64 | 0.59 | 0.23 | 0.27 | 0.25 | 0.23 | | | |
| SA2-P4<br>SA3-P1 | 西 | M5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.82 | 0.64 | 0.67 | 0.52 | 0.29 | 0.27 | 0.25 | 0.29 | | | |
| SA3-P2 | 西 | N5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.76 | 0.75 | 0.56 | 0.34 | 0.37 | 0.30 | 0.21 | 0.35 | | SK13 | |
| SA3-P3 | 西 | N5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.65 | 0.59 | 0.42 | 0.42 | 0.36 | 0.25 | 0.18 | 0.36 | | SP061 | |
| SA3-P4 | 西 | N5 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.47 | 0.42 | 0.26 | 0.22 | 0.48 | 0.26 | 0.22 | 0.48 | | | |
| SA4-P1 | 西 | M5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.78 | 0.75 | 0.62 | 0.60 | 0.28 | 0.25 | 0.21 | 0.25 | | | |
| SA4-P2 | 西 | N5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.52 | 0.44 | 0.30 | 0.29 | 0.33 | 0.20 | 0.13 | 0.33 | | | |
| SA4-P3 | 西 | N5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.49 | 0.37 | 0.35 | 0.27 | 0.25 | 0.20 | 0.13 | 0.25 | | | |
| SA5-P1 | 西 | M,N4 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.54 | 0.51 | 0.44 | 0.43 | 0.30 | 0.26 | 0.15 | 0.09 | | | |
| SA5-P2 | 西 | M,N4 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.49 | 0.46 | 0.34 | 0.31 | 0.27 | 0.22 | 0.17 | 0.23 | | SP106 | |
| SA5-P3 | 西 | N4 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.84 | 0.68 | 0.60 | 0.53 | 0.29 | 0.25 | 0.22 | 0.31 | | | 現代の暗渠に切られる。 |
| SA6-P1 | 西 | M7 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.35 | 0.33 | 0.24 | 0.24 | 0.21 | 0.15 | 0.12 | 0.21 | | | |
| SA6-P2 | 西 | M7 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.41 | 0.37 | 0.30 | 0.27 | 0.24 | 0.16 | 0.14 | 0.24 | | SP091 | |
| SA6-P3 | 西 | M7 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.40 | (0.32) | 0.36 | (0.30) | 0.18 | 0.22 | 0.18 | 0.18 | | | |
| SA7-P1 | 西 | M5 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.29 | 0.22 | 0.16 | 0.15 | 0.32 | 0.16 | 0.10 | 0.32 | | | |
| SA7-P2 | 西 | M6 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.37 | 0.23 | 0.33 | 0.17 | 0.28 | 0.20 | 0.13 | 0.28 | | | |
| SA7-P3 | 西 | M6 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.34 | 0.31 | 0.19 | 0.18 | 0.36 | 0.17 | 0.13 | 0.36 | | | |
| SA8-P1 | 西 | M5 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.29 | 0.27 | 0.17 | 0.15 | 0.38 | 0.13 | 0.10 | 0.38 | | | |
| SA8-P2 | 西 | M5 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.31 | 0.25 | 0.17 | 0.17 | 0.40 | 0.14 | 0.10 | 0.40 | | | |
| SA8-P3 | 西 | M6 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.17 | 0.16 | 0.12 | 0.10 | 0.32 | － | － | － | | | |
| SB1-P1 | 東 | J13 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.33 | (0.30) | 0.21 | 0.16 | 0.30 | 0.15 | 0.15 | 0.34 | | | 柱材残存。 |
| SB1-P2 | 東 | J13 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.30 | (0.24) | 0.17 | 0.16 | 0.20 | 0.15 | 0.15 | 0.20 | | | 柱材残存。 |
| SB2-P1 | 東 | J13 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.30 | 0.18 | 0.20 | 0.10 | 0.10 | 0.15 | 0.07 | 0.10 | | | SB1と軸異なる。 |
| SB2-P2 | 東 | J13 | Ⅲ | － | イ | a | a | (0.29) | 0.27 | (0.25) | 0.20 | 0.18 | － | － | － | | | 木屑敷き詰める |
| SB3-P1 | 西 | L5 | Ⅲ | | ア | a | a | 0.52 | 0.42 | 0.37 | 0.33 | 0.63 | 0.26 | 0.20 | 0.63 | | | |
| SB3-P2 | 西 | M5 | Ⅲ | a | イ | b | b | 0.83 | 0.72 | 0.70 | 0.63 | 0.16 | 0.33 | 0.30 | 0.62 | | | |
| SB3-P3 | 西 | M4 | Ⅲ | a | イ | c | c | 1.05 | 0.88 | 0.88 | 0.69 | 0.15 | 0.33 | 0.23 | 0.53 | | | |
| SB3-P4 | 西 | M4 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.72 | 0.69 | 0.57 | 0.55 | 0.25 | 0.30 | 0.20 | 0.25 | | SK12 | |
| SD1 | 東 | I,J13,14 | Ⅳ | c | Ⅲ | c | c | 11.10 | 0.38～1.48 | 10.90 | 0.21～1.2 | 0.1～0.23 | － | － | － | SE1,SE2,SE3,SK10 | | |
| SD2 | 東 | I12,13 | Ⅳ | a | Ⅲ | c | c | 6.70 | 0.38 | 6.60 | 0.13～0.22 | 0.07 | － | － | － | | SP001 | |
| SD3 | 東 | I12,13 | Ⅲ | a | Ⅰ | c | c | 6.45 | 0.35～0.84 | 6.38 | 0.2～0.75 | 0.09 | － | － | － | | | |
| SD4 | 西 | G,H13,14 | Ⅲ | b | Ⅰ | c | c | 13.7 | 0.4～3.7 | 13.50 | 0.2～3.5 | 0.18 | － | － | － | | SK16 | |
| NR1 | 東 | F,G11,12 | Ⅳ | b | Ⅲ | c | c | (6.00) | (6.00) | (5.80) | (6.00) | 0.13 | － | － | － | | | |
| SE1 | 東 | J13 | Ⅳ | c | Ⅱ | a | a | 1.00 | 0.80 | 0.86 | 0.65 | 0.65 | － | － | － | | SD1 | 曲物井戸枠有。 |
| SE2 | 東 | I13,14 | Ⅳ | b | Ⅳ | c | c | 2.40 | 2.30 | 2.00 | 1.60 | 0.47 | － | － | － | | | 湧水標高7.75m。 |
| SE3 | 東 | I,J14 | Ⅲ | c | Ⅵ | a | b | 3.00 | 3.00 | 1.43 | 1.30 | 0.3～0.5 | － | － | － | | SD1 | |
| SK01 | 東 | H11 | Ⅳ | b | Ⅰ | b | b | 1.70 | 0.58 | 1.41 | 0.46 | 0.07 | － | － | － | | | |
| SK02 | 東 | H12 | Ⅳ | b | Ⅳ | a | a | (0.35) | 0.28 | (0.30) | 0.20 | 0.21 | － | － | － | SP005 | | |
| SK03 | 東 | H12 | Ⅳ | b | Ⅰ | a | a | 0.39 | 0.31 | 0.24 | 0.19 | 0.15 | － | － | － | | | |
| SK04 | 東 | H12 | Ⅳ | c | Ⅳ | a | a | 0.43 | 0.31 | 0.30 | 0.22 | 0.19 | － | － | － | | | |
| SK05 | 東 | I12 | Ⅳ | c | Ⅰ | a | a | 0.40 | 0.34 | 0.23 | 0.21 | 0.22 | － | － | － | | | |
| SK06 | 東 | I13 | Ⅳ | b | Ⅰ | a | a | (0.50) | 0.37 | 0.34 | 0.27 | 0.10 | － | － | － | SP019 | | |
| SK07 | 東 | J12 | Ⅳ | b | Ⅰ | a | a | 0.46 | 0.39 | 0.32 | 0.30 | 0.16 | － | － | － | | | |
| SK08 | 東 | J12 | Ⅳ | b | Ⅳ | a | a | 0.65 | 0.38 | 0.48 | 0.22 | 0.17 | － | － | － | | | |
| SK09 | 東 | I,J12,13 | Ⅳ | a | Ⅰ | c | c | (1.86) | 1.52 | － | － | 0.10 | － | － | － | SK10 | | |
| SK10 | 東 | I,J13 | Ⅳ | b | Ⅰ | c | c | 2.30 | (1.25) | 2.25 | 1.16 | 0.20 | － | － | － | SK09 | S239 | |
| SK11 | 東 | I13 | Ⅳ | b | Ⅰ | a | a | 0.46 | 0.39 | 0.36 | 0.30 | 0.10 | － | － | － | | | |
| SK12 | 西 | M4 | Ⅳ | c | Ⅱ | a | a | (0.50) | 0.46 | (0.41) | 0.38 | 0.18 | － | － | － | SB3P4 | | |
| SK13 | 西 | N5 | Ⅳ | b | Ⅱ | b | b | (0.73) | 0.65 | (0.59) | 0.53 | 0.18 | － | － | － | SA3P2,SP060 | | |
| SK14 | 西 | M6 | Ⅳ | b | Ⅰ | a | a | 0.97 | 0.64 | 0.65 | 0.43 | 0.22 | － | － | － | | | |
| SK15 | 西 | M6,7 | Ⅳ | c | Ⅳ | b | b | 0.48 | 0.43 | 0.37 | 0.32 | 0.28 | － | － | － | | | |
| SK16 | 西 | H13 | Ⅲ | b | Ⅱ | c | c | (1.12) | (1.06) | 1.12 | 0.96 | 0.80 | － | － | － | SD4 | | |
| SK17 | 西 | M6 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.65 | 0.62 | 0.49 | 0.48 | 0.15 | 0.17 | 0.12 | 0.12 | | | |
| SK18 | 西 | L5 | Ⅲ | a | Ⅱ | b | a | (0.75) | (0.25) | (0.75) | (0.22) | 0.10 | － | － | － | SP124 | | |
| SK19 | 西 | L5 | Ⅲ | － | ア | b | b | (0.44) | (0.18) | (0.40) | (0.15) | 0.10 | － | － | － | | | |
| SK20 | 西 | L5 | Ⅲ | － | ア | b | b | (0.68) | (0.25) | (0.65) | (0.20) | 0.10 | － | － | － | | | |
| SP001 | 東 | I13 | Ⅳ | a | ア | b | b | 0.79 | 0.59 | 0.74 | 0.55 | 0.12 | 0.14 | 0.10 | 0.30 | SD2 | | |

表10　遺構観察表(2)

| 遺構名 | 地区名 | 地区割り | 検出面 | 堆積状況 | 断面形状 | 平面形状 | 底面形状 | 規模（m） | | | | | 柱痕規模（m） | | | 切り合い | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 上端 | | 下端 | | 深さ | 上端 | 下端 | 深さ | ＜切られる | ＞切る | |
| | | | | | | | | 長軸長 | 短軸長 | 長軸長 | 短軸長 | | | | | | | |
| SP002 | 東 | I12 | Ⅳ | c | ア | a | a | 0.35 | 0.32 | 0.17 | 0.17 | 0.26 | 0.17 | 0.12 | 0.05 | | | |
| SP003 | 東 | I12 | Ⅳ | c | ア | a | a | 0.42 | 0.36 | 0.32 | 0.25 | 0.16 | 0.24 | 0.22 | 0.08 | | | |
| SP004 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.37 | 0.35 | 0.30 | 0.27 | 0.02 | － | － | － | | | |
| SP005 | 東 | H12 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.28 | 0.25 | 0.19 | 0.17 | 0.18 | － | － | － | | SK02 | |
| SP006 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.29 | 0.25 | 0.16 | 0.13 | 0.31 | － | － | － | | | |
| SP007 | 東 | I11,12 | Ⅳ | － | イ | a | a | (0.26) | (0.19) | (0.22) | (0.08) | 0.12 | － | － | － | | | |
| SP008 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.27 | 0.22 | 0.16 | 0.11 | 0.14 | － | － | － | | | |
| SP009 | 東 | J12 | Ⅳ | b | ア | a | a | 0.21 | 0.18 | 0.15 | 0.13 | 0.09 | － | － | － | | | |
| SP010 | 東 | J12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.28 | 0.25 | 0.15 | 0.14 | 0.15 | － | － | － | | | |
| SP011 | 東 | J12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.28 | 0.22 | 0.18 | 0.14 | 0.04 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP012 | 東 | J12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.26 | 0.25 | 0.16 | 0.15 | 0.17 | － | － | － | | | |
| SP013 | 東 | J13 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.28 | 0.25 | 0.23 | 0.18 | 0.03 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP014 | 東 | H11 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.22 | 0.18 | 0.15 | 0.13 | 0.04 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP015 | 東 | H12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.21 | 0.20 | 0.14 | 0.12 | 0.07 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP016 | 東 | H12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.24 | 0.15 | 0.14 | 0.14 | 0.03 | 0.14 | 0.07 | 0.12 | | | |
| SP017 | 東 | H12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.18 | 0.14 | 0.15 | 0.09 | 0.07 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP018 | 東 | I,H12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.17 | 0.17 | 0.08 | 0.07 | 0.18 | － | － | － | | | |
| SP019 | 東 | I13 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.18 | 0.17 | 0.10 | 0.07 | 0.10 | － | － | － | | SK06 | やや浅い。 |
| SP020 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.19 | 0.18 | 0.11 | 0.11 | 0.05 | － | － | － | | | 小さく浅い。 |
| SP021 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.18 | 0.15 | 0.12 | 0.09 | 0.04 | － | － | － | | | 小さく浅い。 |
| SP022 | 東 | J12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.14 | 0.13 | 0.08 | 0.08 | 0.05 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP023 | 東 | J12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.13 | 0.11 | 0.07 | 0.05 | 0.07 | － | － | － | | | |
| SP024 | 東 | J12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.08 | 0.08 | 0.04 | 0.04 | 0.06 | － | － | － | | | |
| SP025 | 東 | J12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.06 | 0.03 | 0.03 | 0.04 | － | － | － | | | |
| SP026 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.09 | 0.07 | 0.04 | 0.03 | 0.02 | － | － | － | | | |
| SP027 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.09 | 0.07 | 0.03 | 0.03 | 0.03 | － | － | － | | | |
| SP028 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.06 | 0.05 | 0.04 | 0.02 | － | － | － | | | |
| SP029 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.06 | 0.06 | 0.04 | 0.04 | 0.04 | － | － | － | | | |
| SP030 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.06 | 0.03 | 0.03 | 0.08 | － | － | － | | | 斜め、先尖る。 |
| SP031 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.07 | 0.07 | 0.03 | 0.03 | | | | | | |
| SP032 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.07 | 0.05 | 0.03 | 0.05 | | | | | | |
| SP033 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.08 | 0.08 | 0.06 | 0.05 | 0.01 | | | | | | 浅い。 |
| SP034 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.06 | 0.06 | 0.05 | 0.04 | 0.04 | | | | | | |
| SP035 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.08 | 0.08 | 0.06 | 0.04 | 0.10 | － | － | － | | | |
| SP036 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.04 | 0.04 | 0.04 | 0.03 | 0.04 | | | | | | |
| SP037 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.05 | 0.05 | 0.04 | 0.04 | 0.03 | | | | | | 浅い。 |
| SP038 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.05 | 0.05 | 0.04 | 0.04 | 0.03 | | | | | | 浅い。 |
| SP039 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.06 | 0.05 | 0.04 | 0.03 | 0.04 | － | － | － | | | |
| SP040 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.05 | 0.05 | 0.05 | 0.04 | 0.04 | | | | | | |
| SP041 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.10 | 0.08 | 0.05 | 0.05 | 0.06 | － | － | － | | | 先尖る。 |
| SP042 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.09 | 0.08 | 0.05 | 0.05 | 0.05 | － | － | － | | | |
| SP043 | 東 | I12 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.06 | 0.04 | 0.03 | 0.05 | － | － | － | | | 先尖る。 |
| SP044 | 東 | I13 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.07 | 0.04 | 0.04 | 0.06 | － | － | － | | | |
| SP045 | 東 | I13 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.07 | 0.04 | 0.04 | 0.04 | － | － | － | | | |
| SP046 | 東 | I13 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.07 | 0.07 | 0.04 | 0.04 | 0.03 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP047 | 東 | I13 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.08 | 0.08 | 0.06 | 0.05 | 0.01 | － | － | － | | | 浅い。 |
| SP048 | 西 | M3 | Ⅳ | a | ア | b | b | 1.04 | (0.67) | 0.99 | 0.63 | 0.17 | 0.33 | 0.29 | 0.16 | | | |
| SP049 | 西 | M3 | Ⅳ | a | ア | b | b | 0.86 | 0.60 | 0.76 | 0.48 | 0.16 | 0.30 | 0.20 | 0.16 | | | |
| SP050 | 西 | M4 | Ⅳ | a | ア | b | a | 0.47 | 0.45 | 0.37 | 0.33 | 0.27 | 0.22 | 0.14 | 0.27 | | | |
| SP051 | 西 | M3 | Ⅳ | a | ア | b | b | 1.28 | (0.90) | 1.15 | (0.83) | 0.15 | 0.45 | 0.30 | 0.16 | SP064 | | |
| SP052 | 西 | M4 | Ⅳ | a | ア | a | a | 0.42 | 0.38 | 0.30 | 0.20 | 0.33 | 0.23 | 0.15 | 0.25 | | SP053 | |
| SP053 | 西 | M4 | Ⅳ | a | ア | b | b | 0.92 | 0.72 | 0.83 | 0.65 | 0.09 | 0.27 | 0.20 | 0.27 | SA2P2,SP052 | | |
| SP054 | 西 | M4 | Ⅳ | a | Ⅱ | c | c | 1.14 | 0.96 | 1.15 | 0.94 | 0.11 | － | － | － | | | SB3P3の下層。 |
| SP055 | 西 | M5 | Ⅳ | a | ア | b | b | 0.63 | 0.43 | 0.53 | 0.33 | 0.21 | 0.26 | 0.14 | 0.24 | | | |
| SP056 | 西 | M5 | Ⅳ | a | ア | b | b | 0.73 | 0.60 | 0.62 | 0.51 | 0.15 | 0.31 | 0.20 | 0.36 | | | |
| SP057 | 西 | M5 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.36 | 0.30 | (0.22) | 0.16 | 0.46 | | | | | | |
| SP058 | 西 | M5 | Ⅳ | a | ア | b | b | 1.16 | 1.05 | 0.95 | 0.88 | 0.26 | 0.28 | 0.14 | 0.34 | | | |
| SP059 | 西 | N5 | Ⅳ | a | ア | b | b | 0.59 | 0.53 | 0.53 | 0.46 | 0.12 | 0.30 | 0.25 | 0.57 | | | |
| SP060 | 西 | N5 | Ⅳ | a | Ⅱ | b | b | 0.96 | 0.93 | 0.90 | 0.86 | 0.06 | － | － | － | | SK13 | SA3P2の下層。 |
| SP061 | 西 | N5 | Ⅳ | c | Ⅱ | a | a | 0.68 | (0.50) | 0.58 | (0.25) | 0.21 | － | － | － | SA3P3 | | SA3P3が柱痕か。 |
| SP062 | 西 | N5 | Ⅳ | a | ア | b | a | 0.71 | 0.60 | 0.45 | 0.40 | 0.16 | 0.40 | 0.32 | 0.42 | | | SA3P4の下層。<br>SA3P4が柱痕か。 |
| SP063 | 西 | N5 | Ⅳ | a | ア | a | a | 0.57 | 0.39 | 0.46 | 0.32 | 0.21 | 0.21 | 0.17 | 0.22 | | | |
| SP064 | 西 | M3 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.26 | 0.23 | 0.17 | 0.13 | 0.18 | － | － | － | | SP051 | |
| SP065 | 西 | N4 | Ⅳ | b | ア | a | a | 0.30 | 0.26 | 0.24 | 0.22 | 0.21 | － | － | － | | | |

表11　遺構観察表(3)

| 遺構名 | 地区名 | 地区割り | 検出面 | 堆積状況 | 断面形状 | 平面形状 | 底面形状 | 規模（m） | | | | | 柱痕規模（m） | | | 切り合い | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 上端 | | 下端 | | 深さ | 上端 | 下端 | 深さ | ＜切られる | ＞切る | |
| | | | | | | | | 長軸長 | 短軸長 | 長軸長 | 短軸長 | | | | | | | |
| SP066 | 西 | N4 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.27 | 0.25 | 0.23 | 0.22 | 0.21 | － | － | － | | | |
| SP067 | 西 | N4 | Ⅳ | b | ア | a | a | 0.35 | 0.35 | 0.27 | 0.26 | 0.17 | － | － | － | | | |
| SP068 | 西 | N4 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.37 | 0.31 | 0.21 | 0.19 | 0.17 | － | － | － | | | |
| SP069 | 西 | M4 | Ⅳ | b | イ | a | a | 0.30 | 0.30 | 0.21 | 0.18 | 0.26 | － | － | － | | | |
| SP070 | 西 | M4 | Ⅳ | b | ア | a | a | 0.26 | 0.23 | 0.20 | 0.16 | 0.21 | － | － | － | | | |
| SP071 | 西 | M4 | Ⅳ | b | ア | a | a | 0.27 | 0.26 | 0.22 | 0.18 | 0.23 | － | － | － | | | |
| SP072 | 西 | M5 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.33 | 0.33 | 0.29 | 0.26 | 0.11 | － | － | － | | | |
| SP073 | 西 | M5 | Ⅳ | b | イ | a | a | 0.17 | 0.16 | 0.11 | 0.11 | 0.23 | － | － | － | | | |
| SP074 | 西 | M5 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.33 | 0.23 | 0.24 | 0.18 | 0.19 | － | － | － | | | |
| SP075 | 西 | M5 | Ⅳ | a | Ⅱ | a | a | 0.37 | 0.33 | 0.34 | 0.28 | 0.06 | － | － | － | | | SA8P2の下層。<br>SA8P2が柱痕か。 |
| SP076 | 西 | M5 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.30 | 0.25 | 0.22 | 0.14 | 0.30 | － | － | － | | | |
| SP077 | 西 | M5 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.34 | 0.32 | 0.22 | 0.18 | 0.23 | － | － | － | | | |
| SP078 | 西 | N5 | Ⅳ | a | イ | a | a | 0.29 | 0.28 | 0.15 | 0.09 | 0.25 | － | － | － | | | |
| SP079 | 西 | N5 | Ⅳ | a | ア | a | a | 0.26 | 0.21 | 0.20 | 0.16 | 0.37 | 0.20 | 0.15 | 0.37 | | SP080 | |
| SP080 | 西 | N5 | Ⅳ | － | ア | a | a | (0.23) | (0.07) | (0.18) | (0.04) | 0.19 | － | － | － | SP079 | | |
| SP081 | 西 | N6 | Ⅳ | a | ア | a | a | 0.40 | 0.33 | 0.34 | 0.25 | 0.22 | － | － | － | | | SP111が柱根か。 |
| SP082 | 西 | N6 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.42 | 0.28 | 0.32 | 0.21 | 0.32 | － | － | － | | | |
| SP083 | 西 | N6 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.32 | 0.31 | 0.24 | 0.23 | 0.20 | － | － | － | | | |
| SP084 | 西 | N5 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.32 | 0.28 | 0.23 | 0.23 | 0.19 | － | － | － | | | |
| SP085 | 西 | N6 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.38 | 0.26 | 0.24 | 0.17 | 0.30 | － | － | － | | | |
| SP086 | 西 | N6 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.23 | 0.21 | 0.17 | 0.17 | 0.24 | － | － | － | | | |
| SP087 | 西 | N6 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.30 | 0.25 | 0.21 | 0.17 | 0.47 | － | － | － | | | |
| SP088 | 西 | N6 | Ⅳ | b | イ | a | a | 0.15 | 0.15 | 0.11 | 0.11 | 0.20 | － | － | － | | | |
| SP089 | 西 | N6 | Ⅳ | a | イ | a | a | 0.40 | 0.35 | 0.33 | 0.28 | 0.24 | － | － | － | | | SP117が柱痕か。 |
| SP090 | 西 | M6,7 | Ⅳ | a | ア | b | b | 1.07 | 0.81 | 1.01 | 0.69 | 0.22 | 0.22 | 0.18 | 0.17 | | | |
| SP091 | 西 | M77 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.38 | 0.36 | 0.32 | 0.28 | 0.16 | － | － | － | SA6P2 | | |
| SP092 | 西 | L5 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.32 | 0.30 | 0.22 | 0.14 | 0.24 | － | － | － | | | |
| SP093 | 西 | L5 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.22 | 0.18 | 0.16 | 0.08 | 0.32 | － | － | － | | | |
| SP094 | 西 | L5 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.14 | 0.13 | 0.13 | 0.11 | 0.29 | － | － | － | | | |
| SP095 | 西 | L5 | Ⅳ | － | イ | a | a | 0.19 | 0.17 | 0.07 | 0.06 | 0.23 | － | － | － | | | |
| SP096 | 西 | L5 | Ⅳ | － | ア | a | a | 0.23 | 0.23 | 0.20 | 0.20 | 0.17 | － | － | － | | | |
| SP097 | 西 | G13 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.21 | 0.21 | 0.08 | 0.07 | 0.22 | 0.07 | 0.07 | 0.14 | | | 柱材残存。 |
| SP098 | 東 | I12 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.28 | 0.25 | 0.20 | 0.16 | 0.12 | － | － | － | | | |
| SP099 | 東 | I12 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.31 | 0.30 | 0.19 | 0.16 | 0.17 | 0.14 | 0.10 | 0.15 | | | |
| SP100 | 東 | I12 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.18 | 0.16 | 0.14 | 0.08 | 0.04 | － | － | － | | | |
| SP101 | 東 | I12 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.21 | 0.16 | 0.07 | 0.06 | 0.11 | － | － | － | | | |
| SP102 | 東 | I12 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.16 | 0.14 | 0.06 | 0.06 | 0.13 | － | － | － | | | |
| SP103 | 東 | I12 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.16 | 0.10 | 0.07 | 0.04 | 0.05 | － | － | － | | | |
| SP104 | 西 | M5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 1.01 | 0.95 | 0.91 | 0.84 | 0.22 | 0.41 | 0.31 | 0.53 | | | |
| SP105 | 西 | M3 | Ⅲ | a | ア | b | b | (0.55) | (0.44) | (0.36) | (0.42) | 0.15 | (0.20) | (0.10) | 0.15 | | | |
| SP106 | 西 | M,N4 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.64 | 0.64 | 0.55 | 0.54 | 0.26 | 0.29 | 0.17 | 0.36 | SA5P2 | | |
| SP107 | 西 | N4,5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.55 | 0.48 | 0.45 | 0.33 | 0.29 | 0.30 | 0.18 | 0.29 | | | |
| SP108 | 西 | N,O4 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.64 | 0.54 | 0.40 | 0.32 | 0.27 | 0.23 | 0.18 | 0.27 | | | |
| SP109 | 西 | M5 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.60 | 0.33 | 0.50 | 0.29 | 0.27 | 0.22 | 0.18 | 0.25 | | | |
| SP110 | 西 | M5 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.52 | 0.52 | 0.40 | 0.28 | 0.35 | 0.21 | 0.15 | 0.35 | | | |
| SP111 | 西 | M6 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.28 | 0.23 | 0.21 | 0.15 | 0.27 | 0.15 | 0.13 | 0.27 | | | |
| SP112 | 西 | M6 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.86 | (0.65) | 0.69 | (0.55) | 0.18 | 0.13 | 0.13 | 0.18 | | | |
| SP113 | 西 | M,N6 | Ⅲ | a | ア | b | b | 0.50 | 0.47 | 0.39 | 0.33 | 0.21 | 0.27 | 0.21 | 0.21 | | | |
| SP114 | 西 | M3 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.25 | 0.22 | 0.15 | 0.12 | 0.20 | － | － | － | | | |
| SP115 | 西 | N3 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.35 | (0.23) | 0.18 | (0.16) | 0.23 | － | － | － | | | 現代の暗渠に切られる。 |
| SP116 | 西 | M6 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.16 | 0.16 | 0.10 | 0.08 | 0.26 | － | － | － | | | |
| SP117 | 西 | M6 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.23 | 0.17 | 0.15 | 0.09 | 0.25 | － | － | － | | | |
| SP118 | 西 | M6 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.19 | 0.15 | 0.13 | 0.10 | 0.17 | － | － | － | | | |
| SP119 | 西 | L5 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.27 | 0.24 | 0.15 | 0.14 | 0.32 | 0.13 | 0.13 | 0.34 | | | |
| SP120 | 西 | L5 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.25 | 0.20 | 0.17 | 0.15 | 0.27 | 0.14 | 0.10 | 0.27 | | | |
| SP121 | 西 | L5 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.28 | 0.22 | 0.24 | 0.16 | 0.28 | 0.11 | 0.09 | 0.28 | | | |
| SP122 | 西 | L5 | Ⅲ | a | イ | a | a | 0.29 | 0.22 | 0.26 | 0.17 | 0.24 | 0.14 | 0.11 | 0.26 | | | |
| SP123 | 西 | L5 | Ⅲ | a | ア | a | a | 0.49 | 0.42 | 0.43 | 0.31 | 0.23 | 0.12 | 0.10 | 0.20 | | | |
| SP124 | 西 | L5 | Ⅲ | － | イ | a | a | 0.18 | 0.15 | 0.12 | 0.12 | 0.27 | － | － | － | | SK18 | |
| SP125 | 西 | L5 | Ⅲ | － | イ | a | a | (0.30) | (0.17) | (0.24) | (0.14) | 0.13 | － | － | － | | | |

表12　土器観察表（1）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 分類・時期等 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 東 | I14 | SD1 | 1 | 灰釉陶器 | 皿 | 東濃 | 大原2（新）、虎渓山（古） | 13.9 | 7.2 | 2.4 | ヘラ削り無し。胴部丸く立上。内外面煤付着。内面使用。ハケ塗り。 | 13 | 11 |
| 2 | 東 | I-J12-14 | SD1 | 1 | 灰釉陶器 | 皿 | 東濃 | 丸石2 | 9.7 | 5.5 | 2.0 | 高台低く外に貼付。口縁部真っ直ぐ外反。浸け掛け。底部外面回転ヘラ削り。 | 13 | 11 |
| 3 | 東 | I14 | SD1 | 1 | 灰釉陶器 | 輪花碗 | 東濃 | 丸石2 | 11.8 | 5.9 | 4.2 | 四弁。形骸化した輪花。ヘラ削り無し。ハケ塗り。底部外面工具痕か。 | 13 | 11 |
| 4 | 東 | I-J14 | SD1 | 1 | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 丸石2 | － | 6.5 | (4.7) | 糸切り痕有。ハケ塗り。 | 13 | 11 |
| 5 | 東 | J13 | SE1 | 8 | 灰釉陶器 | 輪花碗 | 東濃 | 光ヶ丘1 | 16.8 | － | (2.1) | ハケ塗り。井戸内埋土最下層。 | 16 | 11 |
| 6 | 東 | J13 | SE1 | 10 | 灰釉陶器 | 碗 | | 不明 | 14.0 | － | (2.0) | 口縁形状からK-14、K-90ではない。井戸埋め土。胴部丸く立ち上がる。ハケ塗り。 | 16 | 11 |
| 14 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 11世紀末 | 13.2 | － | － | 口縁部折り返し。胴部外面ハケ目。 | 21 | 12 |
| 15 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 12世紀末 | 26.0 | － | (3.8) | 口縁部折り返し。頸部外面に２段の刺突有。 | 21 | 12 |
| 16 | 東 | I13 | SE2 | 3 | 土師器 | 土師器皿 | | 12～13世紀か | 8.8 | 4.0 | 1.5 | 小破片時期不明。底部外面指押さえ。 | 21 | 12 |
| 18 | 東 | I13 | SE2 | 3 | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 虎渓山1 | － | 9.8 | (2.1) | 長く真っ直ぐな高台。 | 21 | 12 |
| 19 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 8.2 | (3.9) | 高台丁寧。籾殻圧痕有。内面使用。内面煤付着。 | 21 | 13 |
| 20 | 東 | I13 | SE2 | 3 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.0 | 4.2 | 2.7 | 墨書「十」。底径小。口縁部真っ直ぐ外反。 | 21 | 13 |
| 21 | 東 | I13 | SE2 | 3 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.6 | 3.6 | 2.4 | 底径小。胴部丸く立ち上がる。 | 21 | 13 |
| 22 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.0 | 4.0 | 2.0 | 平底。底径大。胴部丸く立ち上がる。 | 21 | 13 |
| 23 | 東 | I13 | SE2 | 3 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 8.4 | (3.3) | 内外面煤付着。高台丸く低い外に貼付。高台に砂粒圧痕有。内面使用。底部外面回転ヘラ削り。 | 21 | 13 |
| 24 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.5 | 7.6 | 5.4 | 高台三角形。籾殻圧痕有。 | 21 | 13 |
| 25 | 東 | I13-14 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 13.8 | 6.0 | 5.1 | 内外面煤付着。高台小さい、一部剥離。籾殻圧痕有。口縁部外反。 | 21 | 13 |
| 26 | 東 | I13 | SE2 | 3 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.3 | 7.2 | 5.0 | 高台低く外に貼付。籾殻圧痕有。 | 21 | 13 |
| 27 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 14.7 | 6.2 | 4.6 | 高台丸く低い外にずれる。胎土粗い。籾殻圧痕有。外面煤付着。 | 21 | 13 |
| 28 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.0 | 6.6 | 6.0 | 高台細く低い。籾殻圧痕有。 | 21 | 13 |
| 29 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.5 | 7.9 | 5.4 | 高台雑、一部剥離。籾殻圧痕有。 | 21 | 13 |
| 30 | 東 | I13 | SE2 | 3 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 14.6 | 6.1 | 4.5 | 内外面煤付着。高台低く粗い。籾殻圧痕有。 | 21 | 13 |
| 31 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式（新） | － | 6.1 | (2.8) | 内外面煤付着。高台低く粗い。籾殻圧痕有。 | 21 | 13 |
| 32 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.9 | － | (4.3) | 口縁部破片。 | 21 | 12 |
| 33 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 片口鉢 | 尾張 | 第5型式 | 31.6 | 11.3 | 10.8 | 胴下部外面回転ヘラ削り。 | 21 | 12 |
| 34 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第6型式 | － | 6.8 | (2.9) | 高台極めて低く内側に付く。籾殻圧痕有。内面使用。外面煤付着。 | 21 | 12 |
| 35 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 白磁 | 碗 | | Ⅳ類（12～13世紀） | － | － | (2.6) | 胴部破片。内面に沈線。 | 21 | 12 |
| 36 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 常滑か | 甕 | 不明 | 中世 | － | － | (9.9) | 押印帯有。胴部破片。 | 21 | 12 |
| 39 | 東 | H11 | SK1 | 1 | 灰釉陶器 | 瓶 | 東濃 | 不明 | － | 9.0 | (2.3) | 底部破片。高台丸く幅狭い。 | 17 | 11 |
| 40 | 東 | H12 | SK3 | 2 | 灰釉陶器 | 段皿 | 東濃 | 虎渓山1 | 11.6 | － | (1.5) | 口縁部先端丸み有。ハケ塗り。胴下半部外面回転ヘラ削り。 | 17 | 11 |
| 41 | 東 | I-J12-13 | SK09 | 1 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 12世紀 | － | 6.0 | (1.5) | 底部破片。回転糸切り痕有。 | 18 | 11 |
| 42 | 東 | I-J12-13 | SK09 | 1 | 灰釉陶器 | 段皿 | 東濃 | 丸石2 | 10.4 | 5.5 | 2.1 | 回転糸切り痕有。高台に稜有。口縁部真っ直ぐ外反。ハケ塗り。 | 18 | 11 |
| 43 | 東 | I-J12-13 | SK09 | 1 | 灰釉陶器 | 段皿 | 東濃 | 丸石2 | 10.3 | 6.0 | 2.0 | 回転糸切り痕有。高台丸く外付け。口縁部外反。ハケ塗り。 | 18 | 11 |
| 44 | 東 | I-J12-13 | SK09 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式（12世紀前半） | － | 7.5 | (3.9) | 内外面煤付着。高台高く丁寧な作り。 | 18 | 11 |
| 45 | 東 | I13 | SP001 | 2 | 土師器 | 清郷型鍋 | | 11世紀 | 29.2 | － | (6.2) | | 18 | 11 |

表13　土器観察表（2）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 分類・時期等 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 46 | 東 | I13 | SP001 | 2 | 灰釉陶器 | 瓶 | 東濃 | 不明 | － | － | (6.3) | SE2出土破片と接合。肩部破片。胴部外面回転ヘラ削り。 | 18 | 11 |
| 47 | 東 | F11 | NR1 | 1 | 須恵器 | ミニチュア壺 | 美濃須衛 | Ⅳ-3期（8世紀後葉） | 13.1 | － | (2.5) | 短頸。口縁部破片。 | 19 | 12 |
| 48 | 東 | F11 | NR1 | 1 | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀後半 | 28.0 | － | (5.4) | | 19 | 12 |
| 49 | 東 | F-G11-12 | NR1 | 1 | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 光ヶ丘1 | － | 7.8 | (4.1) | 墨書「大」か。三日月高台。胴下半部外面回転ヘラ削り。内面使用。ハケ塗り。 | 19 | 12 |
| 50 | 東 | G11 | NR1 | 1 | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 大原2 | 12.9 | 6.6 | 3.8 | 浸け掛け。内面煤付着。 | 19 | 12 |
| 51 | 東 | F11 | NR1 | 1 | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 大原2 | 15.5 | － | (3.8) | 外面ヘラ描きか。ハケ塗り。胴下半部外面回転ヘラ削り。 | 19 | 12 |
| 52 | 東 | F11 | NR1 | 1 | 灰釉陶器 | 瓶 | 東濃 | 不明 | － | 8.5 | (2.2) | 底部破片。ハケ塗り。高台丸く幅広。胴下部外面回転ヘラ削り。 | 19 | 12 |
| 54 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 12世紀 | 17.2 | 8 | 4.4 | 回転糸切り痕有。全面摩耗。 | 23 | 14 |
| 55 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 7.6 | (2.1) | 底部外面墨書「大」か。内外面煤付着。底部内面稲藁圧痕。 | 23 | 14 |
| 56 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.2 | 3.5 | 2.1 | 外面煤付着。底径小 | 23 | 14 |
| 57 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.8 | 8.0 | 5.1 | 内外面煤付着。58とセット。高台低い外付け。籾殻圧痕有。底部外面回転糸切り後ナデ。 | 23 | 13 |
| 58 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.6 | 7.0 | 4.9 | 57とセット。高台低く粗い。籾殻圧痕有。口縁部内面からの打ち欠き。 | 23 | 13 |
| 67 | 西 | M6 | SP090 | 3 | 灰釉陶器 | 皿 | 東濃 | 虎渓山1 | 11.6 | 5.6 | 2.2 | 丸く低い高台。浸け掛け。 | 26 | 11 |
| 68 | 東 | I12-13 | SA1-P4 | 1 | 灰釉陶器 | 短頸壺 | 東濃 | 不明 | 15.0 | － | (3.5) | 口縁部破片。ハケ塗り。 | 27 | 11 |
| 71 | 東 | J13 | SB2-P2 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.0 | － | (3.2) | 口縁部破片。 | 29 | 11 |
| 72 | 東 | I13 | SD3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 17.0 | － | (3.1) | 厚い。 | 29 | 11 |
| 73 | 東 | H13-14 | SD4 | 2 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | | － | 4.8 | 1.1 | 糸切り痕有。底部破片。 | 31 | 14 |
| 74 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 12世紀後半 | － | 6.3 | (4.2) | 台付。 | 31 | 14 |
| 76 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 灰釉陶器 | 皿 | 東濃 | 大原2 | － | 7.1 | (2.2) | 丸く低い高台。ハケ塗り。内面使用。 | 31 | － |
| 77 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 灰釉陶器 | 皿 | 猿投 | 不明 | 15.7 | － | (2.1) | ハケ塗り。 | 31 | － |
| 78 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 灰釉陶器 | 皿 | 東濃 | 虎渓山1 | 11.9 | 5.8 | 2.5 | 胎土灰色。真っ直ぐで低い高台。胴部丸く立ち上がる。浸け掛け。底部外面回転削り。 | 31 | 14 |
| 79 | 東 | G-H13-14 | SD4 | 1 | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 虎渓山1 | 14.6 | 7.6 | 5.5 | 高台高く外付け。ハケ塗り。内面使用。 | 31 | 14 |
| 80 | 東 | G-H13-14 | SD4 | 2 | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 虎渓山1 | 12.9 | 6.6 | 3.7 | 高台丸い。浸け掛け。回転糸切り痕有。外面煤付着。 | 31 | 14 |
| 81 | 東 | G-H13-14 | SD4 | 1 | 灰釉陶器 | 碗 | 美濃須衛 | Ⅵ期（虎渓山1並行） | － | 6.5 | (3.2) | 高台丸く外付け。回転糸切り痕有。 | 31 | 14 |
| 82 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 灰釉陶器 | 瓶 | 東濃 | 不明 | － | － | (7.1) | 縦方向の耳が付く。ハケ塗り。内面煤付着。ハケ塗り。外面回転ヘラ削り。 | 31 | 14 |
| 83 | 東 | G-H13-14 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 小碗 | 尾張 | 第3型式 | － | 5.4 | (2.1) | | 31 | 14 |
| 84 | 東 | G13 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第3型式 | － | 8.0 | (2.8) | 胎土5Y8/1灰白色。内面使用。 | 31 | 14 |
| 85 | 東 | G13 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第3か4型式 | 17.5 | － | (3.9) | 口縁部破片。 | 31 | － |
| 86 | 東 | G-H13-14 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第4型式 | 9.6 | 4.7 | 2.7 | | 31 | 14 |
| 87 | 東 | G-H13-14 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 7.4 | 4.1 | 胎土白色。高台丁寧。内面煤付着。 | 31 | 14 |
| 88 | 東 | H14 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 7.9 | (2.2) | 底部破片。高台低い三角形。 | 31 | － |

表14　土器観察表（3）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 分類・時期等 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 89 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 8.0 | (2.8) | 外面煤付着。胎土砂を多く含む。高台外付け。籾殻圧痕有。 | 31 | 14 |
| 90 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 美濃須衛 | Ⅷ期（第4型式並行） | － | 8.2 | (2.1) | 内面漆付着。丁寧な三角形の高台。 | 31 | 14 |
| 91 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 美濃須衛 | Ⅷ期（第4型式並行） | － | 5.4 | (4.4) | 底部破片。底部内面炭化物、底部外面煤付着。 | 31 | 14 |
| 92 | 東 | H14 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 東濃 | 浅間窯下1（古） | － | 7.5 | (3.5) | 内外面煤付着。高台太く外付け。籾殻圧痕有。 | 31 | － |
| 93 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.0 | 4.2 | 2.5 | 底径小。 | 31 | 15 |
| 94 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.4 | － | (1.7) | 口縁部破片。 | 31 | － |
| 95 | 東 | G13 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | － | 4.0 | (1.1) | 底部破片。底径小。 | 31 | － |
| 96 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | － | 4.2 | (1.4) | 底部破片。底径大。 | 31 | － |
| 97 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 6.3 | (2.0) | 内面煤付着。高台低く厚い三角形、丁寧な作り。 | 31 | 15 |
| 98 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 7.0 | (2.3) | 内面煤付着。胎土白色。高台低く丁寧な作り。籾殻圧痕有。 | 31 | － |
| 99 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 6.7 | (4.1) | 内面使用。高台丁寧な作り。籾殻圧痕有。 | 31 | － |
| 100 | 東 | H14 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 7.4 | 4.8 | 底部内面煤付着。高台低く外付け、丁寧な作り。 | 31 | － |
| 101 | 東 | H14 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 7.1 | (2.8) | 内外面煤付着。高台外付け。籾殻圧痕有。 | 31 | 15 |
| 102 | 東 | G13 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.4 | 7.7 | 4.6 | 高台幅広く丁寧な作り。籾殻圧痕有。 | 31 | 15 |
| 103 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 8.0 | (2.4) | 底部破片。胎土白色。やや丁寧な高台。 | 31 | － |
| 104 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 19.2 | － | (4.1) | 口縁部破片。胎土に砂を多く含む。 | 31 | 15 |
| 105 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 7.0 | (2.7) | 底部破片。高台低く丸く外付け。 | 31 | 15 |
| 106 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式（新）か第6型式（古） | 15.3 | 7.6 | 4.9 | 口縁部打ち欠き。内外面煤付着。高台低く薄い、一部剥がれる。 | 31 | 15 |
| 107 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 白磁 | 碗 | 中国 | Ⅱ類 | 12.4 | － | (1.3) | 口縁部破片。 | 31 | 15 |
| 108 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 白磁 | 碗 | 中国 | Ⅳ類（12～13世紀） | － | 6.9 | (2.2) | 口縁部破片。 | 31 | 15 |
| 109 | 東 | H15 | SD4 | 1 | 白磁 | 碗 | 中国 | Ⅳ類（12～13世紀） | 17.4 | － | (5.0) | 底部破片。 | 31 | 15 |
| 110 | 東 | G13 | SD4 | 2 | 常滑 | 甕 | 常滑 | 中世（12か13世紀） | － | － | (6.3) | 肩部破片。押印帯の位置が高い。 | 31 | 15 |
| 111 | 東 | H13-14 | SD4 | 1 | 常滑 | 甕 | 常滑 | 中世 | － | － | (9.8) | 胴部破片。 | 31 | 15 |
| 112 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 12世紀後半 | 22.2 | － | (5.3) | 井戸埋土の上層と下層で接合。内外面煤付着。口縁部折り返し。内面板ナデ。外面指頭圧痕、ハケ目。 | 34 | 15 |
| 113 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 12世紀後半 | 23.8 | － | (8.3) | 井戸埋土の上層と下層で接合。内外面煤付着、外面炭化物付着。口縁部折り返し。内面板ナデ、外面指頭圧痕。 | 34 | 15 |
| 114 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 12世紀後半か | － | － | (12.8) | 井戸埋土の上層と下層で接合。内外面煤付着。頸部から胴部の破片。内面板ナデ胴下部ケズリ。外面指頭圧痕。 | 34 | － |
| 115 | 東 | I-J14 | SE3 | b | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 12世紀後半か | － | － | (11.1) | 井戸埋土の上層と下層で接合。内外面煤付着。肩部破片。 | 34 | － |
| 116 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 12世紀後半か | － | － | (10.2) | 内面煤外面炭化物付着。胴下半部破片。 | 34 | 15 |
| 117 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | | － | 4.8 | 2.3 | 底部破片。回転糸切り痕有。底径小。 | 34 | － |
| 118 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | | － | 5.8 | 2.4 | 底部破片。回転糸切り痕有。底径大。 | 34 | 16 |
| 119 | 東 | I14 | SE3 | 8 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 13世紀 | － | － | (2.0) | 台付。全面に煤付着。 | 34 | － |
| 120 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 13世紀 | － | 5.3 | (3.1) | 台付。 | 34 | 16 |
| 121 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 土師器 | 土師器皿 | | | 8.6 | 4.3 | 1.7 | 薄い。内外摩耗。 | 35 | 16 |

表15　土器観察表（4）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 分類・時期等 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 122 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 土師器 | 土師器皿 | | 12～13世紀 | 8.2 | 6.8 | 1.6 | 有段。低い。やや厚い。底部外面指頭圧痕。 | 35 | 16 |
| 123 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 土師器 | 土師器皿 | | 12～13世紀 | 8.5 | 5.2 | 2.2 | 有段。底部外面削り。底部外面ケズリ。 | 35 | 16 |
| 124 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 土師器 | 土師器皿 | | 12～13世紀 | 8.6 | 5.6 | 1.8 | 有段。厚い。外面煤付着。 | 35 | 16 |
| 128 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 灰釉陶器 | 甕 | 美濃須衛 | Ⅵ～Ⅶ期（10～11世紀） | － | － | (9.1) | 船山北に例有。外面粗い叩き。肩部破片。輪積み痕有。内面指頭圧痕。外面自然釉。 | 35 | 16 |
| 129 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 小碗 | 尾張 | 第3型式 | 10.2 | 4.5 | 3.6 | 底径小。高台厚く丁寧。 | 35 | 17 |
| 130 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 小碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 4.2 | (2.2) | 内面使用。底部破片。 | 35 | － |
| 131 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第3か4型式 | 16.7 | － | (3.1) | 口縁部破片。 | 35 | － |
| 132 | 東 | I14 | SE3 | 3 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 4.7 | (1.2) | 加工円盤。内面使用。高台低い。底径小。 | 35 | 16 |
| 133 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | | 浅間窯下1か丸石3 | － | 7.0 | (2.6) | 底部破片。内面使用。高台が低い。 | 35 | 16 |
| 134 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式（古） | 7.5 | 4.0 | 2.1 | 底径大。胴部丸く立ち上がる。 | 35 | 17 |
| 135 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.5 | 4.1 | 2.4 | 底部外面墨書「花押」。底径小。口縁外反。 | 35 | 17 |
| 136 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 7.8 | 3.5 | 2.1 | 底部外面墨書「大」。底径小。口縁外反。 | 35 | 17 |
| 137 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 7.9 | 3.1 | 2.2 | 底部外面墨書「大」か。底径小。口縁外反。 | 35 | 17 |
| 138 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.3 | 4.1 | 2.2 | 底部外面墨書「上」。底径大。口縁外反。 | 35 | 17 |
| 139 | 東 | I-J14 | SE3 | c | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.2 | 4.0 | 2.3 | 胎土に径3mm以下の砂粒混じり粗い。 | 35 | － |
| 140 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.1 | 4.1 | 2.4 | 口縁部打ち欠き。底径大きい。胴部丸く立ち上がる。 | 35 | 17 |
| 141 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.7 | 7.4 | 5.2 | 内外面煤付着。高台厚く外付け丁寧。胴部丸み有。 | 35 | 17 |
| 142 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 6.8 | (2.4) | 内外面割れ面に付着物（漆か）。高台外付け丁寧。籾殻圧痕有。 | 35 | 16 |
| 143 | 東 | I-J13-14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 6.8 | (3.2) | 内面使用。SD1出土破片と接合。高台丁寧。籾殻圧痕有。 | 35 | － |
| 144 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 6.9 | (3.6) | 高台丁寧。 | 35 | － |
| 145 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 6.2 | (2.6) | 内外面に煤付着。高台三角形丁寧。底部破片。 | 35 | － |
| 146 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 7.4 | (2.9) | 内面使用。胎土砂を多く含む。高台丁寧。底部破片。 | 35 | － |
| 147 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.8 | 6.5 | 4.9 | 口縁部打ち欠き。内外割れ面煤付着。SD1出土破片と接合。高台厚く丁寧。籾殻圧痕有。 | 35 | － |
| 148 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.2 | 6.3 | 5.1 | 口縁部打ち欠き。内面使用。胎土白色。底径小。高台低く外付け。籾殻圧痕有。胴部丸く立ち上がる。 | 35 | 17 |
| 149 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.5 | 6.4 | 4.9 | 口縁部打ち欠き。内面使用。高台やや丁寧、一部剥がれ。籾殻圧痕有。底径小。 | 35 | 17 |
| 150 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.1 | 6.9 | 6.0 | 底部外面墨書「花押」。内面使用。高台低く丁寧。底径大。籾殻圧痕有。 | 35 | 17 |
| 151 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.1 | 6.7 | 4.9 | 高台幅広く丁寧、一部剥がれ。籾殻圧痕有。 | 35 | － |
| 152 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 14.6 | 6.1 | 5.2 | 内外面煤付着。内面使用。厚い。底径小。高台丸く低い。籾殻圧痕有。胴部丸い。 | 36 | － |
| 153 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.1 | 6.7 | 4.8 | 内外面煤付着。内面使用。底径小。高台薄く低く粗い。籾殻圧痕有。 | 36 | 17 |
| 154 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.4 | 7.7 | 4.3 | 口縁部打ち欠き。内面煤付着。高台低く外付け粗い。籾殻圧痕有。 | 36 | 17 |
| 155 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.7 | 7.4 | 5.1 | 内面割れ面煤付着。口縁部に打ち欠き。底径大。高台薄く低く粗い。籾殻圧痕有。 | 36 | － |
| 156 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 16.1 | 7.3 | 5.1 | 内外面煤付着。口縁部に打ち欠き。高台丸く低く外付け。籾殻圧痕有。 | 36 | － |
| 157 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.6 | 6.5 | 5.4 | 口縁部打ち欠き。高台丸く低く粗い。籾殻圧痕有。 | 36 | － |
| 158 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.4 | 7.3 | 4.5 | 内面使用。高台幅広く丁寧、一部剥がれ。籾殻圧痕有。 | 36 | － |

表16　土器観察表（5）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 分類・時期等 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 159 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.0 | 6.8 | 5.3 | 内面使用。胎土白色。高台粗い一部剥離。籾殻圧痕有。 | 36 | － |
| 160 | 東 | I-J14 | SE3 | 1,2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式（新） | 15.8 | 7.6 | 5.2 | 第6型式に近い。口縁部打ち欠き。高台粗く外付け一部剥離。籾殻圧痕有。 | 36 | 17 |
| 161 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 山茶碗 | 小型片口壺 | 美濃須衛 | Ⅸ期 | 9.3 | 7.9 | 8.1 | 片口の傍を故意に打ち欠いている、底部外面に下駄歯状圧痕有。内面に入れ子にして焼いた痕有。底部内面工具痕。白いチャートの角礫が入る。胴下半部外面回転ヘラ削り。 | 36 | 17 |
| 162 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 山茶碗 | 甕 | 美濃須衛 | Ⅸ期 | － | － | (14.7) | 胴下半部破片。輪積み痕有。内面指頭圧痕。 | 36 | 16 |
| 163 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 青磁 | 皿 | 中国 | 12～13世紀 | 9.6 | 4.0 | 2.6 | | 36 | 16 |
| 164 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 白磁 | 碗 | 中国 | Ⅳ類（12～13世紀） | 18.0 | － | (3.6) | 口縁部破片。 | 36 | 16 |
| 187 | 東 | I12 | SP098 | 2 | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 10世紀後半 | 19.9 | － | (7.4) | 口縁部短く折り返す。内外面煤付着。 | 39 | 16 |
| 189 | 西 | M5 | SB3-P2 | 3 | 須恵器 | 甕 | 猿投 | 不明 | － | － | (4.6) | 小破片で時期不明。断面セピア色。外面叩き。 | 44 | 18 |
| 190 | 西 | L5 | SK20 | 2 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 7.0 | (3.0) | 内面煤付着。胎土粗い。高台低く粗い。籾殻圧痕有。 | 45 | 18 |
| 191 | 西 | M5-6 | SP109 | 3 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 6.6 | (2.6) | 内面煤付着。内面使用。底部破片。高台丁寧。籾殻圧痕有。 | 45 | 18 |
| 192 | 西 | | TP10 | 5 | 須恵器 | 鉄鉢 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | － | 8.2 | (2.5) | 底部外面回転ヘラ削り。 | 46 | 18 |
| 193 | 西 | | 包含層 | 3 | 灰釉陶器 | 段皿 | 東濃 | 虎渓山1 | － | 6.4 | (1.9) | 高台低く外付け。ハケ塗り。底部外面回転ナデ。 | 46 | 18 |
| 194 | 西 | M6,7 | 包含層 | Ⅰ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第4型式 | － | 4.2 | (1.8) | 高台三角形丁寧。底径小。籾殻圧痕有。 | 46 | 18 |
| 195 | 西 | M7 | 包含層 | Ⅰ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第4型式 | 11.2 | － | (2.5) | 口縁部破片。 | 46 | 18 |
| 196 | 西 | N4 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 6.8 | (2.6) | 内面使用。高台三角形丁寧。籾殻圧痕有。 | 46 | 18 |
| 197 | 西 | N6 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | － | 4.2 | (0.8) | 底部破片。底径大。 | 46 | 18 |
| 198 | 西 | M6 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第6型式 | － | 6.5 | (3.6) | 口縁部打ち欠き。内外割れ面煤付着。内面使用。高台低く剥離。底径大。籾殻圧痕有。 | 46 | 18 |
| 199 | 西 | M,G6,15 | 包含層 | Ⅰ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第7型式 | － | 4.3 | (4.2) | 胎土粗い。高台低く粗い。底径小。籾殻圧痕有。 | 46 | 18 |
| 200 | 西 | | 包含層 | 2 | 青磁 | 碗 | 中国 | 12～13世紀 | 14.8 | － | (4.2) | 内面に飛雲文有。口縁部破片。 | 46 | 18 |
| 201 | 東 | H15 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | 台付甕 | | | － | 7.2 | (4.4) | | 47 | － |
| 202 | 東 | I12 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | 高坏 | | 廻間Ⅰか廻間Ⅱ（古） | － | － | (2.9) | 内外面摩耗。 | 47 | － |
| 203 | 東 | D12 | 包含層 | Ⅳ | 土師器 | 高坏 | | 古墳前～中期 | － | 9.7 | (2.2) | 松河戸式に伴うか。脚部破片。 | 47 | － |
| 204 | 東 | G14 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 長胴甕 | | 7世紀か | － | － | (4.4) | 頸部破片。内外煤付着。内面板ナデ。 | 47 | － |
| 205 | 東 | J12 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 長胴甕 | | | － | － | (5.0) | 胴部破片。外面ハケ目。外面煤付着。 | 47 | － |
| 206 | 東 | F11 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | 伊勢型鍋 | | ９世紀末～10世紀初 | 20.6 | － | (2.1) | 古い伊勢型鍋。外面煤付着。 | 47 | － |
| 207 | 東 | G13 | 包含層 | Ⅰ | 土師器 | 伊勢型鍋 | | 10世紀後半 | － | － | (2.6) | 古い伊勢型鍋。口縁やや折り返す。胴部内面ハケ。 | 47 | － |
| 208 | 東 | H13 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀後半 | 24.0 | － | (4.5) | 内外面煤付着。 | 47 | 18 |
| 209 | 東 | F11 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀後半 | 24.0 | － | (4.6) | 内外面煤付着。口縁部、内面板ナデ。 | 47 | 18 |
| 210 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀後半 | 24.2 | － | (5.5) | 口縁部内面肥厚。口縁部、内面板ナデ。内外面煤付着。 | 47 | － |
| 211 | 東 | G14 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀後半 | 18.6 | － | (4.6) | 口縁部内面肥厚。口縁部、内面板ナデ。内外面煤付着。 | 47 | － |
| 212 | 東 | G11 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀後半 | 26.0 | － | (3.8) | 口縁部内面を肥厚し上端平坦面幅広い。くの字状。内外板ナデ。 | 47 | 18 |
| 213 | 東 | H12 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀末 | 24.8 | － | (3.2) | 口縁部横へ摘み出す。内面板ナデ。 | 47 | 18 |
| 214 | 東 | H13 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 10世紀末 | 24.4 | － | (5.5) | 内外面煤付着。口縁部内面板ナデ。 | 47 | 18 |
| 215 | 東 | G11 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | 清郷型鍋 | | 11世紀 | 26.5 | － | (4.1) | 内面板ナデ。 | 47 | 18 |
| 216 | 東 | H12 | 包含層 | Ⅲ | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 12～13世紀 | 11.5 | － | (2.3) | 口縁部破片。 | 47 | 18 |

表17　土器観察表（6）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 分類・時期等 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 217 | 東 | J14 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 13世紀か | － | 5.0 | (1.5) | 底部破片。回転糸切り痕有。薄く小さい。内外摩耗。 | 47 | － |
| 218 | 東 | H14 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 13世紀 | － | 5.2 | (3.2) | 高い台付。底径小。 | 47 | 18 |
| 219 | 東 | I15 | 包含層 | Ⅱ | 土師器 | ロクロ土師器皿 | | 13世紀 | － | 5.5 | (1.8) | 低い台付。底径大。 | 47 | 18 |
| 222 | 東 | H,G11,12 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 甕 | 美濃須衛 | Ⅳ-3（8世紀後葉） | 31.1 | － | (17.6) | 屈折・外反・内側に摘み出す装飾的な口縁部。胴部内面当て具痕。胴部外面叩き。 | 47 | 19 |
| 223 | 東 | H11 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 蓋 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | 9.9 | － | (2.1) | 佐波理写し。 | 47 | 19 |
| 224 | 東 | I12 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 摘み蓋 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | 7.9 | － | (1.6) | 転用硯。内面に墨付着。外面上部回転ヘラ削り。 | 47 | 19 |
| 225 | 東 | J13 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 無台坏 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | － | 6.5 | (2.0) | ヘラ記号「二」か。内外面墨付着。底部外面使用。 | 47 | 19 |
| 226 | 東 | G11 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 無台坏 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | 11.4 | 6.6 | 3.4 | 底部外面ヘラ切り。 | 47 | 19 |
| 227 | 東 | H11 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 有台坏 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | － | 8.4 | (1.4) | 転用硯。内面使用、内面に墨付着。底部外面回転ヘラ削り。底部破片。 | 47 | 19 |
| 228 | 東 | I14 | 包含層 | Ⅱ | 須恵器 | 有台坏 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | － | 7.6 | (1.2) | 底部外面ヘラ記号。底部外面回転ヘラ切り。底部破片。 | 47 | 19 |
| 229 | 東 | F11 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 有台坏 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | － | 8.2 | (3.1) | | 47 | 19 |
| 230 | 東 | I12 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 有台盤 | 美濃須衛 | Ⅴ-1（9世紀中頃） | － | 10.7 | (1.9) | 外面胴下部回転ヘラ削り。 | 47 | 19 |
| 231 | 東 | H12 | 包含層 | Ⅲ | 須恵器 | 甕 | 美濃須衛 | Ⅴ期（9世紀初） | － | － | (4.6) | 内面目の細かい当て具痕。外面叩き。胴部破片。 | 47 | 19 |
| 232 | 東 | J12 | 包含層 | Ⅲ | 緑釉陶器 | 水瓶、壺 | | 平安 | － | 10.0 | (1.7) | 底部破片。軟質。胴下部外面回転ヘラ削り。底部外面にも緑釉有。 | 47 | 巻頭2 |
| 233 | 東 | F11 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 光ヶ丘1 | － | 5.6 | (2.2) | 三日月高台。底部外面回転ヘラ削り。 | 48 | － |
| 234 | 東 | F11 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 大原2 | － | 7.8 | (4.1) | 胎土灰色。ハケ塗り。胴部外面回転ヘラ削り。 | 48 | 19 |
| 235 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 大原2 | － | 7.1 | (2.8) | 内面使用。底部内面に工具痕か円文有。底部外面回転削り。ハケ塗り。 | 48 | － |
| 236 | 東 | H12 | 包含層 | Ⅳ | 灰釉陶器 | 皿 | 東濃 | 虎渓山1 | 12.2 | 7.0 | 1.9 | ハケ塗り。口縁端部丸い。 | 48 | － |
| 237 | 東 | H12 | 包含層 | Ⅳ | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 虎渓山1 | 13.0 | 6.4 | 4.1 | 回転糸切り痕有。胴部低い。釉薬薄いハケ塗りか。 | 48 | － |
| 238 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅱ | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 虎渓山1 | － | 7.4 | (2.4) | 底部外面回転ヘラ削り。内面使用。ハケ塗り。 | 48 | 19 |
| 239 | 東 | H12 | 包含層 | Ⅱ | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 虎渓山1 | － | 6.5 | (3.0) | ヘラ削り。高台厚く外付け。底部外面回転ヘラ削り。内面使用。 | 48 | － |
| 240 | 東 | I16 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 虎渓山1 | － | 7.6 | (4.0) | 胴部外面回転ヘラ削り。ハケ塗り。底部外面回転ヘラ削り。 | 48 | 19 |
| 241 | 東 | G13 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 虎渓山1 | － | 8.2 | (3.3) | 胴下部外面回転ヘラ削り。内面使用。 | 48 | － |
| 242 | 東 | H12 | 包含層 | Ⅱ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 虎渓山1 | － | 7.9 | (2.6) | ハケ塗り。胴下部外面回転ヘラ削り。 | 48 | － |
| 243 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 皿 | 東濃 | 丸石2 | 12.7 | 7.0 | 2.6 | 高台丸く外付け。浸け掛け。内面煤付着。回転糸切り痕有。 | 48 | － |
| 244 | 東 | H14 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 皿 | | 不明 | 14.3 | － | (2.3) | 胴下部外面回転ヘラ削り。ハケ塗り。 | 48 | － |
| 245 | 東 | H11 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 段皿 | 東濃 | 丸石2 | － | 6.4 | (2.1) | 回転糸切り痕有。高台丸く外付け。 | 48 | 19 |
| 246 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 段皿 | 東濃 | 丸石2 | 9.6 | － | (1.3) | 口縁外反。ハケ塗り。 | 48 | 19 |
| 247 | 東 | G12 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 丸石2 | 11.3 | 5.9 | 3.5 | ハケ塗り。内面使用。底部外面回転糸切り痕有。 | 48 | － |
| 248 | 東 | TP9 | 包含層 | Ⅰ | 灰釉陶器 | 碗 | 東濃 | 丸石2 | － | 6.5 | (1.8) | ハケ塗りか。底部外面回転糸切り痕有。高台外付け。 | 48 | － |
| 249 | 東 | J12 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 丸石2 | － | 6.8 | (3.0) | 三日月の伸びた高台。内面使用。ハケ塗り。 | 48 | － |
| 250 | 東 | G12 | 包含層 | Ⅱ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 丸石2 | － | 6.6 | (2.8) | ハケ塗り。内面使用。外面煤付着。 | 48 | － |
| 251 | 東 | I15 | 包含層 | Ⅳ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 丸石2 | － | 6.8 | (2.4) | 底部外面回転糸切り痕有。ハケ塗りか。 | 48 | － |

表18　土器観察表（7）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 産地 | 分類・時期等 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 252 | 東 | TP9 | 包含層 | Ⅰ | 灰釉陶器 | 香炉か段皿 | | 11世紀 | 10.6 | － | (2.1) | 口縁有段外反。ハケ塗りか。 | 48 | 19 |
| 253 | 東 | H13 | 包含層 | Ⅱ | 灰釉陶器 | 深碗 | 東濃 | 明和27 | － | 7.5 | (2.2) | 底部外面回転糸切り痕有。 | 48 | 19 |
| 254 | 東 | I15 | 包含層 | Ⅳ | 灰釉陶器 | 平瓶か | 東濃 | 不明 | 11.3 | － | (2.5) | 口縁部破片。 | 48 | 19 |
| 255 | 東 | I14,15 | 包含層 | Ⅰ | 灰釉陶器 | 長頸瓶 | 東濃 | 不明 | － | － | (6.6) | 頸部破片。 | 48 | 19 |
| 256 | 東 | G,H14 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 瓶 | 東濃 | 不明 | － | － | (9.3) | 外面に墨書「大」か。ハケ塗り。胴下半部外面回転ヘラ削り。底部破片。 | 48 | 17 |
| 257 | 東 | H,J14,15 | 包含層 | Ⅰ | 灰釉陶器 | 瓶 | 東濃 | 不明 | － | － | (10.6) | ハケ塗り。胴下半部外面回転ヘラ削り。底部破片。 | 48 | － |
| 258 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 灰釉陶器 | 瓶 | 東濃 | 不明 | － | 7.0 | (4.1) | 底部内面指頭圧痕。外面回転ヘラ削り。底部外面ヘラ切り。ハケ塗り。底部破片。 | 48 | 19 |
| 259 | 東 | J14 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第3型式 | － | 8.0 | (2.8) | 胎土灰白色。内面使用。底部外面回転糸切り痕有。 | 48 | － |
| 260 | 東 | TP9 | 包含層 | 1 | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第3型式 | － | 8.0 | (3.0) | 底部外面回転ナデ。ハケ塗り。内面使用。高台三角形。 | 48 | － |
| 261 | 東 | I15 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第3か4型式 | 10.8 | － | (2.5) | 口縁部破片。 | 48 | － |
| 262 | 東 | H15 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第4型式 | 9.5 | 5.0 | 2.2 | 内面使用。高台低い。底径小。 | 48 | － |
| 263 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 8.5 | (1.8) | 内面煤付着。底部破片。高台丁寧。籾殻圧痕有。 | 48 | － |
| 264 | 東 | H15 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 8.0 | (3.7) | 内外面割れ面に付着物（漆か）。高台丁寧。籾殻圧痕無し。 | 48 | － |
| 265 | 東 | F12 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第4型式 | － | 7.9 | (1.7) | 高台丁寧。籾殻圧痕無し。 | 48 | － |
| 266 | 東 | J14 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 7.4 | 3.8 | 2.0 | 底部外面墨書（花押）。底径小。 | 48 | 17 |
| 267 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 7.8 | 4.0 | 2.2 | 底径大。 | 48 | － |
| 268 | 東 | G14 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 皿 | 尾張 | 第5型式 | 8.4 | 4.7 | 2.7 | 内面使用。底径大。 | 48 | － |
| 269 | 東 | G14 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 12.6 | － | (2.5) | 内面文様か線刻有。 | 48 | 19 |
| 270 | 東 | I13 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | 15.6 | 7.6 | 4.8 | 内面使用。高台粗く低い。胎土砂多い。籾殻圧痕有。 | 48 | － |
| 271 | 東 | H,I14 | 包含層 | Ⅱ | 山茶碗 | 碗 | 尾張 | 第5型式 | － | 7.2 | (1.6) | 内面使用。胎土白い。底部破片。高台雑。籾殻圧痕有。 | 48 | － |
| 272 | 東 | F11 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 東濃か | 第5型式並行 | － | 6.1 | (2.1) | 内面使用。高台太く幅広い。籾殻圧痕有。底部破片。 | 48 | － |
| 273 | 東 | I15 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 美濃須衛 | Ⅷ期（第4型式並行） | － | 7.8 | (2.6) | 高台丁寧低い。内面使用。 | 48 | 19 |
| 274 | 東 | H15 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 美濃須衛 | Ⅷ～Ⅸ期（第5型式並行） | － | 8.0 | (2.7) | 高台三角形。籾殻圧痕少し有。内面煤付着。 | 48 | － |
| 275 | 東 | H14 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 美濃須衛 | Ⅷ～Ⅸ期（第5型式並行） | － | 10.0 | (2.3) | 軟質。へそ状突起、粘土紐巻き痕有。底部内面煤付着。 | 48 | 19 |
| 276 | 東 | H15 | 包含層 | Ⅲ | 山茶碗 | 碗 | 美濃須衛 | 不明 | － | 7.5 | (2.8) | 内面使用。高台にキザミか。胎土砂多い。 | 48 | － |
| 277 | 東 | G14 | 包含層 | Ⅰ | 山茶碗 | 広口瓶 | 猿投 | 12世紀 | － | 14.0 | (4.6) | 底部破片。内面指頭圧痕。胴下部外面回転ヘラ削り。底部外面削り。 | 48 | 19 |

表19　木製品観察表（1）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 用途 | 種別 | 樹種 | 木取り | 先端形状 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 東 | J13 | SE1 | － | 容器 | 曲物 | ヒノキ | － | － | | 高さ(11.5) | 0.53 | 曲物１段目。残存状況不良。 | 16 | － |
| 8 | 東 | J13 | SE1 | － | 容器 | 曲物 | ヒノキ | － | － | 直径55.8 | 高さ10.2 | 0.55 | 曲物２段目。内面に掻引き線。重なる部分を樹皮で留めている。 | 16 | 20 |
| 9 | 東 | J13 | SE1 | － | 容器 | 曲物 | ヒノキ | － | － | 直径55.8 | 高さ10.2 | 0.53 | 曲物３段目。下部に底板を付けた木釘穴有。重なる部分を樹皮で留めている。 | 16 | 20 |
| 10 | 東 | J13 | SE1 | － | 容器 | 曲物底板 | ヒノキ | Ⅳ | － | (48.6) | 31.0 | 1.4 | 上端部、左側部欠損。側面に木釘穴有,木釘残存。 | 16 | 20 |
| 11 | 東 | J13 | SE1 | 3 | 用途不明品 | 筒 | ウツギ属 | Ⅰ | － | (16.8) | 1.6 | 1.6 | 12と同一か。井戸枠側から出土。中心に直径7mmの空洞有。上下端部欠損。 | 16 | 20 |
| 12 | 東 | J13 | SE1 | 12 | 用途不明品 | 筒 | ウツギ属 | Ⅰ | － | (17.0) | 1.7 | 1.6 | 11と同一か。井戸枠側から出土。中心に直径7mmの空洞有。上下端部欠損。 | 16 | 20 |
| 53 | 東 | F-G11-12 | NR1 | 1 | 祭祀具 | 斎串か | ヒノキ科 | Ⅱ-2 | 3 | 26.5 | 4.8 | 2.5 | 表面下端部炭化。下端部尖るか一部欠損。断面三角形。 | 19 | 20 |
| 59 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 用途不明品 | 板材 | ヒノキ | Ⅳ | － | 10.6 | 3.0 | 0.7 | 厚さ7mmの板材。墨痕有か。上左端部の２つの穿孔に木釘残存。赤外線写真撮影：裏面に４文字分の墨痕有、判読不能。表面に刃物痕有。上下端部切断。左右側面欠損。 | 23 | 20 |
| 60 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 用途不明品 | 板材 | ヒノキ | Ⅳ | － | (12.4) | 3.8 | 0.6 | 厚さ6mmの板材。表面使用か摩耗。墨痕無し。上下端部左右側面欠損。 | 23 | 20 |
| 61 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 用途不明品 | 板材 | ヒノキ | Ⅳ | － | (10.9) | 3.6 | 0.5 | 表面に刃物痕有。上端部切断。下端部左右側面欠損。 | 23 | 20 |
| 62 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 用途不明品 | 角材破材 | ヒノキ | Ⅲ | － | 12.5 | 8.0 | 4.0 | 表面下端部、裏面上端部に金属による切断痕有。裏面下端部剥離。 | 23 | 20 |
| 63 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 籠編物 | 笊 | ヒノキ | － | － | 27.0 | 22.0 | 0.2 | 南側。 | 22 | 10 |
| 64 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 籠編物 | 柄か | スギ | Ⅳ | － | 34.0 | 1.0 | 0.3 | 笊の一部か。全面に漆付着か。上端部欠損。 | 23 | 20 |
| 65 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 籠編物 | 留紐 | 樹皮 | － | － | (24.0) | 0.5 | 0.1 | 桜の樹皮。笊の一部か。 | 23 | 20 |
| 69 | 東 | J13 | SB1-P1 | 1 | 建築部材 | 柱 | モミ属 | Ⅰ | 2 | 34.0 | 12.0 | 13.0 | チョウナによる加工痕有。刃こぼれ痕有。下部に伐採時の２方向からのチョウナ痕有。中央部に柱材運搬時の縄をかけるための凹みを上方下方の２方向からチョウナで加工している。下端部炭化か。 | 29 | 22 |
| 70 | 東 | J13 | SB1-P2 | 1 | 建築部材 | 柱 | モミ属 | Ⅰ | 2 | 27.0 | 14.0 | 13.0 | 5cm幅のチョウナで加工。刃こぼれ痕有。下端部に伐採時の３方向からのチョウナ痕有。柱材運搬時に縄をかけるための抉り有。 | 29 | 22 |
| 165 | 東 | I-J14 | SE3 | e | 装身具 | 扇子 | トウヒ属 | Ⅳ | 3 | (27.0) | 1.4 | 0.7 | 親骨。要付着。上端部折損。下端部に面取り。 | 37 | 21 |
| 166 | 東 | I-J14 | SE3 | e | 装身具 | 扇子 | トウヒ属 | Ⅳ | － | (28.3) | 1.4 | 0.4 | 中骨。上端部折損。表面に７文字以上有、うち一文字は「々」、その他は不明。裏面に６文字分の墨痕有、判読不能。 | 37 | 21 |
| 167 | 東 | I-J14 | SE3 | e | 装身具 | 扇子 | トウヒ属 | Ⅳ | － | (23.8) | 1.3 | 0.4 | 親骨。上下端部欠損。右側縁部一部欠損。 | 37 | 21 |
| 168 | 東 | I-J14 | SE3 | e | 祭祀具 | 斎串 | ヒノキ | Ⅳ | － | (21.5) | 1.3 | 0.7 | 両面に刃物痕有。表面下端部切断。 | 37 | 21 |
| 169 | 東 | I-J14 | SE3 | e | 祭祀具 | 斎串 | マダケ属 | Ⅱ-4 | 3 | 23.9 | 2.2 | 0.5 | 竹を割き、下端部を加工し尖らせている。 | 37 | 21 |
| 170 | 東 | I-J14 | SE3 | e | 祭祀具 | 斎串か | イネ科タケ亜科 | Ⅱ-4 | － | 13.4 | 1.3 | 0.2 | 竹を薄く割いている。 | 37 | 21 |
| 171 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 用途不明品 | 板材 | ヒノキ | Ⅳ | － | 6.1 | 9.2 | 0.9 | 樹皮止紐有。172と同一、接点無し。表面上端に墨痕有。表面は0.7～1.0cm幅のヤリガンナで加工。表裏面に刃物痕有。左右端部欠損。 | 37 | 22 |
| 172 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 用途不明品 | 板材 | ヒノキ | Ⅳ | － | (6.4) | 3.8 | 1.1 | 171と同一、接点無し。表面に墨痕有。表面は0.7cm幅のヤリガンナで加工。表裏面に刃物痕有。上端部切断。 | 37 | 22 |
| 173 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 用途不明品 | 板材 | モミ属 | Ⅳ | － | 17.9 | 5.6 | 0.6 | 上下端部左右側面欠損。 | 37 | 22 |

### 表20　木製品観察表（2）

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 用途 | 種別 | 樹種 | 木取り | 先端形状 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 174 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 用途不明品 | 板材 | ヒノキ | Ⅳ | － | 15.9 | 15.0 | 0.7 | 一部煤付着。表面に多数の刃物痕有。上端部は水平に切断、下端部は斜めに切断。左右側面欠損。 | 37 | 22 |
| 175 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 用途不明品 | 板材 | ヒノキ | Ⅳ | － | (4.7) | 2.4 | 0.2 | 薄い板。上端部切断痕。下端部左右側面欠損。 | 37 | － |
| 176 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 服飾具 | 下駄 | センダン | Ⅳ | － | 20.6 | 11.8 | 1.1 | 177と同一個体と思われるが接点無し。裏面に削り出しの歯が平行して２本有。かかと側の歯が磨り減っている。表面中央部やや凹む。鼻緒を通す眼（穿孔）2つ有。 | 38 | 22 |
| 177 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 服飾具 | 下駄 | センダン | Ⅳ | － | － | － | － | 176と同一個体と思われるが接点無し。裏面に削り出しの歯が平行して２本有。かかと側の歯が磨り減っている。表面中央部やや凹む。下部欠損。 | 38 | 22 |
| 178 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 服飾具 | 下駄 | 広葉樹(散孔材) | Ⅳ | － | 16.6 | 3.5 | 1.1 | つま先部分の穿孔１つ有。表面の一部のみ残存。 | 38 | 22 |
| 179 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 紡織具 | 手押木 | ヒノキ | Ⅳ | － | 14.0 | 3.3 | 2.2 | 左側面欠損。裏面上部欠損。0.9cmの穿孔有。 | 38 | 21 |
| 180 | 東 | I-J14 | SE3 | e | 用途不明品 | 鞘か | イネ科タケ亜科 | － | － | (15.8) | 2.7 | 1.0 | 竹を扁平に加工か。下端部切断。上端部欠損。 | 38 | 21 |
| 181 | 東 | I-J14 | SE3 | f | 農具か | 柄か | コナラ属アカガシ亜属 | Ⅲ | 3 | (29.1) | 3.5 | 3.4 | 上部で屈曲する。磨きに近い削り加工痕有。下部欠損。 | 38 | 21 |
| 182 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 籠編物 | 留紐 | 樹皮 | － | － | (5.7) | 0.9 | 0.04 | 桜の樹皮。笊の留紐か。 | 38 | － |
| 183 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 籠編物 | 笊 | イネ科 | － | － | 39.0 | 27.0 | 0.2 | 北側。 | 33 | 7 |
| 184 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 籠編物 | 笊 | ヒノキ | － | － | 47.0 | 32.0 | 0.2 | | 33 | 7 |
| 186 | 東 | F14 | SP097 | 1 | 建築部材 | 柱 | クリ | Ⅰ | 3 | 21.0 | 8.0 | 8.0 | 下端部に伐採時の２方向からの切断痕有。樹皮一部残存。上端部欠損。 | 39 | 22 |
| 188 | 西 | N5 | SA3-P3 | 2 | 祭祀具 | 斎串 | ヒノキ | Ⅳ | 1 | (17.2) | 1.6 | 1.1 | 下端部炭化。下端部先端欠損。裏面下端部剥離か。 | 41 | 20 |
| 278 | 東 | G12 | NR上層 | Ⅲ | 祭祀具 | 斎串 | ヒノキ科 | Ⅳ | 3 | (36.5) | 1.3 | 0.8 | 左側面下端部に加工痕有。 | 48 | 20 |

### 表21　土錘観察表

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 孔径(cm) | 重さ(g) | 時期 | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 5.3 | 2.2 | 1.0 | 21.7 | 中世 | 棒形。太く長い。 | 21 | 12 |
| 75 | 東 | G13 | SD4 | 1 | 4.2 | 1.1 | 0.5 | 5.1 | 中世 | 棒形。細く短い。上端部一部欠損。 | 31 | － |
| 125 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 5.1 | 1.9 | 1.0 | 17.7 | 中世 | 棒形。太く長い。 | 35 | 16 |
| 126 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | 5.0 | 2.1 | 1.0 | 21.6 | 中世 | 棒形。太く長い。 | 35 | 16 |
| 127 | 東 | I-J14 | SE3 | 2 | (4.4) | 2.1 | 1.0 | 18.8 | 中世 | 棒形。太く長い。下端部欠損。 | 35 | 16 |
| 220 | 東 | G13 | 包含層 | Ⅱ | 3.8 | 1.3 | 0.4 | 5.7 | 中世 | 棒形。細く短い。下端部欠損。 | 47 | － |
| 221 | 東 | G15 | 包含層 | Ⅰ | 4.2 | 1.2 | 0.4 | 5.4 | 中世 | 棒形。細く短い。下端部欠損。 | 47 | － |

### 表22　石器観察表

| 掲載番号 | 地区名 | ｸﾞﾘｯﾄﾞ名 | 遺構名 | 層位 | 器種 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 時期 | 備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 東 | J13 | SE1 | 1 | 磨石か | 花崗岩 | (15.1) | 10.0 | 9.2 | 1958.0 | 中世 | 被熱有。左側上部下部欠損。 | 16 | － |
| 37 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 砥石 | 班れい岩 | (10.5) | 7.2 | 2.7 | 240.0 | 中世 | 両面砥面有。砥面再生か剥離有。 | 21 | 22 |
| 38 | 東 | I13 | SE2 | 1 | 磨石 | 安山岩 | 17.3 | 9.8 | 8.0 | 1471.5 | 中世 | 割れ後に全面煤付着。磨面有。 | 21 | 22 |
| 66 | 東 | I-J13 | SK10 | 1 | 叩石 | 流紋岩 | 13.7 | 7.1 | 4.5 | 713.5 | 中世 | ほぼ全面に煤付着。外面に叩き痕。 | 23 | 22 |
| 185 | 東 | I-J14 | SE3 | 1 | 砥石か | ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ | 8.4 | 6.8 | 1.9 | 138.0 | 中世 | 砥面に砥面調整敲打痕有り。全面に煤付着。 | 38 | 22 |

# 第４章　自然科学分析

## 第１節　出土木製品年代測定

### １　はじめに

当遺跡では第１面において溝跡、土坑、井戸跡などの遺構を検出した。同一遺構面において柱材の残存する柱穴を３基検出した。しかしこれらは、表土および耕作土を重機で掘削後の状況で、地表面から非常に浅い位置で検出し、柱材には陶器等の遺物も伴っていない。このため、周辺で検出した遺構との時期関係を検証するために、柱材の年代測定を実施した。分析は高橋敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）が担当した。

### ２　試料

放射性年代測定を実施する柱材は、東地区第１面で検出された 69（SB1-P1）、70（SB1-P2）、186（SP097）の３点である（表 23）。

**表23　年代測定対象木製品の一覧**

| 試料番号 | 掲載番号 | 遺構名 | 種別等 | | | 大きさ（cm） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 種別 | 木取り | 先端形状 | 長さ | 幅 | 厚さ |
| 1 | 69 | SB1P1 | 柱材 | 芯持材 | 4面で加工 | 34.0 | 12.0 | 13.0 |
| 2 | 70 | SB1P2 | 柱材 | 芯持材 | 3面で加工 | 27.0 | 14.0 | 13.0 |
| 3 | 186 | SP097 | 柱材 | 芯持材 | 2面で加工 | 21.0 | 8.0 | 8.0 |

年代測定用試料は、調査担当者立ち会いのもと、採取位置を確認の上、各柱材の残存する年輪の最外部から測定に必要な最小量を採取した。このうち、70 は樹皮が残存しており、最外年輪から２年分に相当する年輪を試料とした。

なお、分析対象とした柱材の樹種を確認するため、取上時に分離していた材の破片について樹種同定を実施した。樹種同定は剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の切片を採取し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入したプレパラートを作製の上、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類(分類群)を同定した。木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Richter 他(2006)を参考にする。その結果、69 と 186 は以下に示す解剖学的特徴が確認されたことから針葉樹のモミ属に同定された。70 は、針葉樹の樹皮であったため種類は特定できなかった。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個。放射組織は単列、１～20 細胞高。

### ３　分析方法

年代測定は、AMS 法で実施する。採取試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。1Ｎの塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(AAA 処理)。なお、水酸化ナトリウム処理については、試料の損耗がおこるため、注意深く行う。

処理後の試料を燃焼させたあと、不純物(水など)を取り除き、精製された $CO_2$ を得る。これを還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加

速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いてδ$^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0 を用いる。なお暦年較正とは、大気中の $^{14}C$ 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}C$ 濃度の変動および半減期の違い（$^{14}C$ の半減期 5,730±40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σと２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が 95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とはσや２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

**表24　放射性炭素年代測定および暦年較正結果**

| 遺物番号<br>遺構番号 | 処理方法 | 測定年代(BP) | δ13C(‰) | 補正年代(暦年較正用)(BP) | 暦年較正結果 | | | | Code No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 分散度 | cal AD | cal BP | 相対比 | |
| 69<br>SB1P1 | AAA | 950±20 | -26.74±0.17 | 920±20<br>(917±21) | σ | cal AD 1,046 - cal AD 1,091 | cal BP 904 - 859 | 0.620 | IAAA-131502 |
| | | | | | | cal AD 1,121 - cal AD 1,135 | cal BP 829 - 815 | 0.249 | |
| | | | | | | cal AD 1,151 - cal AD 1,183 | cal BP 799 - 767 | 0.131 | |
| | | | | | 2σ | cal AD 1,037 - cal AD 1,163 | cal BP 913 - 787 | 1.000 | |
| 70<br>SB1P2 | AAA | 930±20 | -27.05±0.17 | 900±20<br>(895±21) | σ | cal AD 1,050 - cal AD 1,083 | cal BP 900 - 867 | 0.486 | IAAA-131503 |
| | | | | | | cal AD 1,126 - cal AD 1,135 | cal BP 824 - 815 | 0.092 | |
| | | | | | | cal AD 1,151 - cal AD 1,210 | cal BP 799 - 740 | 0.423 | |
| | | | | | 2σ | cal AD 1,044 - cal AD 1,100 | cal BP 906 - 850 | 0.428 | |
| | | | | | | cal AD 1,119 - cal AD 1,210 | cal BP 831 - 740 | 0.572 | |
| 186<br>SP097 | AAA | 910±20 | -26.50±0.18 | 890±20<br>(887±21) | 2σ | cal AD 1,054 - cal AD 1,078 | cal BP 896 - 872 | 0.304 | IAAA-131504 |
| | | | | | | cal AD 1,153 - cal AD 1,191 | cal BP 797 - 759 | 0.620 | |
| | | | | | | cal AD 1,198 - cal AD 1,204 | cal BP 752 - 746 | 0.075 | |
| | | | | | 2σ | cal AD 1,046 - cal AD 1,093 | cal BP 904 - 857 | 0.308 | |
| | | | | | | cal AD 1,120 - cal AD 1,140 | cal BP 830 - 810 | 0.078 | |
| | | | | | | cal AD 1,147 - cal AD 1,216 | cal BP 803 - 734 | 0.614 | |

1)処理方法のAAAは、1Nの塩酸ならびに水酸化ナトリウムを用いる、酸処理ーアルカリ処理ー酸処理を示す。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
3)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。暦年の計算には、補正年代の括弧内に示した一桁目を丸める前の値を使用。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσが68.3%、2σが95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

## ４　結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表 24、図 61 に示す。また各柱材の暦年較正結果の比較を図 61 に示す。

各柱材の補正年代と暦年較正年代（2σ確率１位の値）をみると、69 が 920±20 BP(calAD 1037-1163)、70 が 900±20BP (cal AD 1119-1210)、186 が 890 ±20 BP（cal AD 1147-1216）を示した。

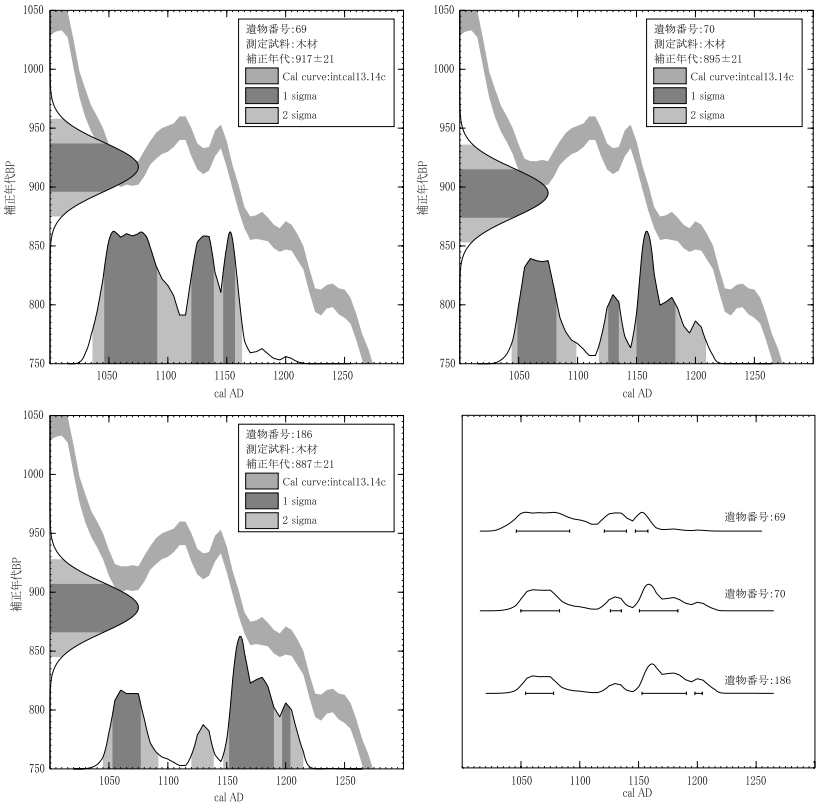



図61　暦年較正結果

５　総括

今回調査を行った柱材の年代値は、上記したように誤差範囲内で一致した値を示した。柱材のうち、69については樹皮が残存しており、最外年輪部分から試料採取していることから、得られた年代値は伐採年を示している可能性が高い。今回の柱材が、転用材や古木を利用していないとすると、柱材としての利用年代は暦年較正結果から 12 世紀から 13 世紀初頭と推定される。

なお、柱材の樹種は、69 と 186 がモミ属に同定された。モミ属に含まれる種は、温帯に生育するモミ、温帯北部から亜高山帯に分布するウラジロモミ、亜高山帯に分布するシラビソ、オオシラビソなどが含まれる。今回の遺跡の立地を考えると、モミに由来する可能性が高い。モミはツガ、スギ、ヒノキ、コウヤマキなどと同様の温帯性針葉樹である。温帯性針葉樹は地すべり地など地表攪乱によって鉱質土壌が露出する場所がセーフサイト（植物の発芽・定着に適した場所）となっている（中静、2004)。当時も後背の扇状地や台地斜面などに分布していた可能性は充分考えられる。

また、モミ属の木材は、木理が通直で割裂性が高く、軽軟で加工は容易であるが、強度と保存性は低い材質を有している。伊東・山田 編（2012）によると、本遺跡周辺における鎌倉時代の建築部材の樹種同定結果は、曽根八千代遺跡(大垣市)の柱材の調査例があり、クリとサカキが確認されている。時代を室町時代前半まで広げてみると、曽根城跡(大垣市)の柱にモミ属が利用されていることが確認されている。

６　考察

SB1、SB2、SP097 の遺構年代を 12 世紀から 13 世紀と推定されることから、東地区第１面で検出した鎌倉時代初頭の SE3 と同時期と考える。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久(編)、2012、木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社、449p.

中静　透、2004、日本の森林／多様性の生物学シリーズ①　森のスケッチ.東海大学出版会、236p.

Reimer J Paula・ Bard Edouard・ Bayliss Alex・Beck J Warren・ Blackwell G Paul・ Ramsey Bronk Christopher・ Buck E Caitlin・ Cheng Hai・ Edwards R Lawrence・ Friedrich Michael・ Grootes M Pieter・ Guilderson P Thomas・ Haflidason Haflidi・ Hajdas Irka・ Hatté Christine・ Heaton J Timothy・ Hoffmann Dirk L・ Hogg G Alan・ Hughen A Konrad・ Kaiser K Felix・ Kromer Bernd・ Manning W Sturt・ Niu Mu・ Reimer W Ron・ Richards A David・ Scott E Marian・ Southon R John・ Staff A Richard・ Turney S M Christian・ Plicht van der Johannes、2013、 Intcal13 and Marine13 Radiocarbon age Calibration curves 0- 50、000 years cal BP.RADIOCARBON、55、1869- 1887.

Richter H.G.、Grosser D.、Heinz I. and Gasson P.E. (編)、2006、針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修)、海青社、70p.［Richter H.G.、Grosser D.、Heinz I. and Gasson P.E.(2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東　隆夫、1982、図説木材組織.地球社、176p.

## 第２節　出土木製品墨痕の赤外線写真撮影

### １　はじめに

当遺跡の SE3 と SK10 から出土した木製品の一部に墨痕らしきものが認められた。SE3 からは木製品とともに多数の完形の山茶碗等や板状木製品、笊等が出土し、井戸を閉じる際に祭りを行っていると判断した。井戸からは呪符木簡が出土したり木製品に墨で絵が描かれていることもあり、井戸の祭祀に係わる文字資料等が残存している可能性が考えられた。SK10 は SE3 の西５ｍの位置にあり、煤の付着した山茶碗と煤が付着しない山茶碗がセットで出土し、笊等が出土している。井戸３基の側にあり、祭りを行っている土坑の可能性が考えられる。ここでは、肉眼で墨痕らしきものがあると判断した木製品５点について、赤外線写真撮影を行い判読を試みた。なお、分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当したが、赤外線写真撮影には、奈良大学西山要一教授を通じて奈良大学保存科学研究室の撮影装置を使用し、また文字については、奈良大学東野治之氏が判読した。

### ２　試料と方法

分析対象は、井戸 SE3 から出土した木製品３点および土坑 SK10 から出土した木製品２点の計５点で、出土山茶碗から時期は鎌倉時代初頭と考えている（表 25）。

撮影には、赤外線カメラに浜松ホトニクス製 C8800-21C、アダプタに同 A3472-06 AC ADAPTOR、赤外線ライトに同 IR Light Source C1385-02 を使用した。

**表25　墨痕分析対象一覧**

| No. | 調査面 | 地区名 | 掲載番号 | 地区割り | | 出土遺構 | | 寸法(cm) | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 南北 | 東西 | 遺構名 | 層位 | 長さ | 幅 | 厚さ | |
| 1 | 2 | 東 | 59 | I-J | 13 | SK10 | 1 | 10.0 | 3.0 | 0.7 | 裏面に４文字有。穿孔に木釘残存。 |
| 2 | 2 | 東 | 60 | I-J | 13 | SK10 | 1 | (12.0) | 4.0 | 0.7 | |
| 3 | 1 | 東 | 166 | I-J | 14 | SE3 | e | (28.5) | 1.5 | 0.4 | 表裏に文字有。上端部折損。中骨。 |
| 4 | 1 | 東 | 171 | I-J | 14 | SE3 | 2 | 9.0 | 6.0 | 1.5 | 表面に墨痕有。樹皮止紐有。172と同一、接点無し。 |
| 5 | 1 | 東 | 172 | I-J | 14 | SE3 | 2 | 5.0 | 4.0 | 1.0 | 表面に墨痕有。171と同一、接点無し。 |

### ３　結果

59（写真 11）表面は、墨痕が認められなかった。裏面は、４字分の文字とみられる墨痕が認められたが、判読不能であった。

60　表裏面ともに、墨痕が認められなかった。

166（写真 12）形状より、扇の中骨とみられる。表面は、７字以上の文字とみられる墨痕が認められ、うち１文字は「々」とみられるが、その他は判読不能であった。裏面は、６字分の文字とみられる墨痕が認められたが、判読不能であった。

171（写真 11）表面は、上端に墨痕が明瞭に認められるものの、切断されており、文字であるか判断できない。裏面は、墨痕のようなものが認められたものの、文字であるか判断できなかった。

172（写真 11）表面は、墨痕のようなものが認められたものの、文字であるか判断できなかった。裏面は、墨痕は認められなかった。

### ４　考察

５点の内の４点から墨痕が確認された。このうち SK10 出土の 59 は裏面に４文字分の墨痕が確認され、SE3 から出土した 166 の表面から７文字以上、裏面から６文字分の墨痕が確認された。166 は扇子の中骨で、

文字が書かれた板状木製品の再利用ではなく、扇子の骨の細長い部分の両面に文字を書いているようである。166 は周辺にも同じ大きさの木製品が出土しており、井戸を閉じる祭りを行う際に結界を張るために斎串として使用したものではないかと考えており、文字は判読できなかったが、斎串として使用した際に記入したものと考えられる。

参考文献

三浦定俊・石川陸郎（1980）最近の赤外線テレビカメラの利用、保存科学、第 19 号、21-28、東京文化財研究所.

三浦定俊（2003）赤外線(IR)写真撮影・赤外線リフレクト・トランスミッシオグラフィー、文化財科学の事典、287-290、朝倉書店.

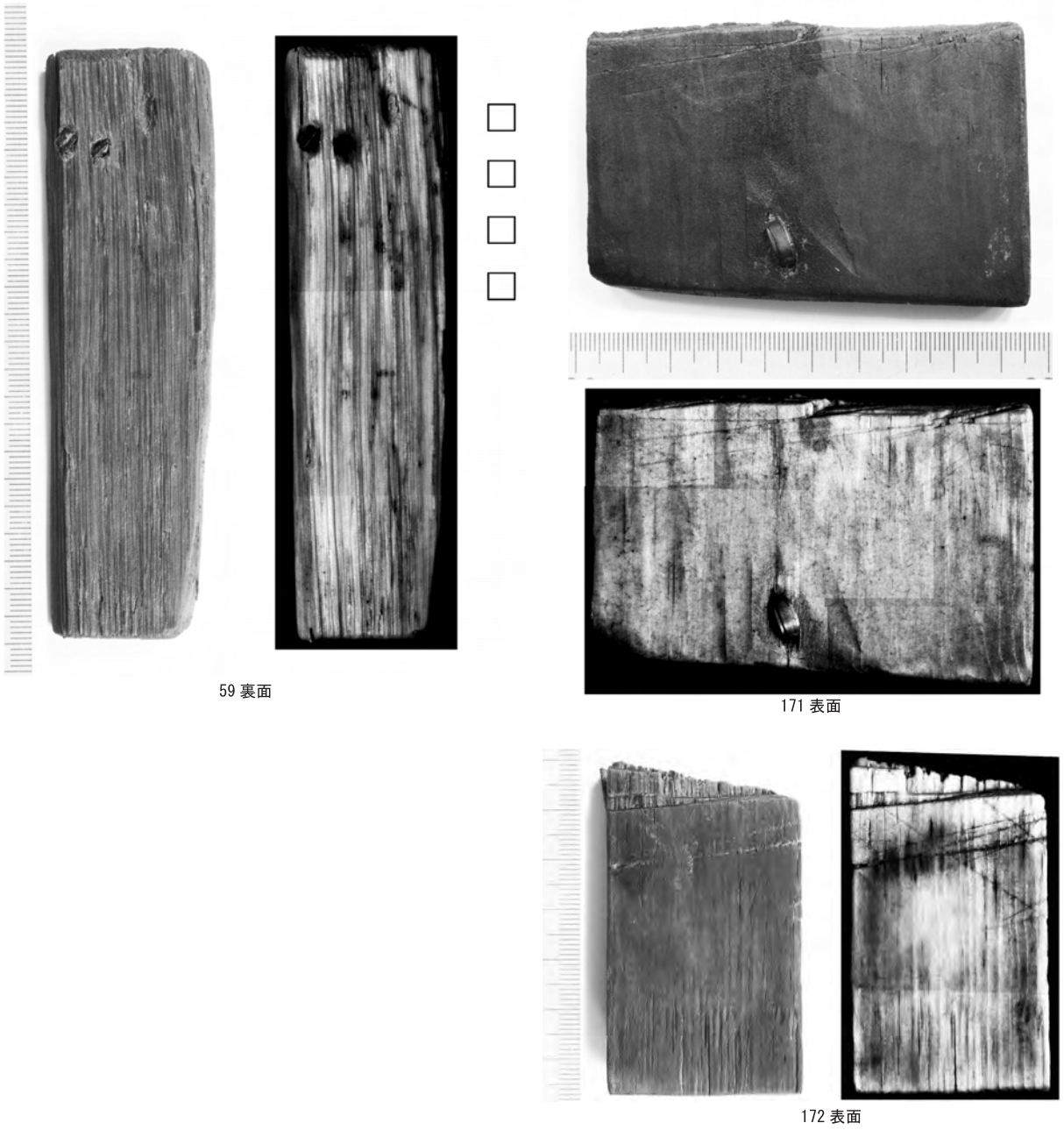



写真 11　59, 171, 172 赤外線写真

166 表　　166 表文字部分拡大　　166 裏

写真 12　166 赤外線写真

# 第３節　出土木製品樹種同定

１　はじめに

当遺跡の平安時代前期の遺構 SE1、SK10、NR1、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構 SB1-P1、SB1-P2、SE3、SP097 から出土した木製品の中で報告書に掲載するものを保存処理の対象とし、保存処理前に樹種同定を実施した。樹種同定及び保存処理、同定結果から木製品と樹種の関係や木材利用について周辺事例を踏まえた解析を植村明男（株式会社文化財サービス）が担当した。赤外線写真撮影で墨痕があるとわかった扇子の骨や板材は真空凍結乾燥法で、それ以外を PEG 含浸法で実施している。

２　試料

試料は 39 点で、このうち、遺存状態が悪い 183（笊）については、薄片作成の手法でプレパラートを作成する。

３　分析方法

木製品の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。183 については、脆弱な保存状態であったことから端部から長さ約 1 cmの木片を採取し、合成樹脂で包埋し固化させた。固化した木部の横断面が得られるようにダイヤモンドカッターで切断し切断面を研磨した。研磨面をスライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行って同定プレパラートとした。

プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995、1996、1997、1998、1999)を参考にする。

４　結果

樹種同定結果を表 26 に示す。当遺跡の木製品は、針葉樹５分類群(モミ属・トウヒ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科)、広葉樹４分類群(コナラ属アカガシ亜属・クリ・ウツギ属・センダン)とマダケ属、イネ科タケ亜科、イネ科に同定された。なお、65、182 は樹皮であり、外観等から桜皮(サクラ属)あるいは樺皮(カバノキ属)と考えられるが、木部細胞が残っていないため、樹種は不明である。また、178 は散孔材の組織配列を持つ広葉樹であるが、収縮の痕跡があり、保存状態も悪く、種類は不明である。

同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

軸方向組織は、基本的に仮道管のみで構成されるが、69 では傷害樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１-４個。放射組織は単列、１-20 細胞高。

・トウヒ属（*Picea*）　マツ科

軸方向組織は、仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は、晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピ

表26　樹種同定結果

| | 掲載番号 | 出土遺構 | | 種別 | 木取り | 時期 | 樹種(分類群) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 遺構名 | 遺構層位 | | | | |
| 1 | 7 | SE1 | － | 曲物 | 板目 | 平安前期 | ヒノキ |
| 2 | 8 | SE1 | － | 曲物 | 板目 | 平安前期 | ヒノキ |
| 3 | 9 | SE1 | － | 曲物 | 板目 | 平安前期 | ヒノキ |
| 4 | 10 | SE1 | － | 曲物底板 | 板目～柾目 | 平安前期 | ヒノキ |
| 5 | 11 | SE1 | 3 | 筒 | 芯持丸木 | 平安前期 | ウツギ属 |
| 6 | 12 | SE1 | 12 | 筒 | 芯持丸木 | 平安前期 | ウツギ属 |
| 7 | 53 | NR1 | 1 | 斎串 | 板目 | 平安前期 | ヒノキ科 |
| 8 | 59 | SK10 | 1 | 板材 | 追柾 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 9 | 60 | SK10 | 1 | 板材 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 10 | 61 | SK10 | 1 | 板材 | 柾目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 11 | 62 | SK10 | 1 | 角材破材 | 分割材 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 12 | 63 | SK10 | 1 | 笊 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 13 | 64 | SK10 | 1 | 柄 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | スギ |
| 14 | 65 | SK10 | 1 | 留紐 | ― | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | 樹皮 |
| 15 | 69 | SB1-P1 | 1 | 柱 | 芯持角材 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | モミ属 |
| 16 | 70 | SB1-P2 | 1 | 柱 | 芯持材 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | モミ属 |
| 17 | 165 | SE3 | e | 扇子 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | トウヒ属 |
| 18 | 166 | SE3 | e | 扇子 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | トウヒ属 |
| 19 | 167 | SE3 | e | 扇子 | 追柾 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | トウヒ属 |
| 20 | 168 | SE3 | e | 斎串 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 21 | 169 | SE3 | e | 斎串 | 分割 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | マダケ属 |
| 22 | 170 | SE3 | e | 斎串 | 分割 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | イネ科タケ亜科 |
| 23 | 171 | SE3 | 2 | 板材 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 24 | 172 | SE3 | 2 | 板材 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 25 | 173 | SE3 | 2 | 板材 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | モミ属 |
| 26 | 174 | SE3 | 2 | 板材 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 27 | 175 | SE3 | 2 | 板材 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 28 | 176 | SE3 | 2 | 連歯下駄 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | センダン |
| 29 | 177 | SE3 | 2 | 連歯下駄 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | センダン |
| 30 | 178 | SE3 | 2 | 連歯下駄 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | 広葉樹(散孔材) |
| 31 | 179 | SE3 | 2 | 織機 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 32 | 180 | SE3 | e | 鞘 | 丸木 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | イネ科タケ亜科 |
| 33 | 181 | SE3 | e | 柄 | 削出丸木 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | コナラ属アカガシ亜属 |
| 34 | 182 | SE3 | 2 | 留紐 | ― | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | 樹皮 |
| 35 | 183 | SE3 | 2 | 笊 | ― | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | イネ科 |
| 36 | 184 | SE3 | 2 | 笊 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 37 | 186 | SP097 | 1 | 柱 | 芯持丸木 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | クリ |
| 38 | 188 | SA3-P4 | 2 | 斎串 | 分割材 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ |
| 39 | 278 | 包含層 | Ⅲ | 斎串 | 板目 | 平安時代末～鎌倉時代初頭 | ヒノキ科 |

セリウム細胞で構成される。放射柔細胞の細胞壁は厚く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてトウヒ型。分野壁孔はトウヒ型で、１分野に３-６個。放射組織は単列、１-20 細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２-４個。放射組織は単列、１-10 細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.)Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１-３個。放射組織は単列、１-10 細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１-10 細胞高。

上記ヒノキを含むヒノキ科のいずれかであり、組織の特徴や他の同定結果を考慮すればヒノキの可能性があるが、分野壁孔が観察できなかったために断定できず、ヒノキ科とした。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３-４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-15 細胞高。

・ウツギ属（*Deutzia*）　ユキノシタ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１-４細胞幅、40-100 細胞高以上のものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

・センダン（*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel）　センダン科センダン属

環孔材で、孔圏部は３-５列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち、単独または２-６個が複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１-４細胞幅、１-30 細胞高。

・マダケ属（*Phyllostachys*）

原生木部の小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

外観から、稈鞘が伸長と共に節から脱落するタケ類であり、節が２条になる特徴から、マダケ属のマダケあるいはハチクである。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

原生木部の小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

上記マダケ属を含むタケ・ササ類である。外観において、節を除けて切断されている、あるいは節の保存状態が悪いため、タケ類、ササ類の区別ができない試料をタケ亜科とした。

・イネ科（Gramineae）

試料は保存状態が極めて悪い。比較的厚壁の繊維細胞が認められる。道管は潰れており、詳細は不明。観察した範囲で放射組織が認められない。

厚壁の繊維細胞があることと、放射組織が認められない特徴から、タケ亜科を含むイネ科と考えられる。

５　考察

平安時代および鎌倉時代の木製品には、合計 12 種類が認められた。各種類の材質などについてみると、針葉樹のモミ属は、軽軟で加工は容易であるが、強度と保存性は低い。トウヒ属は、やや軽軟な部類に入り、加工は容易であるが、保存性は低い。スギ、ヒノキ、ヒノキ科は、木理が通直で割裂性・耐水性が比較的高い。広葉樹のアカガシ亜属とクリは、重硬で強度が高く、クリでは耐朽性も高い。ウツギ属は、比

較的強度が高い部類に入るが、いずれも低木であり、大径木は得られない。また、髄が大きく抜けやすく、材が中空になりやすい特徴を持つ。センダンは、重さや硬さが中庸とされ、加工は比較的容易な部類に入る。マダケ属とタケ亜科は、強度、靭性、耐水性が比較的高い。イネ科は、タケ亜科やヨシ属の可能性があり、マダケ属やタケ亜科と同様の材質が考えられる。

器種別では曲物、底板、筒、柄、鞘、織機、笊、下駄、斎串、扇子、柱、角材、板材、留紐がある。これらの木製品は、伊東・山田(2012)の木器分類を参考にすれば、工具(柄、鞘)、紡織具(織機)、容器(曲物、底板)、調理加工具(笊)、服飾具(下駄)、祭祀具(斎串)、日用品(扇子)、建築部材(柱)、その他(筒、角材、板材、留紐)に分けられる。時期別・機種別の種類構成を表 27 に示す。

平安時代とされる遺構から出土した木製品は、曲物の側板と底板、筒である。曲物は、井戸枠として利用されており、３段目の９には底板を固定するための木釘穴があることから、底板 10 が３段目の曲物に接合されていたと考えられている。曲物側板はいずれもヒノキの板目材、底板はヒノキの板目～柾目材であり、加工性・耐水性の高いヒノキを選択・利用したことが推定される。岐阜県内では、今回と同時期の資料は少ないが、古代～鎌倉時代の曲物の事例では、柿田遺跡（可児市・可児郡御嵩町）でヒノキを中心とした木材利用が確認されており(伊東・山田、2012)、今回の結果とも調和的である。

筒は、２点とも直径 1.5 ㎝の丸木で、中央に孔がある。樹種はいずれもウツギ属である。ウツギ属は、中心部の髄が抜けて中空になりやすい特徴があることから、こうしたウツギ属の特徴を利用し筒を作製したことが推定される。なお、伊東・山田(2012)によれば、同時期の岐阜県の資料中にウツギ属の利用は確認されていない。

鎌倉時代の木製品は、工具、紡織具、調理加工具、服飾具、祭祀具、日用品、建築部材、その他がある。工具は、柄と鞘である。柄 181 は、削出丸木状で、上部が屈曲して、「く」の字状を呈する。樹種はアカガシ亜属であり、強度の高い木材を選択したことが推定される。なお 64 についても柄とされているが、笊の一部である可能性が考えられている。樹種はスギである。鞘は、長さ 29 ㎝の板状を呈し、タケ亜科が節を外した状態で利用されている。鞘とすれば、比較的強度の高い材質を選択した可能性がある。比較的近い時期の資料では、柿田遺跡で柄にヒノキを用いた例が確認されている(伊東・山田、2012)。

紡織具は、織機とされる１点がある。長さ 12 ㎝、幅３㎝、厚さ 2.5 ㎝の板目板で、長辺の一方が弧を

**表27　興福地遺跡の時期別・器種別種類構成**

| 分類群＼時期・器種 | 平安 | | | 鎌倉 | | | | | | | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 容器 | | 他 | 工具 | | 紡織 | 調理 | 服飾 | 祭祀 | 日用 | 建築 | その他 | | | |
| | 曲物 | 底板 | 筒 | 柄 | 鞘 | 織機 | 笊 | 下駄 | 斎串 | 扇子 | 柱 | 角材 | 板材 | 留紐 | |
| 針葉樹 | | | | | | | | | | | | | | | |
| モミ属 | | | | | | | | | | | 2 | | 1 | | 3 |
| トウヒ属 | | | | | | | | | | 3 | | | | | 3 |
| スギ | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| ヒノキ | 3 | 1 | | | | 1 | 2 | | 2 | | | 1 | 7 | | 17 |
| ヒノキ科 | | | | | | | | | 2 | | | | | | 2 |
| 広葉樹 | | | | | | | | | | | | | | | |
| アカガシ亜属 | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| クリ | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| ウツギ属 | | | 2 | | | | | | | | | | | | 2 |
| センダン | | | | | | | | 2 | | | | | | | 2 |
| 広葉樹(散孔材) | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| 樹皮 | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| その他 | | | | | | | | | | | | | | | |
| マダケ属 | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| タケ亜科 | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | 2 |
| イネ科 | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 合　計 | 3 | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 | 3 | 3 | 6 | 3 | 3 | 1 | 8 | 2 | 39 |

描くように半円形になる。半円形になる反対側の長辺には穿孔が認められる。ヒノキが利用されており、加工性の高い木材の選択が推定される。

調理加工具は、笊３点である。いずれも細い板状の部材を交互に編んでいる状態が確認できるが、保存状態は悪い。このうち、２点がヒノキ、１点がイネ科であった。ヒノキの笊については、加工性や耐水性等を考慮した木材利用が推定される。イネ科は、靭性や耐水性等を考慮するとタケ亜科やヨシ属の利用が想定されるが、詳細は不明である。

服飾具は、下駄３点である。いずれも台と歯を一木で作る連歯下駄である。このうち、176 と 177 は、縦に約半分に割れた状態で、接合関係は認められないが、形状から同一個体の可能性が考えられている。樹種はいずれもセンダンである。また、センダンの利用から、堅牢であることより、加工性等が重要視されたことが推定される。なお、もう１点の連歯下駄 178 は、保存状態が悪く樹種は不明であるが、散孔材の道管配列を有することから、環孔材となるセンダンとは別の種類である。柿田遺跡の平安～鎌倉とされる下駄の樹種については、ヒノキを中心に、ケヤキ、モクレン属が確認されている(伊東・山田、2012)。

祭祀具は、斎串である。板状を呈するものの他に、分割材も利用されている。これらの斎串には、ヒノキ、ヒノキ科、マダケ属、タケ亜科が認められる。ヒノキとヒノキ科は、加工性を考慮し利用された可能性がある。マダケ属とタケ亜科は、いずれも竹を割って板状にしたものである。比較的近い時期の斎串は、北方京水遺跡でヒノキが確認されている他、柿田遺跡の平安～鎌倉とされる斎串もヒノキに同定されており(伊東・山田、2012)、ヒノキについては広域的に利用されていた可能性がある。タケ亜科については、岐阜県内では斎串に確認された例が無いため、今後、同様の例が他にも見られるか、注目する必要がある。

日用品は、扇子の骨３点である。両端の親骨２点と中骨１点である。いずれもトウヒ属に同定されたことから、比較的加工性の高い木材の利用が推定される。岐阜県内では、杉崎廃寺跡(飛騨市)の古代とされる桧扇３点、柿田遺跡の平安～鎌倉とされる桧扇や扇２点があるが、樹種同定を実施した資料はヒノキあるいはヒノキ属に同定されている(伊東・山田、2012)。伊東・山田(2012)の全国のデータベースを見ても、トウヒ属を利用した扇あるいは桧扇は認められず、今回の結果は、扇の骨の木材利用としては珍しい事例と考えられる。

建築部材は、柱３点である。69 と 70 は、芯持角材あるいは芯持材(芯持丸木の一面が平坦に加工された状態)で、いずれもモミ属に同定された。一方、186 の柱材は芯持丸木でクリに同定された。モミ属は、強度や保存性は低いが、加工性が高く、大径木が得やすいことから、加工性や入手できる木材の大きさが利用の背景に考えられる。一方、クリについては、強度や耐朽性が高いことが利用された背景に考えられる。なお、鎌倉時代の柱材については、曽根八千町遺跡(大垣市)でクリとサカキ、顔戸南遺跡(御嵩町)でクリ、コウヤマキ、ヒノキ属が確認された例がある(伊東・山田、2012)。

その他として、角材、板材、留紐がある。角材は、不定形に分割されており、厚板状を呈する。板材は、一方の端部に加工が施される資料 173、薄い板状の資料 175、幅広の板材 174、刃物傷のある板材 172、綴紐の残る板材 59、171、割れており形状不明の板材 60、長方形状の板材 61 があり、形状が様々であることから、複数の用途の板材が混在していることが推定される。角材と板材は、ヒノキを中心にモミ属が１点混じる組成であり、用途に関わらず、加工性の高い針葉樹材が利用されたことが推定される。なお、ヒノキとモミ属では耐水性が異なることから、モミ属の板材 173 は、強度や保存性が低くても利用可能な用途に用いられた可能性がある。留紐は、いずれも樹皮である。樹皮の組織から樹種を同定することは難しい

が、外観、水平方向に長い状態であること、民族事例等を考慮すれば、桜や樺の樹皮である可能性が考えられるが詳細は不明である。

引用文献

林　昭三、1991、日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫、1995、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料、31、京都大学木質科学研究所、81-181.

伊東隆夫、1996、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料、32、京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫、1997、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料、33、京都大学木質科学研究所、83-201.

伊東隆夫、1998、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料、34、京都大学木質科学研究所、30-166.

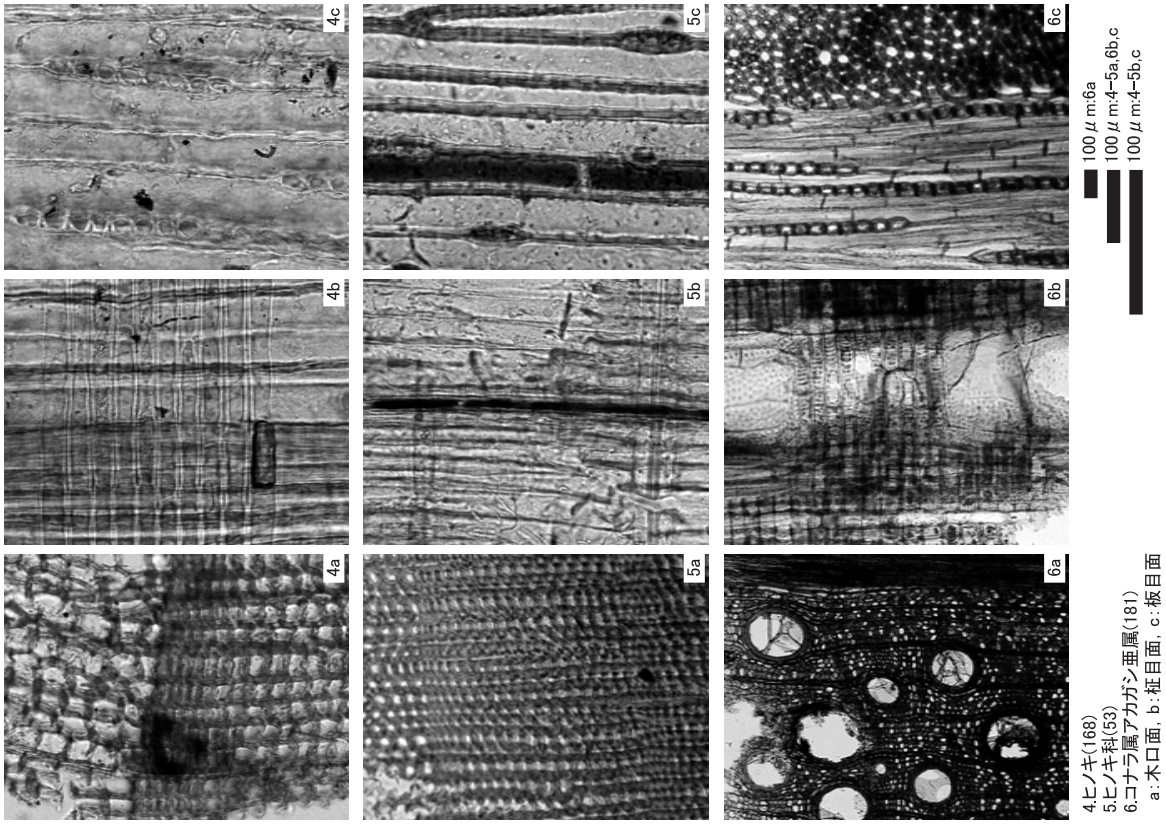
伊東隆夫、1999、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料、35、京都大学木質科学研究所、47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編)、2012、木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社、449p.

Richter H.G.、Grosser D.、Heinz I. and Gasson P.E. (編)、2006、針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修)、海青社、70p.［Richter H.G.、Grosser D.、Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫、1982、図説木材組織.地球社、176p.

Wheeler E.A.、Bass P. and Gasson P.E. (編)、1998、広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修)、海青社、122p.［Wheeler E.A.、Bass P. and Gasson P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.



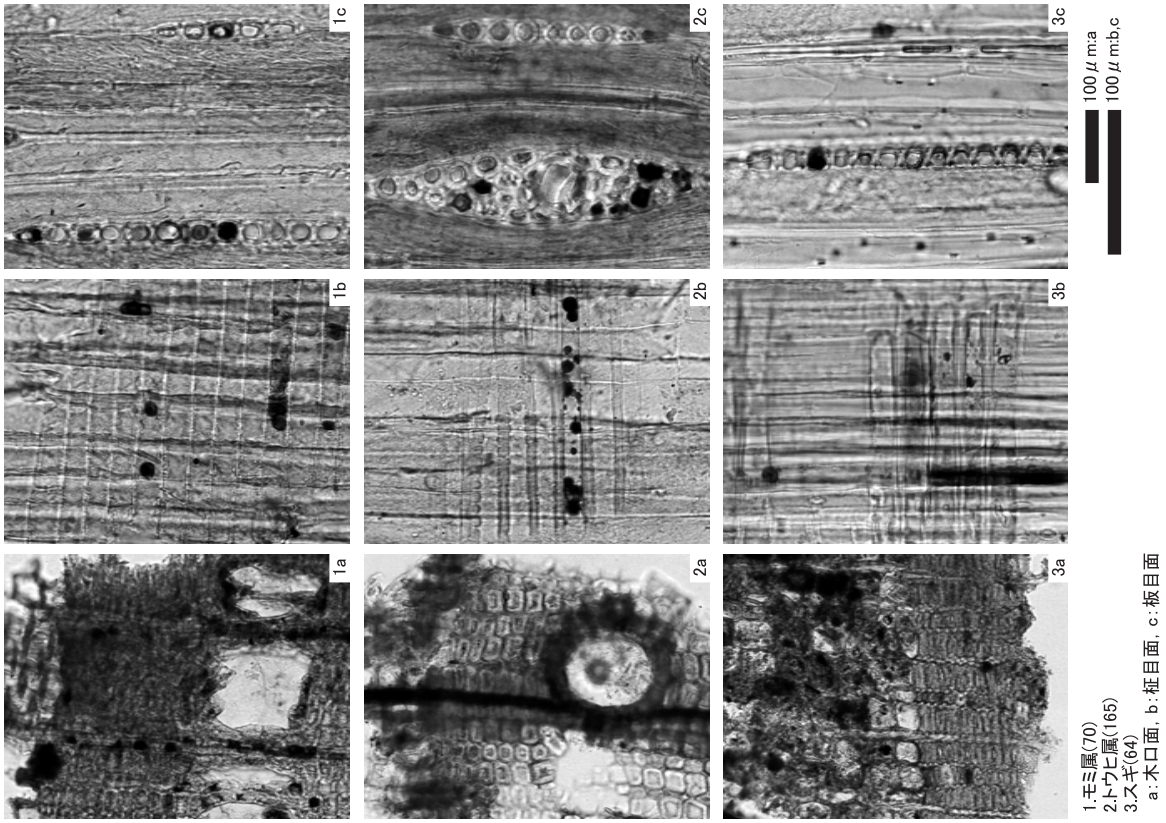
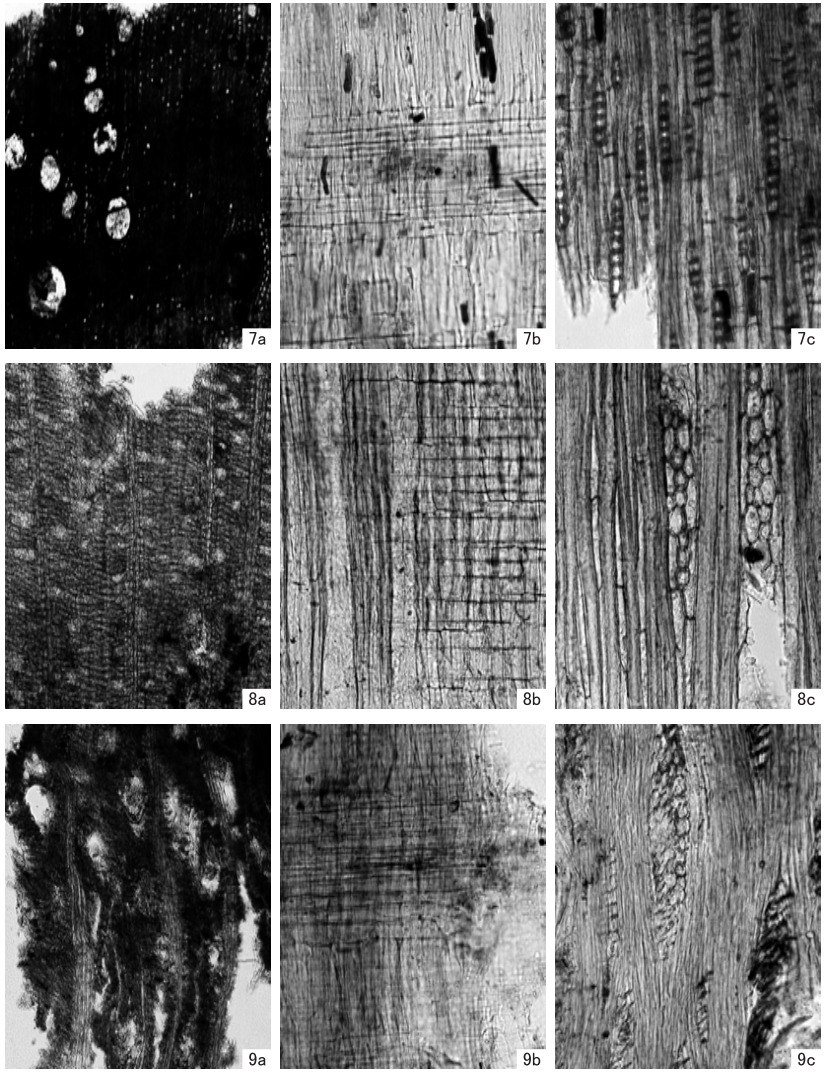
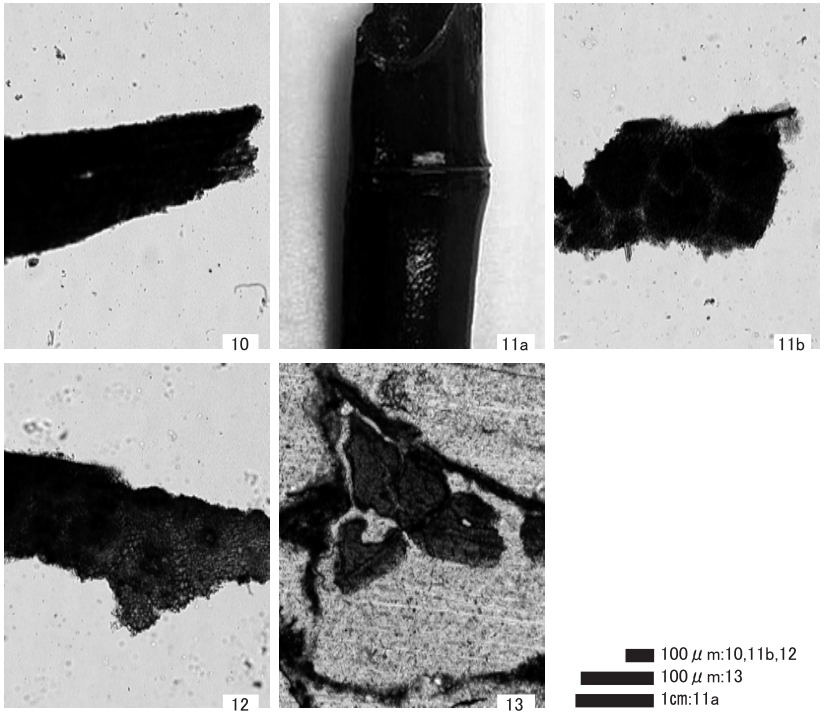




写真 13　樹種同定木材組織写真１




7.クリ(186)
8.ウツギ属(12)
9.センダン(176)
　a：木口面，b：柾目面，c：板目面




10.樹皮(65)　横断面
11.マダケ属(169)　a：節の外観，b：横断面
12.イネ科タケ亜科(170)　横断面
13.イネ科(183)　横断面

写真 14　樹種同定木材組織写真２

# 第５章　総括

## 第１節　遺構から見る遺跡のまとめ

今回の調査で検出した遺構の時期は平安時代前期と平安時代末～鎌倉時代初頭の２時期である（図62）。平安時代前期から生活の痕跡が見られ、平安時代末～鎌倉時代初頭に遺跡の規模が拡大するといえる。主要な遺構の軸の方向から、平安時代末～鎌倉時代初頭の間に少なくとも３回の建て替えが考えられる。

西地区で検出したSB3の柱穴は平面方形で、その柱痕跡は径が30cm近くあり、SA2～SA6も平面方形の柱穴で柱痕跡が径20cm近くある。このように大きな柱痕跡のある掘立柱であれば、官衙や寺院に関係するのではないかと考えられる。西地区は東地区と比べると極端に出土遺物が少なく、東地区が日常生活の場であったと考えると、西地区は非日常の場であった可能性が考えられ、官衙でいうならば朝堂院のような役所の中枢部であるために、全く遺物が出土しないのではないかとも考えられる。柱痕跡が径30cm近くあるにも関わらず礎石や礎盤を持たないところから、神社建築の社殿である可能性も考えられる。[1)] 柿田遺跡の中世前期のSH38は神社建築と考えられており、SH38の西と東には南北方向の、南には東西方向の柵がある。SB3が社殿かもしくは門になり、その南は掘立柱塀で区画し、屋敷などの主な建物の目隠しの役割を果たしていたと考えられる。今回の調査では主要な建物は確認できていないが、それらが北や南に広がる可能性が確認できたといえよう。

興福地遺跡は、東にある「中川」にも近いことから伊勢神宮領の中河御厨に比定されている（大垣市教育委員会1990）。興福地遺跡にはその地名から中世に興福寺という寺が存在した可能性も考えられており（大垣市教育委員会1997）、興福地遺跡範囲内の小字名に見られる「寺前」、「神田」（図７）は神仏習合の宗教現象の名残である可能性も考えられなくはない。大野郡の來振神社（揖斐郡大野町）は式内社と中世寺院が近接し、奈良県興福寺と春日大社、滋賀県延暦寺と日吉大社など神仏習合の宗教現象がみられるように、この地にも神社と寺院の両方があったのかもしれない。

延長５年（西暦927年）に奏進された『延喜式』美濃国三九座のうち、西濃地域では、多芸郡四座、不破郡三座、池田郡一座、安八郡四座、大野郡三座の神社が上げられている。また天慶年間から天暦・天徳年間（西暦938～960年）に成立したと推定されている『美濃国神名帳』美濃国三八二社には、西濃地方では、不破郡八二社、多芸郡一六社、石津郡二三（一三か）社、池田郡一一社、安八郡一九社、大野郡三二社が載せられている。興福地遺跡の近くでは、安八郡墨俣神社がある。多芸郡に御井神社（養老郡養老町）と井戸に関する社名を持つ神社がある。ところが安八郡のほぼ中央に位置するこの地には古くから知られる神社が無く空白地帯となっており、文字資料には残らなかった何かがあったようである。

西地区で検出した遺構が寺院跡か神社に関係するのか役所なのかは今回の調査では言及できないが、検出遺構からも一般集落ではない何かがこの地にあるといえよう。

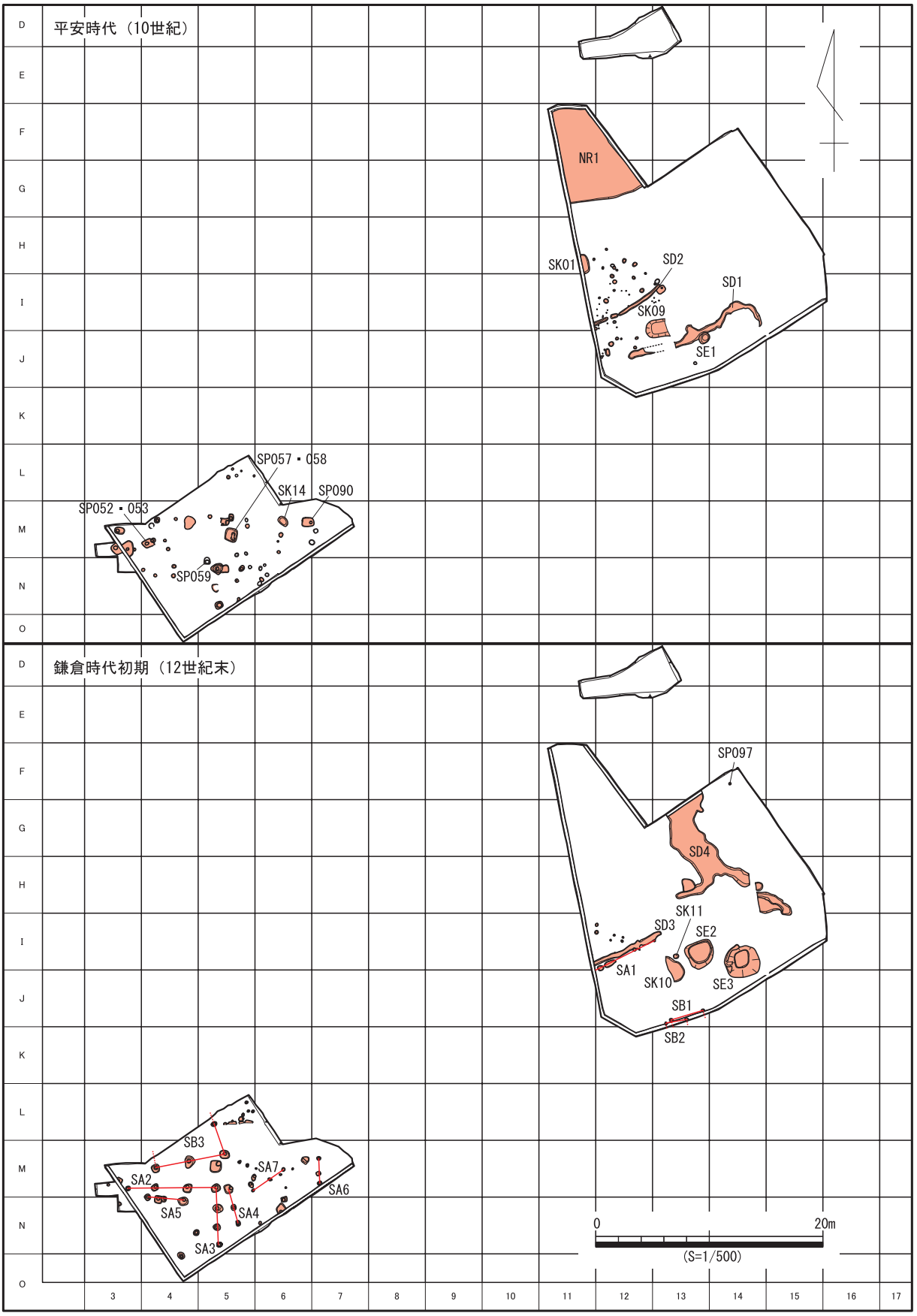
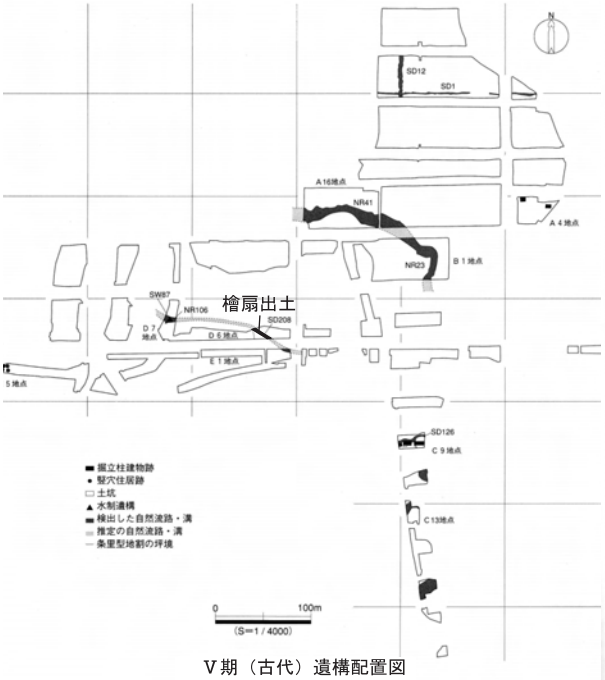
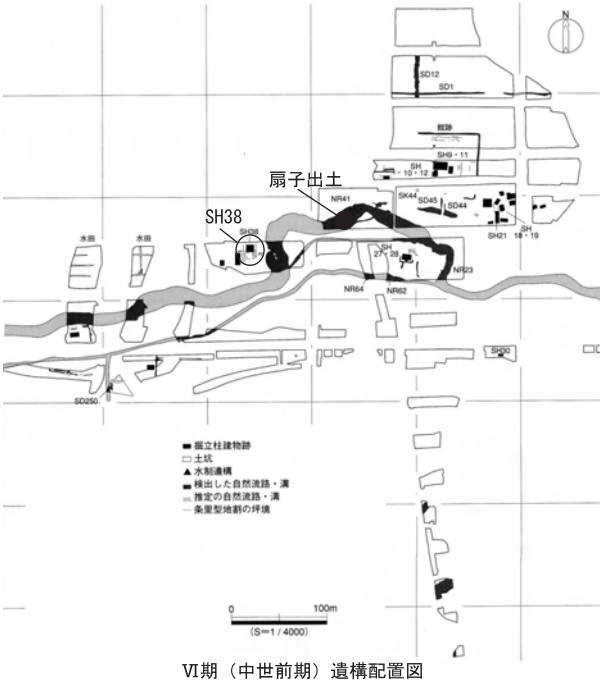

平安時代（10世紀）
NR1
SK01
SD2
SD1
SK09
SE1
SP057・058
SK14
SP090
SP052・053
SP059
鎌倉時代初期（12世紀末）
SP097
SD4
SK11
SD3
SE2
SA1
SK10
SE3
SB1
SB2
SB3
SA2
SA7
SA6
SA5
SA4
SA3
0
20m
(S=1/500)
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17

図62　遺構変遷図




Ⅴ期（古代）遺構配置図




Ⅵ期（中世前期）遺構配置図

D1 地点　SH38 等掘立柱建物跡・柱列配置図

図 63　柿田遺跡遺構配置図、SH38 遺構図

## 第２節　遺物から見る遺跡のまとめ

### 破片数、個体数について

主な出土遺物は須恵器、灰釉陶器、山茶碗である。時期の分かる破片数で、須恵器は 125 点、灰釉陶器は 548 点、山茶碗は 1,870 点である。破片数を集計したものが表 28～表 33、口縁部残存率と底部残存率を集計し個体数を出したものが表 34～表 47 である。残存率は分母を 12 とし、0.5 単位切り上げで計測している。

須恵器は圧倒的に美濃須衛Ｖ-1（９世紀前葉）のものが多い。灰釉陶器は９世紀末光ヶ丘１号窯式期のものが少数あり、10 世紀が多く深碗と段皿のセットの時期である。山茶碗はほとんどが尾張産猿投窯のものがほとんどで、東濃産の山茶碗がほとんど無く、美濃須衛産の山茶碗が少数ある。尾張型山茶碗第５型式期がほとんどである。11 世紀～12 世紀初めの遺物は途切れることなくほぼ連続してあるが、遺跡が廃絶するのか 13 世紀初めまでの遺物しかない。興福地遺跡と同年度に調査した北方京水遺跡からは興福地遺跡と同時期の遺物が出土している。両遺跡から出土した灰釉陶器、山茶碗の時期は同じで、両遺跡ともに常滑は少しあるが古瀬戸が出土していない。常滑の甕は胴部破片ばかりで口縁部破片が出土していないため個体数には数が出てこない。破片数のグラフでは大型品の数量が出ている。山茶碗の数量が破片数より個体数の方が比率が多くでているので、割れにくいことを示しているようである。

### 埋め井の祭りに使用した道具

SE3 からは検出の段階から完形の山茶碗がみられた。接合後の破片数で山茶碗が 242 点出土し、上層部から完形の山茶碗の碗が 23 点、小碗が２点、皿が６点、壺が１点出土し、それらの時期は第５型式期のものがほとんどである。これら井戸出土の山茶碗には口縁部を故意に打ち欠いているあるものが 10 点（31%）あり、内外面に故意に煤を付着させているものが９点（28%）、墨書のあるものが５点（16%）ある。内外面が黒い山茶碗は井戸や溝から出土しており、水辺の祭りに意図的に黒くした器を使用しているといえる。多数の山茶碗とともに井戸上層部から出土したものは、伊勢型鍋、ロクロ土師器皿、土師器皿、小型片口壺（161）、青磁、白磁、扇子、斎串、板材、下駄、手押木、笊などが出土している。扇子の骨は３本（165～167）井戸底から出土し、親骨２本と中骨１本で、親骨１本（165）には要が残り、中骨（166）の上端部両面には６～７文字の墨書がある（第４章参照）。扇子の骨は束になって出土しておらず、ばらばらの状況で出土している。扇子の骨以外にも周辺からは同じ大きさの木片が３本（168～170）出土している。出土状況から扇子の骨と同じ大きさの木片は斎串で、埋め井の祭りで結界を張るために井戸の周辺に挿して使用し、使用後に井戸底に捨てたものと考える。[2)] このため 166 にある墨書は、斎串として使用する際に書かれたものと考える。また、井戸上層部から出土している遺物は、埋め井の祭りで使用した道具を投棄したもの[3)]と考えられ、祭祀に使用した道具の一括資料として貴重な資料といえる。

### 井戸のまなこ

SE3 から出土した小型片口壺（161）が「まなこ」と考える。[4)] 井戸の「まなこ」について最初に発掘調査報告書に掲載されたのは『橿原』である。[5)] 橿原遺跡では奈良時代から平安時代の井戸 22 基のうちの３基から「まなこ」が確認されている。橿原遺跡でいわれている「まなこ」は、「井戸の内底部に

## 表28　出土遺物破片数量表（須恵器）

| 器種 | | 産地 | 7世紀 初頭 前半 | 7世紀 前葉 前半 | 7世紀 中葉 前半 | 7世紀 後葉 後半 | 7世紀 末 後半 | 8世紀 初頭 前半 | 8世紀 前葉 前半 | 8世紀 中葉 前半 | 8世紀 後葉 後半 | 8世紀 末 後半 | 9世紀 初頭 前半 | 9世紀 前葉 前半 | 9世紀 中葉 前半 | 9世紀 後葉 後半 | 9世紀 末 後半 | 時期不明 | 小計 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 蓋 | 摘み蓋 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 10 | 14 |
| | | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | | | 9 | | | | | |
| | 蓋 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | | | 4 | | | | 4 | |
| 坏 | 坏身 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 38 | 66 |
| | | | | | | | | | | | | | | | 37 | | | | | |
| | | 猿投 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | |
| | 有台坏 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 10 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 9 | | | | | |
| | 無台坏 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | 17 | |
| | | | | | | | | | | | | | 6 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 6 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | |
| 碗 | 小型碗 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 |
| 盤 | 盤 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 3 |
| | 有台盤 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | 2 | |
| 鉢 | 鉢 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 2 |
| | 鉄鉢 | 美濃須衛 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | |
| 壺 | ミニチュア壺 | 美濃須衛 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | 2 |
| 瓶 | 小瓶 | 不明 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 甕 | 甕 | 美濃須衛 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 34 | 36 |
| | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 24 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | | 猿投 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | |
| | | 畿内系 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | |
| 他 | 不明 | 不明 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| 合計 | | | 125 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

※数値は接合後の破片数を示す。

## 表29　出土遺物破片数量表（灰釉陶器）

| 器種 | 産地 | 美濃須衛窯 IV期 | V期 | VI期 | VII期 | VIII期 | IX期 | 猿投窯 K14 | K90 | O53 | H72 | 百代寺 | 美濃窯 光ケ丘1 | 大原2 | 虎渓山1 | 丸石2 | 明和27 | 11世紀 | 時期不明 | 小計 | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 深碗 | 不明 | | | | | | | | | | | | | 1 | 6 | 7 | 1 | | | 15 | 450 | 548 |
| 輪花碗 | 不明 | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | | 2 | | |
| 碗 | 不明 | | | | | | | | | | | | 2 | 11 | 10 | 3 | | | 407 | 433 | | |
| 皿 | 猿投 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 58 | |
| | 不明 | | | | | | | | | | | | | 1 | 7 | 4 | | | 26 | 43 | | |
| | 不明 | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | |
| | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | |
| 段皿 | 不明 | | | | | | | | | | | | | | 2 | 10 | | | 2 | 14 | | |
| 台付盤 | 美濃須衛 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | |
| 香炉か | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | 1 | |
| 鉢 | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 3 | |
| 瓶か鉢 | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | |
| 壺 | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 15 | 15 | 33 | |
| 小瓶 | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | |
| 平瓶か | 美濃 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | |
| 短頸瓶 | 美濃 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | |
| 長頸瓶 | 美濃 | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | 2 | | |
| 瓶 | 猿投 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 13 | |
| | 美濃 | | | | | | | | | | | | | 7 | | | | | | | | |
| | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 | | | |
| 甕 | 美濃須衛 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | |

※数値は接合後の破片数を示す。

## 表30　出土遺物破片数量表（山茶碗）

| 器種 | 産地 | 美濃須衛 VII期 | VIII期4型式並行 | VIII～IX5型式並行 | IX期 | 尾張 第3型式 | 第4型式 | 第5型式 | 第6型式 | 第7型式 | 第8型式 | 第9型式 | 第10型式 | 第11型式 | 東濃 浅間窯下1 | 丸石3 | 時期不明 | 小計 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 碗 | 美濃須衛 | | 7 | 2 | | | | | | | | | | | | 1 | | 42 | 1870 |
| | | 32 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 美濃 | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | 23 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 20 | | | | |
| | 尾張 | | | | | 4 | 19 | 174 | 3 | 3 | | | | | | | | 1711 | |
| | | | | | | | | 182 | | | | | | | | | 1319 | | |
| | | | | | | 3 | | 1 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | |
| 小碗 | 尾張 | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | 3 | |
| 皿 | 尾張 | | | | | | 7 | 33 | | | | | | | | | 36 | 78 | |
| | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| 片口鉢 | 美濃須衛 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 尾張 | | | | | 1 | 4 | 1 | 1 | | | | | | | | | 7 | |
| | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 3 | |
| 小型片口壺 | 美濃須衛 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 広口瓶 | 尾張 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | |

※数値は接合後の破片数を示す。

## 表33 中世食器組成（破片数）

| 種別 | 数量 | 割合（%） |
|---|---|---|
| 山茶碗 | 1895.0 | 84.4 |
| ロクロ土師器皿 | 71.0 | 3.2 |
| 土師器皿 | 93.0 | 4.1 |
| 伊勢型鍋 | 136.0 | 6.1 |
| 中国陶磁器 | 9.0 | 0.4 |
| 常滑 | 15.0 | 0.7 |
| 瀬戸美濃陶器 | 25.0 | 1.1 |
| 合計 | 2244.0 | 100.0 |

※数量は接合後の破片数

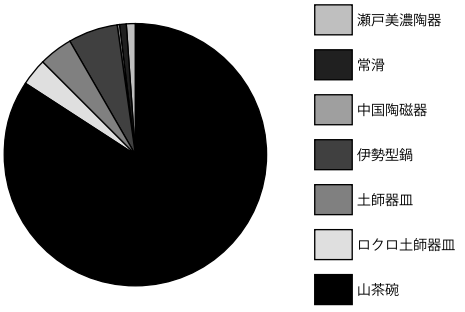



図 64 中世食器組成破片数グラフ

## 表31 出土遺物破片数量表（古代・中世土師器）

| 分類 | 遺物時期 | 数量 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 長胴甕 | | 17 | 148 |
| 清郷型鍋 | 10～11世紀 | 128 | |
| 伊勢型鍋 | 10～11世紀末 | 3 | |
| | 12世紀 | 136 | 300 |
| ロクロ土師器 | 12～13世紀 | 71 | |
| 土師器皿 | 12～13世紀 | 11 | |
| | 不明 | 82 | |
| 合計 | | 448 | |

## 表32 出土遺物破片数量表（中国製陶磁器）

| 種別 | 器種 | | 分類1 | 分類2 | 破片数 | 小計 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 青磁 | 皿類 | 皿 | 中国 | 12～13世紀 | 2 | 2 | 9 |
| 白磁 | 碗類 | 碗 | 中国 | II類 | 1 | 7 | |
| | | | 中国 | IV類 | 6 | | |

※数値は接合後の破片数を示す。

## 表36 灰釉陶器数量表（口縁部残存率）

| 器種 | 産地 | 美濃窯 | | | | | | | | 11世紀 | 時期不明 | 小計 | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | V期 | VI期 | VII期 | 光ケ丘1 | 大原2 | 虎渓山1 | 丸石2 | 明和27 | | | | | |
| 蓋 | | | | | | | | | | | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 0.17 |
| 輪花碗 | 不明 | | | | 1.0 | | | 5.5 | | | | 6.5 | 98.5 | 8.20 |
| 碗 | 不明 | | | | | 6.5 | 6.5 | 1.0 | | | 78.0 | 92.0 | | |
| 皿 | 猿投 | | | | | | | | | | 0.5 | 0.5 | 68.0 | 5.67 |
| | 不明 | | | | | | 11.0 | 19.5 | | | 14.0 | 51.5 | | |
| | 不明 | | | | | 2.5 | | | | | | | | |
| | 不明 | | | | | | 4.5 | | | | | | | |
| 段皿 | 不明 | | | | | | 4.0 | 11.0 | | | 1.0 | 16.0 | | |
| 香炉か | 不明 | | | | | | | | | 1.0 | | 1.0 | 1.0 | 0.08 |
| 平瓶か | 美濃 | | | | | | | | | | 2.5 | 2.5 | 3.5 | 0.29 |
| 短頸瓶 | 美濃 | | | | | | | | | | 1.0 | 1.0 | | |
| 合計 | | | | | 73.0 | | | | | 1.0 | 99.0 | 173.0 | | 14.42 |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表37 灰釉陶器数量表（底部残存率）

| 器種 | 産地 | 美濃窯 | | | | | | | | 11世紀 | 時期不明 | 小計 | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | V期 | VI期 | VII期 | 光ケ丘1 | 大原2 | 虎渓山1 | 丸石2 | 明和27 | | | | | |
| 深碗 | 不明 | | | | | 4.0 | 8.0 | 26.0 | 3.5 | | | 41.5 | 216.5 | 18.04 |
| 輪花碗 | 不明 | | | | | | | 12.0 | | | | 12.0 | | |
| 碗 | 美濃須衛 | | 4.0 | | | | | | | | | 4.0 | | |
| | 不明 | | | | 1.5 | 26.0 | 41.0 | 12.5 | | | 78.0 | 159.0 | | |
| 皿 | 不明 | | | | | 4.0 | 14.0 | 35.0 | | | 44.5 | 101.5 | 117.0 | 9.75 |
| | 不明 | | | | | 4.0 | | | | | | | | |
| 段皿 | 不明 | | | | | | | 15.5 | | | | 15.5 | | |
| 瓶 | 美濃 | | | | | | | | | | 6.5 | 6.5 | 6.5 | 0.54 |
| 合計 | | | | | 207.0 | | | | | | 129.0 | 340.0 | | 28.33 |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表38 山茶碗数量表（口縁部残存率）

| 器種 | 産地 | 美濃須衛 | | | | 尾張 | | | | 東濃 | | 時期不明 | 小計 | X合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | VII期 | VIII期4型式並行 | VIII～IX | IX期 | 第3型式 | 第4型式 | 第5型式 | 第6型式 | 浅間窯下1 | 丸石3 | | | | |
| 碗 | 美濃須衛 | | 1.5 | | | | | | | | | | 1.5 | 394.5 | 32.875 |
| | 美濃 | | | | | | | | | 1.0 | | | 1.0 | | |
| | 尾張 | | | | | | 2.5 | 231.5 | | | | 147.5 | 384.0 | | |
| | | | | | | | 2.5 | | | | | | | | |
| 小碗 | 尾張 | | | | | 8.0 | | | | | | | 8.0 | | |
| 皿 | 尾張 | | | | | | 7.0 | 137.5 | | | | 42.0 | 186.5 | 190.5 | 15.875 |
| | 尾張 | | | | | 0.5 | 1.0 | 1.0 | | | | 1.5 | 4.0 | | |
| 小型片口壺 | 美濃須衛 | | 10.0 | | | | | | | | | | 10.0 | 10.0 | 0.83 |
| X合計 | | | 11.5 | | | | 391.5 | | | 1.0 | | 191.0 | 595.0 | | 49.58 |
| 個体数 | | | 0.96 | | | | 32.63 | | | 0.08 | | 15.92 | 49.58 | | |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表39 山茶碗数量表（底部残存率）

| 器種 | 産地 | 美濃須衛 | | | | 尾張 | | | | 東濃 | | 時期 不明 | 小計 | X合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | VII期 | VIII期4型式並行 | VIII～IX | IX期 | 第3型式 | 第4型式 | 第5型式 | 第6型式 | 浅間窯下1 | 丸石3 | | | | |
| 碗 | 美濃須衛 | | 7.5 | | | | | | | | | 6.0 | 13.5 | 984.5 | 82.04 |
| | 美濃 | | | | | | | | | 4.5 | | | 8.5 | | |
| | | | | | | | | | | 4.0 | | | | | |
| | 尾張 | | | | | | 83.5 | 551.0 | 14.0 | | | 272.5 | 936.0 | | |
| | | | | | | 1.0 | | 12.0 | | | | | | | |
| | | | | | | | 2.0 | | | | | | | | |
| 小碗 | 尾張 | | | | | 22.5 | 4.0 | | | | | | 26.5 | | |
| 皿 | 尾張 | | | | | | 30.0 | 196.5 | | | | 42.0 | 269.5 | 269.5 | 22.46 |
| | 尾張 | | | | | | 1.0 | | | | | | | | |
| 片口鉢 | 尾張 | | | | | | | 2.5 | | | | 4.0 | 6.5 | 6.5 | 0.54 |
| 小型片口壺 | 美濃須衛 | | 12.0 | | | | | | | | | | 12.0 | 12.0 | 1.00 |
| 広口瓶 | 猿投 | | | | | | | | | | | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 0.17 |
| X合計 | | | 19.5 | | | | 920.0 | | | 8.5 | | 326.5 | 1274.5 | | 106.21 |
| 個体数 | | | 1.625 | | | | 76.67 | | | 0.71 | | 27.2 | 106.21 | | |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表34 須恵器数量表(口縁部残存率)

| 器種 | | 美濃須衛 | | | 時期不明 | 小計 | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | Ⅳ-3 | Ⅳ-3かⅤ-1 | Ⅴ-1 | | | | |
| 蓋 | 摘み蓋 | | 1.0 | 3.5 | 1.0 | 5.5 | 7.0 | 0.58 |
| | 蓋 | | | 1.5 | | 1.5 | | |
| 坏 | 坏身 | | | 11.5 | | 11.5 | 14.5 | 1.21 |
| | 無台坏 | 2.0 | | 1.0 | | 3.0 | | |
| 碗 | 小型碗 | | | 0.5 | | 0.5 | 0.5 | 0.04 |
| 壺 | ミニチュア壺 | 0.5 | | | | 0.5 | 0.5 | 0.04 |
| 甕 | 甕 | 3.0 | | | | 3.0 | 3.0 | 0.25 |
| 合計 | | 5.5 | 1.0 | 18.0 | 1.0 | 25.5 | | 2.13 |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表35 須恵器数量表(底部残存率)

| 器種 | | 美濃須衛 | | | 時期不明 | 小計 | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | Ⅳ-3 | Ⅳ-3かⅤ-1 | Ⅴ-1 | | | | |
| 坏 | 有台坏 | | 0.5 | 15.5 | | 16.0 | 36.0 | 3.00 |
| | 無台坏 | | 12.0 | 8.0 | | 20.0 | | |
| 碗 | 無台碗 | | | | 3.0 | 3.0 | 3.0 | 0.25 |
| 盤 | 有台盤 | | | 3.0 | | 3.0 | 3.5 | 0.29 |
| | 盤 | | | 0.5 | | 0.5 | | |
| 合計 | | 0.0 | 12.5 | 27.0 | 3.0 | 42.5 | | 3.54 |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表40 古代・中世土師器数量表（口縁部残存率）

| | 遺物時期 | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|
| 弥生土器 | | 0.5 | 0.04 |
| 古代土師器甕 | | 3.0 | 0.25 |
| 清郷型鍋 | 10～11世紀 | 27.0 | 2.25 |
| 伊勢型鍋 | 12世紀 | 19.5 | 1.63 |
| ロクロ土師器 | 12～13世紀 | 13.5 | 1.13 |
| 土師器皿 | 12～13世紀 | 66.5 | 5.54 |
| 合計 | | 130.0 | 10.83 |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表41 古代・中世土師器数量表（底部残存率）

| | 遺物時期 | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|
| 弥生土器 | | 5.5 | 0.46 |
| 古代土師器甕 | | 1.5 | 0.13 |
| 清郷型鍋 | 10～11世紀 | 0.0 | 0.00 |
| 伊勢型鍋 | 12世紀 | 0.0 | 0.00 |
| ロクロ土師器 | 12～13世紀 | 102.5 | 8.54 |
| 土師器皿 | 12～13世紀 | 45.0 | 3.75 |
| 合計 | | 154.5 | 12.88 |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表42 中国製磁器数量表（口縁部残存率）

| 種別 | 器種 | | 分類1 | 分類2 | 小計 | | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 青磁 | 皿類 | 皿 | 中国 | 12～13世紀 | 2.0 | 2.0 | 4.0 | 0.33 |
| 白磁 | 碗類 | 碗 | 中国 | Ⅱ類 | 0.5 | 2.0 | | |
| | | | 中国 | Ⅳ類 | 1.5 | | | |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

## 表43 中国製磁器数量表（底部残存率）

| 種別 | 器種 | | 分類1 | 分類2 | 小計 | | 合計 | 個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 青磁 | 皿類 | 皿 | 中国 | 12～13世紀 | 3.0 | 3.0 | 5.0 | 0.42 |
| 白磁 | 碗類 | 碗 | 中国 | Ⅱ類 | 0.0 | 2.0 | | |
| | | | 中国 | Ⅳ類 | 2.0 | | | |

※残存率は分母12、0.5単位切り上げで計測。

表44 中世食器組成
（口縁部残存率）

| 種別 | 個体数 | 割合（%） |
|---|---|---|
| 山茶碗 | 49.58 | 85.19 |
| ロクロ土師器皿 | 1.13 | 1.94 |
| 土師器皿 | 5.54 | 9.52 |
| 伊勢型鍋 | 1.63 | 2.80 |
| 中国陶磁器 | 0.33 | 0.57 |
| 合計 | 58.2 | 100.02 |

表45 中世食器組成
（底部残存率）

| 種別 | 個体数 | 割合（%） |
|---|---|---|
| 山茶碗 | 106.21 | 89.33 |
| ロクロ土師器皿 | 8.54 | 7.18 |
| 土師器皿 | 3.75 | 3.15 |
| 伊勢型鍋 | 0.00 | 0.00 |
| 中国陶磁器 | 0.42 | 0.35 |
| 合計 | 118.9 | 100.01 |

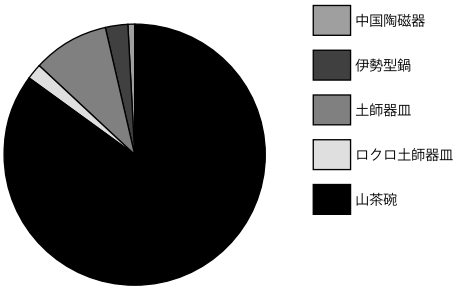



図 65　中世食器組成個体数グラフ（口縁部残存率）

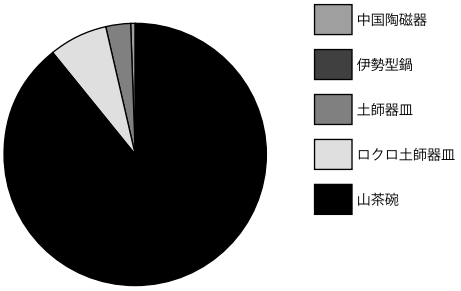



図 66　中世食器組成個体数グラフ（底部残存率）

表46 中世陶器集計表（底部残存率）

山茶碗（美濃須衛産）

| 分類 | 数量 | Ⅷ期 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 皿 | 確定 | 0.0 | 0.0 |
| 皿 | 按分 | 0.0 | 0.0 |
| 皿 | 合計 | 0.0 | 0.0 |
| 碗 | 確定 | 7.5 | 7.5 |
| 碗 | 按分 | 0.0 | 0.0 |
| 碗 | 合計 | 7.5 | 7.5 |
| 壺 | 確定 | 12.0 | 12.0 |
| 壺 | 按分 | 0.0 | 0.0 |
| 壺 | 合計 | 12.0 | 12.0 |
| 合計 | | 19.5 | 19.5 |

山茶碗（東濃産）

| 分類 | 数量 | 浅間窯下 | 丸石3 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 皿 | 確定 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 皿 | 按分 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 皿 | 合計 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 碗 | 確定 | 4.0 | 0.0 | 4.0 |
| 碗 | 按分 | 2.3 | 2.3 | 4.6 |
| 碗 | 合計 | 6.3 | 2.3 | 8.6 |
| 合計 | | 6.3 | 2.3 | 8.6 |

山茶碗（尾張産）

| 分類 | 数量 | 第３型式 | 第４型式 | 第５型式 | 第６型式 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 皿 | 確定 | 0.0 | 30.0 | 196.5 | 0.0 | 226.5 |
| 皿 | 按分 | 0.0 | 0.5 | 0.5 | 0.0 | 1.0 |
| 皿 | 合計 | 0.0 | 30.5 | 197.0 | 0.0 | 227.5 |
| 碗 | 確定 | 0.0 | 83.5 | 551.0 | 14.0 | 648.5 |
| 碗 | 按分 | 0.5 | 0.5 | 6.0 | 6.0 | 13.0 |
| 碗 | 合計 | 0.5 | 84.0 | 557.0 | 20.0 | 661.5 |
| 片口鉢 | 確定 | 0.0 | 0.0 | 2.5 | 0.0 | 2.5 |
| 片口鉢 | 按分 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 片口鉢 | 合計 | 0.0 | 0.0 | 2.5 | 0.0 | 2.5 |
| 合計 | | 0.5 | 114.5 | 756.5 | 20.0 | 891.5 |

表47 中世陶器磁器別個体数
（底部残存率）

| 分類 | 第３型 | 第４型 | 第５型 | 第６型 |
|---|---|---|---|---|
| 碗皿合計 | 0.04 | 10.69 | 63.03 | 1.67 |
| 片口鉢 | 0.00 | 0.00 | 0.21 | 0.00 |
| 壺 | 0.00 | 1.00 | 0.00 | 0.00 |

※個体数

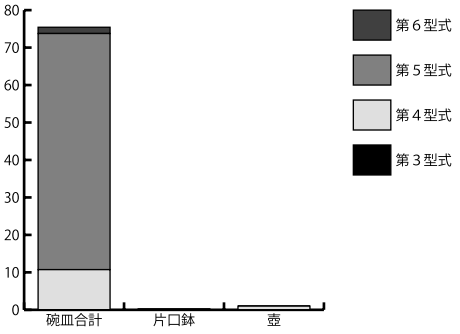



図 67　中世陶器時期別グラフ（底部残存率）

表48　煤付着
山茶碗点数表

| 遺構名 | 点数 |
|---|---|
| SD4 | 25 |
| SE2 | 11 |
| SE3 | 35 |
| SK09 | 1 |
| SK10 | 5 |
| SK16 | 1 |
| 包含層 | 46 |
| 合計 | 124 |

※点数は接合後破片数

表49　山茶碗
煤付着状況

| 煤付着面 | 点数 |
|---|---|
| 外 | 11 |
| 外内断 | 13 |
| 外断 | 1 |
| 外内 | 41 |
| 内 | 56 |
| 内断 | 2 |
| 合計 | 124 |

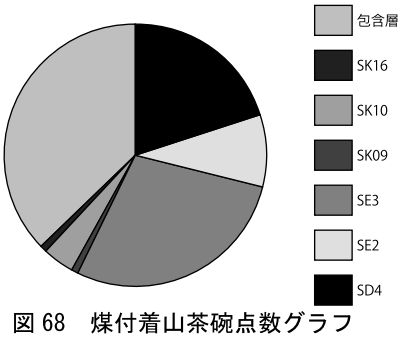



図 68　煤付着山茶碗点数グラフ

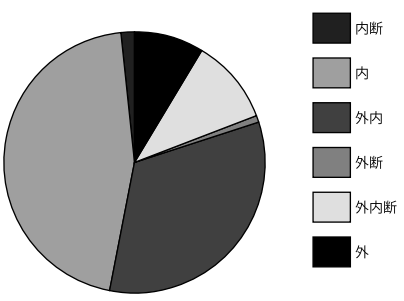



図 69　山茶碗煤付着状況グラフ

小さな枠を入れて、貯水か一種の浄化施設と思われる構造である。井戸の中心たる意味にもとれる。井戸の構造上最も大切な施設。」[6]である。また、「居合わせた見物人の一人は伊勢の人で、「まなこ」が出たからこの井戸の底だといい、伊勢地方では井戸の底に「まなこ」といって、桶・壺・竹で編んだ笊状のものを入れるという。それは旱魃になればそれに従って掘り下げるためだともいう。そして井戸を埋めるときには必ず「まなこ」を取り上げなければ祟るという。」[7]とある。橿原遺跡でまなこが確認されている井戸は、掘立柱建物が分布する中にあり、掘立柱建物と関係のある井戸と推定できる。橿原遺跡で報告されている「まなこ」は３つとも曲物である。

高槻市阿久都神社参道の調査で井戸から出土した、合わせ口にした二枚の土師器皿の内面に十二神王の墨書があり、「器内を神威のこもる空間とし、この井の根原、まなことして息づいた」[8]としている。橿原遺跡からも「神」の墨書のある合わせ口の皿が出土しているが、報告書の段階ではこれを「まなこ」とはしていない。

石川県穴水町桜町遺跡、大町・縄手遺跡、御館遺跡、美麻奈比古神社前遺跡は古代官衙や中世開発領主の館跡と考えられている。これらの遺跡から奈良県あたりで井戸の「まなこ」と呼んでいるものに相当すると考えられているものが[9]、総柱建物や庇付掘立柱建物近くにある井戸から出土している。桜町遺跡からは口縁部と注口部が故意に打ち欠かれた珠洲焼水注や組み合わせ人形の頭部が、大町・縄手遺跡からは、口縁部と注口部が故意に打ち欠かれた珠洲焼水注が、御館遺跡からは珠洲焼小型壺が、美麻奈比古神社前遺跡からは柄の無い柄杓に蓋をした容器が井戸底に納められた状況で出土している。これらの容器は「神霊（水神）を納めた容器、御魂が籠められた容器で井戸のマナコ」[10]と考えられている。

興福地遺跡の井戸から出土した美濃須衛産の小型片口壺は、片口のそばを内面側から故意に打ち欠いており、井戸底ではなく井戸の上層から、井戸を閉める際の祭りに使用したと思われる道具と一緒に出土している。口縁部の打ち欠きはおそらく「まなこ」として使用する前に行っていると思われる。小型片口壺が井戸の「まなこ」であった可能性が高く、井戸を埋める際に祟られないように神送りの祭りを行った例であると考える。また、表 52 に集成した「まなこ」を伴う井戸が検出されている遺跡は、一般集落ではない遺跡（古代役所跡や中世館跡）が多いように思うが、検索範囲は十分ではないため、今後更なる井戸の「まなこ」の出土例の集成が必要であると考える。

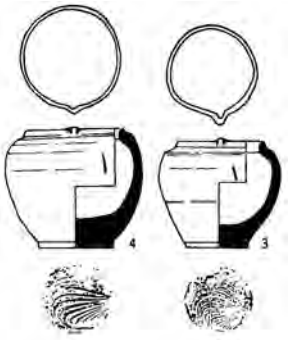
また、美濃須衛産の小型片口壺に類似するものが、県内の遺跡で出土している。稲田山 16 号窯出土３、４は小壺で片口をもつが底部は回転糸切り痕が残る。船山北３号窯出土 1642Y、1643Y は片口鉢で灰原からの出土である。柿田遺跡出土 2534、2538、2539 は灰釉系陶器短頸鉢と報告され包含層からの出土である。野笹遺跡出土 217 は美濃須衛産三口鉢で遺物集中地点 SU2 からの出土である（図 70 参照）。

**扇について**

扇には檜扇と扇子（紙扇）とがあるが、SE3 から出土しているのは扇子の骨と考える。親骨２本、中骨１本の３本が出土し、樹種はトウヒ属である。扇の樹種はヒノキかスギであることが多いのだが樹種が珍しい事例といえる。扇は柿田遺跡、鳥羽離宮、平城京八条一坊十四坪、柳之御所などの遺跡から出土し、井戸や溝、池、自然流路から出土している（表 50、51）。これについても「まなこ」と同様で、更に集成が必要と思われるが、扇は宮都以外では官衙や館跡から水の祭祀に関連して出土しているといえる。

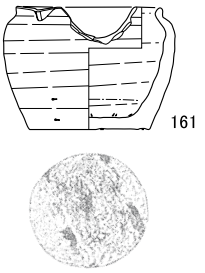
**美濃須衛産鉢・壺実測図**

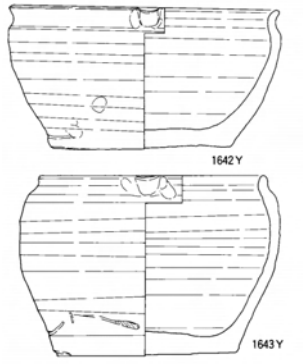
柿田遺跡　美濃須衛産
灰釉系陶器短頸鉢（包含層出土）



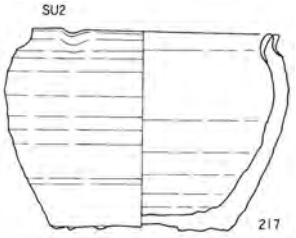

稲田山 16 号窯　蓋，小壺
『各務原市史』1983 から転載

興福地遺跡
美濃須衛産小型片口壺
（SE3 出土まなこ壺）



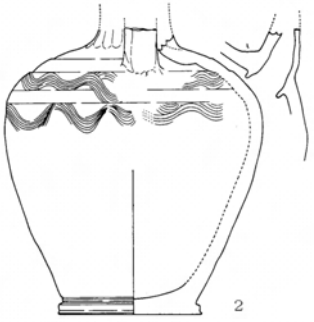




船山北３号窯
片口鉢（灰原出土）

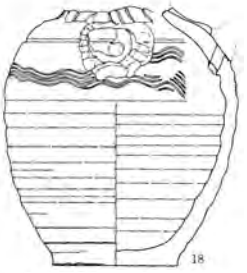



野笹遺跡　美濃須衛産三口鉢
（遺物集中地点 SU2 出土）

**井戸底出土まなこ壺**

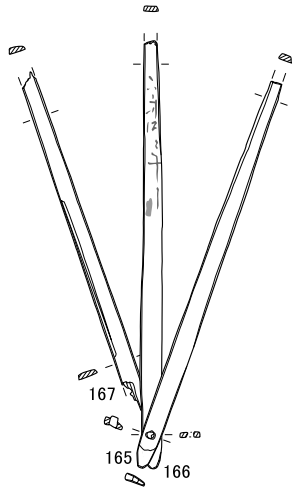



大町・縄手遺跡　珠洲窯産
注口（SE1 出土まなこ壺）
『西川島』1987 から転載




桜町遺跡　珠洲窯産
注口（SE1 出土まなこ壺）
『西川島』1987 から転載

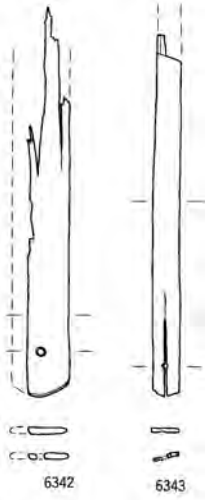
**扇実測図**




興福地遺跡　扇子（SE3 出土）

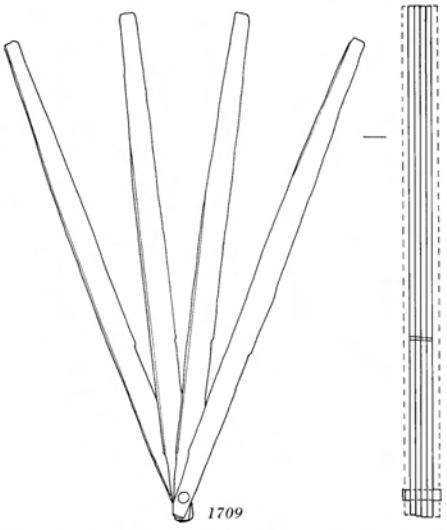
檜扇
（SD208
出土）

扇子
（NR41
出土）




柿田遺跡　扇

千木ヤシキダ遺跡
扇子（SE02 出土）
『金沢市千木ヤシキダ遺跡』Ⅱから転載




鳥羽離宮　扇子（SD4 出土）
『鳥羽離宮跡調査概要』1982
から転載

0　10cm
(S=1/5)

図 70　美濃須衛産壺、まなこ壺、扇実測図

## 表50　扇出土遺跡一覧表(1)

| 遺跡名 | 檜扇 | 扇子 | 出土遺構 | 遺構の時期 | 掲載番号 | 扇骨長(cm) | 扇骨幅(cm) | 扇骨厚(cm) | 扇以外の出土遺物 | 扇樹種 | 遺跡の性格 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 興福地遺跡 | | 3本 | SE3 | 12世紀初 | 165～167 | (28.60) | 1.20 | 0.30 | 織機、笊、板状木製品、山茶碗碗・皿、美濃須衛産小型片口壺・甕破片、白磁碗、土師器皿、伊勢型鍋 | トウヒ属 | 荘園関連施設 |
| 柿田遺跡 | 1枚 | | SD208 | 7世紀中～11世紀前半 | 6342 | (26.00) | (4.00) | 0.60 | 形代（人形、剣形、馬形）、斎串、火付け木、箸、杓子状木製品、農具、火きり臼、鞍、皿、曲物、建築部材、須恵器、灰釉陶器 | － | 荘園管理者の居住域、条里集落 |
| | | 1本 | NR41 | 11世紀後半～13世紀中 | 6343 | (24.20) | 2.00 | 0.20 | 形代（刀形）、火付け木、糸巻、箸、曲物、漆器、土師器甕、須恵器、灰釉陶器壺、白磁壺 | ヒノキ | 屋敷地 |
| 杉崎廃寺 | ３枚 | | 包含層 | ８世紀末～９世紀初頭 | 170～172 | 23.50 | 4.00 | 0.40 | － | ヒノキ | 古代寺院 |
| 鳥羽離宮 | | 小型品4本束 | 北大路溝跡（SD4） | 平安時代後期11世紀末～12世紀頃 | 2 | (19.00) | 1.00 | 0.40 | 木簡、人形、櫛、漆器椀、玉、陽物形、下駄、土師器、須恵器、陶器、瓦器、中国製白磁・陶器 | スギ | 田中殿地区金剛心院内の九躰阿弥陀堂と推定 |
| | | 大型品4本束 | | | 3 | 34.00 | 1.50 | 0.40 | | | |
| 平城京八条一坊十四坪 | 3枚 | | SE2020 | 奈良時代前半 | 13 | 28.00 | 末幅4.5、本幅1.3 | 0.15～0.2 | 竪櫛、曲物容器、柄杓、方形の折敷、箸、モモの種子90点、平城宮土器Ⅱ～Ⅴの土師器皿、黒色土器 | ヒノキ | 官衙風の配置をもつ建物群 |
| 三田谷Ⅰ遺跡 | | 1本 | 木製品集積遺構 | 奈良・平安時代 | 14 | (15.40) | 1.60 | 0.40 | 木簡、木簡状木製品、笏、人形、舟形、刀形、陽物、弓、栓状木製品、箱状木製品、木錘、糸巻具、案・机状木製品、刳物盤、曲物、下駄、火鑽具、建築部材、五輪塔、宝篋、石製紡錘車、砥石、須恵器、製塩土器、帯金具、和銅開珎、緑釉、墨書土器、硯 | － | 文字資料の処理機関（公的施設）。1997,98年調査のSD6からは「麻奈井」墨書須恵器出土 |
| 樋口遺跡 | 10枚束 | | ST30(捨て場) | 平安時代(9世紀後半) | 55～64 | 28.80 | 3.30 | 0.40 | 斎串、ヤス状製品、木札状木製品、アカスクイ状木製品、楔状木製品、棒状木製品、把手、曲物、刳り物、篦、土師器（坏、高坏、甕、壺）、砥石 | スギ | 『日本三代実録』にある「野代営」祭祀場 |
| 伊場遺跡 | 1枚 | | 大溝　ハ 2W-Ⅳ | 9世紀～10世紀 | 157 | 28.70 | 1.60 | 0.20 | 木簡、人形、舟形、斎串、曲物、有孔板、挽物盤、織機具、横槌、槽、櫂、下駄、柄杓柄、人骨、動物骨（牛、馬、鹿） | ヒノキ | 敷智郡衙 |
| 磯部カンダ遺跡 | | 10本束 | 南北方向大溝（SD16） | 平安時代（8世紀末～10世紀） | 47～50 | 28.10 | 1.1～2.3 | 0.20 | 横櫛、75点以上の斎串、人形、鳥形、火鑽杵、曲物、箸状木製品、施釉陶器、製塩土器、須恵器、土師器、49点以上の墨書土器、刀子、銅銭、砥石、土錘 | － | 官衙的性格が強い遺跡 |
| 千木ヤシキダ遺跡 | 1枚（10文字以上の墨痕。転用木簡か扇面経か） | | SE02（井戸底）井籠組井戸 | 平安時代（10世紀） | SE02-1 | (20.40) | (1.15) | － | 井鎮めの祭祀具（人形、刀形、斎串）、建築廃材、黒色土師器、須恵器、墨書土器「魚」２点 | － | 多量の皇朝銭、越州窯青磁、緑釉陶器碗出土。 |
| 柳之御所遺跡50次 | | 1本 | 50SE3 3層 | 12世紀 | 4006 | (12.40) | 1.70 | 0.40 | 墨書木片、印章、櫛、糸巻、ものさし、宝塔、曲物底、箸、方形曲物、折敷、篦、刀子柄、下駄、土師器皿、漆布に覆われた白磁四耳壺、白磁皿、常滑広口壺、渥美壺、渥美片口鉢・壺・甕、 | － | 「磐前村印」銅印出土。『平泉館』か。 |
| 柳之御所遺跡52次 | | 1本 | SE8 | 12世紀 | 5054 | 25.00 | 1.00 | 3.00 | 木簡、刀形、横櫛、円盤状、漆器、折敷、箱、曲物、杓子、棚、木槌、箸、刀子鞘、土師器皿、常滑（甕、片口鉢）、白磁壺、緑釉、中国陶器壺、丸瓦、平瓦 | スギ | 奥州藤原氏に関連する居館 |
| | | 1本 | | | 5055 | 25.00 | 1.00 | 3.00 | | イスノキ | |
| | | 4本束 | | | 5050～5053 | 45.00 | 2.00 | 0.50 | | スギ | |
| 草戸千軒町遺跡Ⅱ | | 1本 | SD1375 | 13世紀 | 559 | (16.40) | 2.00 | 0.40 | 人形、鼻緑、箸状木製品、担架状・格子状建築部材、円形板、折敷、漆器、曲物、下駄、草履、木槌、火鑽棒 | － | 流通・商取引関連施設。 |
| | | 1本 | SD3190最下層 | 13世紀後半 | 742 | (19.50) | 2.00 | 0.30 | 付札木簡、舟形、独楽、箸状木製品、杓子状木製品、円形板、箱側板、青白磁、折敷、漆器、曲物、横櫛、下駄、草履状木製品、柄、へら | － | |
| | | 2本束 | | | 743 | 38.20 | 1.50 | 0.30 | | － | |
| | | 1本 | SE3275 | 13世紀 | 758 | (30.70) | 1.50 | 0.40 | 付札木簡、毬、人形、横櫛、鞘、箸状木製品、折敷、円形板、杓子状木製品、曲物、栓、漆器、下駄、草履状木製品、鞘、へら、土師質土器椀、備前・常滑・亀山甕、東播系須恵器擂鉢、青磁・白磁、骨角製賽子・針、石鍋 | － | |
| | | 7本束 | SG2740下層 | 14世紀 | 693 | 37.90 | 2.00 | 0.30 | 人形、舟形、刀形、陽物、毬杖、毬、箸状木製品、羽子板状木製品、板塔婆、楔、籠、円形板、曲物、桶側板、漆器、折敷、杓子状木製品下駄、草履状木製品、へら、編具 | － | |
| | | 6本束 | SG3060 | 14世紀 | 726 | 35.50 | 1.60 | 0.40 | 紀年銘墨書木札、人形、舟形、陽物、毬、箸状木製品、杓子状木製品、柱状塔婆、板塔婆、五輪塔、宝篋印塔、折敷、曲物、蓋板、箱側板、桶側板、栓、円形板、笄、下駄、草履状木製品、楔、柄、鞘、へら、中国製陶磁器、朝鮮産磁器碗、土師質土器、砥石 | － | |

## 表51 扇出土遺跡一覧表(2)

| 遺跡名 | 檜扇 | 扇子 | 出土遺構 | 遺構の時期 | 掲載番号 | 扇骨長(cm) | 扇骨幅(cm) | 扇骨厚(cm) | 扇以外の出土遺物 | 扇樹種 | 遺跡の性格 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区 | | 6本束 | 包含層SD上層 | 13世紀中葉～14世紀初 | 176 | 35.60 | 1.20 | 0.60 | 箸、下駄、草履芯、 | ヒノキ | 祭祀場を伴う建物跡 |
| 千葉地東遺跡 | | 8本束 | 22号溝 | 13世紀中頃～14世紀初 | 9 | 35.40 | 1.20 | 0.40 | 漆器 | － | 古代役所推定地（鎌倉郡役所） |
| | | １本 | 河川跡 | | 29 | (18.40) | 2.20 | 0.60 | 横櫛、杓子、漆器、刀子、古銭 | － | |
| | | ３本 | 河川跡 | | 33 | 26.30 | 1.20 | 0.40 | | － | |
| | | ３本 | 河川跡 | | 220 | (17.10) | 1.60 | 0.30 | 横櫛、陽物、漆器 | － | |
| | | １本 | 河川跡 | | 254 | (16.20) | 1.20 | 0.40 | | － | |
| | | １本 | 河川上部 | | 69 | (15.00) | 1.00 | 0.30 | | － | |
| | | ４本束 | 第５層包含層 | | 223 | 35.40 | 1.80 | 0.60 | 下駄 | － | |
| | | ５本束 | 第７層包含層 | | 71 | (20.60) | 1.50 | 0.40 | 横櫛 | － | |
| | | ５本束 | 側溝 | | 96 | 25.20 | 1.00 | 0.60 | 横櫛、陽物、下駄、刀形代 | － | |
| 清洲城下町遺跡Ⅳ | | 6本束 | 旧五条川(NR4001４群) | 15世紀後葉～16世紀前葉 | 166木 | 10.20 | 1.00 | － | 紀年銘卒塔婆、柿経、羽子板状木製品、木胎漆器椀、折敷、桶、箸、篦、陶磁器（瀬戸美濃、常滑、信楽、楽、丹波、備前、唐津、朝鮮、中国窯）、天目茶碗、花瓶、香炉、瓦、壁土、鋳型、金属製品、土師器皿（墨書、穿孔、刻書）、土師器鍋・釜、人骨、刀子、古銭、硯、碁石、数珠 | － | 城下町内部の川港と祭祀空間 |

※扇：檜扇と扇子の両方を含む。特に扇子を中心に集成している。宮都からは多数出土しており、今回はそれ以外の遺跡を中心に集成している。
※要が残存しているものを束とした。

## 表52 井戸出土まなこ一覧表

| 遺跡名 | 遺構名 | 遺構の時期 | まなこ | その他遺物 | まなこ出土状況等 | 遺跡の性格 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 嶋上郡衙跡 | 井戸 | 平安時代中頃 | 二枚の合わせ口土師質皿（「天罡大神王」「十二神王」の墨書有） | 斎串、横櫛、曲物、桃核、黒色土器、灯明皿、羽釜、土釜、緑釉陶器、灰釉陶器 | 井戸底から出土。 | 郡衙 |
| 橿原遺跡 | 第三号井戸 | 奈良時代 | 曲物 | | 井戸底から出土。 | |
| | 第十二号井戸 | 奈良時代 | 曲物 | | 井戸底から出土。 | |
| 興福地遺跡 | SE3 | 鎌倉時代初 | 小型片口壺（美濃須衛産） | 山茶碗碗・皿、美濃須衛甕、土師器皿、伊勢型鍋、白磁碗、扇子 | 片口の横を内面側から故意に打ち欠いている。埋井祭に使用した道具とともに、井戸上層にまとめて捨てられる。 | 荘園関連施設か |
| 桜町遺跡 | SE01 | 13世紀前半 | 水瓶（珠洲産） | 多量のトチの実、連歯下駄、箸状木製品、龍泉窯系青磁碗、白磁、下駄、杓子、曲物、漆器椀、骨片、中世土師器片 | 井戸底中央に正位で据えられている。口縁部と注口部を故意に打ち欠き、注口部には箸状木製品が詰め込まれている。 | 在地領主層の住居（館） |
| 大町・縄手遺跡 | SE01 | 13世紀前半 | 水注（珠洲産） | トチの実、箸状木製品 | 口縁部と注口部を打ち欠き横位に納置されている。注口に箸状木製品が差し込まれている。 | 崇徳院御影堂領大屋庄穴水保に係る中世開発領主の館跡。水陸交通上の要所に立地した集落。 |
| 御館遺跡 | SE02 | 13世紀前半 | 小型壺（珠洲産） | 柄杓、漆器皿、折敷、曲物、箸状木製品、中世土師器 | 口縁部を打ち欠いている。井底東側から出土。 | |
| 美麻奈比古神社前遺跡 | SE01 | 13世紀前半 | 蓋付柄杓（曲物、柄なし） | 人頭大の石２個、中世土師器、青磁、箸状木製品、トチの実、クルミの種子 | 井戸底に据えられ、左右に人頭大の石あり。 | |
| 寺家遺跡 | SE02 | ９世紀末～11世紀前半 | 井戸枠と同一形態 | 隆平永宝１枚、斎串１枚、円盤形木製品、ヒョウタン１個体分 | 井戸枠と同一形態で井戸底にある。 | 気多神社政庁 |
| 戸水C遺跡 | SE1111 | ９世紀末～10世紀初 | 須恵器双耳瓶 | 檜扇、柄杓、曲物、木皿、須恵器、土師器 | 井戸底に埋納。口縁部を打ち欠く。 | 官衙 |
| 柳之御所遺跡50次 | 50SE3 | 12世紀 | （白磁四耳壺） | 墨書木片、印章、扇子、櫛、糸巻、ものさし、宝塔、曲物底、箸、方形曲物、折敷、篦、刀子柄、下駄、土師器皿、白磁皿、常滑広口壺、渥美壺、渥美片口鉢・壺・甕 | 井戸底から出土。 | 平泉館か |
| 上野遺跡 | SE01 | 11世紀前後 | 灰釉陶器長頸壺 | 土師器甕、灰釉陶器、土錘、土製支脚、砥石、瓦、鉄製品 | 頸部を打ち欠き井戸底から出土。 | 人名の墨書土器出土。 |
| 草山遺跡 | SE140 | 鎌倉末～室町 | 伊勢型鍋 | | 底を打ち欠いた鍋の上に曲物があり、それを固定するように三方に石が置かれる。 | 集落跡。 |

※まなこ：甕や壺が精霊や神、または棲家や依り代として崇敬される習俗がインドにみられる（松村武雄1930「井戸の考古学」より）。壺、甕など。長頸壺は釣瓶か。
※()書きは、出土状況から推定したまなこ。壺や瓶がほぼ完形の形であるもの。口縁部が故意に打ち欠かかれているもの。

## 第３節　興福地遺跡のまとめ

平成元年の発掘区から検出された遺構の時期は、８世紀後半と 12 世紀後半から 13 世紀初めで、遺構は無いが 10 世紀後半から 11 世紀前半の灰釉陶器が出土している。今回の発掘区から検出された遺構の時期は 10 世紀前半と 12 世紀末から 13 世紀初頭で、遺構は確認できていないが９世紀前半の須恵器が出土しこの時期の遺構の分布が推定される。興福地遺跡は遺物の散布範囲と杭瀬川によって形成された微高地の範囲から南北方向に長く遺跡範囲が考えられている。この地形的に制約された土地に、現段階で分かる範囲では８世紀後半から 13 世紀初頭の建物跡が、時代によって地点を変えながら展開していくことが推定される。

興福地遺跡は、平成元年度の調査結果から、文献資料にごくわずかに見られる「中河御厨」に比定されている。御厨とは、天皇家・摂関家、伊勢神宮や賀茂社などに供御・供祭物・食料として魚介類その他を貢進する所領（荘園）を意味する。中世において伊勢神宮は伊勢国を中心として膨大な御厨を保持したと考えられている。神宮文庫に伝わる『神鳳鈔』には美濃国の御厨として、中河御厨、津布良開発御厨、土岐多良御厨、小泉御厨、池田御厨、下有知御厨、帷加納、大井戸加納の八ヶ所が記載されまた、中河御厨、土岐多良御厨、小泉御厨、池田御厨、下有知御厨の五ヶ所についてはその存在を建久年間（1190～98）以前にさかのぼって確認することができる。大垣市域には中河御厨（内宮・外宮）、津布良開発御厨（内宮）、土岐多良御厨（内宮）があったようである（大垣市 2013）。

興福地遺跡周辺には古代から中世（特に奈良時代から鎌倉時代）の遺跡が大垣市北部に東西方向の帯状に分布する。これは東山道等の街道の側に遺跡が展開することや金生山付近を中心に墓域・寺院・経塚が分布することとも関連しているように思う。当遺跡や北方京水遺跡の発掘調査から出土する遺物からは、平安時代前期と平安時代末から鎌倉時代初頭の大きく２時期に遺跡が展開、特に平安時代末から鎌倉時代初頭にこの地に大開発が及んだことが想定できる。また、13 世紀初頭を境にその後の時期の遺物がほとんどといってよいほど出土しなくなることから、何らかの原因でこの地を離れていくようである。その一つの要因として考えられるのは、北方京水遺跡の第２面の水田跡を覆った洪水である。鎌倉時代から室町時代には洪水が多発し、文献に記録が残っている（大垣市教育委員会 1997）。おそらくこれらの原因から、より地形的に安定した場所へと移動していくと考えられる。

今回の調査で検出した遺構・遺物を県内で調査した遺跡と比較すると、類似点が多いのは柿田遺跡である。柿田遺跡の中世前期の遺構遺物との類似点は前項で述べた通りであるが、神社建築の検出、美濃須衛産鉢、扇の出土という点が当遺跡と類似している。柿田遺跡には石清水八幡宮領明知荘があったことが、出土した木簡から知られており、中世屋敷跡が検出されている。また、美濃須衛産の鉢、壺、甕の類や仏具は消費対象が限られているので、寺院や神社等の宗教関連施設へ納められた特注品と考えられ、発掘区からは壺（161、162）や甕（128）が出土している。前項で述べた通り、扇、井戸のまなこも官衙、館跡から出土している。包含層から緑釉陶器（232）、須恵器鉄鉢（192）、佐波理写し蓋（223）、転用硯（224、227）、灰釉陶器の段皿、深碗、輪花碗、香炉等も出土している。

この節で記載してきたすべての事項から、興福地遺跡とはどんな遺跡なのかを考察すると、おそらく柿田遺跡の性格に近い広大な遺跡が展開する可能性があるといえよう。柿田遺跡の神社建築は中世の屋敷地のそばにある。今回の発掘区ではその一部が確認されたのではないかと考えられる。興福地

遺跡は中世前期の荘園に関連のある屋敷跡か、荘園管理者クラスの施設群が展開する遺跡といえるであろう。そしてその基盤は、大垣市の調査出土遺物も含めれば、墨書土器、緑釉陶器、転用硯、佐波理写し、志摩産製塩土器、瓦などから８世紀後半～９世紀前半には役所に関する遺跡がこの地にあったと考えられ、その機能が鎌倉時代まで受け継がれたといえる。発掘調査が実施された範囲はまだまだ遺跡全容を探るには狭く、遺跡の性格について述べようとすればそれは推定の域を脱しない。今後、更に周辺の調査が進み遺跡の全容が明らかになることを期待してやまない。

注１）森郁夫 2013「神社の成立」

２）帝塚山大学教授宇野隆夫氏のご教示による。水野正好 1981 に「穿井―井鎮めに当たり土公供と同様、十二月神―十二神王を謹請し、十二幣を挿し樹てるといった場なり次第のあった可能性が推察されてくる」とある。

３）注２に同じ。

４）注２に同じ。『西川島』を参考にするようにとご教示を受けた。

５）山本博 1970

６）奈良県教育委員会 1961

７）奈良県教育委員会 1961

８）水野正好 1981

９）穴水町教育委員会 1987

10）注９に同じ。

**〈引用・参考文献〉**

秋田県埋蔵文化財センター2006『樋口遺跡』秋田県文化財調査報告書第 411 集

穴水町教育委員会 1980『西川島』Ⅰ穴水盆地における中世遺跡群の調査

穴水町教育委員会 1981『西川島』Ⅱ美麻奈比古神社前遺跡・古代中世編

穴水町教育委員会 1987『西川島』能登における中世村落の発掘調査

穴水町教育委員会 1997『美麻奈比古神社前遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター1986『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター1988『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター1997『寺家遺跡』県営ほ場整備事業羽咋西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

岩手県教育委員会 2000『柳之御所遺跡』第 50 次発掘調査概報　岩手県文化財調査報告書第 107 集

岩手県教育委員会 2001『柳之御所遺跡』第 52 次発掘調査概報　岩手県文化財調査報告書第 111 集

大垣市 2011『大垣市史』考古編

大垣市 2013『大垣市史』通史編　自然・原始～近世

大垣市教育委員会 1990『大垣市埋蔵文化財調査概要』昭和 63 年度

大垣市教育委員会 1997『大垣遺跡詳細分布調査報告書』大垣市埋蔵文化財調査報告書第５集

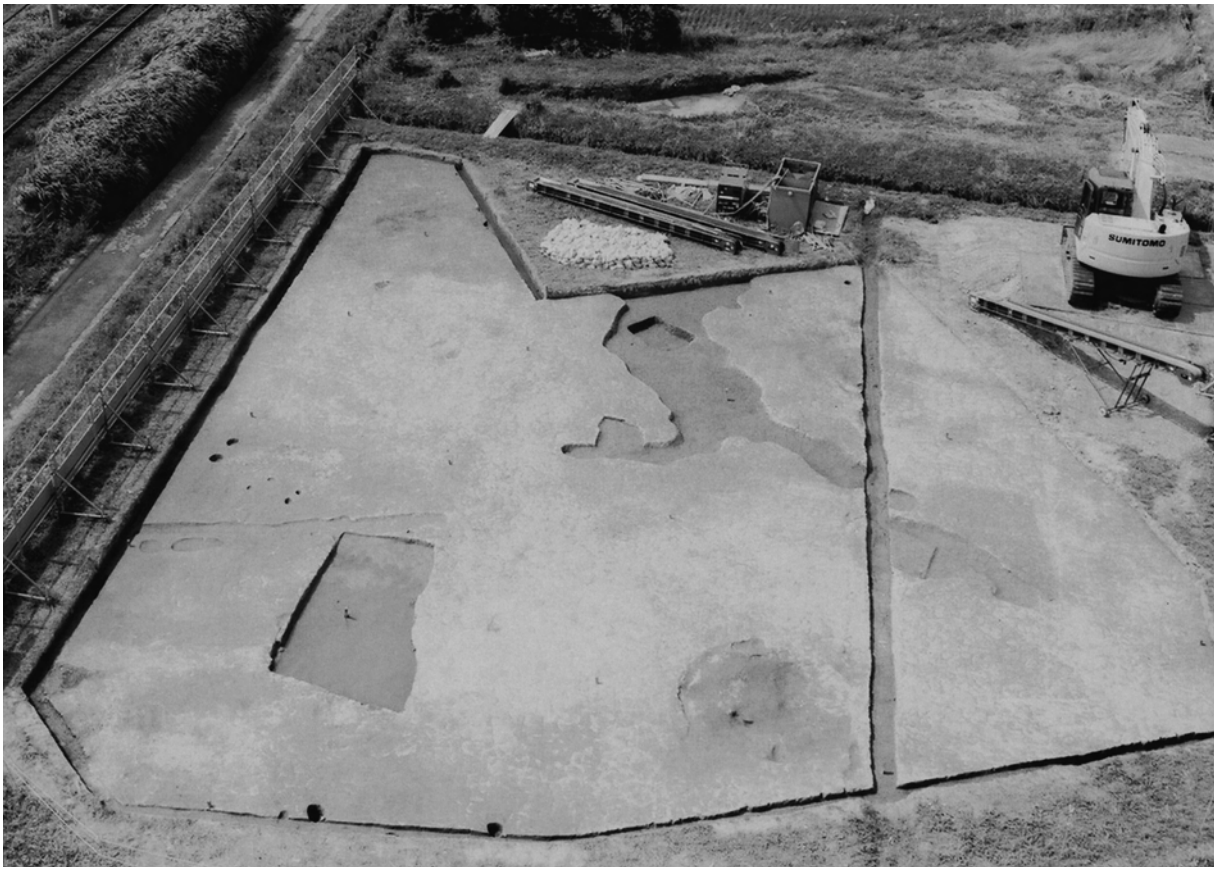
各務原市教育委員会 1983『各務原市史』考古・民俗編　考古

加藤真二 1996「桧扇考」『考古学雑渉』西野元先生退官記念論集

神奈川県立埋蔵文化財センター1986『千葉地東遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 10

金沢市教育委員会 1991『金沢市千木ヤシキダ遺跡』Ⅱ
金沢市埋蔵文化財センター1999『金沢市磯部カンダ遺跡』
鐘方正樹 2003『井戸の考古学』
金子裕之 2014『古代都城と律令祭祀』
久世康博 2002「「井戸」検出に伴う「土坑」の検討」『研究紀要』第８号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
黒崎直 1976「平城宮の井戸」『月刊文化財』151 号第一法規
黒崎直 1977「斎串考」『古代研究』10 号
財団法人愛知県埋蔵文化財センター1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集
財団法人石川県埋蔵文化財センター2003『金沢市　戸水Ｃ遺跡・戸水Ｃ古墳群（第 11・12 次）』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 92 集
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982『鳥羽離宮跡調査概要』
島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡』Vol.2 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ
島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡』Vol.3 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ
高槻市教育委員会 1981『嶋上郡衙跡発掘調査概要』５　高槻市文化財調査概要
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2010『官衙と門』報告編　第 13 回古代官衙・集落研究会報告書
奈良県教育委員会 1961『橿原』
奈良国立文化財研究所 1989『平城宮八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 46 冊
奈良市教育委員会 1990『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』
浜松市教育委員会 2002『伊場遺跡』遺物編８、補遺編、総括編　伊場遺跡調査報告書第 10～12 冊
日色四郎 1967『日本上代井の研究』
広島県教育委員会 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』北部地域南半部の調査
古川町教育委員会 1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告』古川町埋蔵文化財調査報告　第５集
松阪市教育委員会 2006『草山遺跡発掘調査月報』No.1～No.10（増刷合冊）
松村武雄 1930「甕と壺」『民俗学』第２巻第１号
松村武雄 1930「斎瓮につきて」『民俗学』第２巻第２号
水野正好 1981「鎮井祭の周辺」『奈良大学紀要』第 10 号
森郁夫 2013「神社の成立」『鎮めとまじないの考古学』下-鎮壇具からみる古代-
山梨県教育委員会 1997『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 132 集
山本博 1970『井戸の研究』
四日市市遺跡調査会 1992『上野遺跡２』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅸ
渡邉博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』

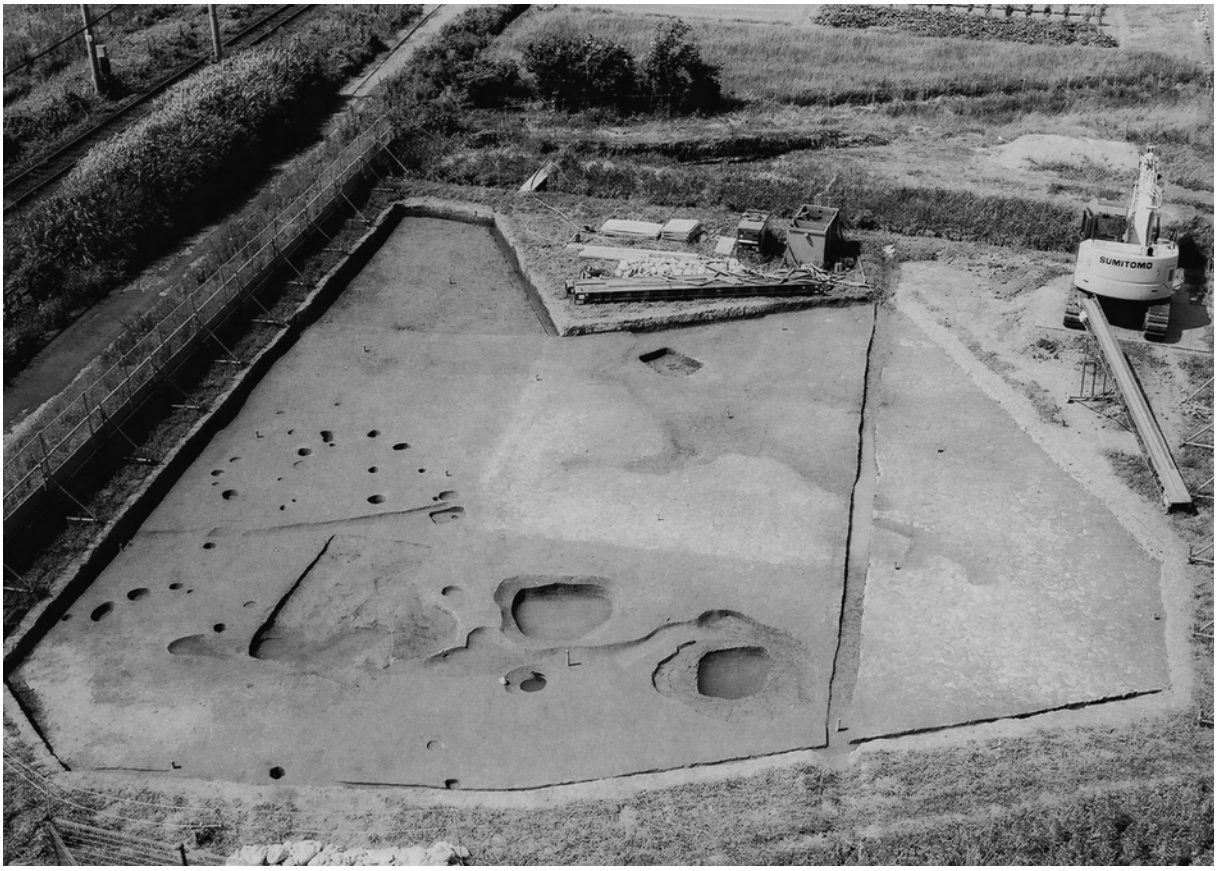
西地区第１面（西から）




東地区第１面（南から）

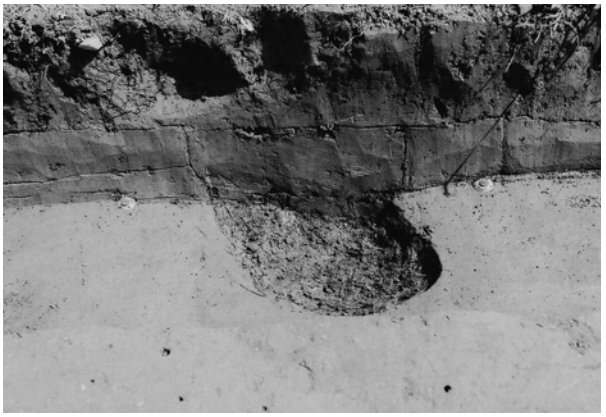
図版２

西地区第２面（西から）




東地区第２面（南から）

SB1-P1・P2、SB2-P1・P2 検出状況（東から）



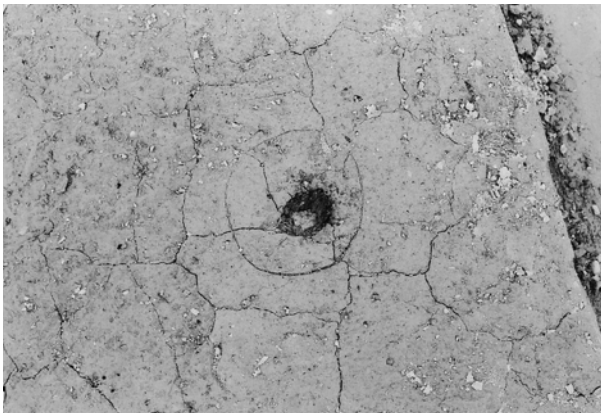
SB2-P2 完掘状況（北から）

SB1-P1 土層断面（東から）

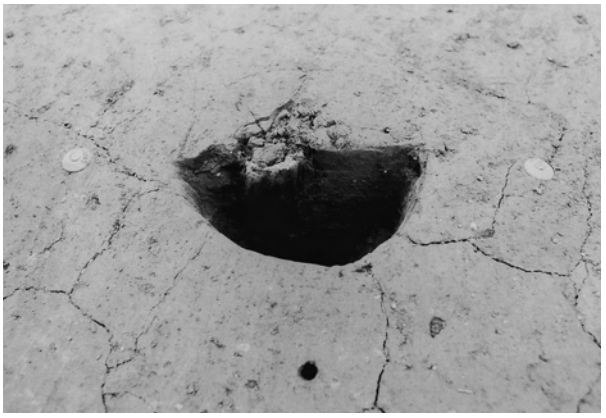
SB1-P2 土層断面（東から）

SB1-P1 完掘状況（南から）

SB1-P2 完掘状況（北から）



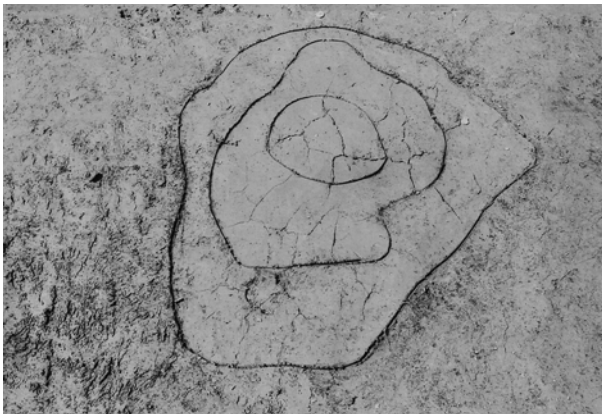
SP097 検出状況（南から）



SP097 土層断面（東から）

図版４

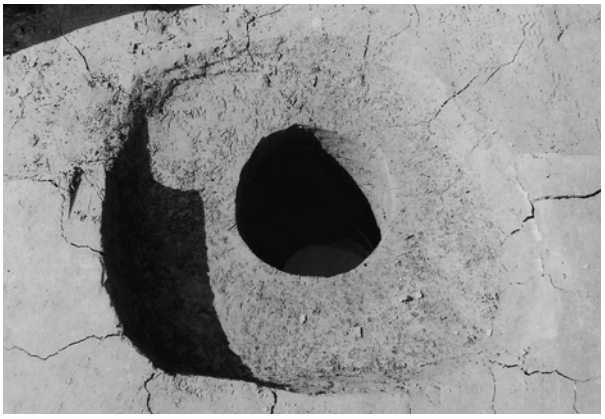
SA2、SB3 検出状況（東から）



SB3-P3 検出状況（北から）

SB3-P2 土層断面（東から）

SB3-P3 土層断面（東から）



SB3-P2 完掘状況（南から）

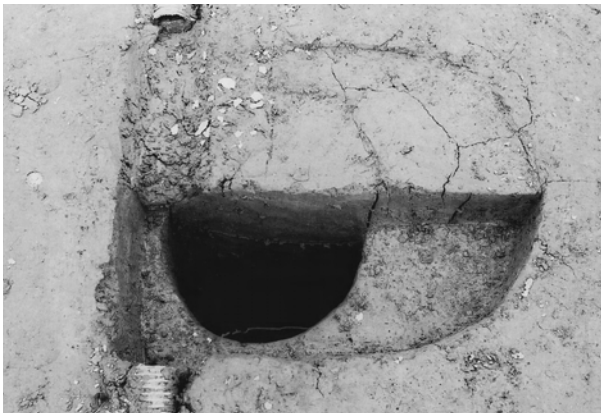
SB3-P1 土層断面（東から）

西地区第１面完掘状況（東から）

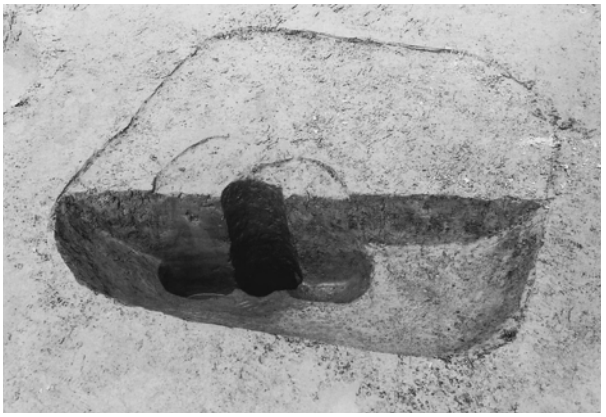
西地区第１面完掘状況（北東から）

西地区第２面検出状況（東から）

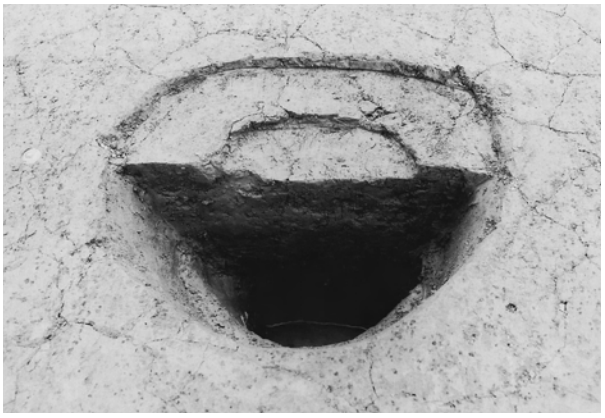
西地区第２面検出状況（南から）



SP059 土層断面（東から）



SP057, SP058 土層断面（東から）



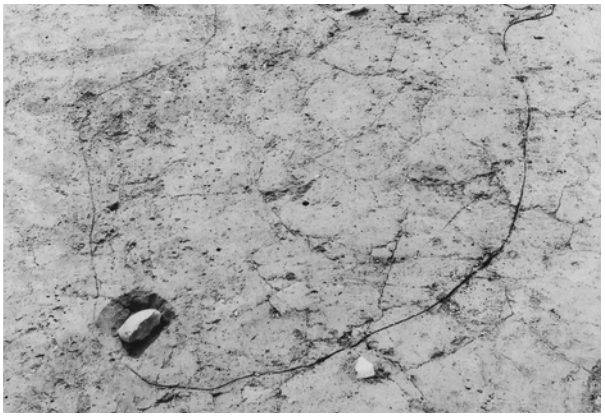
SA3-P4 土層断面（北から）

SP048 検出状況（南から）

西地区第２面完掘状況（東から）

西地区第２面完掘状況（南から）

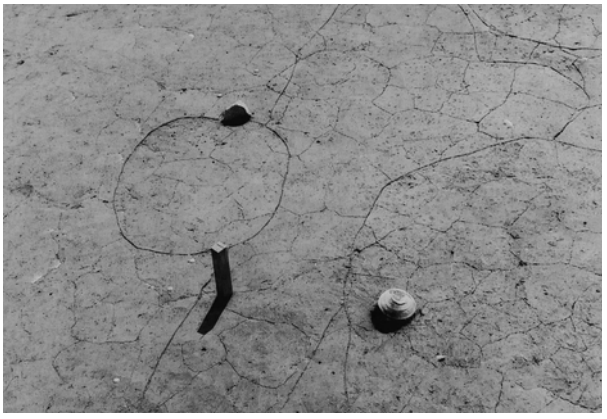
図版６



SD4 検出状況（南東から）

SD4 遺物出土状況（南から）

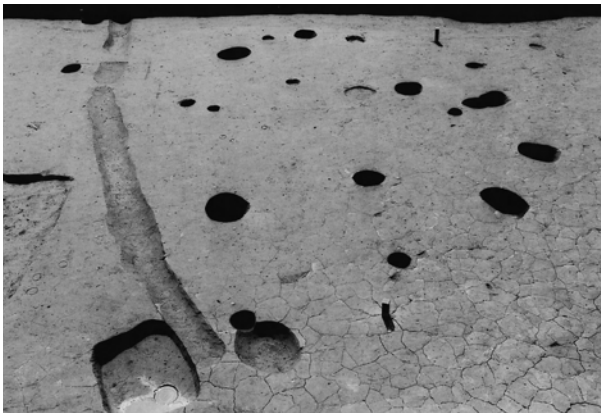
SD3 完掘状況（東から）



SD1 検出状況（東から）

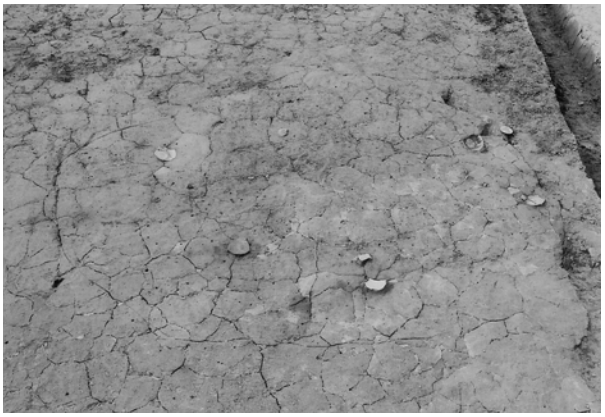
SD1 遺物出土状況（東から）

SD1 完掘状況（東から）

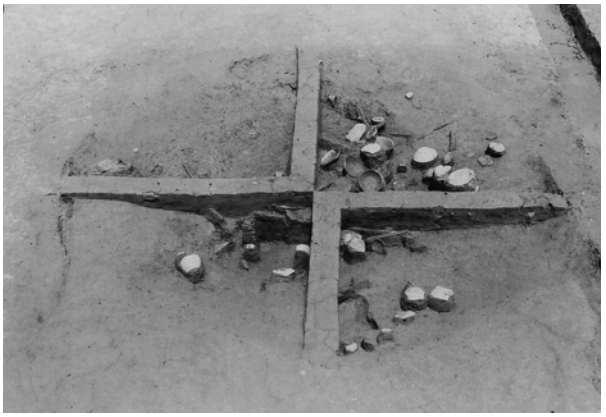


東地区西第２面完掘状況（東から）

東地区西第２面完掘状況（北東から）



SE3 検出状況（南から）



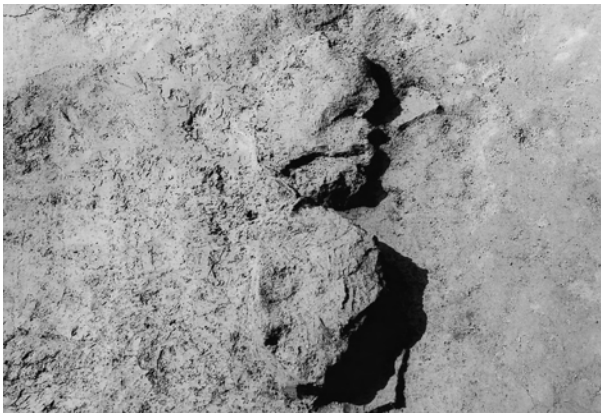
SE3 遺物出土状況（南から）

SE3 遺物出土状況（北から）

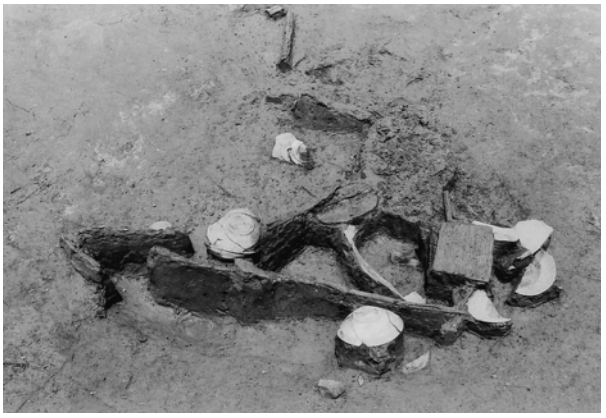
SE3 小型片口壺出土状況（西から）

SE3 墨書土器出土状況（北から）

SE3 畦外し後遺物出土状況（南から）



SE3 笊出土状況（南から）



SE3 畦外し後遺物出土状況 UP（南から）

図版８

SE3 下層南扇、斎串出土状況（南から）

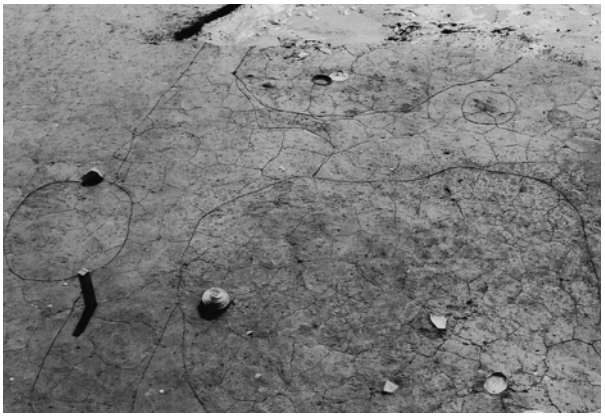
SE3 下層北扇、斎串出土状況（南から）

SE3 完掘状況（南から）

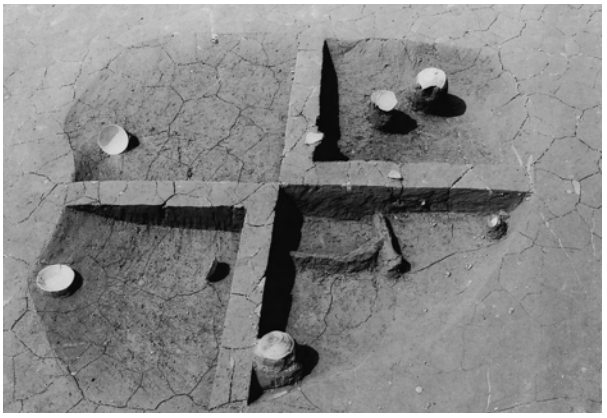
SE3 第２面掘下土層断面（南から）

SD1, SE3 検出状況（南から）

SE3 土層断面（南から）



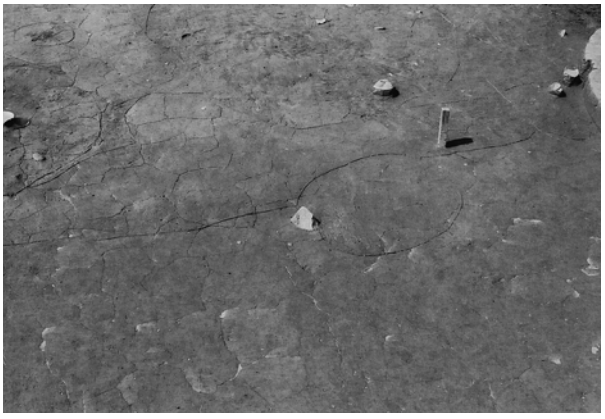
SK10, SE1, SE2, SD1 検出状況（東から）



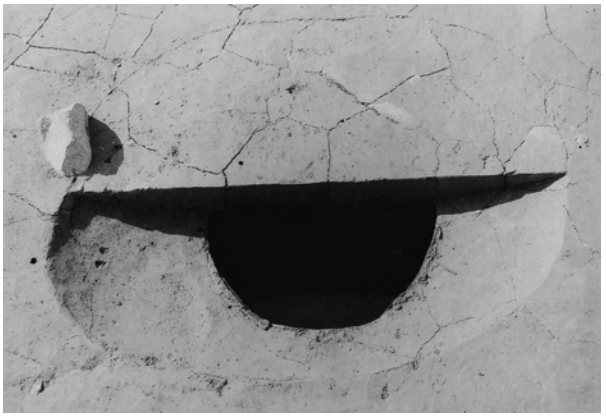
SE2 遺物出土状況（南から）

SE2 遺物出土状況（南から）

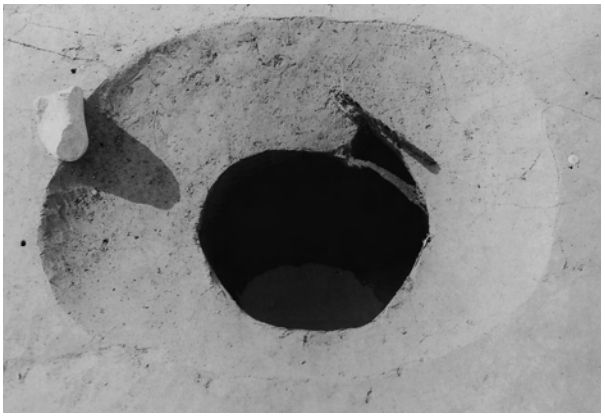
SE2 下層南遺物出土状況（南から）



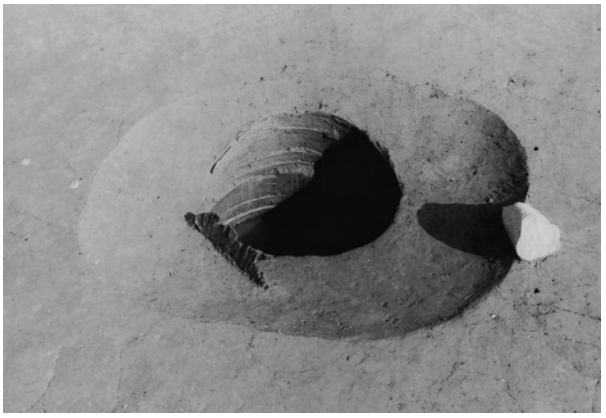
SE1 検出状況（南から）



SE1 土層断面（南から）



SE1 井戸枠検出状況（南から）



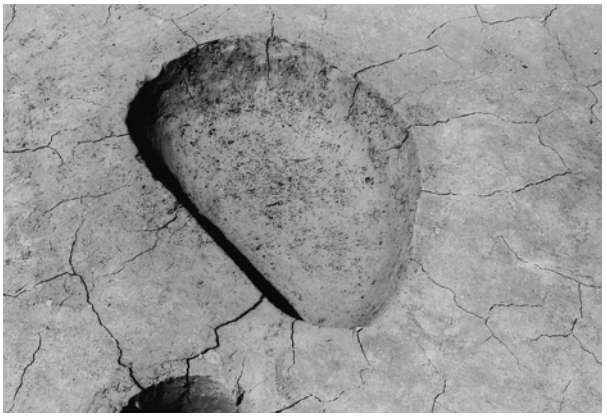
SE1 井戸枠検出状況（北から）

SE1 完掘状況（北から）

SE1 完掘状況（東から）

図版 10

SP098 遺物出土状況（東から）



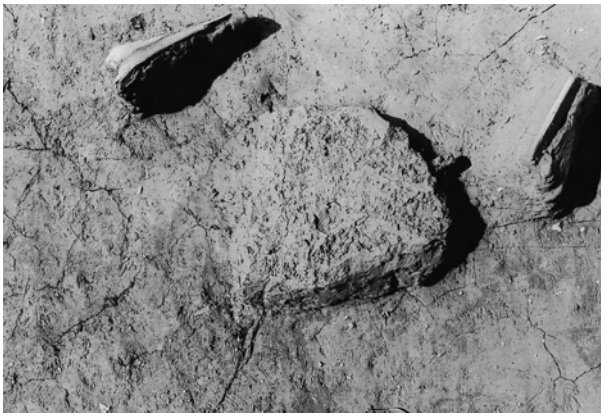
SK14 完掘状況（南から）

SP001 遺物出土状況（南から）

SK10 検出状況（東から）

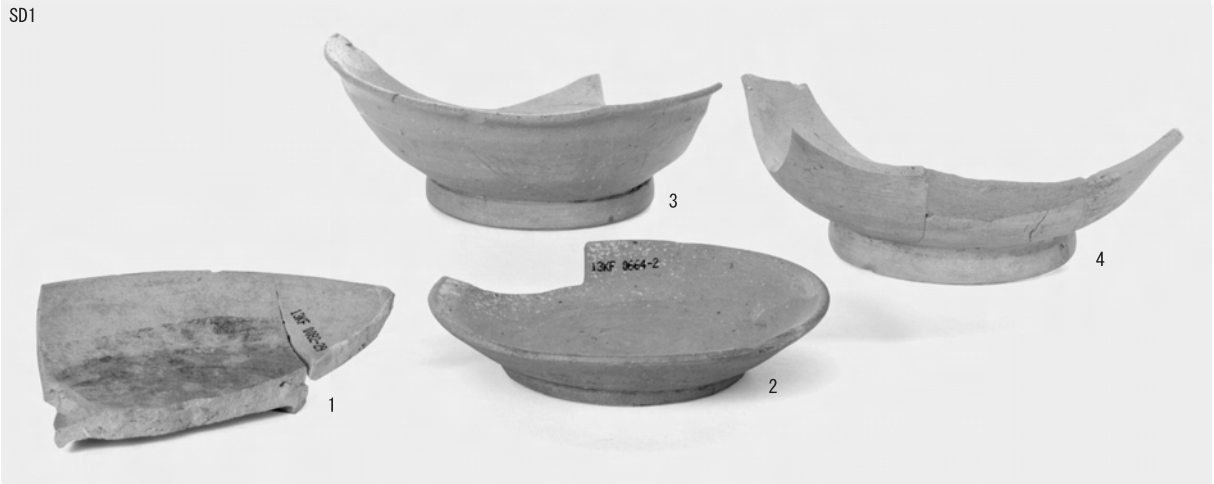
SK10 遺物出土状況（北から）

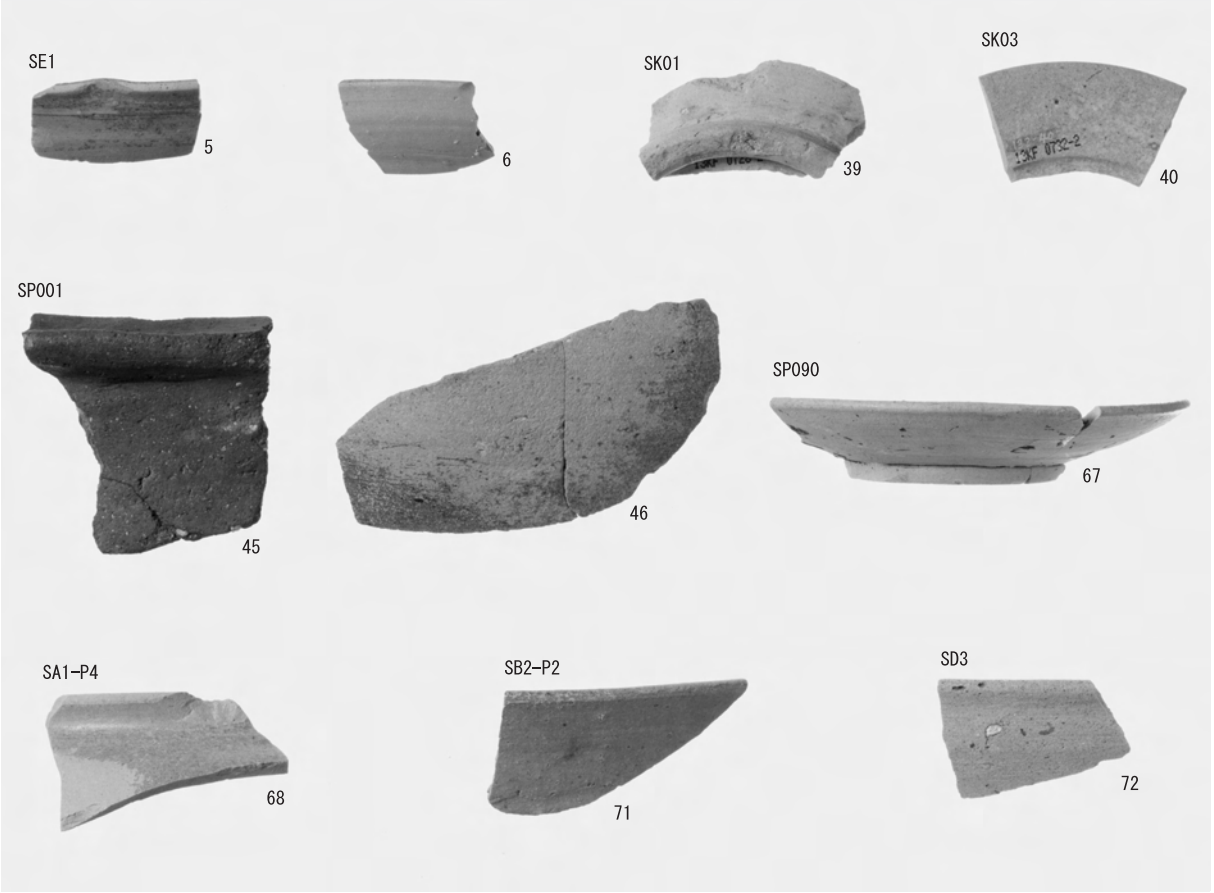
SK10 遺物出土状況（南から）



SK10 笊出土状況（東から）

SK10 遺物出土状況 UP（南から）

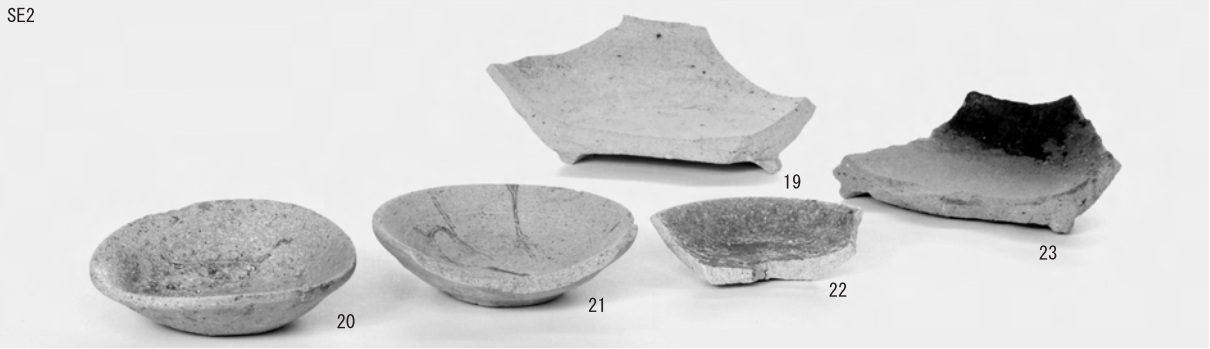

SD1
3
4
2
1

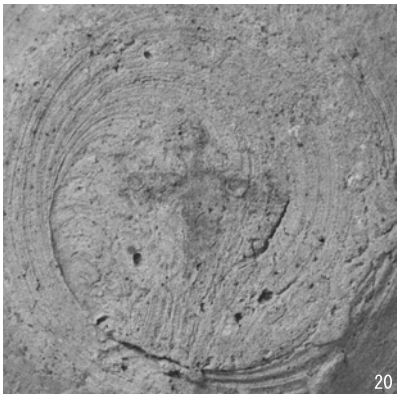

SE1
5
6
SK01
39
SK03
40
SP001
45
46
SP090
67
SA1-P4
68
SB2-P2
71
SD3
72

SK09
41
44

SK09
42
43

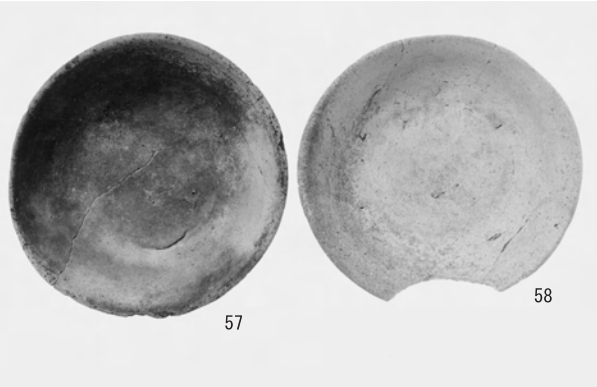
図版 12





25 内面

25 外面



図版 14

SK10
54
55
56

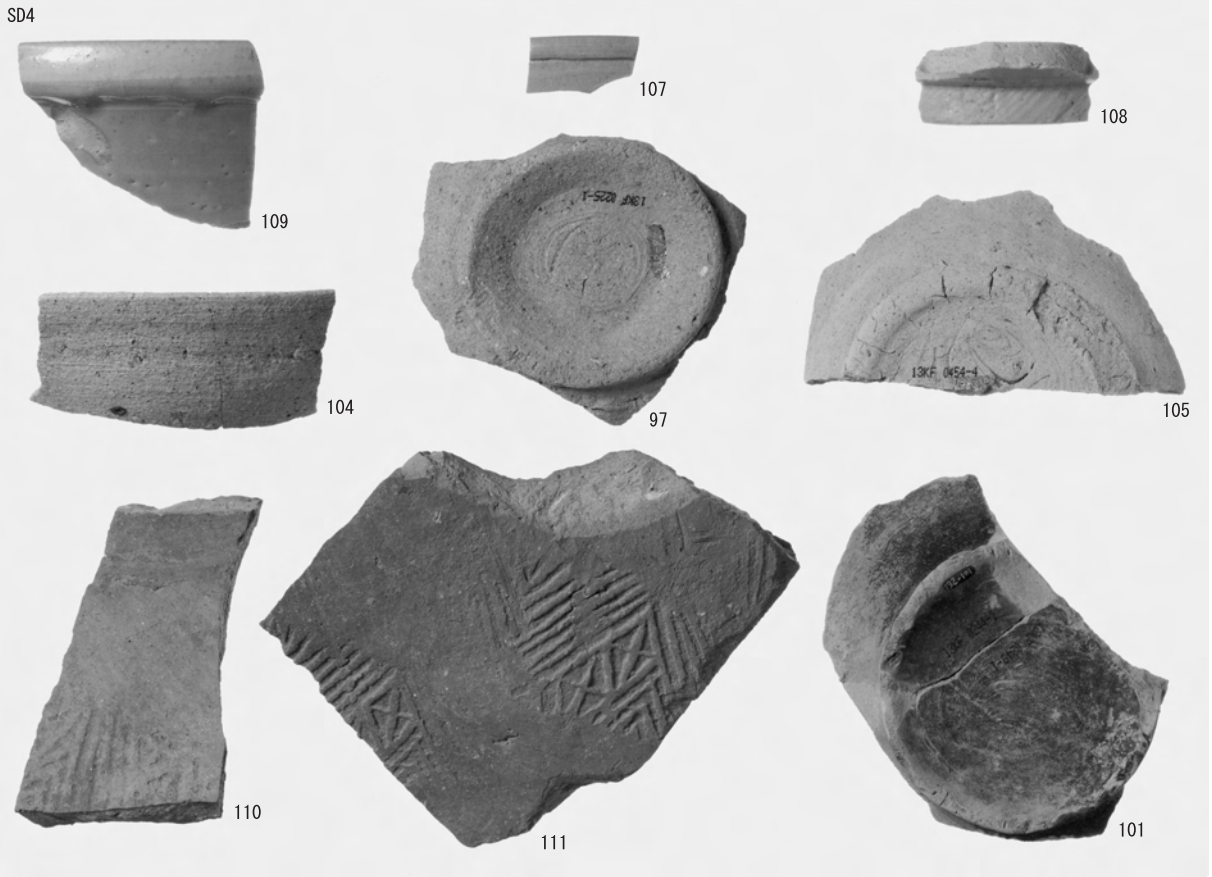
SD4
73
74

SD4
82

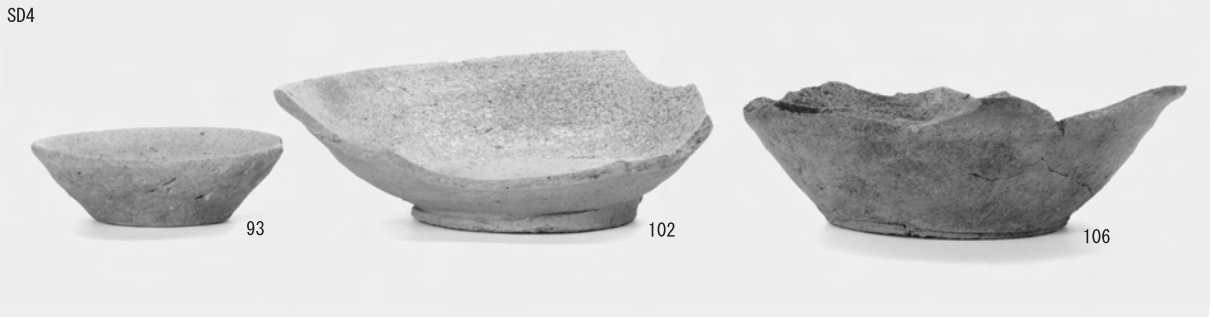
SD4
91
89
87
90
83
86
84

SD4
79
80
81
78

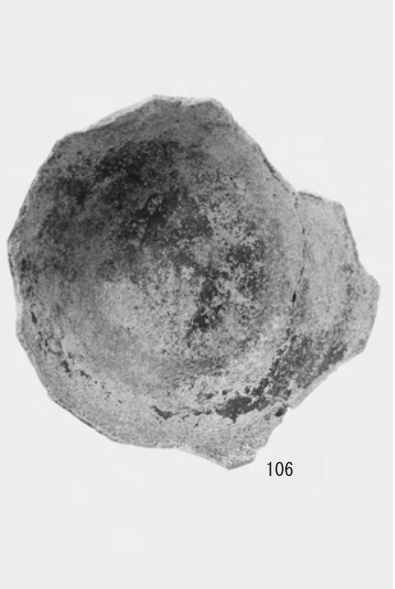
SD4




SD4

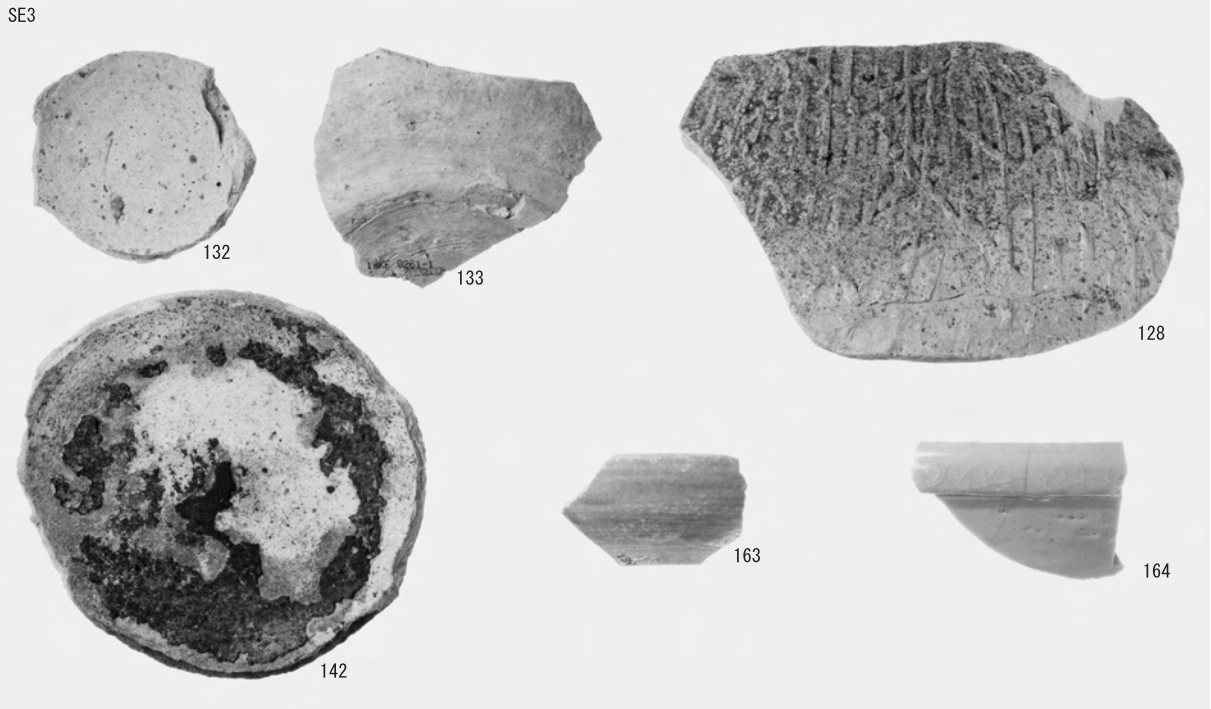


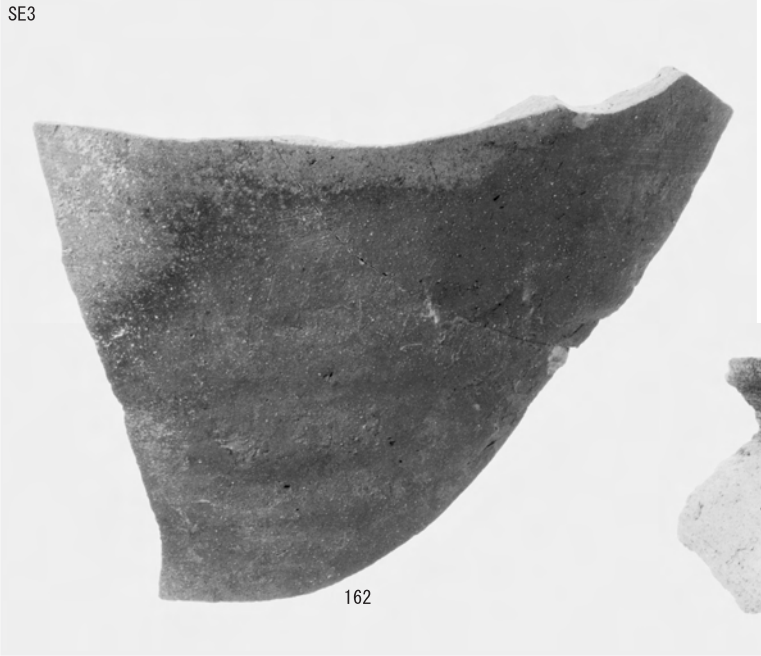

SE3



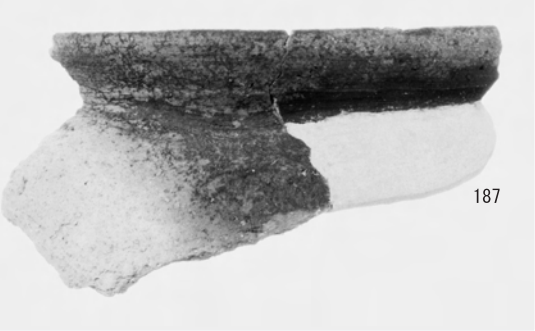
図版 16

SE3
121
122
118
120
123
124


SE3
132
133
128
142
163
164


SE3
162

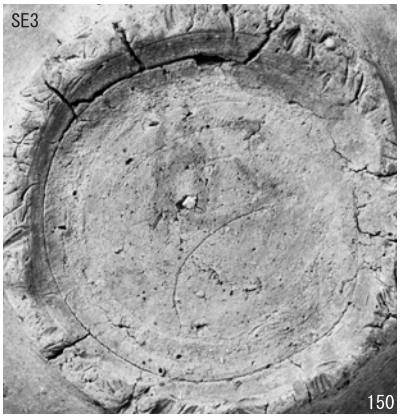
SE3
125
126
127


187

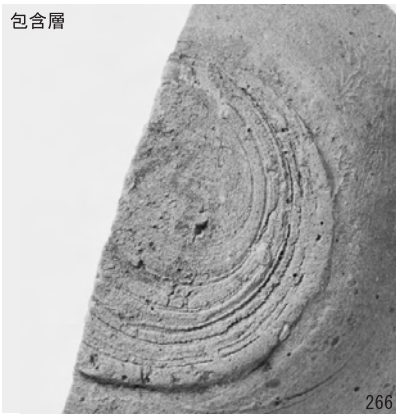
SE3
135

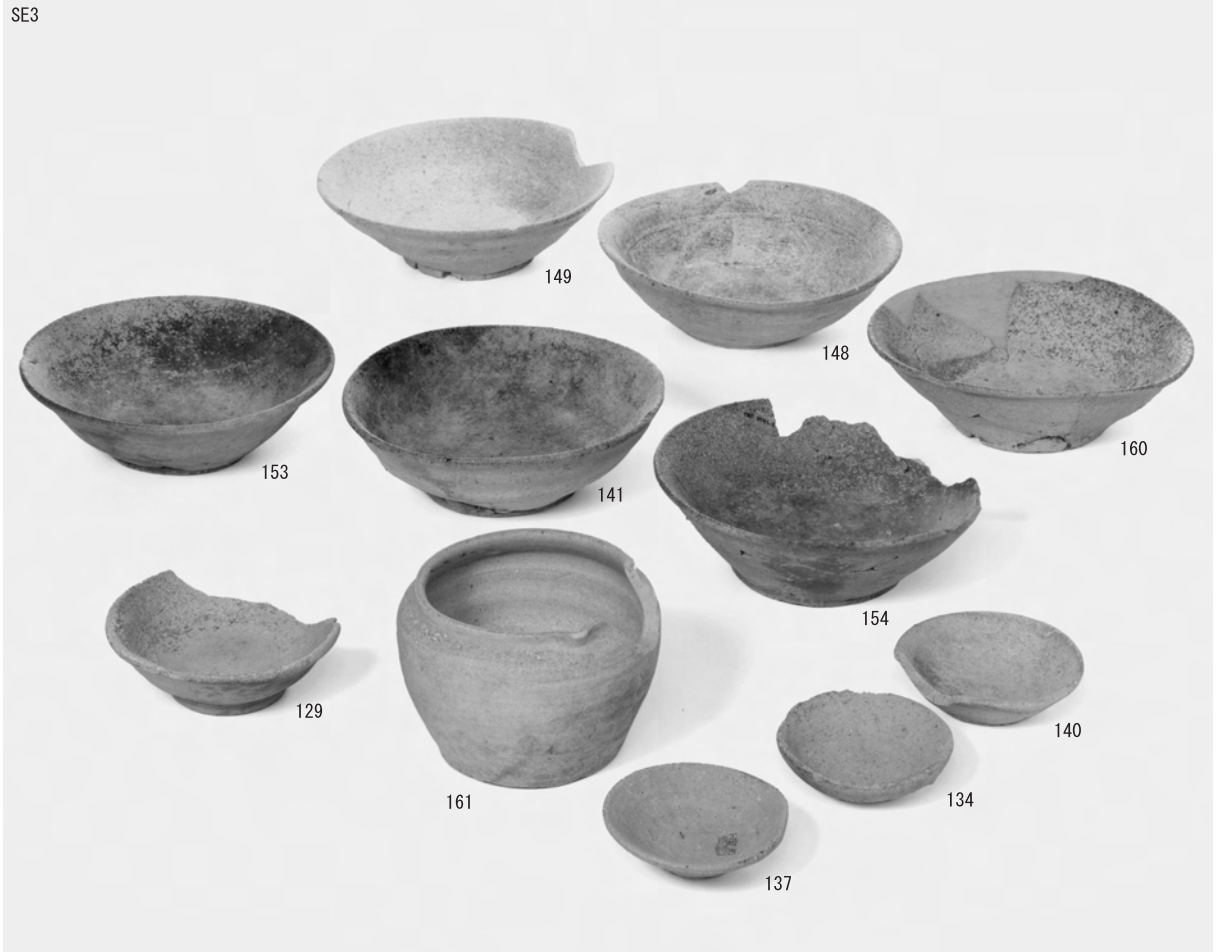
SE3
136

SE3
138

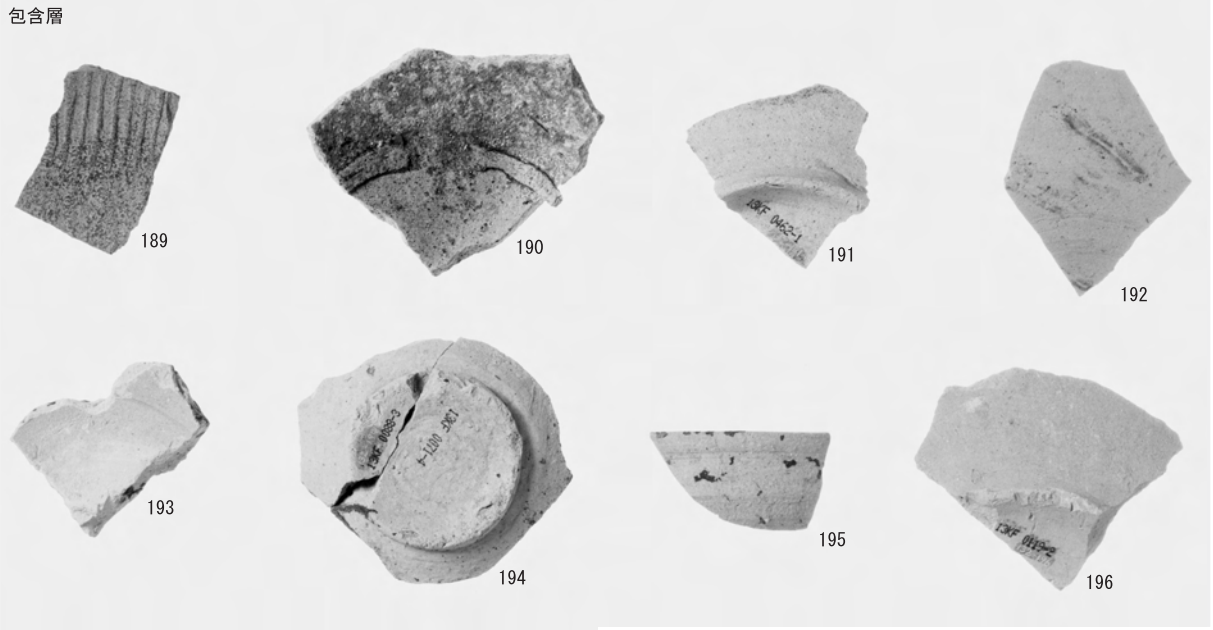

SE3
150

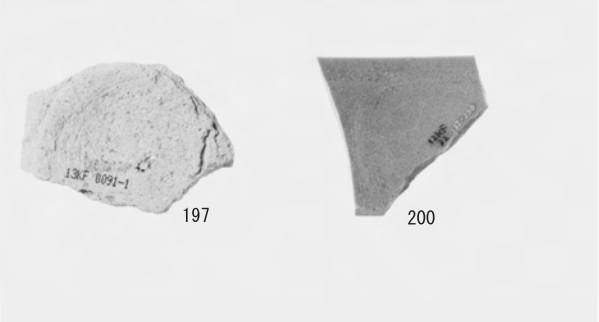
包含層
256

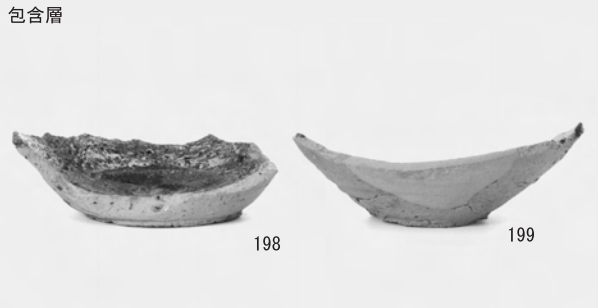

包含層
266

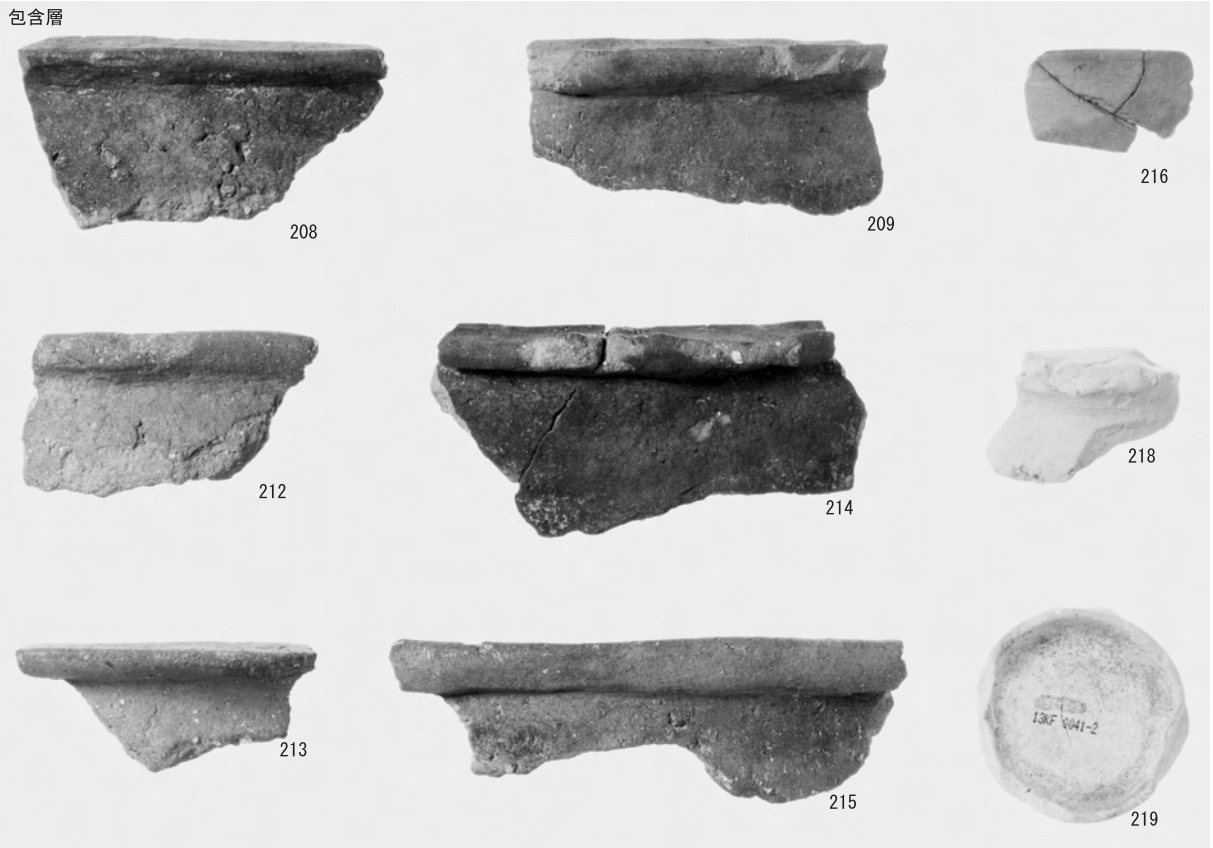

SE3
149
148
160
153
141
154
129
161
140
134
137

図版 18

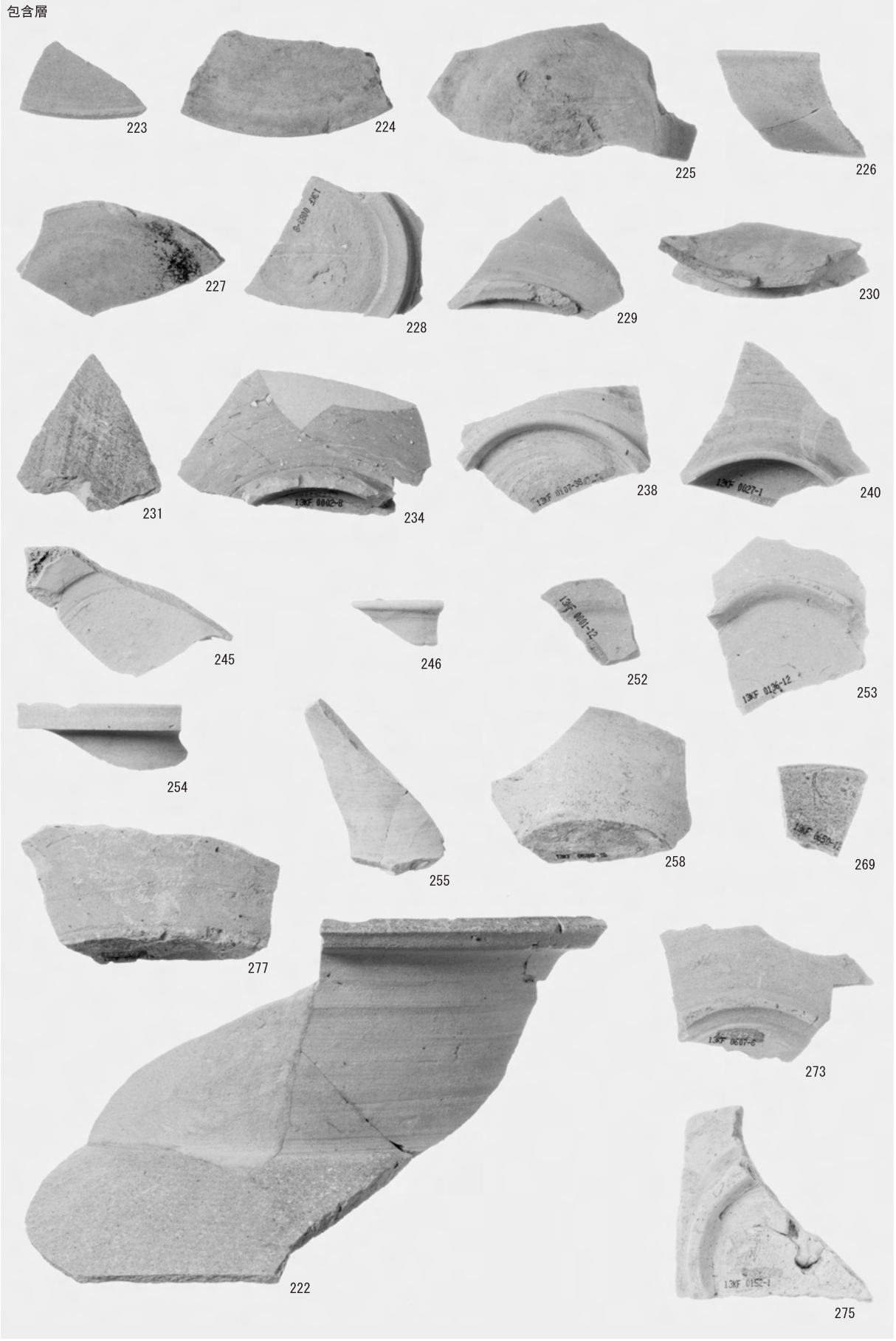

包含層
189
190
191
192
193
194
195
196


197
200

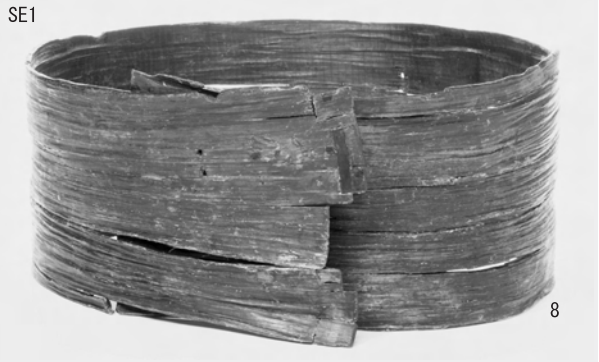

包含層
198
199


包含層
208
209
216
212
214
218
213
215
219

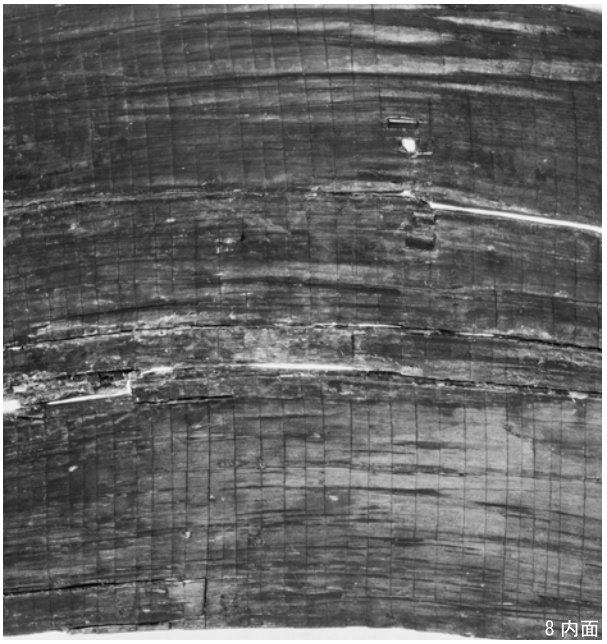
包含層

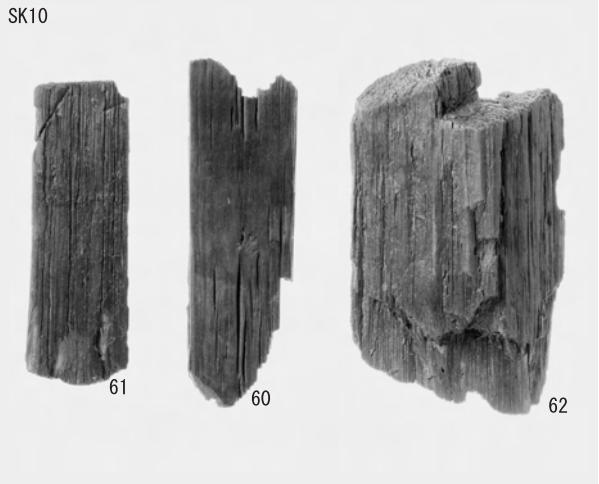

223
224
225
226
227
228
229
230
231
234
238
240
245
246
252
253
254
255
258
269
277
273
222
275

図版 20


SE1
8

9


8 内面

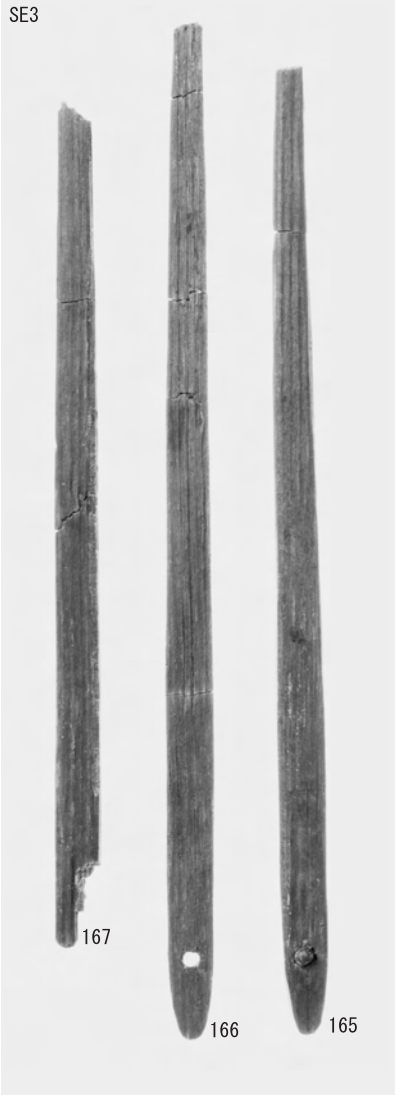

SK10
61
60
62

SE1
11
12

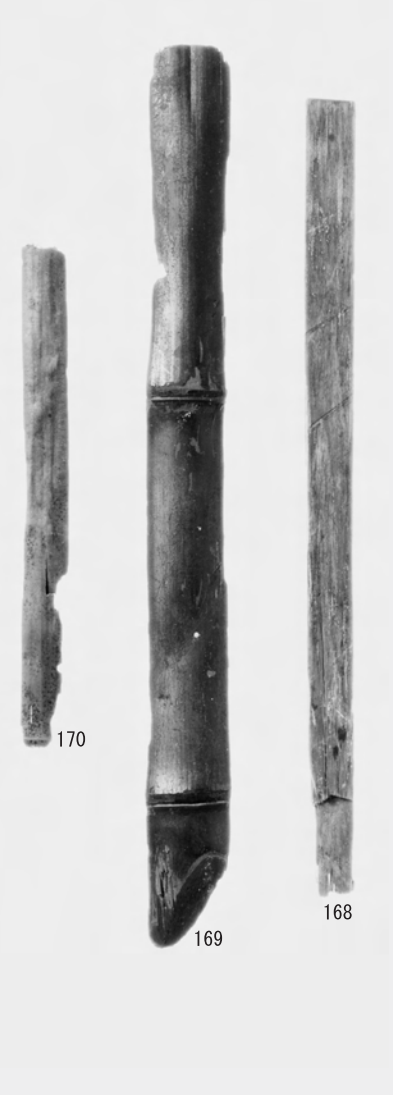
SA3
SK10
65
包含層
SK10
188
NR1
53
278
64

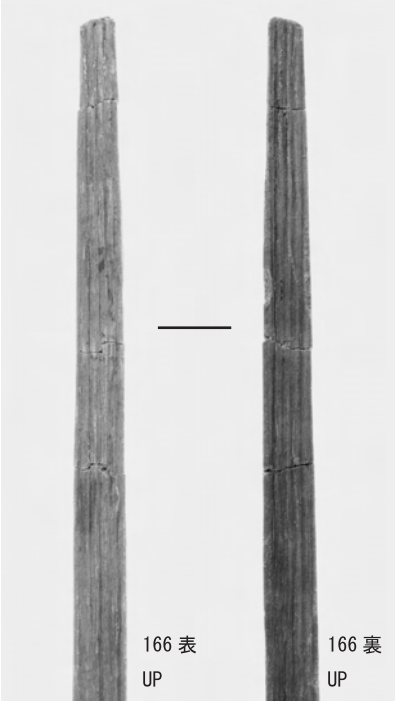
SE1
10

SK10
59


SE3
167
166
165

167 裏
166 裏
165 裏


170
169
168


166 表
UP
166 裏
UP

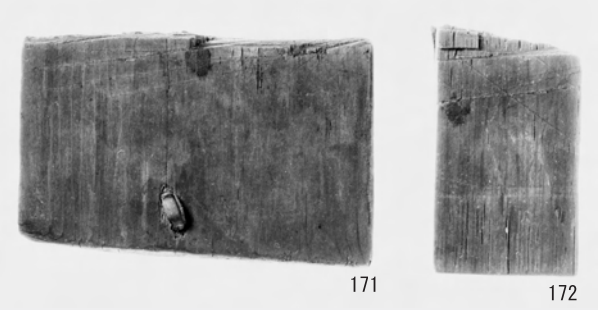
179

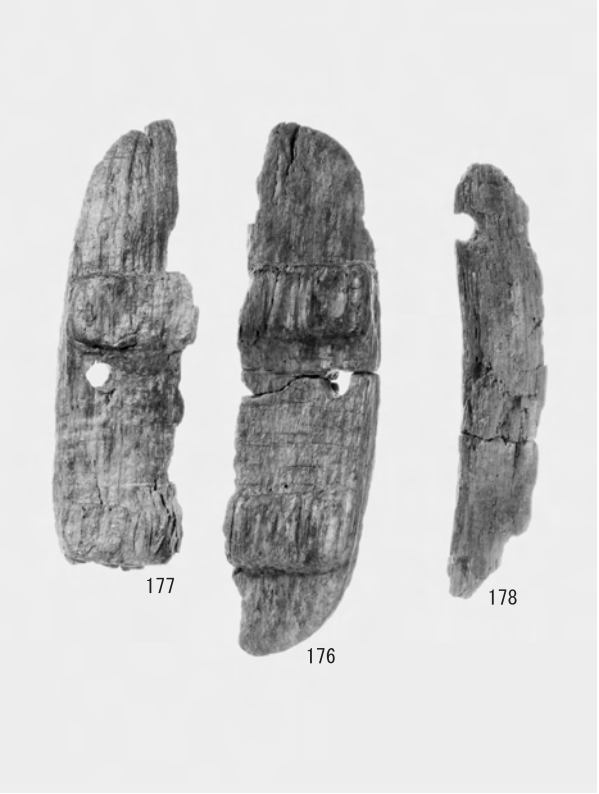
180

181

図版 22

SE3
174
173


171
172


177
176
178

SB1-P1
69

SE2
37
38
SK10
66
SE3
185

SB1-P2
70

SP097
186

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | こうふくじいせき |
| 書名 | 興福地遺跡 |
| 副書名 | |
| シリーズ名 | 岐阜県文化財保護センター調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第132集 |
| 編著者名 | 近藤正枝 |
| 編集機関 | 岐阜県文化財保護センター |
| 所在地 | 〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　℡058-237-8550 |
| 発行年月日 | 2015年３月６日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 | 発掘原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 興福地遺跡<br>（こうふくじいせき） | 岐阜県（ぎふけん）<br>大垣市（おおがきし）<br>興福地町（こうふくじちょう） | 21202 | 7060 | 35°<br>23’<br>10” | 136°<br>36’<br>4” | 20130530<br>～20130829 | 583 ㎡ | 記録保存調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 興福地遺跡 | 集落跡 | 平安時代<br>鎌倉時代 | 掘立柱塀、柵　８列<br>掘立柱建物　３棟<br>溝　４条<br>井戸　３基<br>土坑　20基<br>柱穴　125基<br>自然流路　１条<br>など | 土師器　1,215点<br>須恵器　125点<br>灰釉陶器　553点<br>緑釉陶器　1点<br>山茶碗　1,895点<br>中近世陶磁器　50点<br>石器・石製品　10点<br>木製品　89点 | 平安時代前期から鎌倉時代初頭の居住域と、宗教関連施設あるいは荘園関連施設のものと思われる掘立柱塀などを検出。 |


要　約

興福地遺跡は奈良時代から中世までの集落跡である。今回の調査では平安時代前期と平安時代末～鎌倉時代初頭の２面を調査した。東地区と西地区では遺構の性格と遺物の出土量が大きく異なり、東地区は生活の場であったのに対して、西地区は区画施設を持つ建物域が南北方向に広がっていく。東地区からは掘立柱建物、井戸、溝など、西地区からは掘立柱塀、柱穴などを検出した。

約100ｍ南東で大垣市が行った調査では奈良時代と鎌倉時代の掘立柱建物が検出されているのに対して、今回の発掘区では奈良時代の遺構が確認されていないことから、時代によって遺跡の分布範囲が異なるようである。

鎌倉時代初頭の井戸からは、埋め井の祭りで使用した道具をまとめて捨てた一括資料が出土している。これらの道具の中には斎串として使用したものと思われる扇子の骨が３本出土し、内１本の両面には６文字程の墨書が残っている。扇子の骨も含めて２点の墨書資料が出土している。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第132集

興福地遺跡

2015年３月６日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印　　刷　株式会社もとすいんさつ